秋田県文化財調査報告書 第114集

此掛沢II遺跡
上の山II遺跡

発掘調査報告書

秋田県埋蔵文化財センター

1984.3

秋田県教育委員会

序

秋田県の北部を流れる米代川の下流には広大な台地が発達し、先人の残した数多くの遺跡が所在しております。

農林水産省東北農政局では、未利用地の多いこの台地に対して、昭和51年度から開田等を目的とした国営能代開拓建設事業を実施してまいりました。この本年度事業区域内に此掛沢Ⅱ遺跡と上の山Ⅱ遺跡が所在するため、秋田県教育委員会は文化財保護の立場から農林水産省東北農政局と協議を重ね、工法等で対応できない地域について事前に記録保存のための発掘調査を実施いたしました。

その結果、此掛沢Ⅱ遺跡からは本県で発見例の少ない旧石器時代の石器が出土し、上の山Ⅱ遺跡からは多数の平安時代の竪穴住居跡、土師器、須恵器と鉄刀などが検出されました。

本報告書はこの調査成果を集録したものであり、能代地方の歴史研究や埋蔵文化財の保護活動の資料として御活用いただければ幸いです。

最後にこの調査に御協力いただきました東北農政局能代開拓建設事業所、秋田県能代土地改良区、能代市教育委員会社会教育課、地元浅内地区自治会をはじめ、関係各位に厚く御礼を申し上げます。

昭和59年3月31日

秋田県教育委員会
教育長　斉藤　長

例　　言

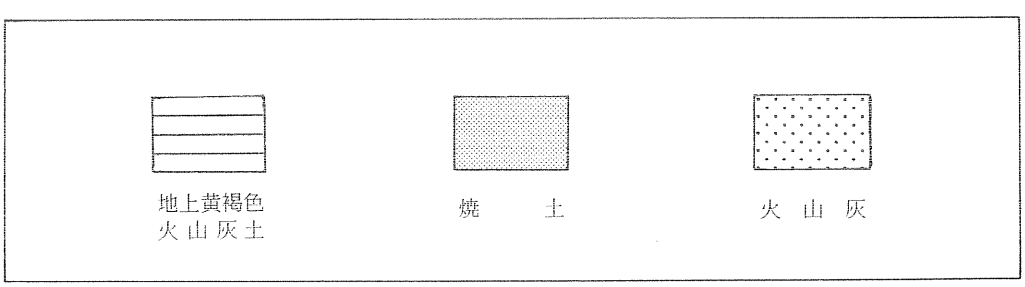
1. 本報告書は国営能代開拓建設事業に伴う此掛沢Ⅱ遺跡、上の山Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書作成に関しては下記の方々から御教示を得た。記して感謝の意を表したい。

国立歴史民俗博物館考古研究部助教授　　阿部　義平氏

文化庁記念物課文化財調査官　　桑原　滋郎氏

3. 石器の石質鑑定は秋田県立博物館学芸主事嵯峨二郎氏に、陶磁器の鑑定は武田事務所武田孝義氏（能代市）にお願いした。
4. 本報告書の作成にあたり、第4章第1節、第5章まとめの旧石器時代については大野憲司があたり、その他の章節の執筆及び編集は柴田陽一郎が行った。
5. 第2章第3節の「此掛沢Ⅱ・上の山Ⅱ両遺跡付近の地形・地質」については、山本郡八森町立観海小学校教諭工藤英美氏にお願いした。
6. 土色、土器の色調の表記は（財）日本色彩研究所色票鑑修『新版標準土色帖』に拠った。
7. 本報告書に使用した地図は建設省国土地理院発行5万分の1、東北農政局能代開拓建設事業所調製千分の1の地形図である。
8. 土器の観察表の底径比は、口径1に対する底径の比率で、径高指数は、器高／口径×100で求められる。
9. 須恵器の実測図の断面は黒く塗りつぶし、土師器と区別した。
10. 挿図の番号は原則として、時代毎に通し番号とし、図版もそれに従った。
11. 挿図に使用したスクリーントーンは以下の通りである。

凡例



目　　次

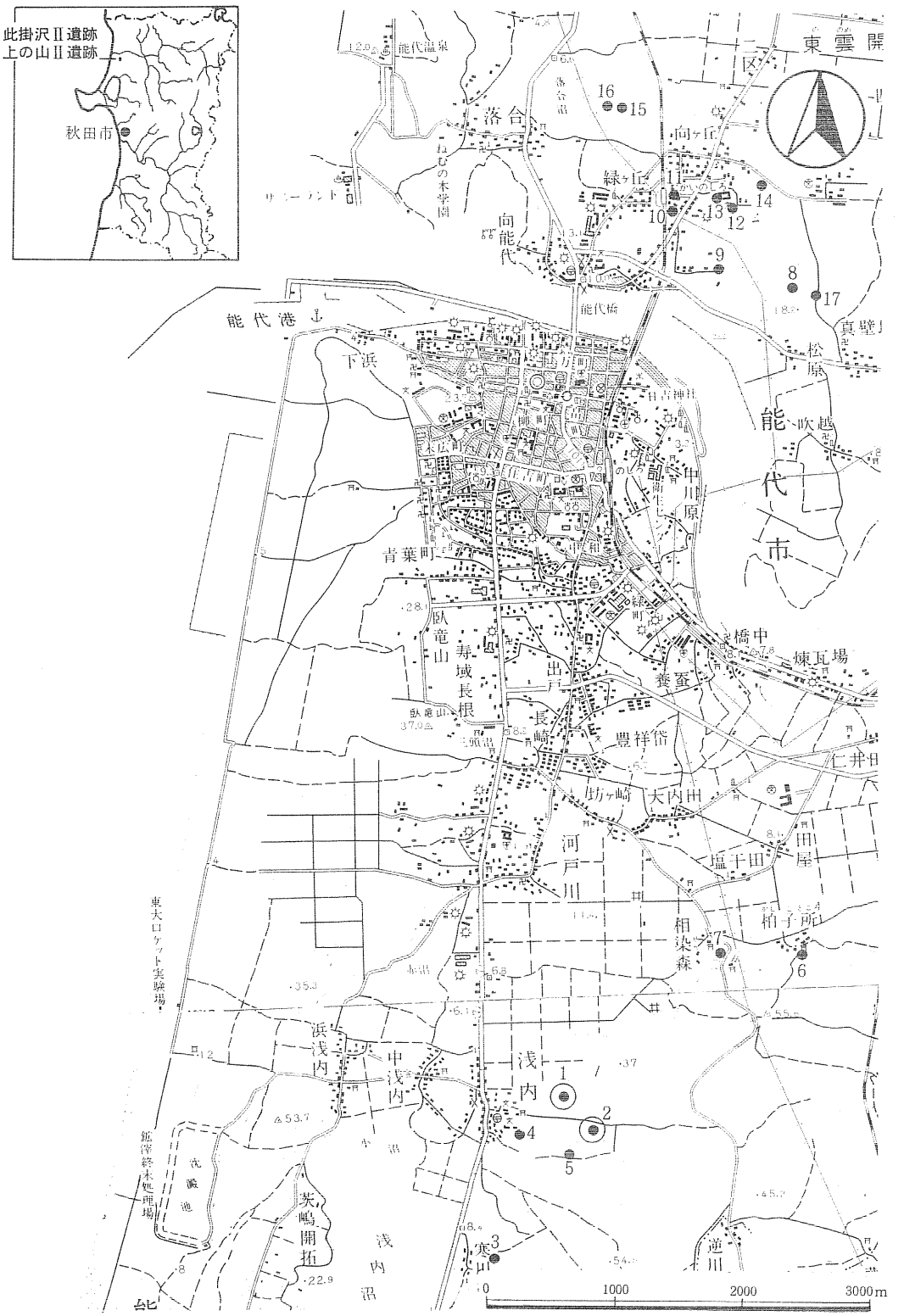
序
例　言

（此掛沢Ⅱ遺跡）
第１章　はじめに
　第１節　発掘調査に至るまで……１
　第２節　調査の組織と構成……１
第２章　遺跡の立地と環境
　第１節　立地と環境……３
　第２節　歴史的環境……３
　第３節　遺跡付近の地形・地質……４
第３章　発掘調査の概要
　第１節　遺跡の概観……９
　第２節　調査の方法……９
　第３節　調査の経過……10
第４章　調査の成果
　第１節　旧石器時代の遺物……13
　第２節　縄文時代の遺構と遺物……41
　　１　発見遺構と遺物……41
　　(1)　フラスコ状ピットと出土遺物…41
　第３節　弥生時代の遺物……42
　第４節　平安時代の遺構と遺物……42
　　１　発見遺構と遺物……42
　　(1)　竪穴住居跡……42
　　(2)　遺構外出土遺物……43
　第５節　その他の遺構と遺物……44
　　１　発見遺構と遺物……44
　　(1)　掘立柱建物跡……44
　　(2)　竪穴状遺構……44
　　(3)　土壙……46
　　(4)　焼土遺構……46
　　(5)　溝……46
　　(6)　その他の遺構……47
　　(7)　遺構外出土遺物……47
第５章　まとめ

（上の山Ⅱ遺跡）
第１章　はじめに
第２章　遺跡の立地と環境
第３章　発掘調査の概要
　第１節　遺跡の概観……66
　第２節　調査の方法……67
　第３節　調査の経過……67
第４章　調査の成果
　第１節　平安時代の遺構と遺物…68
　　１　発見遺構と遺物……68
　　(1)　竪穴住居跡……68
　　(2)　掘立柱建物跡……91
　　(3)　土壙……93
　　(4)　溝……96
　　(5)　焼土遺構……97
　　(6)　その他の遺構……108
　　(7)　遺構外出土遺物……109
　第２節　その他の遺物……109
　　１　出土遺物……109
第５章　まとめ

此掛沢（このかけざわ）II遺跡

（略称　3KKZ II）



第１図　遺跡周辺地形図・遺跡位置図（1. 此掛沢Ⅱ遺跡　2. 上の山Ⅱ遺跡）

第１章　は　じ　め　に

第１節　発掘調査に至るまで

此掛沢Ⅱ・上の山Ⅱ両遺跡の発掘調査は、東北農政局の能代開拓建設事業に係る緊急発掘調査である。当事業は、米代川右岸、左岸の山林、畑地を対象とする国営総合農地開発事業であり、対象地域は能代市、峰浜村、山本町、八竜町の４市町村にわたり、その面積は3,671haにおよぶ。

今回、発掘調査の対象となった両遺跡は、昭和56年11月に秋田県教育委員会が、範囲確認調査を実施し、此掛沢Ⅱ遺跡が48,400㎡、上の山Ⅱ遺跡が131,000㎡におよぶ広大な遺跡である事が確認された。このうち、工法等で対応不可能な削土部分がそれぞれ破壊されるため、記録保存を目的に発掘調査する事になったものである。

第２節　調査の組織と構成

此掛沢Ⅱ遺跡

遺跡所在地　能代市浅内字此掛沢119番地他

調査期間　昭和58年８月29日～11月14日

調査対象面積　2,430㎡

調査面積　1,682㎡

上の山Ⅱ遺跡

遺跡所在地　能代市浅内字上の山138番地他

調査期間　昭和58年10月13日～12月３日

調査対象面積　3,300㎡

調査面積　2,645㎡

調査主体者　秋田県教育委員会

調査担当者　柴田陽一郎　秋田県埋蔵文化財センター　文化財主事

調査補佐員　大高博康　米川一郎　桧森好広　阿部義行　畠山　圭　三嶋隆儀

調査作業員　原田富義　武田憲一　牧野弥助　原田政五郎　原田太一郎　平川哲夫　平川義雄　平川惣一　平川亀松　平川勝巳　平川富雄　平川長三郎　保坂芳

雄　佐々木芳太郎　大山徳治　平川末吉　平川勘四郎　渡辺吉治　落合三之助　福士正夫　武田キヨ　武田アサ　平川政子　梅田キノ　畠京　伊藤チマ　武田フジエ　宮野タキノ　畠悦子　原田キサ　平川テル　平川セツ　佐藤ツナ　佐賀すま　平川麗子　佐藤テツエ　平川キヨ　原田タミ子　平川ユキ　平川ツエ　平川アヤ子　平川リヨ　牧野エミ子　大高裕子　大高ミナ子　大高多智子　安宅ツワ　鈴木トキエ　平川末子　原田由子　畠フミエ　小川テツエ　原田朋子　今野ミネ　野呂田イキ　平川香代子　田中ツナ　鈴木カツエ　鈴木節　渡辺美津　小沼ヒデ子　小沼セツ　加勇田節子　佐藤ミツ子　武田ユリ　藤田敦子　田村トクエ　藤田満子　藤田カネ子　田中ミヤ　清水カチ子　平川厚子　藤田リワ　斉藤チヨ　秋元セツ　秋元キヨ　田中キヨ　浅野サツエ　藤田昌子　渡辺ハルエ　渡辺富子　鵜木陽子　畠山エツ　田川トモ子　大山トキ

事務補助員　鈴木光子

整理作業員　塚本則子　工藤優子　相場敏子　渋谷志　高野ひより　又井薫　佐藤仁美　村田嘉一　佐々木正昇　越後谷晴美　照井真澄美　小松悦子　戸澤典子　細井洋子　鈴木修子　斉藤美江子　新田孝子　加藤キサ子　照井悦子　後藤のり子　嶋津竜子　森元てる子　高橋まき子　高橋チエ子　岡本恵美子　辻輪子　鎌田れい子　伊藤教子　藤肥律子　池田静子　皆川恵子

調査協力機関　東北農政局能代開拓建設事業所
秋田県能代地区土地改良区
能代市教育委員会

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　立地と環境　（第１図、第２図）

此掛沢Ⅱ遺跡は東経140度１分、北緯40度９分で、奥羽本線東能代駅の南西約4.5㎞、標高約30ｍの台地上に位置する。この台地は米代川の左岸に広く展開する台地の一部で、沢目によって区切られ、意外に起伏の認められる台地である。

遺跡周辺は北と東が沢にのぞみ、南に緩傾斜する地形で、現況は畑地となっている。西の日本海とは旧国道を隔てて３㎞の距離にある。

上の山Ⅱ遺跡は此掛沢Ⅱ遺跡と農道を隔てて隣接する遺跡で、現況は畑地、杉、松林で、調査区は此掛沢Ⅱ遺跡の調査区から南に500ｍほど離れた原野と畑地の部分である。

第２節　歴史的環境　（第１図）

能代市には多くの遺跡が存在するが、米代川の両岸に広く展開する河岸段丘上の縁辺部に集中する傾向が顕著である。

旧石器時代の遺跡は弥生時代の遺跡と同様に能代・山本地方では少ない。大槻久馬氏が採集した旧石器をはじめとして、昭和51年に発掘調査された館下Ⅰ遺跡で２点、昨年調査された八森町土井遺跡で１点、昭和56年の範囲確認調査で逆川遺跡からも出土している。本格的に旧石器時代の発掘調査が行われたのは今回の此掛沢Ⅱ遺跡が初めてである。

縄文時代になると、前期の集落である杉沢台遺跡（国指定史跡）をはじめとして遺跡数は増加する。本遺跡周辺の縄文時代の遺跡を見てみると、前期の落合貝塚（16）、落合遺跡（15）、寒川遺跡（３）がある。中期ではフラスコ状ピットの存在が確認されている相染森遺跡（７）がある。後期では上野Ⅰ遺跡（14）や、昭和57年に発掘調査された真壁地遺跡（17）があり、土器の他に三脚石器・鐸形土製品等が出土している。晩期では昭和30年から33年にかけて発掘調査された柏子所貝塚（６―県指定史跡）があり、多くの海水産の貝類や貝製品などとともに、土壙が８基確認され、いずれからも人骨が出土している。遺跡は米代川左岸河岸段丘の傾斜面にある。

弥生時代の遺跡は少ないが、前出の真壁地遺跡では比較的多くの土器が出土している。今回調査された此掛沢Ⅱ遺跡でもわずかながら土器が出土している。

平安時代になると遺跡は増加する。米代川左岸では前出の寒川遺跡、本遺跡に隣接する百足遺跡（４）やムサ台遺跡（５）がある。米代川右岸では上野Ⅱ遺跡（８）、トドメキ竪穴群(12)、トドメキ遺跡（13）などその数は多い。

中世に入ると能代・山本地方に勢力を誇った桧山安東氏の居城として築かれた桧山城がある。周辺の地域は近世に至るまでその影響下にあり、金山館（10)、トドメキ館（11）は桧山安東氏に関係したものである事が推定される。

第３節　此掛沢Ⅱ・上の山Ⅱ両遺跡付近の地形・地質

地形・地質概要

両遺跡は能代平野の南部地域に発達する段丘上にある。

能代平野は南北に長く、東方向でややせばまった三角形状を呈し、西縁には海岸砂丘列が、その東側に広い沖積地があり市街地や水田となっている。他の部分は段丘が広く分布している。

砂丘は能代砂丘とよばれ、諸性質から北部、中央部、南部に分類されている（工藤1982)。調査地域に分布する砂丘は能代砂丘南部の一部分であり、ここでみられる砂丘の最高高度は、53.7ｍと高い値を示めす。砂丘内部には腐植土層が１枚挟まれており藤（1975）のいう累重型砂丘に相当する。

能代砂丘の内陸部には沖積平地が広がるが、米代川以南においては、砂丘列と平行に湖沼が発達し、北から赤沼・小沼・浅内沼と続き、やがて八郎潟でその分布は終る。

東南部には数段の段丘が分布し、これは能代平野南部の大方をしめる。これらの段丘の一部は南能代断層とよばれる南北方向に走る活断層によって断ち切られている。段丘堆積物の基盤は主として船川層より成る。そして、両者の不整合面は凹凸がはげしく、また基盤の斜面にはおびただしい穿孔貝の生活痕が観察される。

段丘群

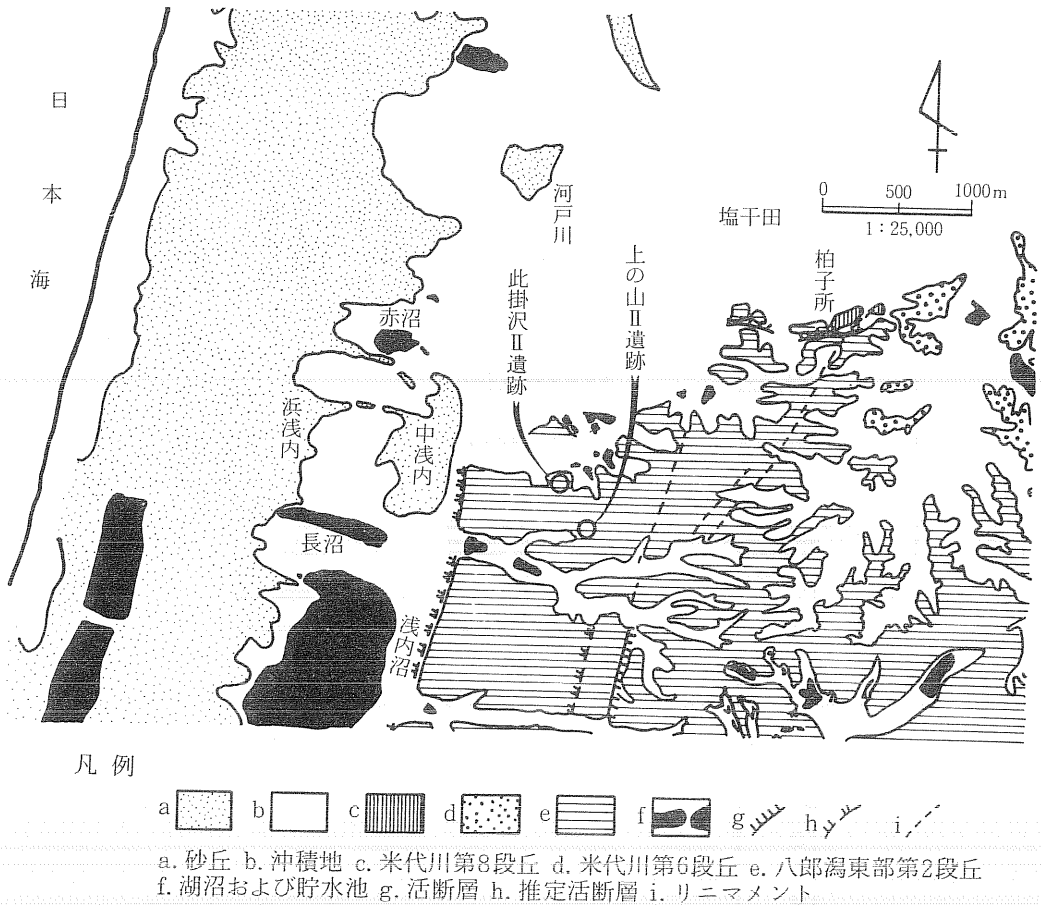
米代川左岸では、現海岸線ならびに八郎潟湖岸線にほぼ平行に八郎潟東部段丘が、また米代川沿いに米代川段丘群の低位段丘がわずかに分布する。

八郎潟東部第２段丘：当調査地域には４段の段丘が分布しており、その中で最も古いものが本段丘である。標高は40～50ｍあり、段丘面はゆるやかな起伏を呈する。また、当段丘は北は柏子所より南は山本町、八竜町までと広く分布し段丘地域の大部分をしめる。構成層は下部に砂礫を主とした地層、また上部では無層理の中粒～粗粒の砂より成る。両者はいずれも潟西層

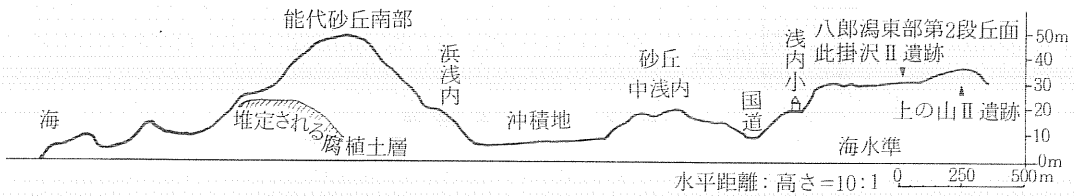
に対比でき、砂礫層は桧木沢砂礫層に、砂層は本内砂部層にそれぞれ対比される。なお、これは最終間氷期の堆積物であり、いわゆる下末吉層相当層である（潟西層団体研究グループ1983）。此掛沢Ⅱ、上の山Ⅱ両遺跡はこの段丘面上に造られているものである。

米代川第６段丘：前記段丘の北端にわずかに分布する段丘で、標高は30～35ｍと前記段丘よりわずかに低い。構成層は砂礫が主で上部にわずかではあるが砂又は泥質物をのせる。これらの堆積物は潟西層が浸食されて形成された谷部を埋積するように堆積したものである。

米代川第８段丘：米代川第６段丘の分布する近くの柏子所付近にごくわずかに分布する段丘



第３図　此掛沢Ⅱ遺跡・上の山Ⅱ遺跡付近の地形（栗山1982、工藤1982、原図、一部加筆）



第４図　此掛沢Ⅱ遺跡・上の山Ⅱ遺跡付近の地形断面図

で、米代川沿岸全体をみても、その分布は非常にかぎられている。標高は20ｍほどで、構成層は下部に細礫を主とする礫、上部は砂質土より成る。

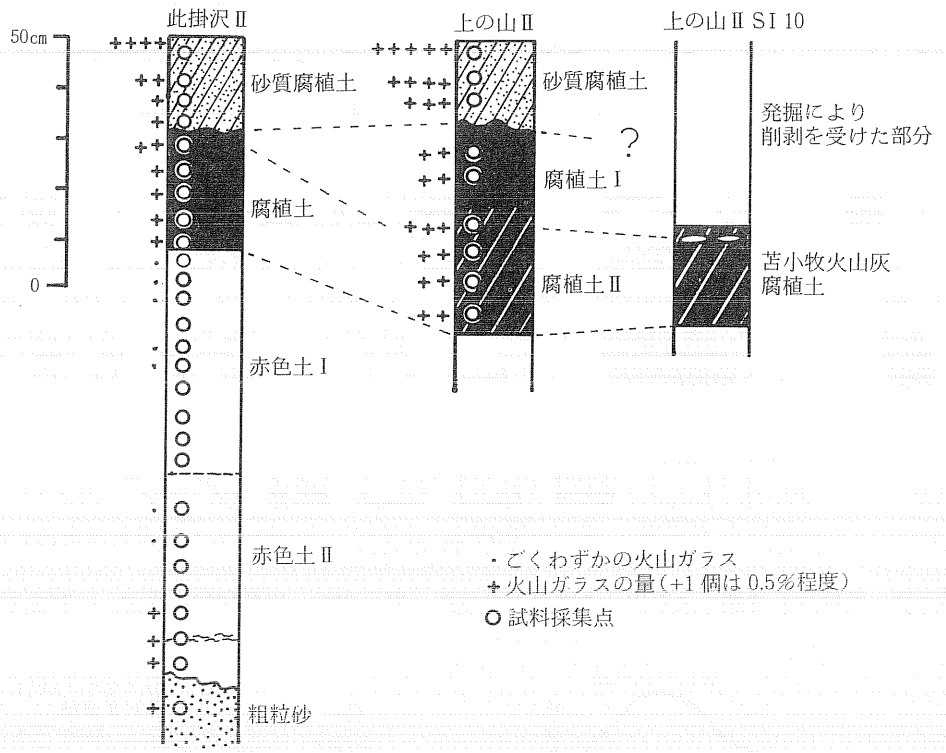
沖積段丘：調査地域の北域をしめる沖積平地にはひとつの段丘が認められ、河戸川や塩干田などに広く分布するものである。標高は８～10ｍで、構成層中に細粒の円磨された浮石を挾むのを特徴とする。これは洪水シラス面ともよばれ、考古学的遺物や古文書などより平安中期から末期に形成されたものと考えられている（平山・他、1966）。

火山灰層について

八森町土井遺跡に続いて、当遺跡からも火山灰層が発見され、新井房夫氏の同定の結果、これも苫小牧火山灰であることが明らかになった。詳細を以下に報告する。

① 地質層序

前述の通り当両遺跡は共に八郎潟東部第２段丘にあり、地質層序は上位から次の通りである。



第５図　地 質 層 序 表

地表から20cm程の深さまでは中粒砂を多く含む腐植土層で、下位のA_1層に比べ黒さがやや淡い。また、下位層の凹凸の面を埋積する形でこの砂質腐植土が堆積していることや、砂の粒子の大きさが比較的均一なことなどから、この層は風成砂が腐植土化したものと考えられる。

続くA_1層は黒色の腐植土層で厚さは約20cmである。その下位にはA_2があり、色も前者に比較してやや明るい黒色を示す。この層の上部に苫小牧火山灰が濃集している。但し、いずれも遺構の中にだけ存在し、他の腐植土層中には発見できなかった。

腐植土層の下位には赤色土が90cmの厚さで形成されており色調から赤色土ⅠおよびⅡに分けることができる。その下位には粗粒砂（本内砂部層相当層）が堆積している。

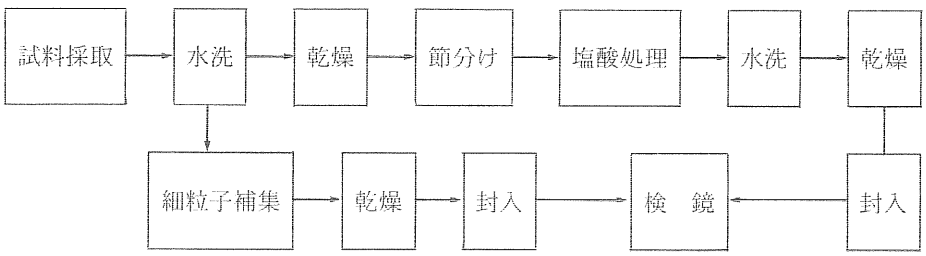
②　腐植土層中の火山ガラスについて

上の山Ⅱ遺跡中の遺跡ＳⅠ10から採取した火山灰を同定してもらった結果は次の通りである。

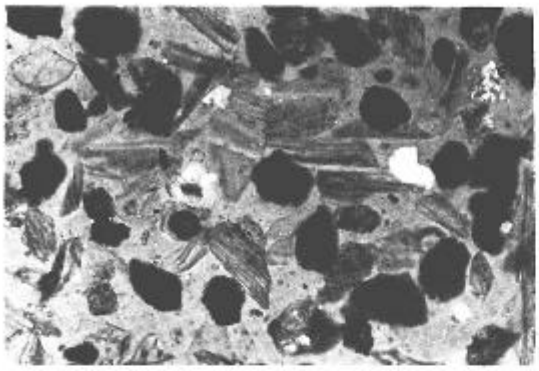
◦火山ガラス	最大粒径	0.3 mm	
	タイプ	パミス型＞バブルウォール型	
	屈折率	1.513 ― 1.520	
◦アルカリ長石	屈折率	n_1― 1.523 ±	分析者　新井房夫　1983、12、24

氏によると、アルカリ長石が認められることや火山ガラスの特徴から、この火山灰は苫小牧火山灰であることはまず確実であるという。

一方同遺跡付近の腐植土層を縦５cm、横10cmの広さで、厚さ５cmの直方体に試料を採取し、また此掛沢遺跡では南北方向１m、東西方向1.5 m、深さ1.4 mの試壕を掘り、前述の大きさでやはり試料を採取した。これら試料から下記の方法で火山ガラスの検出を試みた。なお、詳細については、土井遺跡発掘調査報告書を参照されたい。



試料分析の結果、腐植土層中にはすべてにわたって火山ガラスが認められ、タイプ別にみると繊維状（パミス型の１つ）が多く、扁平状（バブルウォール型）が少量含まれていることが明らかになった。また、此掛沢Ⅱ、上の山Ⅱ両遺跡ともに砂質腐植土層に多く火山ガラスが含まれ、特に表層５cmの点に火山ガラス含有のピークがあった。これは、降下火山灰が堆積後急



第6図　SI10　竪穴住居跡覆土上面の火山灰中の火山ガラス
（スケール0.2㎜）

激に一次的堆積相を失なっていく性質があることや、火山灰の粒子が霜や生物による移動で下方よりも上方に移動しやすい性質があること（町田、他1983）、さらに当層は風成砂であることを加味すると、苫小牧火山灰の二次堆積相と考えることができる。

赤色土上の上20㎝のところにもう一つのピークが認められ、これは層序的にＳＩ10の火山堆積の層準と合致することから、この時期に苫小牧火山灰が降下したものと思われる。

赤色土層にはほとんど火山ガラスは認められなかったが、赤色土最大部付近に、苫小牧火山灰中の火山ガラスと異なる型の火山ガラスがわずかに認められた。（第５図）

（文　献）

平山次郎、市川賢一（1966）　1000年前のシラス洪水――発掘された十和田湖伝説――、地質ニュース、140、10－28。

藤　則雄（1975）北陸の海岸砂丘、第四紀研究、第14巻、第４号、195－220。

活断層研究会（1980）　日本の活断層・分布図と資料、東京大学出版会、９－15、99。

栗山知士・藤本幸雄・鎧　敏春・打矢貞子（1981）　能代平野南部の地質と地形の教材化、秋田　地学No32、５－12。

潟西層団体研究グループ（ＭＳ）（1982）　能代平野南部の段丘地形ならびに中・上部　更新統、〝下末吉総研〟秋田シンポジウム討論資料集、19。

工藤英美（1982）　砂丘の教材化――能代砂丘を中心として――、秋田県教育センター・秋田県　特殊教育センター研究紀要、第13集、59－68。

潟西層団体研究グループ（1983）　男鹿半島北東部潟西地域における潟西層、地球科学37－2　69－80。

町田　洋・新井房夫（1983）　広域テフラと考古学、第四紀研究、第22巻、第３号、133－148

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

此掛沢Ⅱ遺跡は昭和56年11月に範囲確認調査が行われた。その面積は48,400ｍである。

本遺跡は米代川左岸に展開する広大な台地上の北縁にある。北方には沖積地が広がり、その比高差は約20ｍである。南方は台地が続き、その間にいくつかの小谷が形作られ、分断されている。遺跡周辺の現況は畑地で一部は原野となっており、意外と起伏がある。

今回の調査対象区は畑地及び原野であるが、北から南西にわずかに傾斜している。西側の原野を除く畑地部分は昭和49年の開田の際に重機により削平され、その盛土は、南端で100㎝、東端で60～70㎝である。北端から斜面にかけては２ｍ以上の盛土があり、削平されていると考えられたため、調査の対象外とした（第７図参照）。

遺跡の基本層位（第14図参照）は以下の通りである。

第Ⅰa層　黒色土で厚さ20～25㎝。―表土―

第Ⅰb層　黒褐色土で厚さ10～20㎝。―重機による削平後の耕作土―

第Ⅰc層　黒褐色土で厚さ20～100㎝。―重機による盛土―

第Ⅱ層　黒褐色土で厚さ20～25㎝。第Ⅰa層より固い。―縄文時代・弥生時代・平安時代の遺物包含層―

第Ⅲ層　明褐色火山灰土で厚さ30㎝。炭化物粒子を１％位含み、大変に固い。―旧石器時代の遺物包含層―　（調査区の西側を除き、この層の上面が削平されている。）

第Ⅳ層　明褐色火山灰土で厚さ60～100㎝。第Ⅲ層より固く、砂粒が多量に混入。―旧石器時代の遺物包含層（上部）―

第２節　調査の方法

グリッドの設定にあたっては、調査区のほぼ中央部に基準点―原点（M50）を取り、これから磁北に合わせた南北基線（Y軸）とこれに直交する東西基線（X軸）を求めた。南北方向には４ｍ毎に二桁の算用数字、東西方向には４ｍ毎にアルファベット一文字を付し、その組み合でグリッドを呼称した。つまり、M50から南にM49・M48…、北にM51・M52…、東にL50・K50…、西にN50・O50…となる。４ｍ×４ｍのグリッドの呼称はそのグリッド南東隅の交点

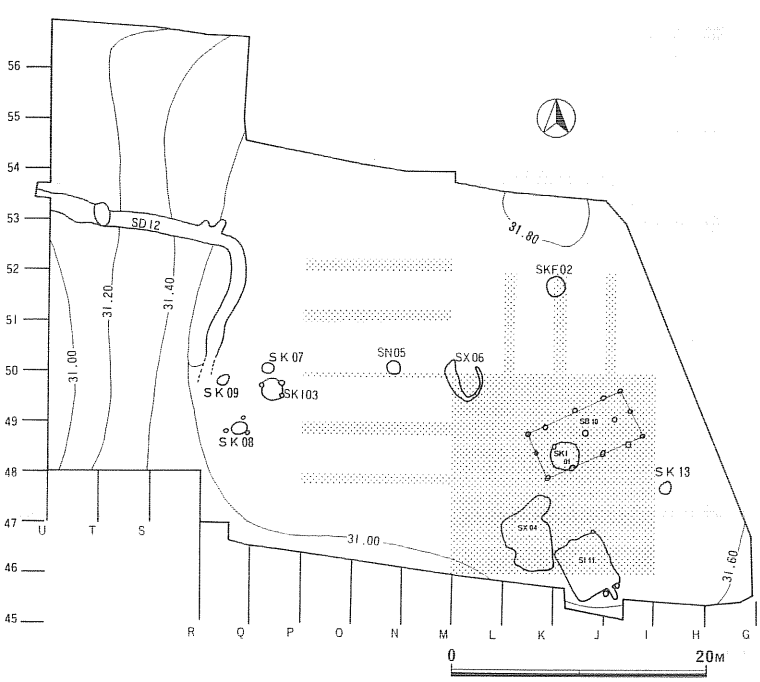
の座標名とした。

第３節　調査の経過

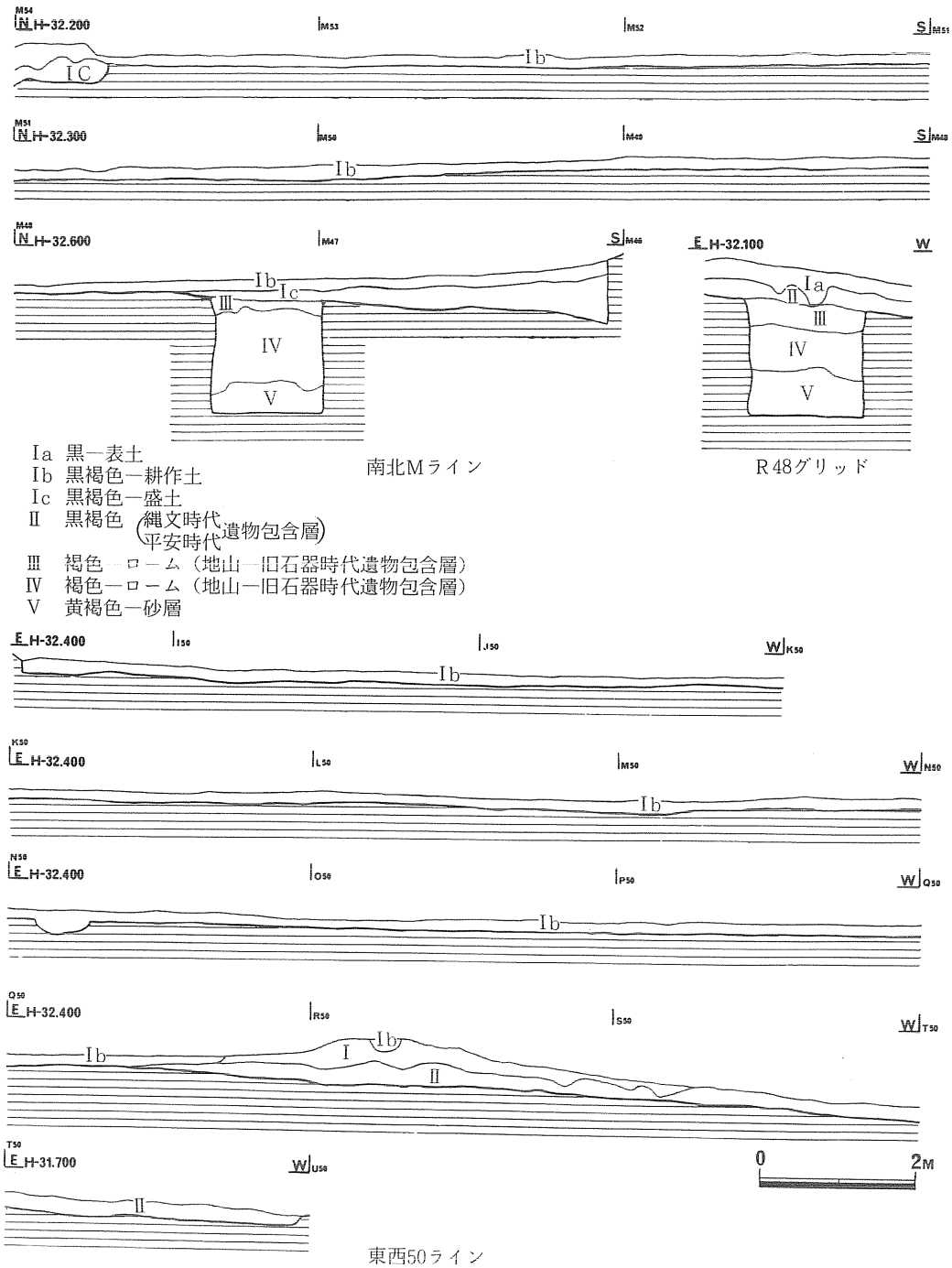
調査期間は昭和58年８月29日～11月14日までの、約２ケ月半にわたった。尚、調査にさきだち業者委託による除土・抜根、グリッド杭打設を行った。

８月29日、プレハブが３棟建ち、内外の整備をする。此掛沢Ⅱ遺跡の下刈り開始。９月１日、作業員に対し、調査の目的等や諸連絡について説明する。７日、東側の畑地から粗掘開始。10日、SKⅠ01を検出。県埋蔵文化財センター佐藤良太郎所長来跡、16日、SKⅠ03、SK03精査開始、26日、SB10、SⅠ11を検出。28日、範囲確認調査で旧石器が出土した地点（J49、K49グリッド）付近の火山灰土の掘り下げ開始。10月６日、遺構全体の写真撮影。農繁期に入り作業員4欠席が多く、調査に遅れがめだつ。

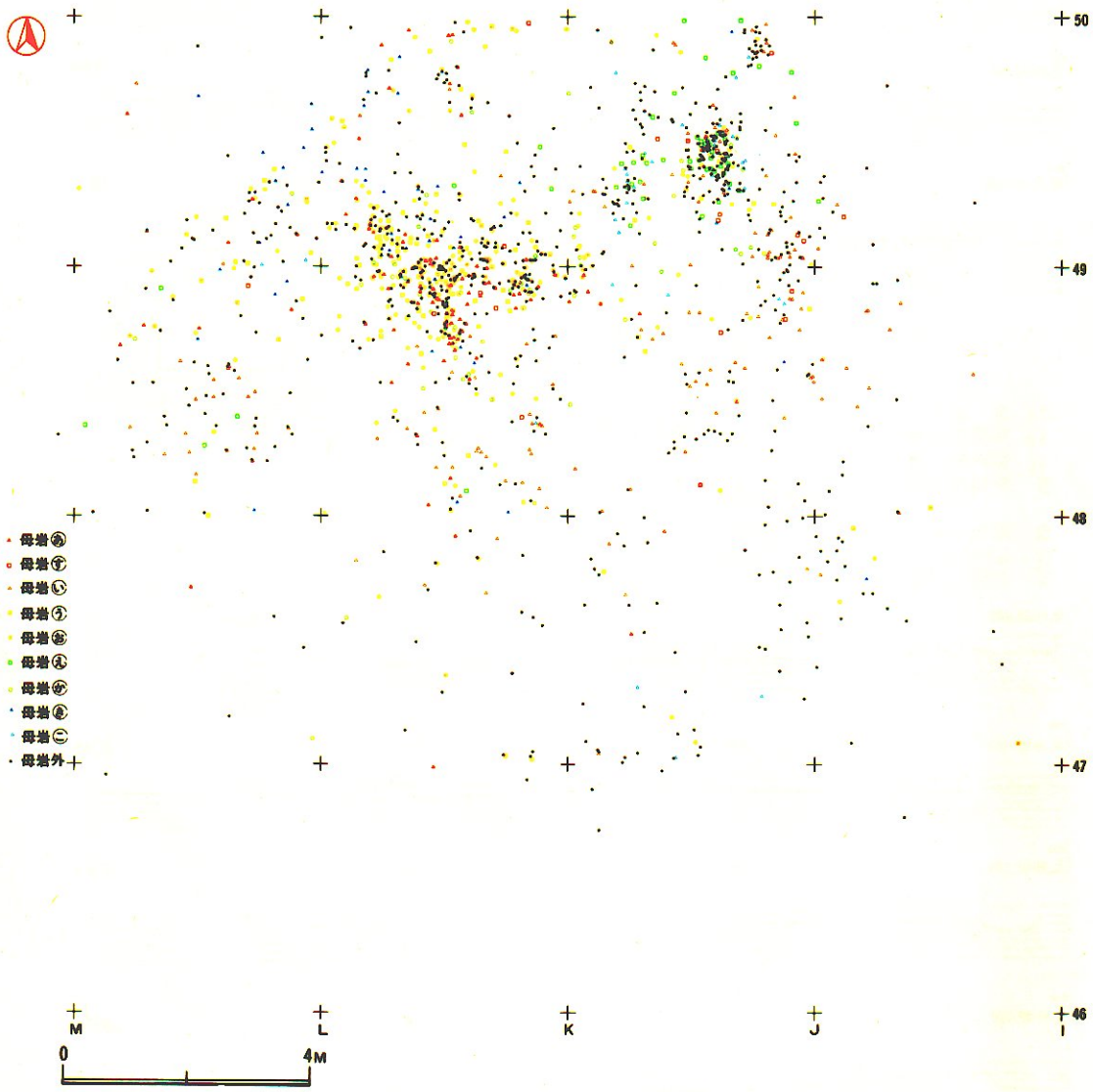
10月７日、旧石器を本格的に掘り始める。フレイク、チップが主だが石核も出土。11日、県埋蔵文化財センター橋本高史文化財主事、阿部義行、畠山圭両補作員調査に参加。13日、上の山Ⅱ遺跡の調査に橋本、阿部、畠山が入り、二手に分かれる。旧石器の出土範囲はSKⅠ01の北を中心に出土する事が判明した。その為、北、南、西にトレンチを設定し、範囲を把む事にした。11月１日、土層観察の為、R48グリッドの深掘りを行う。八森町立観海小学校教諭工藤英美氏来跡。10日、旧石器の出土量が今までよりかなり減ってきた。14日、旧石器の出土範囲およびレベリングを行ない、全ての調査を終了した。



第７図　此掛沢Ⅱ遺跡遺構配置図



第８図　此掛沢Ⅱ遺跡土層断面図



第９図　出土石器平面分布図

第４章　調査の成果

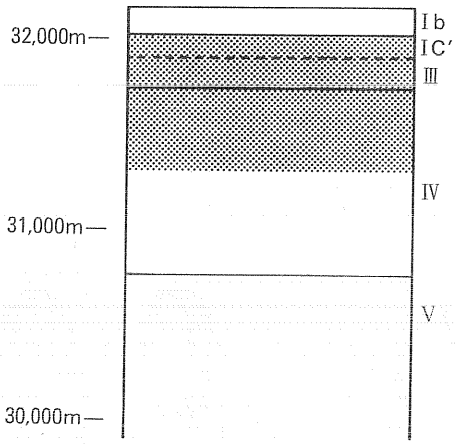
第１節　旧石器時代の遺物

１　出土遺物

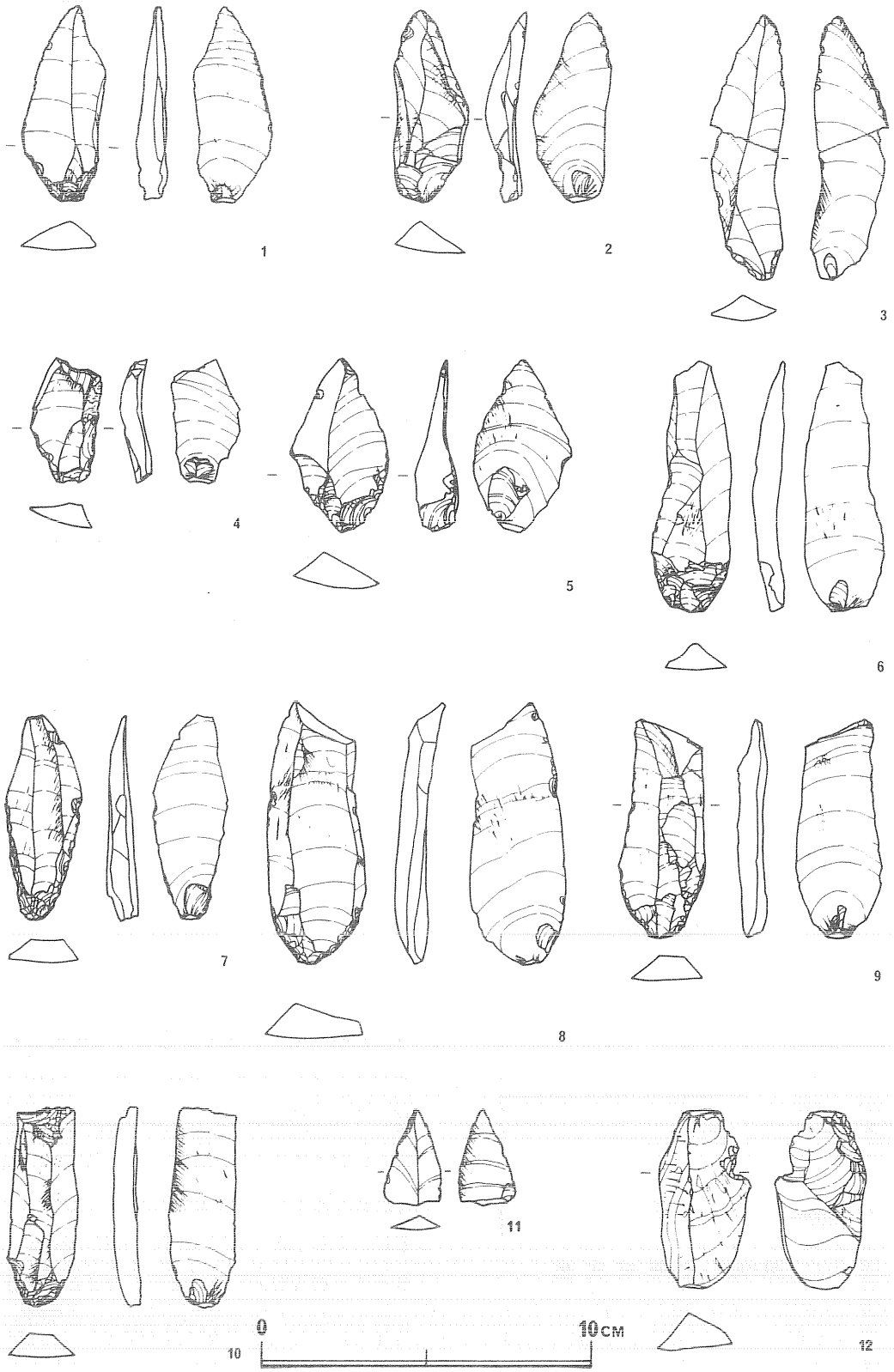
此掛沢Ⅱ遺跡の昭和58年度調査では、旧石器時代の遺物が第Ⅲ層褐色ローム土、第Ⅳ層褐色ローム土を中心にして1,700点、耕作等による撹乱土から約50点、計約1,750点が出土している。これらの（石器群）は、平面的には直径15ｍの円内、垂直的には約70㎝の厚さから出土したものであるが（第９、10図）、接合関係、層位的観察、石器群の組成、視覚的認識などから観て、単一のまとまりのものであると考えられる。出土した石器はナイフ形石器、彫刻刀形石器、石刃、局部磨製石斧、米ケ森型台形石器の他、縦長剥片、石核、剥片、チップなどで、局部磨製石斧と剥片のほとんど得られていない黒曜石を除いて全て頁岩を原材としている。

①　**ナイフ形石器**（第11図１～11、第27図147）

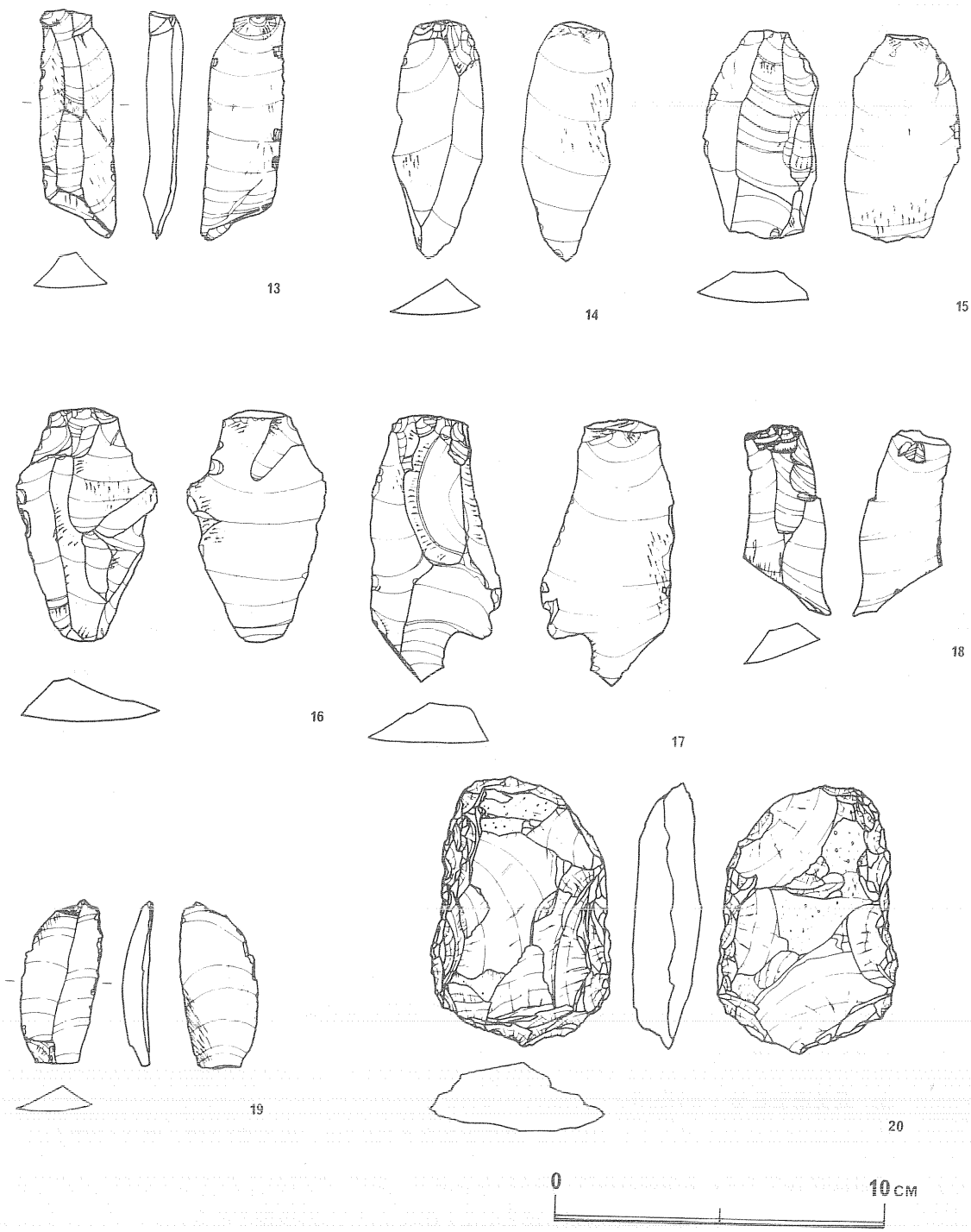
ナイフ形石器は58年度の調査で11点（１～10、第27図147）、57年度の範囲確認調査で１点（１１）出土している。これらのナイフ形石器の特徴は、㋑素材は全て石刃か不定形剥片で、先端部の尖るものと、幅のあるものとがある。㋺先端部にはわずかながら平担面が残っていたり母岩から分割された際の剥離面や、節理面の残っているものが多く、石器の全長がそのまま石核の長さと考えられるものが多い。㋩打面を大きく残し、基部両側辺に主要剥離面から細かいブランティングを１～２㎝（７のみは3.5㎝と長い）施す。㋥従って基部の断面形はカマボコ形か三角形を呈する。㋭両側辺のうち、基部を下にして見た場合の左辺に細かい刃こぼれの痕跡が目立つ。㋬石材は全て頁岩であるが、母岩㋳から得られた剥片を素材とする１点（第27図147）を除いては、各ナイフ形石器とも調査区内から母岩は発見されていない。従って147を除いたナイフ形



第10図　土 層 模 式 図



第11図　ナイフ型石器（1～11）・石刃(12)実測図



第12図　石刃（13～19）・局部磨製石斧（20）実測図

石器は全て他の所で製作されたこの遺跡に持ち込まれたものと考えられる。

此掛沢Ⅱ遺跡出土のナイフ形石器の素材、製作技術等の要素は上記㋑～㋭に要約されるが、形態からはⅠ～Ⅲ類に分類できる。

Ⅰ類（第11図１～５、11第27図147）

先端が尖るものである。先端部のどちらか一方に細部加工のないもの（１～３、147）と、あるもの（５、11）がある。４は先端が折れているが前者に入るものと思われる。

Ⅱ類（第11図６、７）

先端部が幅のあるものである。先端に細部加工のないもの（６）とあるもの（７）がある。

Ⅲ類（第11図８～10）

先端部に節理面などがあり幅広になっているものである。

② **彫刻刀形石器**（第29図172）

１点だけの出土である。米ケ森型台形石器を主に剥取ったと思われる母岩㋮から得られた縦長の剥片を素材として、先端から斜位に１回の加撃のみで彫刻刀面を作出したものである。

③ **石刃**（第11図12、第12図13～19）

此掛沢Ⅱ遺跡にあっては、調査区内で剥片剥離作業を行ったと考えられる母岩及び、その母岩から得られた剥片が総出土石器数の主体を占める。このためチップ等の細かい剥片を除いてはある程度母岩を特定できる。母岩毎の接合作業を行い、それによって剥片剥離技術を復原してみたところ、16の母岩のうち明らかに石刃技法によって石刃を得ていると認められる母岩は２種類だけである（表１参照）。従って狭義の意味において石刃と認め得るのはこの母岩㋩と㋭から得られたものだけである。しかしながら、母岩を特定できない縦長の剥片はこれを石刃とするか否か大いに迷うところである。ここでは母岩を特定できない縦長の剥片の中で石刃としての諸要素を満しているものを便宜上石刃として扱った。

８点ある。この中で、14～17は母岩㋶、㋖、㋟、㋠、㋡、などから得られた剥片と色調などが似ているが、12、13、18、19はナイフ形石器の大部分と同様に、母岩がなく確実に持ち込まれたものである。19は打面が折り取られており、先端部は両側からのブランティングによってわずかに尖っている。

④ **局部磨製石斧**（第12図20）

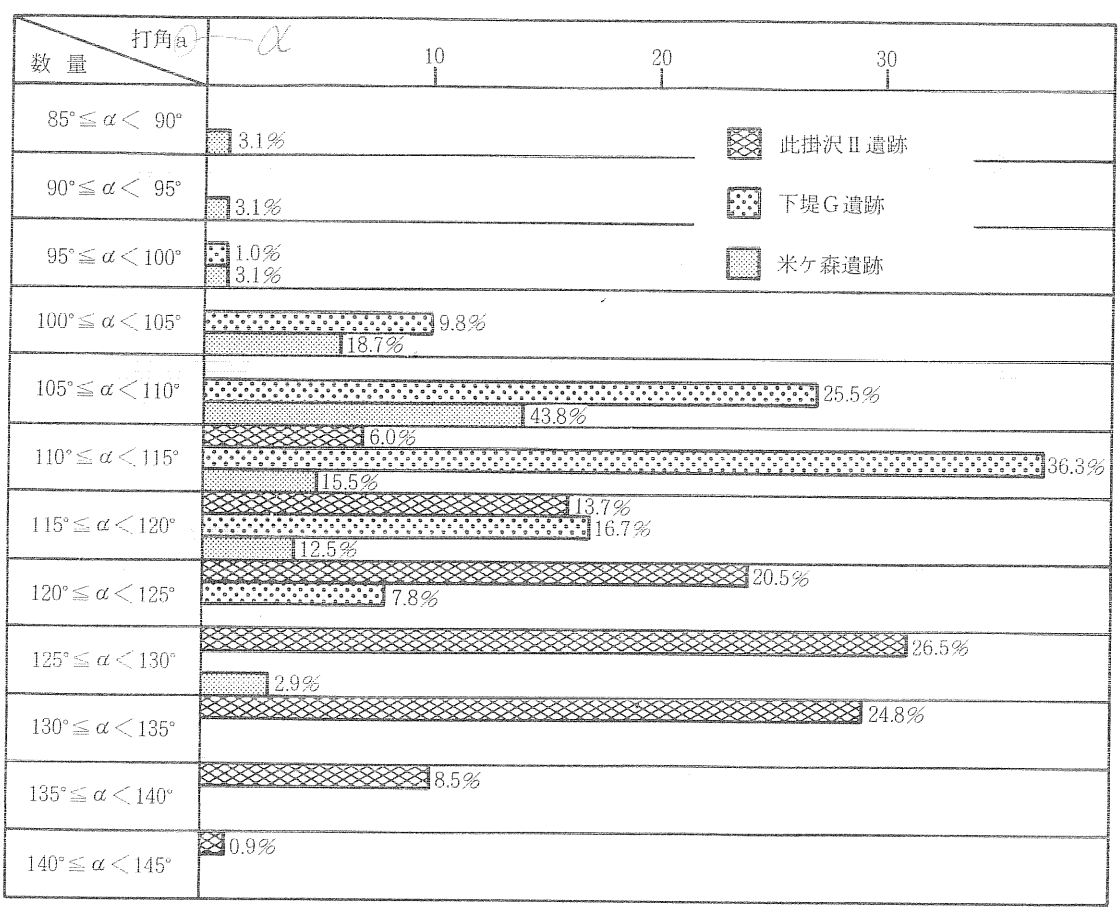
局部磨製石斧が１点出土している。現存する長さは8.3cm、最大幅5.5cm、厚さ2.0cmで、重さは97.5gである。表裏面共に自然面を残しており、扁平な泥板岩を全周から加撃して石斧に仕上げていることがわかる。表面、裏面の左下部に上下方向の擦痕がある。

⑤ **米ケ森型台形石器**（第14、15図）

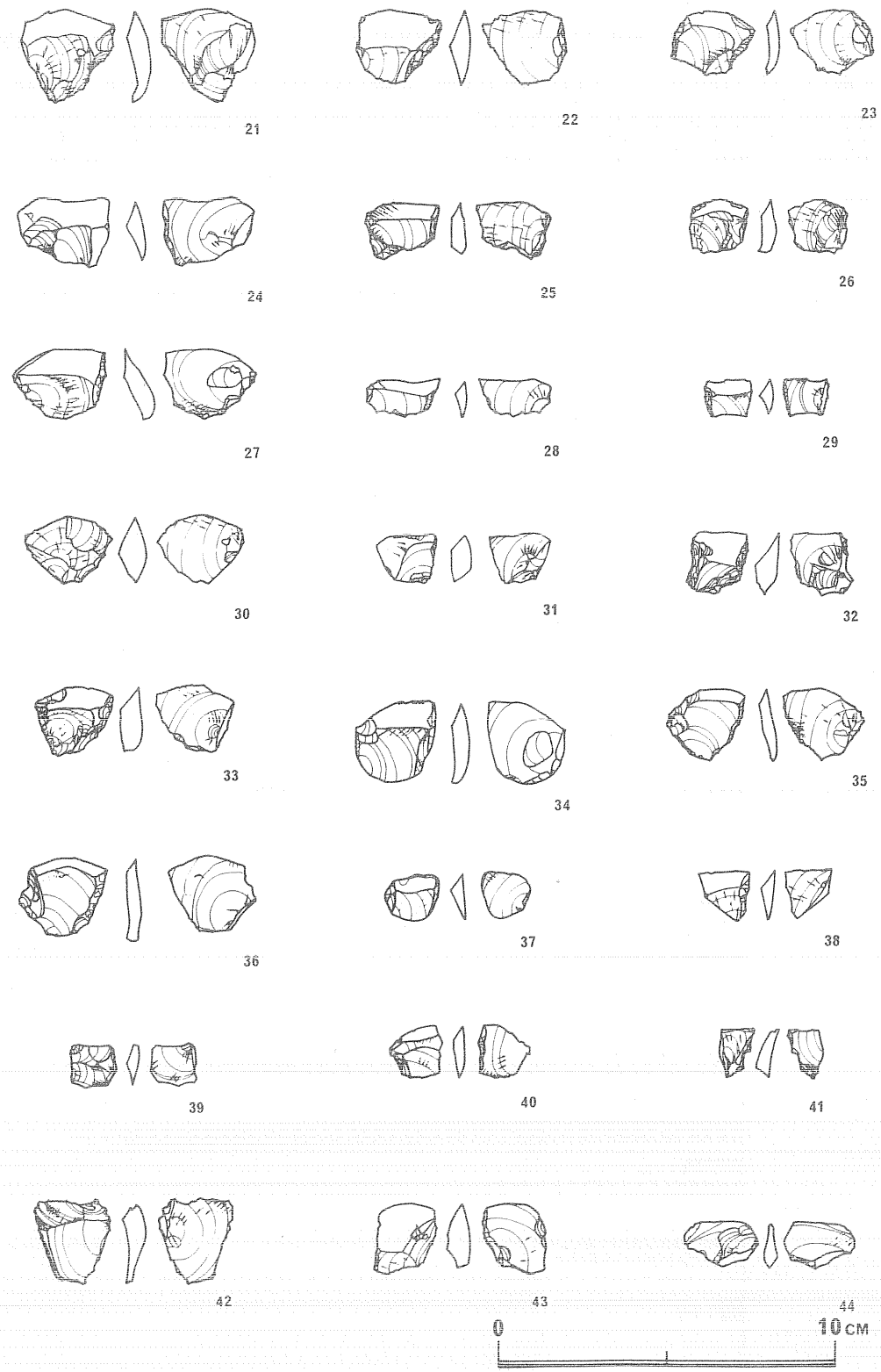
米ケ森型台形石器は全部で、172点出土している。石器の特徴は一㋑打面は平担で、多くは

大きく残る。㋺大きさ、形態に規格制が強く、末端がヒンジフラクチャーで終る。㋩背面右側に最も古い石核面を残し、その面と主要剥離面とが鋭い縁辺を形成する。㋥この縁辺に微細な刃こぼれと摩耗痕が観察される。㋭最も古い石核面の左側には直前の剥離痕を残す。㋬二次加工の施される部位は打面と相対する末端に加えられる。―などで、このことは米ケ森遺跡、下堤G遺跡とほぼ共通している。しかしながら㋩においては、剥離の順序が左→右だけには限らず、第20図86のように右→左のものもあり、この場合には背面左側に最も古い石核面を残している。このような例は第14図42、43、第15図60～65にも見られるが概して少ない。二次加工の施されている石器は全体の約37％（172点中、64点）で米ケ森遺跡の33％（43点中、14点）と近似している。また、本遺跡での米ケ森型台形石器の打角は 115°～ 135°に集中しており、米ケ森遺跡、下堤G遺跡のそれよりも若干大きな値を示している。（第13図）

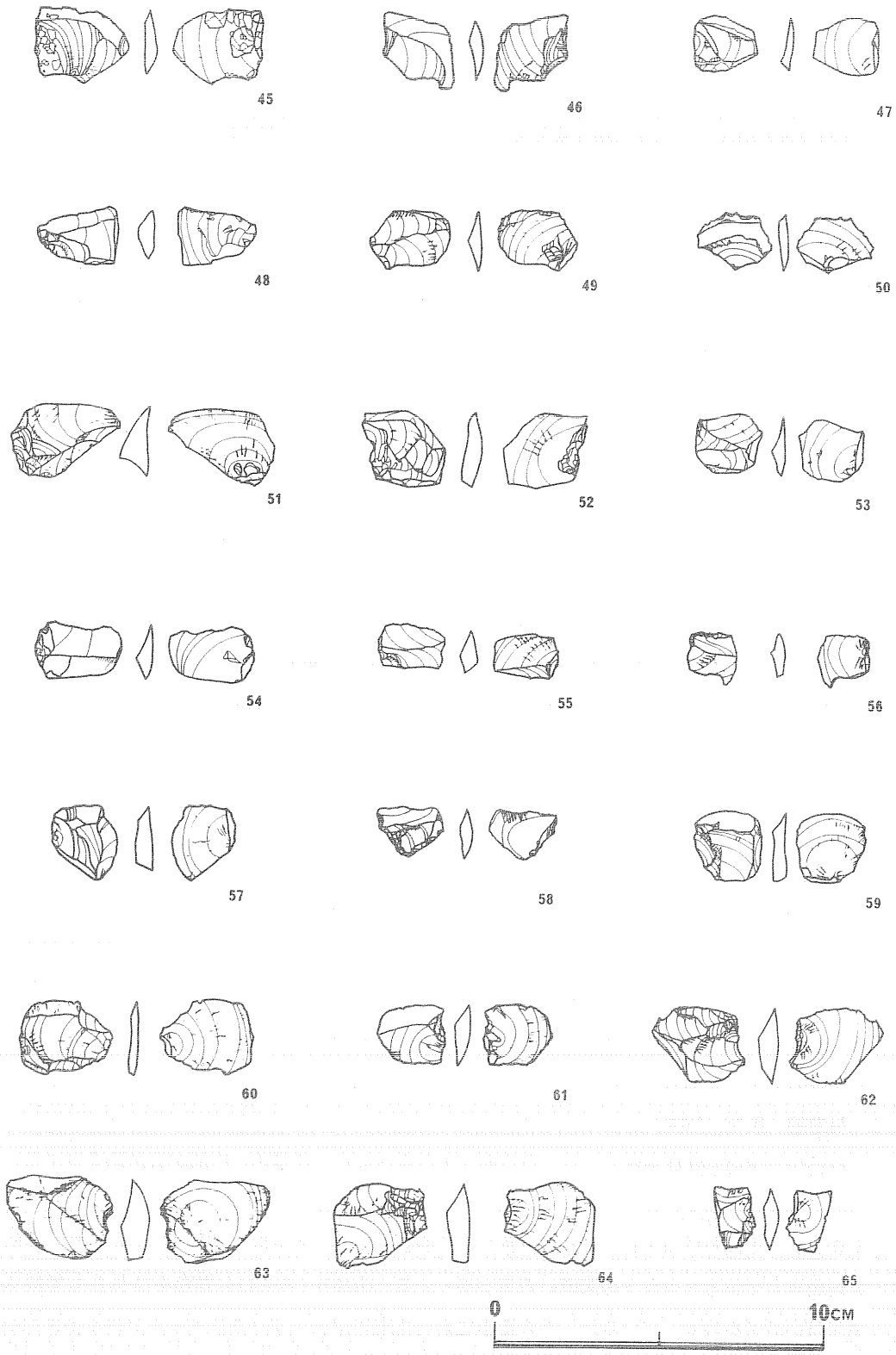
第14図、15図に示した米ケ森型台形石器は、母岩を特定できないものの一部であるが、大部分は母岩、㋶、㋷、㋟、㋠、㋡から得られたものと思われる。第14図は二次加工のあるもの、第15図はそれのないものである。



第13図　米ケ森型台形石器打角分布図



第14図　米ケ森型台形石器実測図（1）



第15図　米ケ森型台形石器実測図（２）

2　母岩と石核

今回の調査地区内で剥片剥離作業を行ったと思われる母岩が約20個確認されている。そのうち、明らかに石器を得ている母岩は16個（母岩名㋐～㋒）で、石質は全て硬質頁岩である。16個の母岩からはナイフ形石器、彫刻刀形石器、石刃、縦長剥片、米ケ森型台形石器などが得られている。その得られている石器の器種によって16個の母岩は５分類できる（表１）。

Ⅰ類：石刃だけを得ている母岩……㋒、㋔

Ⅱ類：米ケ森型台形石器だけを得ている母岩……㋓、㋕、㋖、㋗、㋘、㋙、㋚

Ⅲ類：米ケ森型台形石器と縦長剥片を得ている母岩……㋑、㋖、㋗、㋘、㋚

Ⅳ類：米ケ森型台形石器とそのB種を得ている母岩……㋝

Ⅴ類：米ケ森型台形石器とそのB種と縦長剥片を得ている母岩……㋐

また、合計1,750点の出土石器は、直径15ｍの円内から出土しているが、その平面分布を見ると、その中でも特に、K－48・49グリッドと、J－49グリッドの２ケ所を中心にしていることがわかる。16個の母岩とその剥片の分布状況をこれに着目して見ると、母岩㋐、㋒、㋖はK－48・49グリッド、母岩㋑、㋓、㋗、㋗、㋘、㋙、㋚はJ－49グリッドを主体にし、母岩㋔、㋕、㋚は両者にまたがって分布している。このことから直ちに器種毎の製作場所の違いについては云々できないが、少なくとも、J－49グリッドでは米ケ森型台形石器が主に製作されたことがわかる。なお、実測図中のスクリーントーンは打面を表わしている。

①　Ⅰ類：石刃を得ている母岩

母岩㋒（第16、17図）

16cm×10.5cm×10cm以上の大きさの母岩で、K－48・49グリッドを中心に分布する。自然面は灰白色、内部は明褐灰色～褐灰色を呈する。残存する石核は３個でこのうちの２個、石核A、Bが接合する。母岩の分割に規則性は看取されない。各石核から石刃を剥取る場合、石核A（第17図67）、C（69）B（68）は新たな打面の作出を行っている。得られている石刃は最長でも7.5cm、５～６cmの中形石刃が多い。70は石核Cから剥取られた４点の石刃と２つの剥片の剥離順をａ～ｇで示している。

母岩㋐（第18、19図）

母岩の全体の形状は不明である。自然面は灰白色～にぶい黄橙色、内部が灰白色を呈する。石器は２個残存している。石核A（第19図77、78）は、母岩から分割された後、一隅の自然面を除去し、これを打面として自然面付きの剥片を数枚取り、さらにその面を打面として自然面を剥取りしてから８点以上の部厚い石刃を得ている。石核B（79）は分割面を打面として幅広で部厚い石刃を剥取っているが、その途中において末端がヒンジフラクチャーで終る小さな剥

表1　母　岩　別　石　器　数

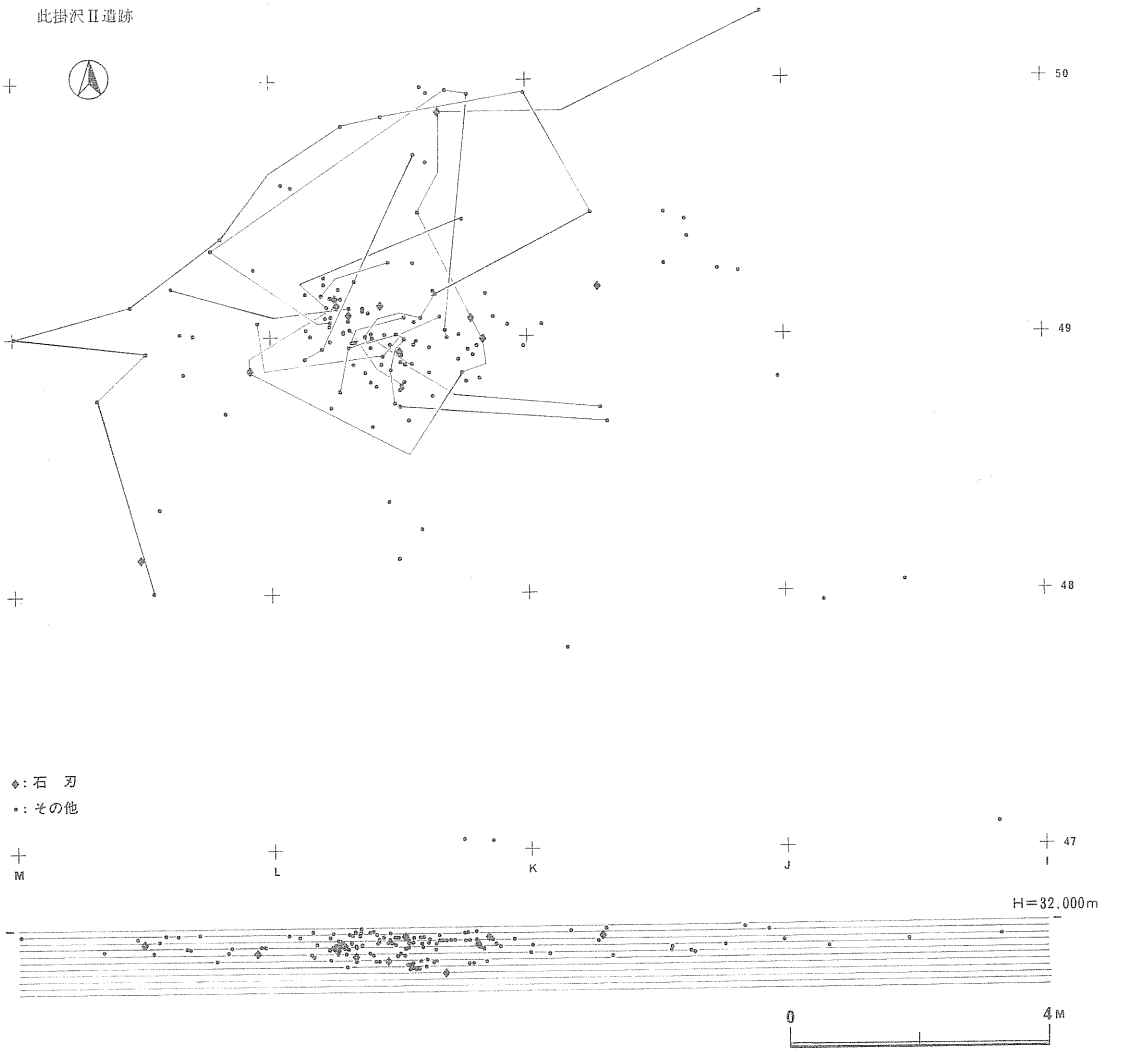
番号	母岩	総点数	石核数	石器数					得られた石器の種類	母岩の分類
				ナイフ形石器など	石刃	縦長剥片	米ケ森型台形石器			
							二　次加工有	二　次加工無		
1	あ	95	4			2	B種－2	(？10) B種－4	米ケ森型台形石器？ 〃　B種、縦長剥片	Ⅴ
2	い	177	6	ナイフ－1		3	9	25	米ケ森型台形石器、縦長剥片	Ⅲ
3	う	144	3		10				石　刃	Ⅰ
4	え	63	5				11	12	米ケ森型台形石器	Ⅱ
5	お	209	2		12				石　刃	Ⅰ
6	か	58	0				5	5	米ケ森型台形石器	Ⅱ
7	き	62	(2)	彫刻刀形石器－1		3	6	4	米ケ森型台形石器、縦長剥片	Ⅲ
8	け		3			4	2	5	米ケ森型台形石器、縦長剥片	Ⅲ
9	こ	38	3			1	1	5	米ケ森型台形石器、縦長剥片	Ⅲ
10	さ		2				1	3	米ケ森型台形石器	Ⅱ
11	す	21	2			1		3	米ケ森型台形石器、縦長剥片	Ⅲ
12	せ	14	0				B種－1	4	米ケ森型台形石器、（B種）	Ⅳ
13	そ		(1)						米ケ森型台形石器	Ⅱ
14	た		6				4	6	米ケ森型台形石器	Ⅱ
15	ち		3					3	米ケ森型台形石器	Ⅱ
16	つ		3						米ケ森型台形石器	Ⅱ
合計		(781)	45	ナイフ－1 彫刻刀－1	22	13	39 B種－3	75 B種－4		

片を数多く得ている。しかしながらこの小剥片の中には米ケ森型台形石器となるようなものは含まれていない。

②　Ⅱ類：米ケ森型台形石器を得ている母岩

母岩え（第20、21図）

9cm×10cm×5cm以上の略楕円球形を呈する母岩と思われ、自然面は浅黄橙色～淡黄色、内部は灰褐色を呈する。J－49グリッドを中心にして分布し小さな剥片も含めて63点確認されて

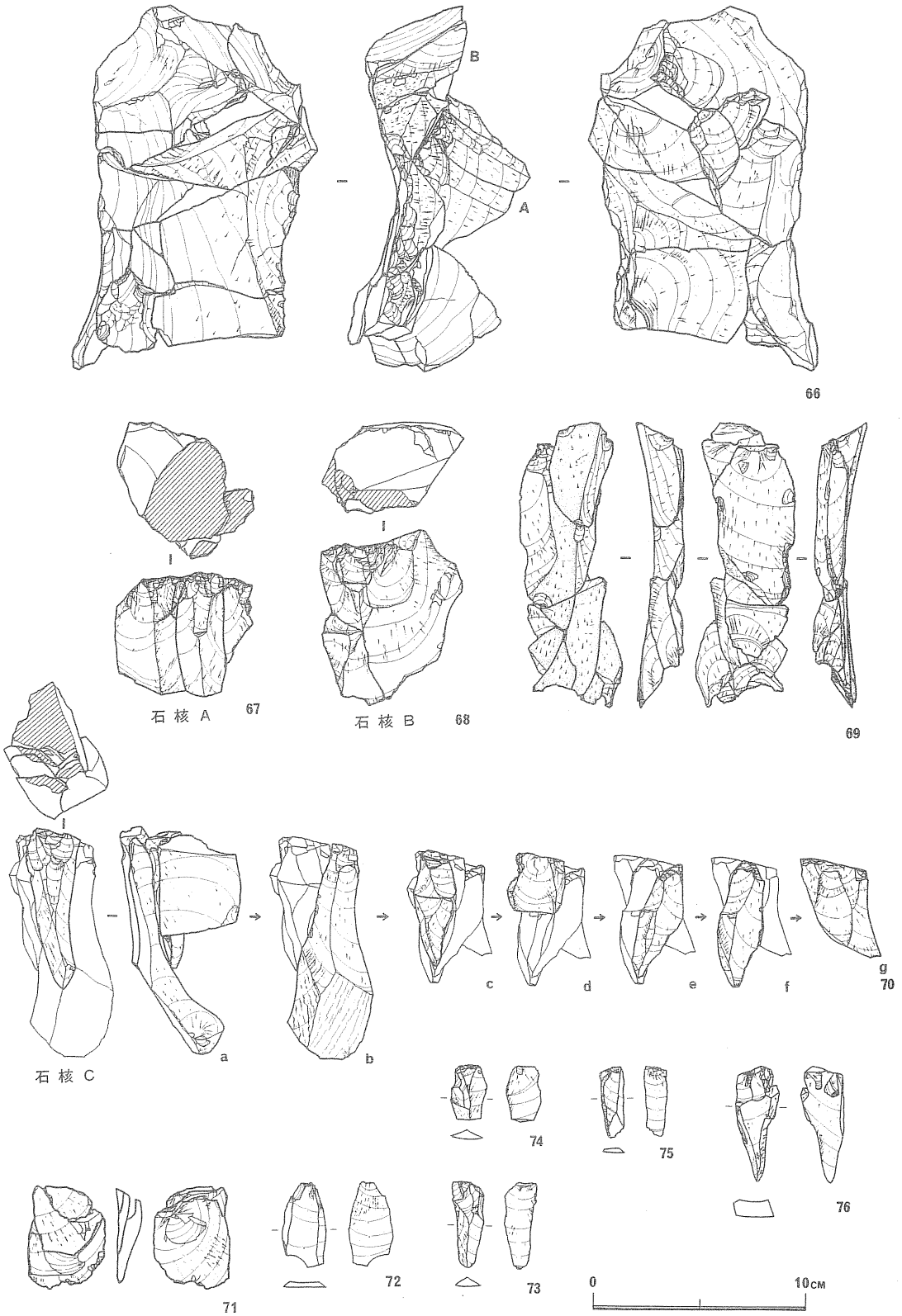


第16図　母岩㋒の分布と接合関係図

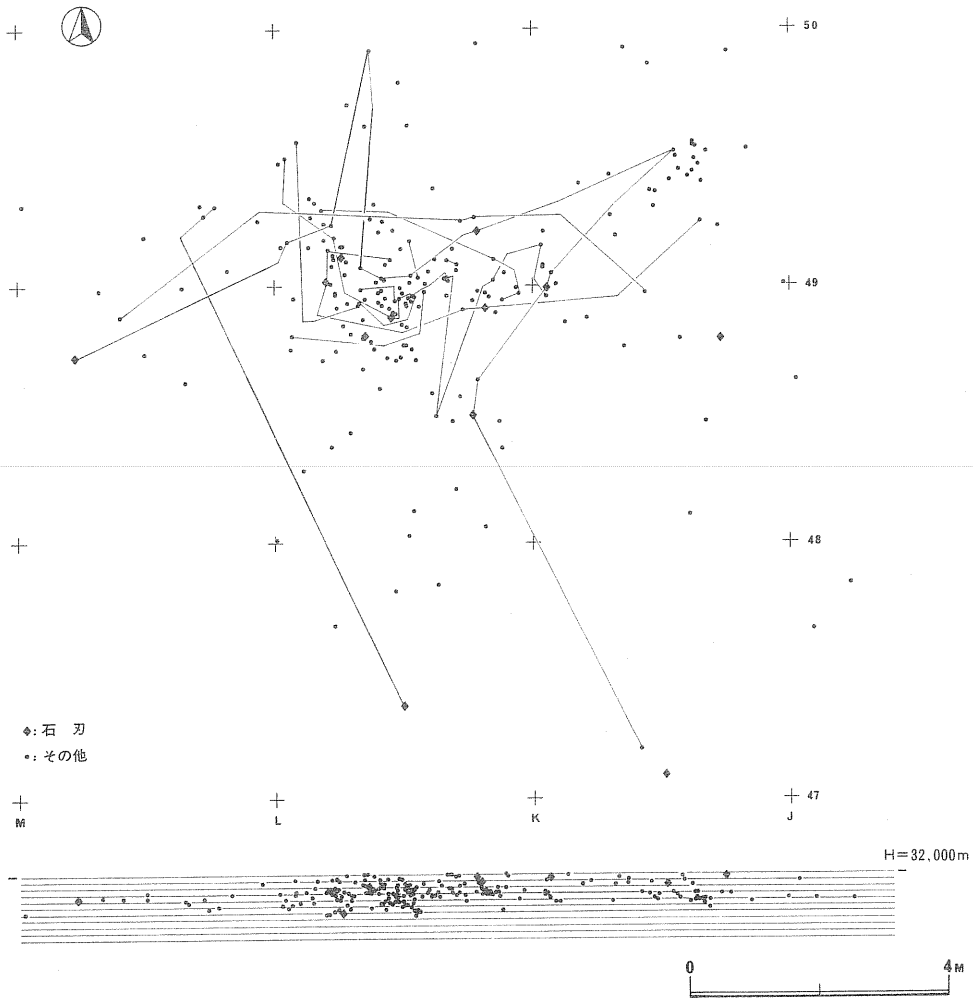
いる。残存する石核は5個であるが、推定される母岩の大きさからして他に2～3個あったものと思われる。石核の母岩からの分割は、ほぼ節理面に沿うように大分割し、必要に応じてさらに2分したりしている。第21図82は3つの石核A、B、Cの、86は石核A、Bの接合状況を示したものである。石核A、Bは最初は1つの石核であったもので、その段階で大分割面を打面として87～89、86dの剥片が得られ、その後に石核Bが分割されている。この石核Bが分割された後も石核Aからは7点以上の、Bからは打面調整された後2点以上の剥片が剥取されている。

母岩㋕（第22図、第23図120～125）

石器を含む計58点の剥片が、K－48・49、J－49グリッドを中心にして分布する。母岩の自然面は灰白色～淡黄色、内部は灰褐～黒褐色を呈し細い縞が多く入る。剥片の大部分は小さなものであるが、やや中型の不定形剥片に近いものも含まれる。石核は残存しない。10点の米ケ



第17図　母岩㋐の実測図



第18図　母岩㊨の分布と接合関係図

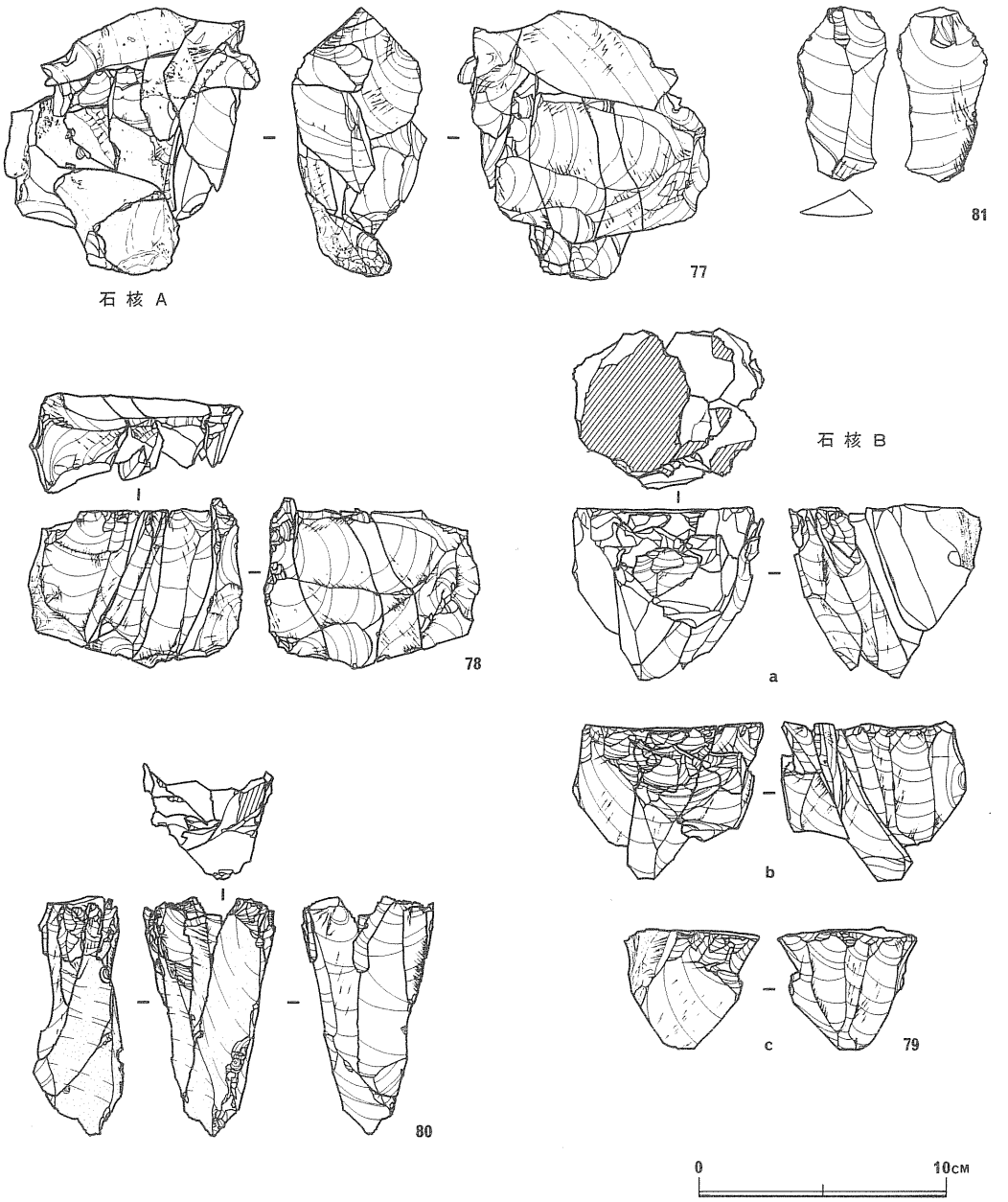
森型台形石器があり、第23図121は下端に自然面を残している。

母岩㊨（第24図、第25図134～137）

11cm×6cm×15cm以上のやや偏平な母岩で自然面はにぶい黄橙色～明褐色、内部は灰褐色～黒褐色を呈する。J－49グリッドを中心にして分布する。残存する石核は2個（134、135）であるが、欠失部分からみて、他に2～3個の石核があったものと思われる。134からは11点以上の米ケ森型台形石器が得られているが、母岩からの分割面を打面にしているところと、自然面を除去して打面の作出を行っているところとがある。2点の米ケ森型台形石器が接合する。135の打面も134と同様、分割面のところと新たに作出しているところがある。

母岩㊩（第24図、第25図132、133）

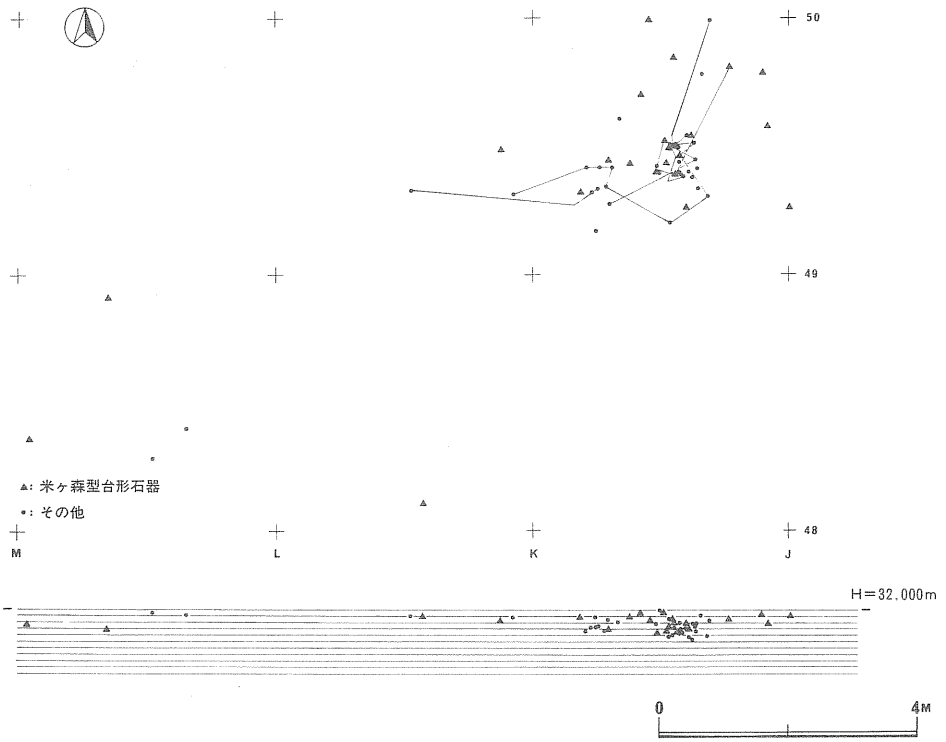
80cm×9cm×9cm以上の比較的小さくずんぐりした母岩で（132）自然面が褐色、内部が灰



第19図　母岩㊟実測図

白色を呈する。J－49グリッドを中心にして分布する。節理面が多い。石核はこの母岩を節理面に沿って２分割したのち、さらに分割して得ているが米ケ森型台形石器の石器は１点（133）しかなく、他は分割されたままの状態である。133は３回の加撃によって自然面の一部を取り除き、これを打面としている。上下両端から剥片が得られている。

母岩㊢（第23図105～119、第24図）



第20図　母岩㋓の分布と接合関係図

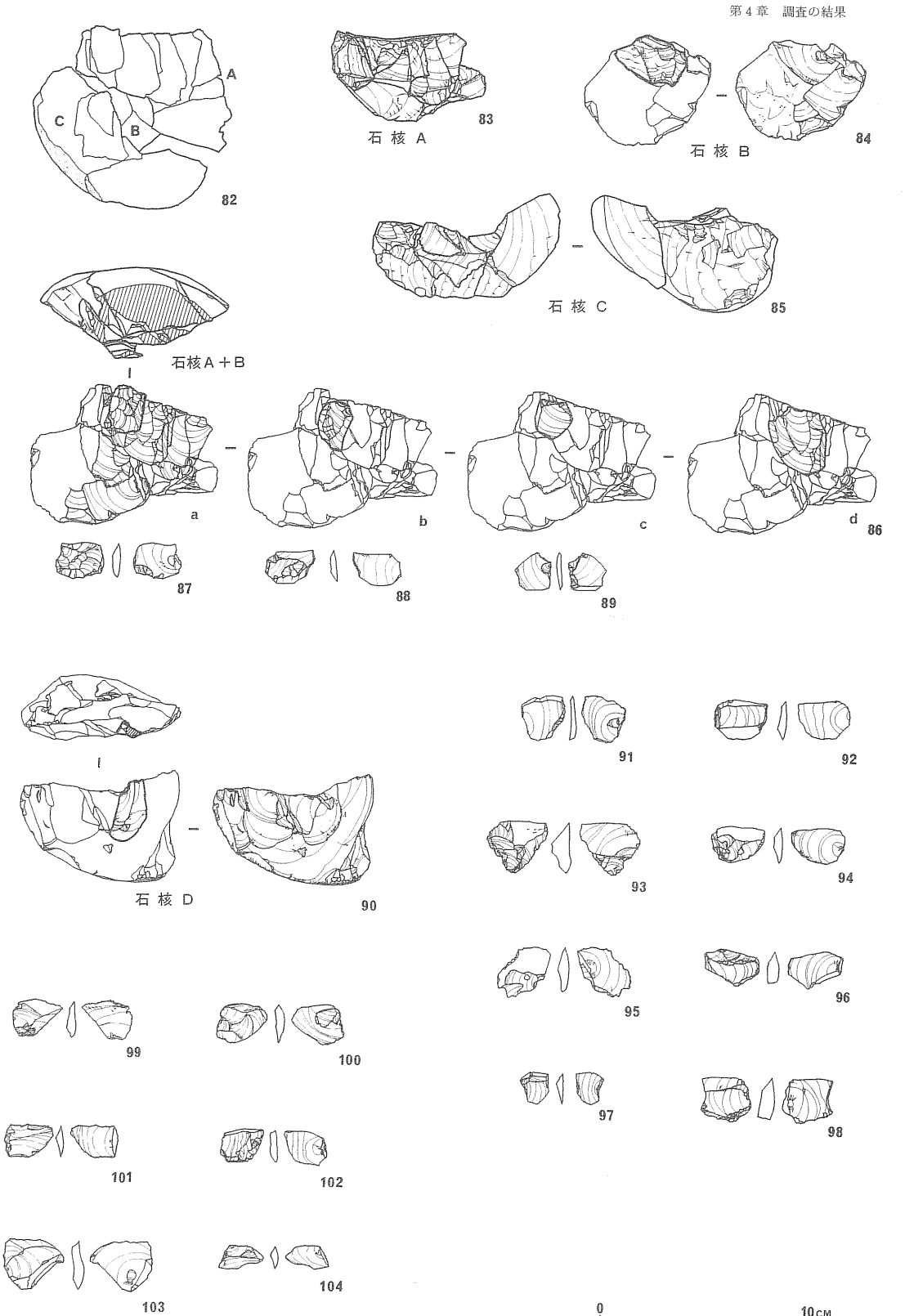
約6.5cm×11cm×20cmのゴツゴツした母岩で、自然面が褐色、内部が灰白色を呈する。J－49グリッドを中心にして分布する。石核を得るに当っては、まず細長い母岩の両端及びゴツゴツした部分を取り去り、縦方向に大分割し、さらにそれを細分して6点以上の石核を得ている。石核における打面はほとんどが調整打面であるが、一部石核Bなどは分割面を打面している。この母岩から得られた米ケ森型台形石器は10点を確認している。しかしこれは石器の一部に自然面等があり、他の母岩、㋕、㋖、㋟、㋠などのものと識別できる点数である。第23図112～119は母岩㋟から得られた米ケ森型台形石器であるが、打面を上にして見た場合の背面左側か下端に自然面を残している。

母岩㋟（第24図、25図129～132）

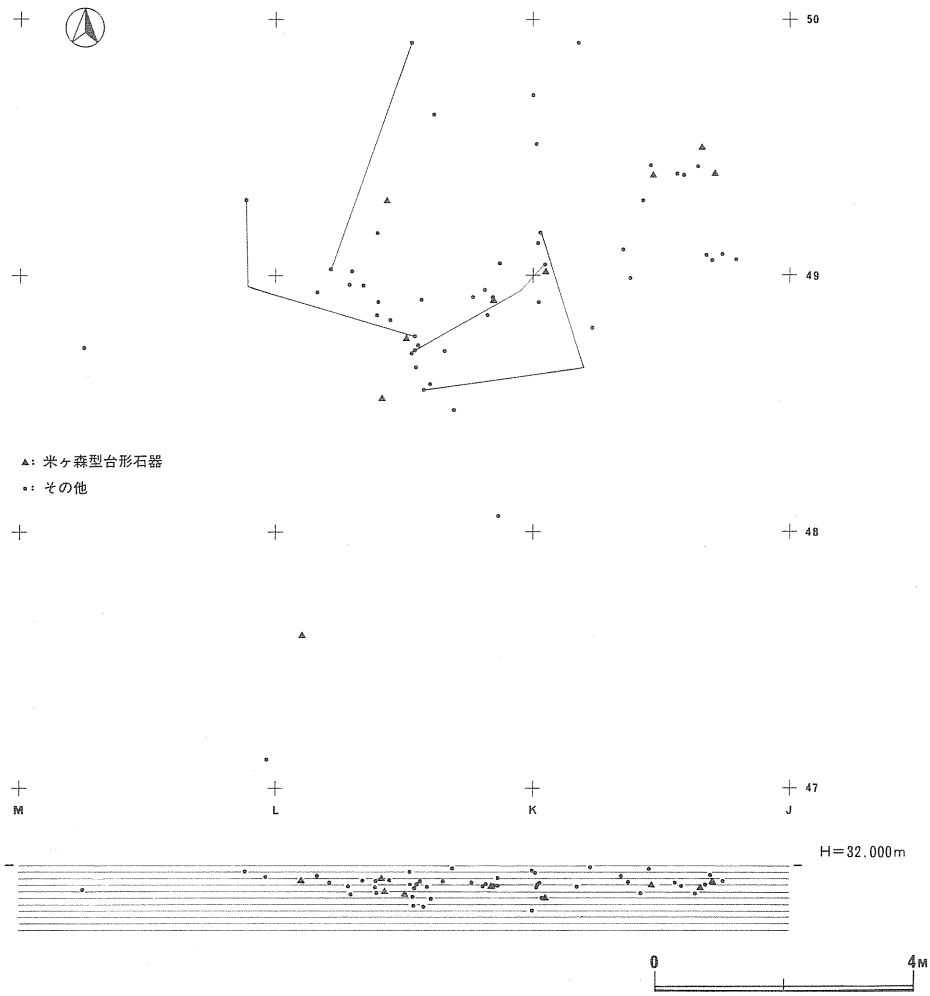
自然面はいぶい黄橙色、内部は灰黄褐色を呈する節理面の多い母岩で、J－49グリッドを中心に分布する。比較的大きな母岩と思われるが、一部しか残存せず全体の大きさ形状は不明である。第25図129～131は接合する3点の石器である。米ケ森型台形石器の剝取りに当っては分割面や節理面を打面とする場合とがある。

母岩㋠（第24図、第25図126～128）

自然面は褐色、内部は灰黄褐色を呈する母岩で、J－49グリッドを中心にして分布する。3


A
B
C
82
83
石核Ａ
84
石核Ｂ
85
石核Ｃ
石核Ａ＋Ｂ
a
b
c
d
86
87
88
89
91
92
93
94
石核Ｄ
90
95
96
99
100
97
98
101
102
103
104
0
10cm

第21図　母岩㋓の実測図



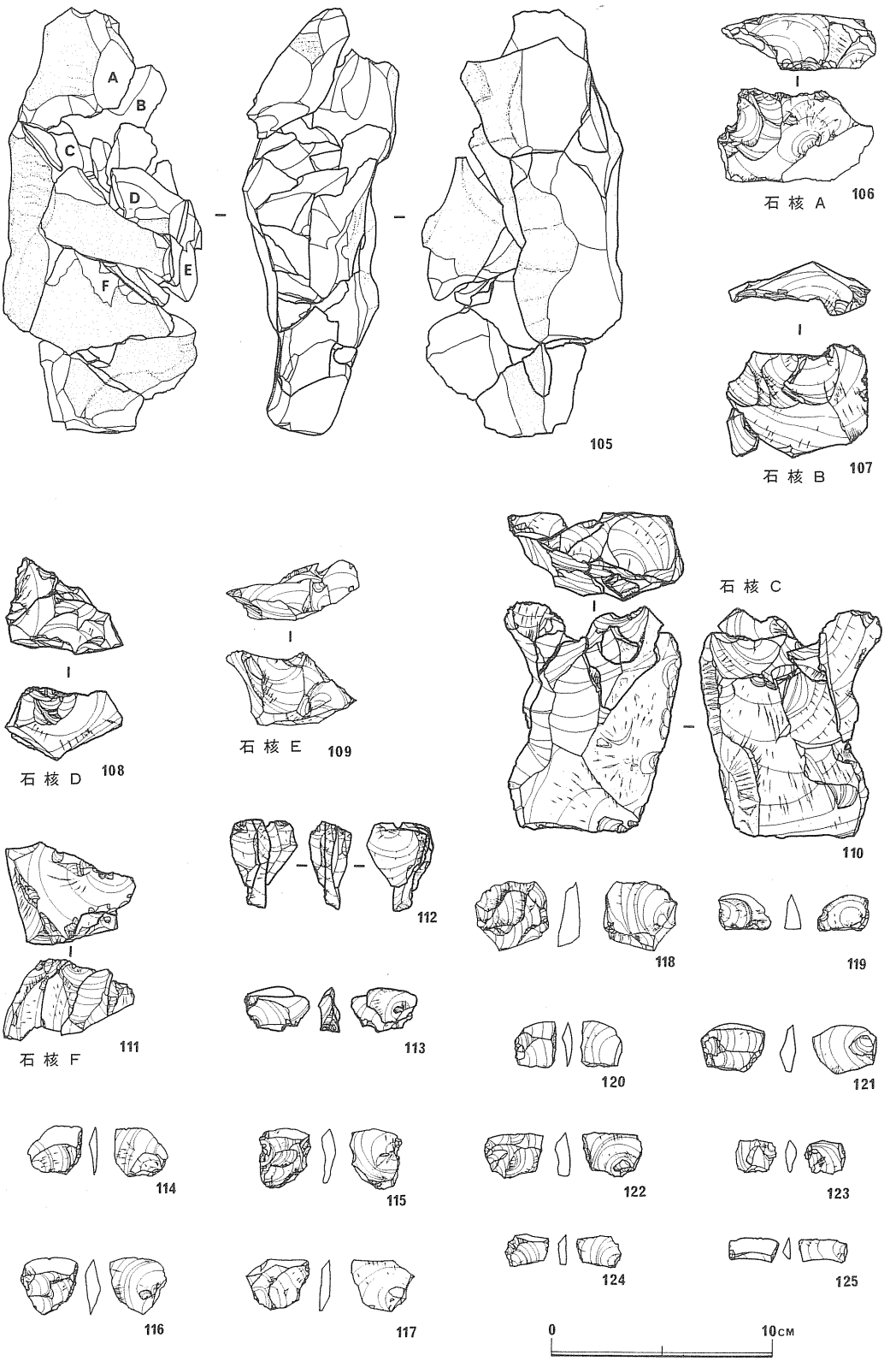
第22図　母岩㋐の分布と接合関係図

個の石核が残存し、2個が接合するが、原形は不明である。1つの石核にあっても分割面をそのまま打面とする場合と、新たに作出する場合とがあり、両者を打面として米ケ森型台形石器が剝取りされている。

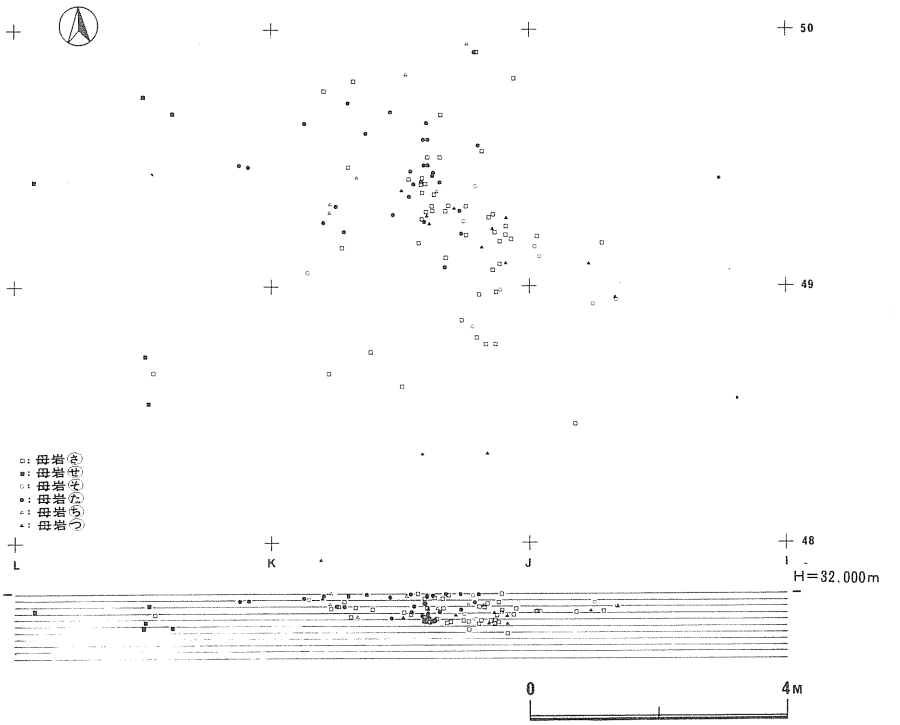
③　**Ⅲ類**：米ケ森型台形石器と縦長剝片を得ている母岩

母岩㋑（第26、27図）

石器、石核を含む計177点の剝片が出土しているがうまく接合せず、全体の形状は不明である。自然面は淡黄色、内部は灰褐色を呈し褐色の斑点が入っている。米ケ森型台形石器を得ている他の母岩に比べ、広い分布をしているが、J－49グリッドに集中する傾向も窺える。石核A（第27図138）は分割面を打面としながら縦長剝片と米ケ森型台形をほぼ全周から剝取り、さらに打面再生を行い剝取りを継続している。石核B（141）は分割面と調整された面を打面



第23図　母岩㋟（105～119）・㋕（120～125）実測図



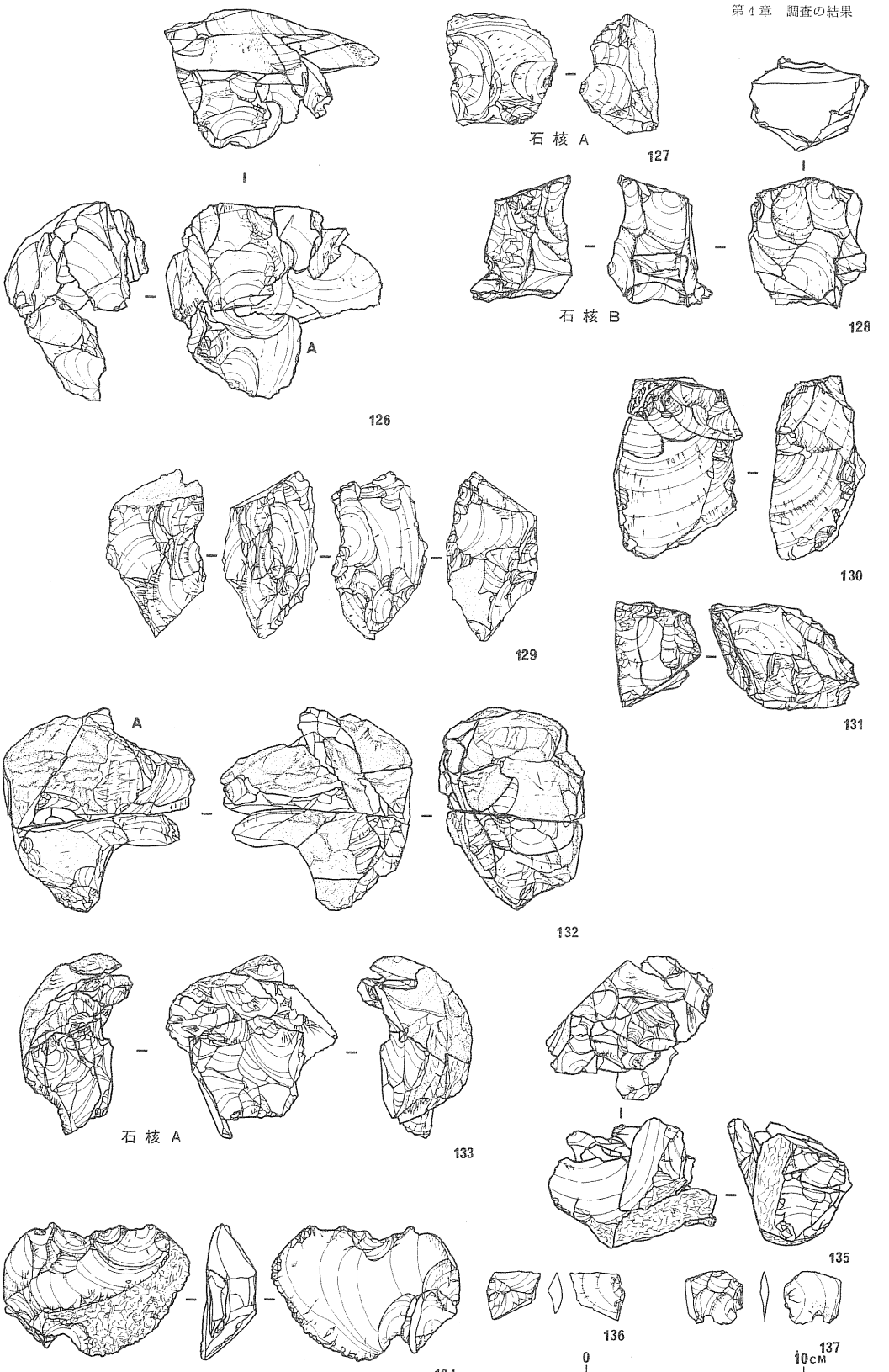
第24図　母岩㋐・㋑・㋒・㋓・㋔・㋕の分布図

としており二次加工のある米ケ森型台形石器142が接合する。石核D（144）は分割面を打面にしているが、他の石核、C（143）、E（145）、F（146）は全て打面の作出を行った後に米ケ森型台形石器を剝取りしている。134、140は剝片の、149は米ケ森型台形石器の接合例である。147は本母岩から得られたナイフ形石器で基部左側辺にのみブランディングが施されている。150は米ケ森型台形石器が3点接合したものであるが、151、152の末端が明瞭なヒンジフラクチャーで終り、153にはそれが見られない。

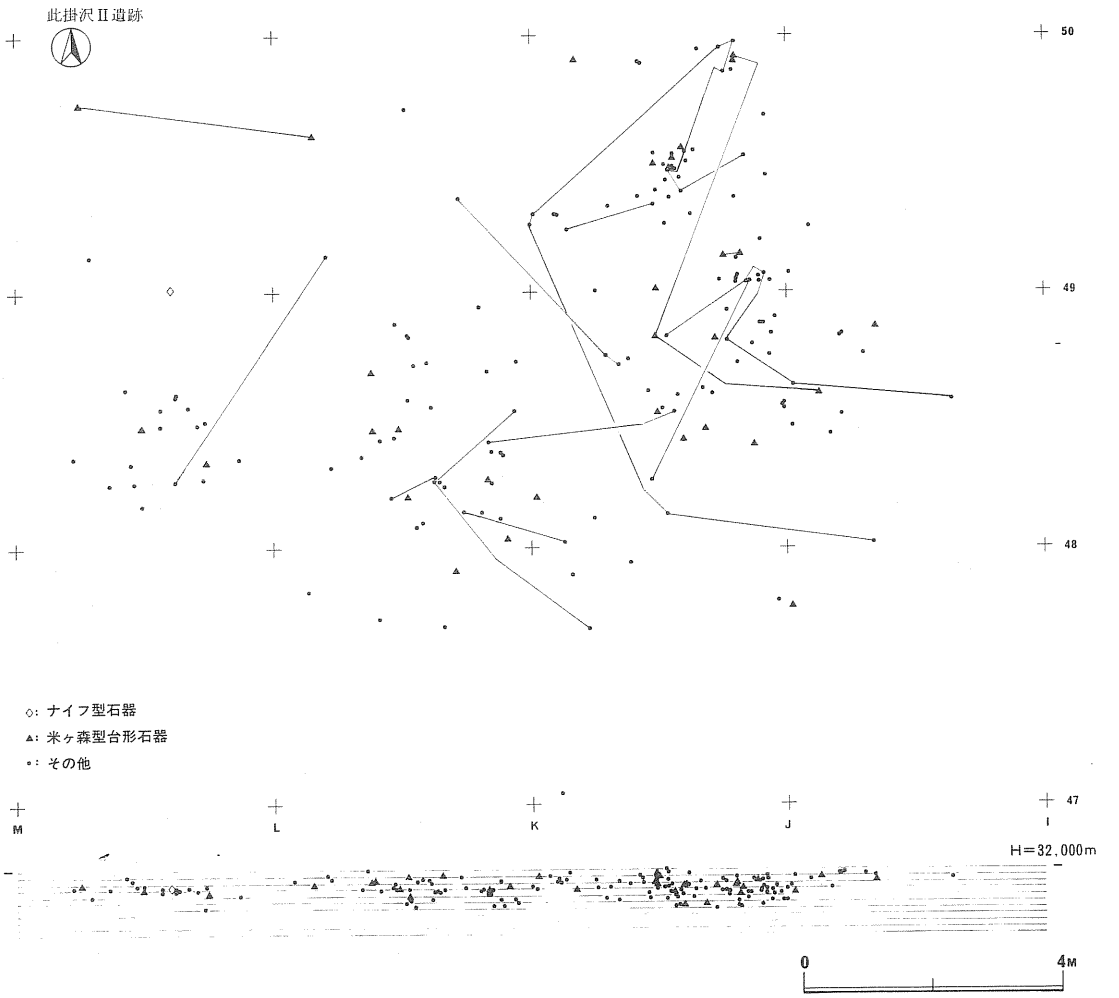
母岩㋐（第28、30図）

自然面は明黄褐色～暗オリーブ色を呈し、内部は緑灰色に暗緑灰色の斑点の入るチャートに近い硬質頁岩である。米ケ森型台形石器も得ている母岩であるが、剝片の大部分はK－48・49グリッドを中心にして分布する。母岩の全体の形状はわからない。第30図171は2個残存する石核のうちの1個で、2点の打面調整剝片と1点の米ケ森型台形石器が接合したものである。172～175は縦長剝片で、172は先端に1回の加撃による彫刻刀面が作出されている。176は節理面のある剝片で2ケ所にノッチが入っている。177は2点の米ケ森型台形石器の接合例であるが179は本来約2倍の長さの剝片であったものが中間で折られ米ケ森型台形石器にされたもので、末端に二次加工が施されている。

母岩㋑（第31図、32図197～204）



第25図　母岩㋒（126～128）・㋓（129～131）・㋔（132～133）・㋕（134～137）実測図

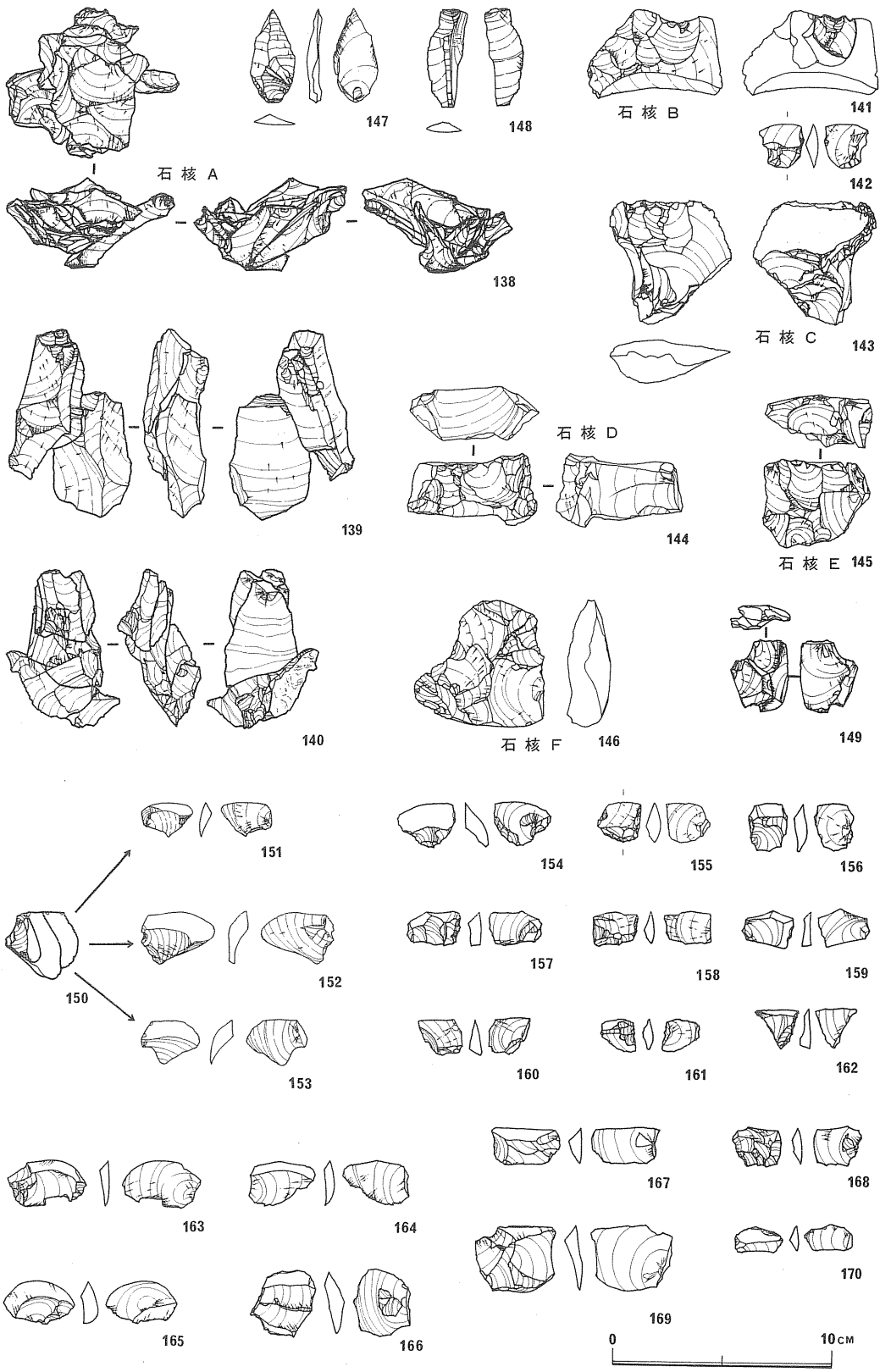


第26図　母岩ⓘの分布と接合関係図

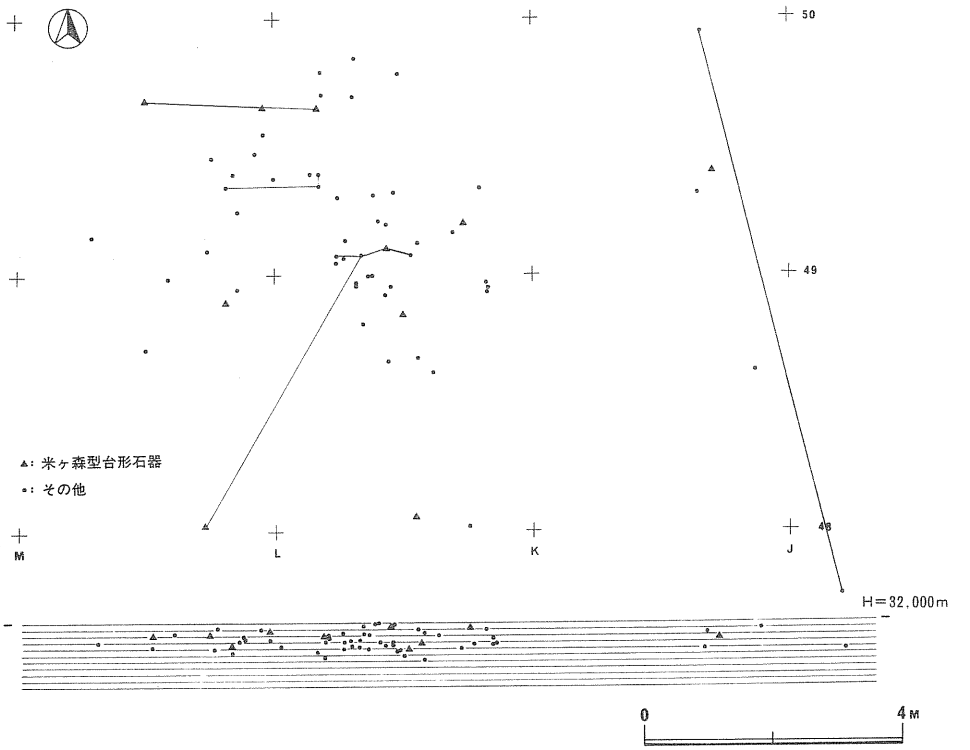
8 cm× 9 cm以上× 4 cm以上の比較的大きな母岩で、J－49グリッドを中心にして分布する。自然面はにぶい黄褐色～灰オリーブ色、内部は灰黄褐色を呈する。母岩は7個以上に分割されているが、明確に石核として剥片の剥取りが行われているものは3個だけで他のほとんどは分割されたままである。これはこの母岩が複雑な節理面を多く持つためのようである。このため母岩の大きさの割には剥片が少ない。石核A（第32図198）は分割面を、打面とし、石核B（199）は3回の打撃によって自然面を除去して打面としている。両者とも1個の米ケ森型台形石器が接合する。

母岩ⓣ（第29図194～196）

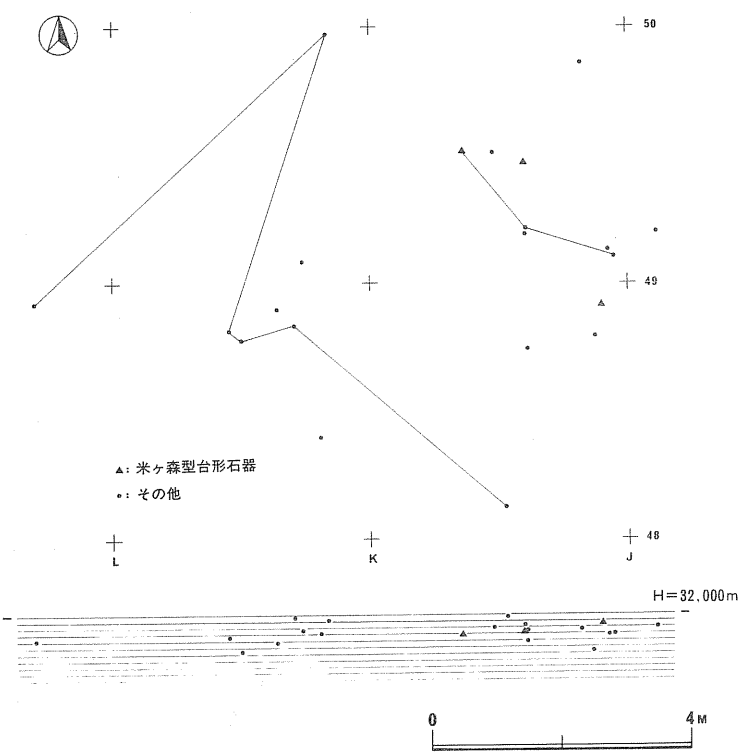
石核と剥片合わせて21点しか残っておらず母岩の全体の形状はわからない。自然面、内部とにぶい黄橙色を呈する。米ケ森型台形石器を剥取ろうとした石核が2個（第32図194、195）残存する。いづれも調整打面を持つが、良好な剥片は得られていないようである。


石核 A
138
147
148
石核 B
141
142
石核 C
143
139
石核 D
144
石核 E
145
140
石核 F
146
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
0
10CM

第27図　母岩Ⓐ実測図



第28図　母岩㋓の分布と接合関係図



第29図　母岩㋜の分布と接合関係図

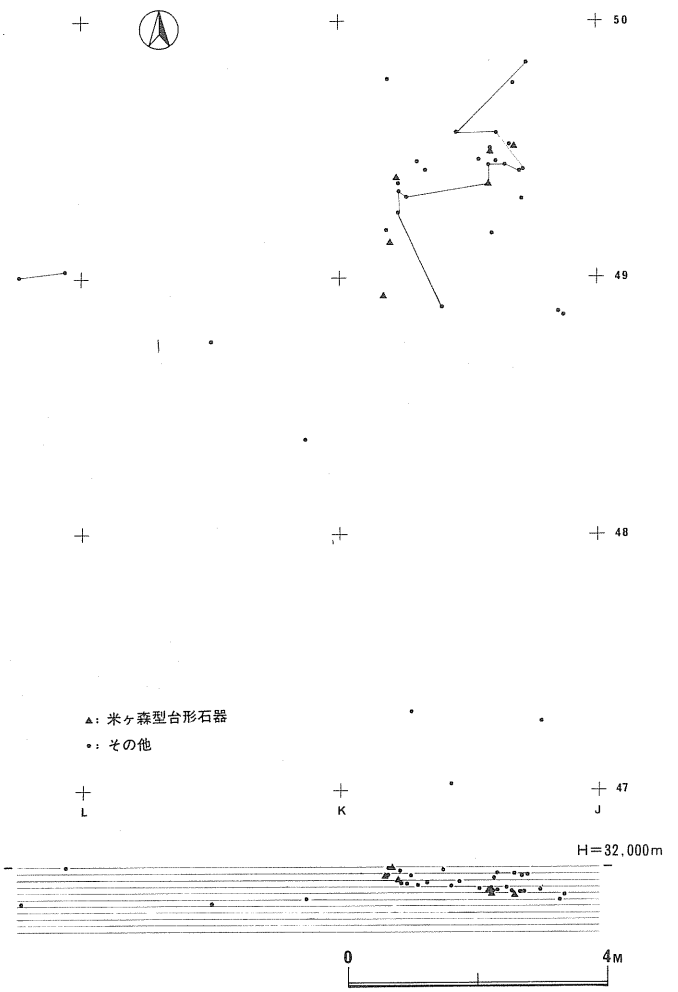
母岩㋝（第32図186～193）

自然面は淡黄色、内部は灰黄褐色～灰褐色を呈し複雑な節理面の多く入った母岩である。剝片の数も多いと思われるが、自然面のない部分のそれは母岩㋞、㋟、㋠、㋡などとの識別が困難である。

④　Ⅳ類：米ケ森型台形石器とそのB種を得ている母岩

母岩㋢（第24図、39

第30図　母岩㊸の実測図



第31図　母岩㊇の分布と接合関係図

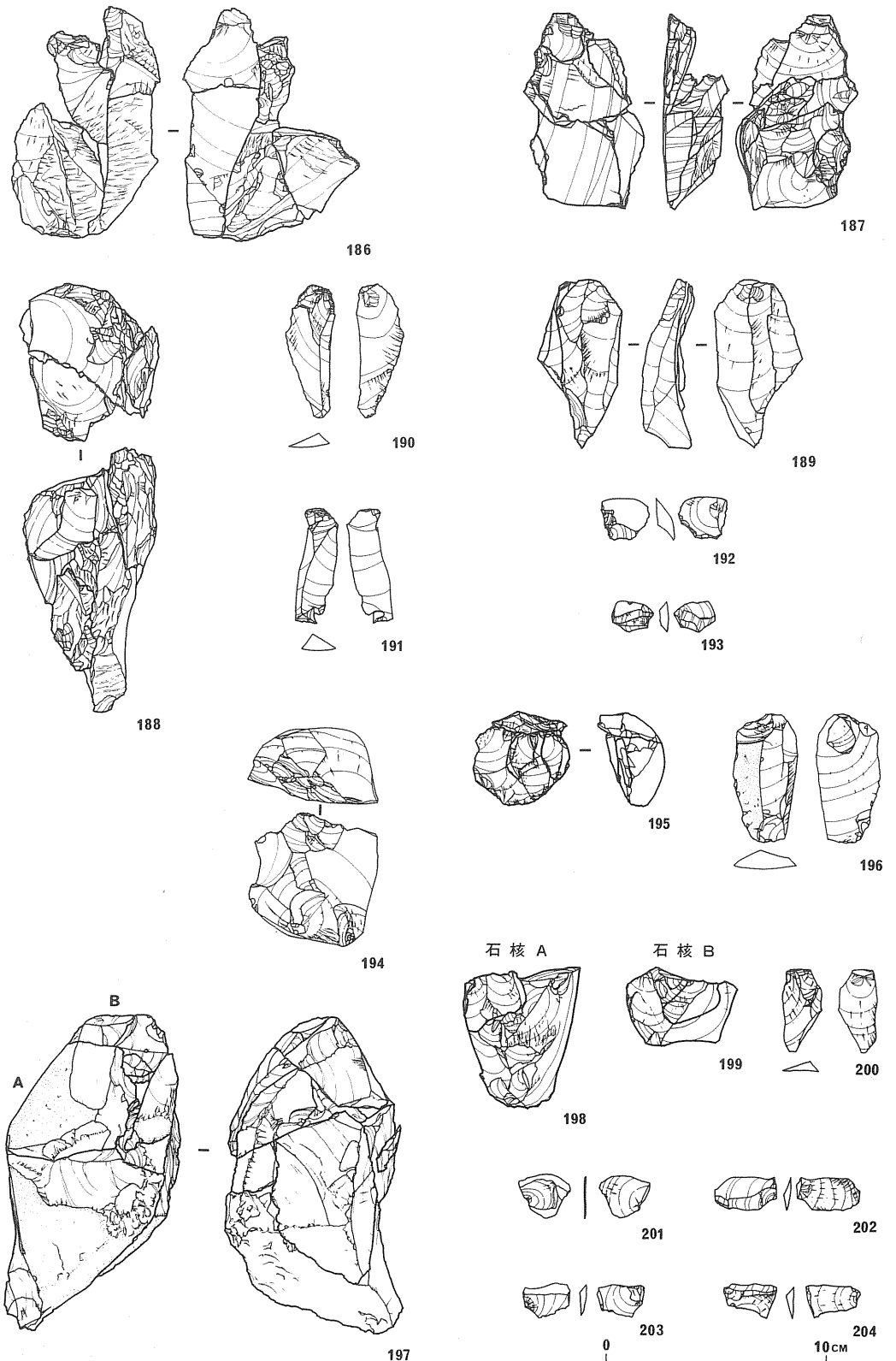
図205～209）

K－48・49グリッドに分布する。わずか14点の剥片だけしかなく全体の形状は不明である。自然面は明黄褐色で、内部は灰白色～明黄橙色を呈し、幅広の縞が入り、他の母岩とは明瞭に区別できる。石核はない。第34図205は米ケ森型台形石器と剥片との接合状態を示している。209は母岩㋐で説明する米ケ森型台形石器のB（仮称）とした石器である。

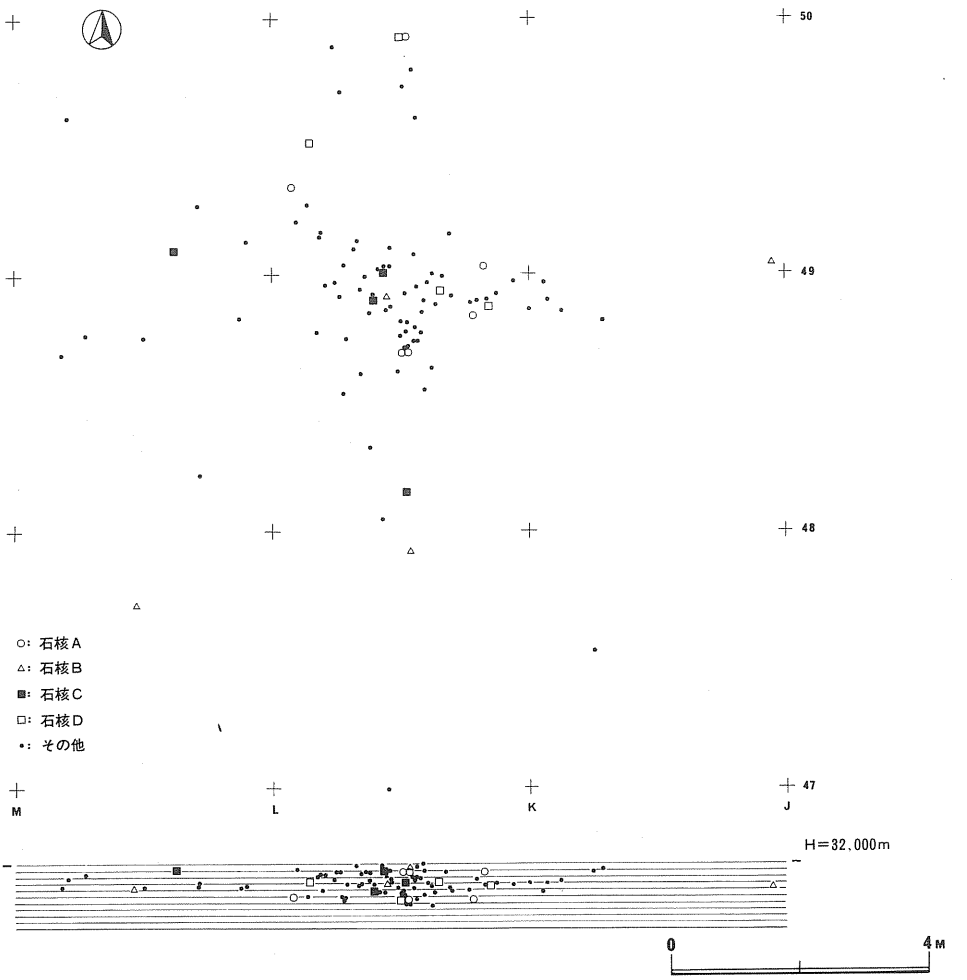
⑤　V類：米ケ森型台形石器とそのB種と縦長剥片を得ている母岩

母岩㋐（第33図、34図210～222）

9㎝×11㎝×20㎝以上の細長い母岩である。K－48・49グリッドを中心にして分布している。自然面はオリーブに近い灰白色、内部は明緑灰色を呈しており、他の母岩とは最も識別し易い母岩であった。大部分の剥片と石核等が接合した状態を示したのが第34図210である。母岩の分割は、まず細長い礫の中央よりやや上の部分を輪切りにするような形で大分割する。上半と下半に大分割された母岩は、上半は母岩の長軸に対して直角に、下半は長軸に並行して上下から数分割されそれぞれ石核B・C、石核A（HもAの一部と思われる）・E・Fなどが得られている。石核の打面はA・E・Fにおいては大分割面、あるいは細分割面をそのまま使用しているが、B・Cにおいては数回の自然面除去作業後その面を打面としている。211は石核AとBの接合関係を示している。両石核からは幅広でうすい剥片と、部厚い剥片が得られ、前者の末端はヒンジフラクチャーで終っている。215は石核Cからの、219は石核Eからの剥片剥取りの状況が示されているが、両者とも末端がヒンジフラクチャーで終る細長い剥片が得られ

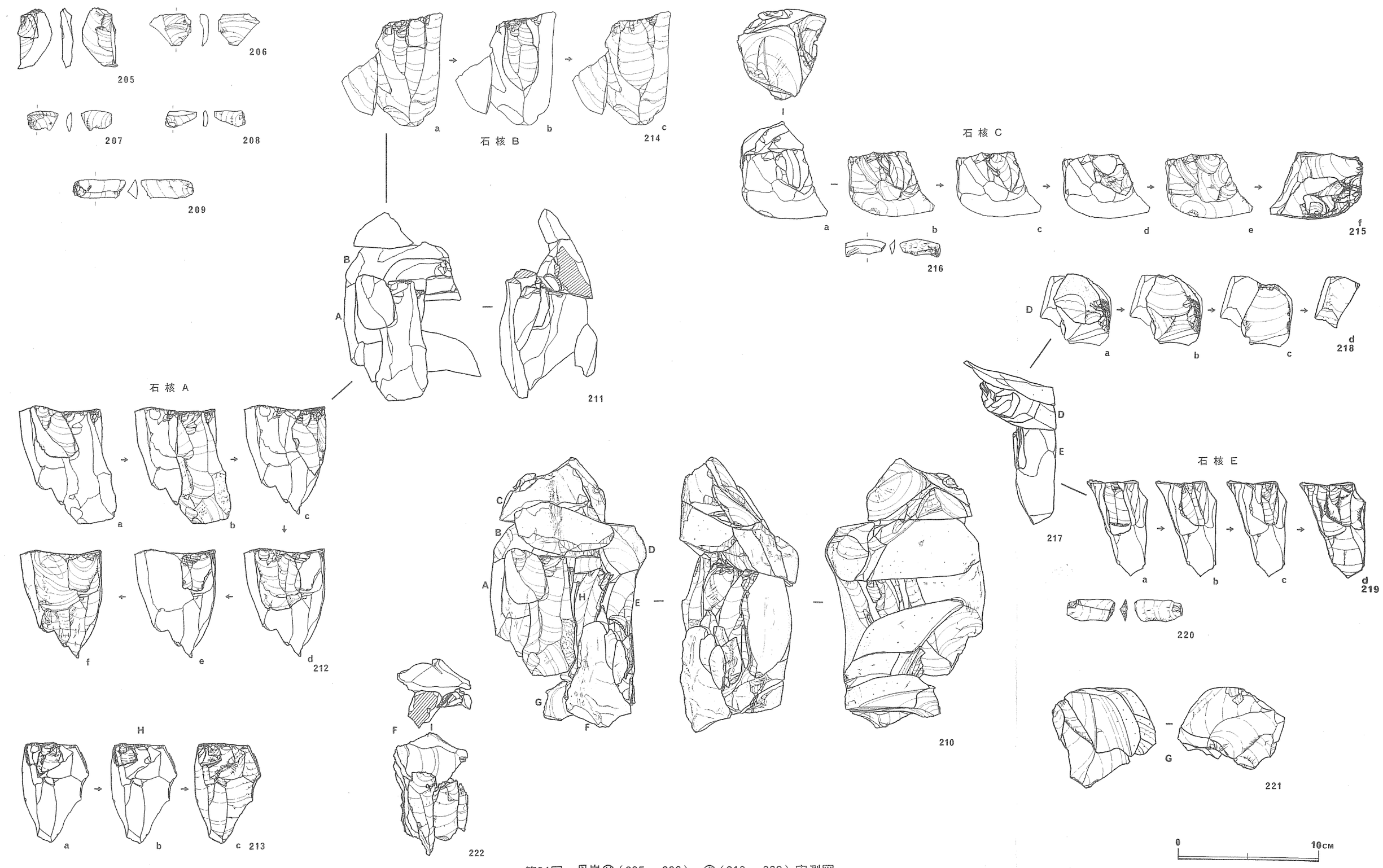


第32図　母岩㋕（186～193）・㋖（194～196）・㋗（197～204）実測図



第33図　母岩㋐の分布と接合関係図

ている。この末端がヒンジフラクチャーで終る細長い剥片の中に、末端を折り取って二次加工を施す石器が2点（216、220）ある。この石器は打面を上にして見た場合の背面右側に石核の最も古い面（この場合は分割面）があり、左側には直前の剥離痕を残している。従ってこの石器はその形状を別にすれば米ケ森型台形石器の製作技法と全く同じである。形状は、米ケ森型台形石器のそれが、略台形を呈し、刃部がゆるく弧を描くのに対し、この石器は全体が長方形あるいは平行四辺形を呈し、刃部が直線的である。そして、直線的な刃部には微細な刃こぼれが見られる。以上のことを理由にしてここでは、この石器を米ケ森型台形石器B種と仮称しておきたい。母岩㊐から得られた第39図209もこの仲間である。



第34図　母岩㋓（205～209）・㋐（210～222）実測図

（ は遺跡の範囲　 は昭和58年度調査区）

第2図　此掛沢II遺跡・上の山II遺跡地形図

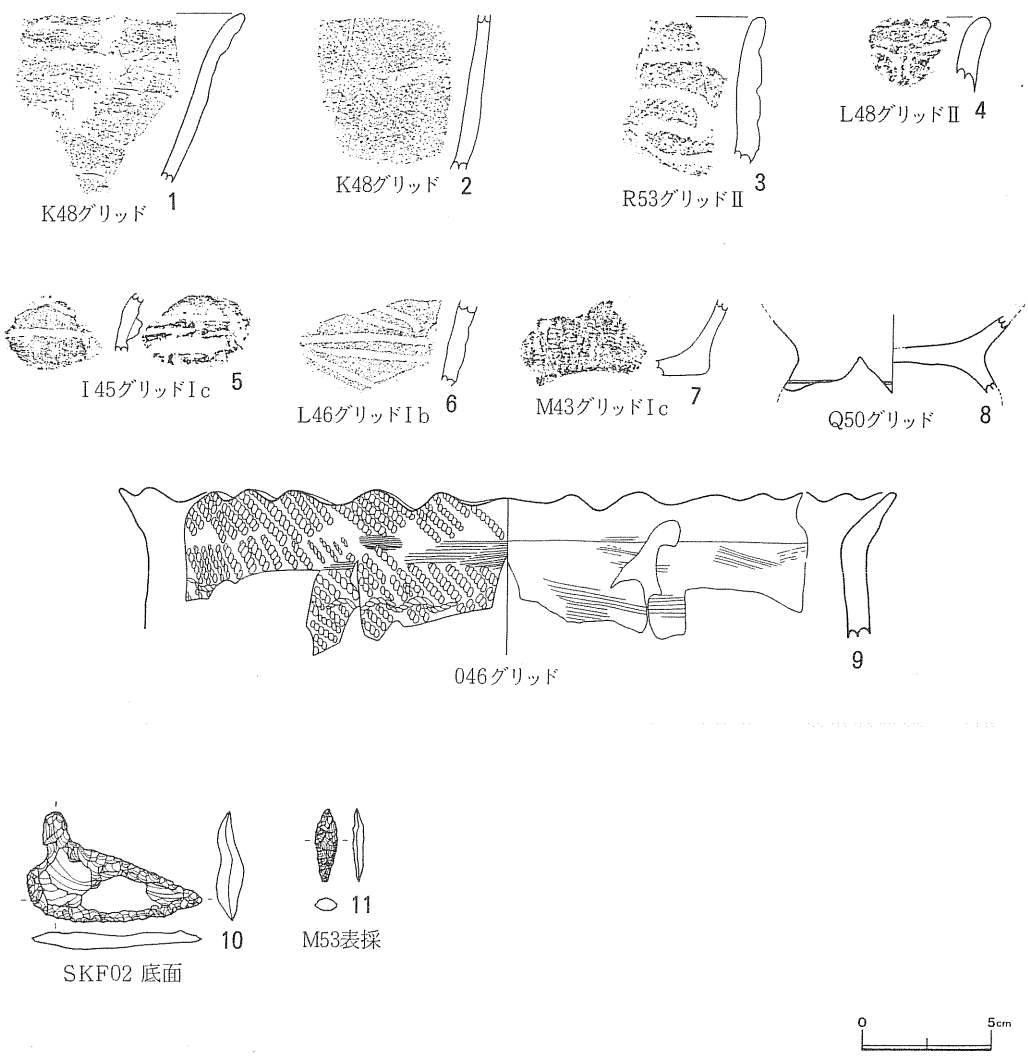
第２節　縄文時代の遺構と遺物

１　発見遺構と遺物

（１）　フラスコ状ピット　（第40図）

フラスコ状ピットは１基のみ検出された。

SKF02、J51、K51に位置し、第Ⅲ層上面で検出された。壙頸部からやや下が重機による開田の際に削平されている。壙底部は長軸1.8ｍ、短軸1.68ｍ、深さ0.58ｍで、平担である。覆土の状況から人為的に埋められたものであろう。壙底部から横型石匙が１点出土した。石質は頁岩である。



第35図　縄文・弥生時代の遺物

（2）　遺構外出土遺物　（第35図）

土器　遺構外からはわずかながら土器が出土したが、小破片で風化が激しく図示できたのは4点である。いずれも後期初頭の十腰内Ⅰ式に比定されるものである。

1は複合口縁でわずかに外反するもので、体部は風化が激しいが無文と思われる。2は胴部に「X」字状の浅い沈線を施すものである。3、4とも口縁部で、3はLR縄文の上に「S」状の沈線を施すもので、深鉢形と思われる。4は風化が激しいが、口縁部直下に浅い沈線を弧状に描くもので、壷形土器と思われる。

石器　石鏃が1点（11）出土した。両端の先が尖っている尖基鏃で、石質は頁岩である。

第3節　弥生時代の遺物　（第35図）

遺構は検出されず、5点の土器が出土した。いずれも縄文晩期の大洞A′式に後続するもので、県内の志藤沢式よりやや古い時期に比定される。

5は口縁部付近と思われるもので、外面に工字文を、内面には口縁部に平行する沈線と山形状の沈線が描かれる。2は変形工字文風の沈線文を施文するもので、縄文は認められない。3は底部で、体部下端が直立ぎみに立ち上がるもので、LR縄文を縦に施文している。内面には刷毛目が見られる。8は高台部分で、脚部には沈線文、内面は刷毛目が施文している。9は口縁部が小波状を呈し、口頸部が「く」の字状に外反するもので、深鉢形土器であろう。外面は頸部の刷毛目の上に胴部から口縁部にRL縄文を、さらに胴部の縄文の上に綾絡文を施文している。内面にも刷毛目が見られる。

第4節　平安時代の遺構と遺物

1　発見遺構と遺物

（1）　竪穴住居跡

Si11　竪穴住居跡　（第36図、第37図）

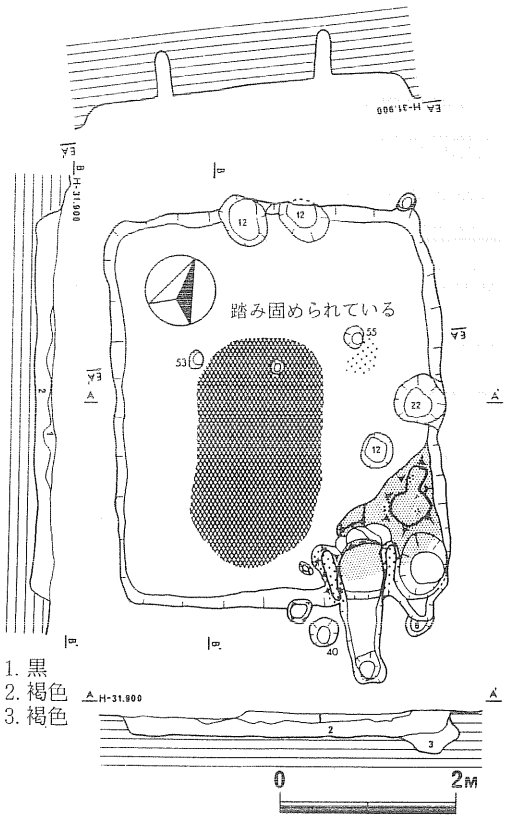
J46グリッドの第Ⅲ層上面で検出されたもので、遺存状態は良好である。長軸4.5m、短軸3.7mの隅丸長方形で、主軸方位はN－25°－Wで、面積は16mである。壁はやや斜めに掘込まれ床面は平担で、中ほどよりカマドにかけて踏み固められている。壁溝はない。柱穴は床面中央寄りに2本である。北壁と東壁及びカマド周辺のピットはこの住居跡に伴なうものかどうか明確でない。床面中央付近に部分的にオリーブ黄色の火山灰が薄く堆積していた。

カマドは南壁の東寄りに位置し、遺存状態は良好である。袖部は褐色及び暗褐色の粘土で構

築され、その中にはわずかに火山灰が混入している。燃焼部は赤く焼けその下はわずかに掘りくぼめている。南東コーナーには燃焼部からかき出したと思われる焼土や灰が堆積している。煙道部は壁外に伸びており、焚口部の底面で甕の破片が出土した。支脚として利用されたものであろう。

出土遺物　（第38図）　土師器杯・甕・須恵器甕の破片が出土している。

１～５は杯である。いずれも回転糸切りで二次調整はない。１・３は内黒の土師器で底部から緩やかな丸味をもって立上がり、口縁部でわずかに外反する。１・３とも焼成良好である。２・５は底部から口縁部まで直線的に立上がるもので、５はロクロ目が明瞭に残る。４は１・３よりは全体的に立上がるもので、底部は高台風に作出されている。風化して剥落部分があるが、内外面ともに漆が付着している。床面の火山灰の脇に伏せられた状態で出土した。６～９は甕である。６～８は口縁部の破片である。９は口頸部がわずかに「く」の字状に外反するもので、風化が激しいが、外面にヘラケズリの痕跡がわずかに残る。10～14は須恵器の破片で内外ともロクロ成形痕が残る。いずれも壷と思われ、13は口頸部、14は底部である。



第36図　ＳＩ11竪穴住居跡

第２表　SI11 出土土器観察表

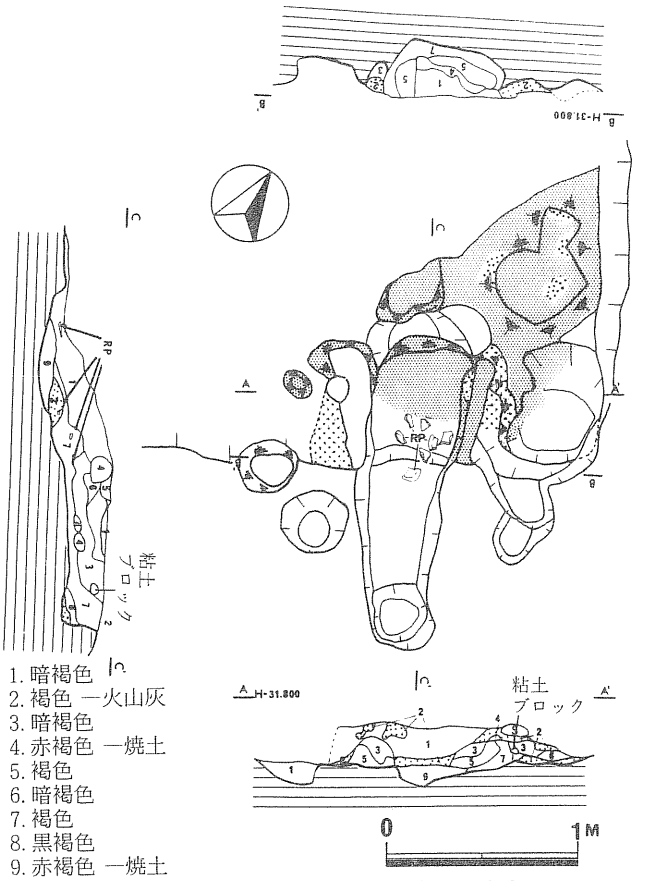
番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
11-1	SI11 床面	土師器杯	(10.9)	5.0	4.2	(0.45)	38	精選	内、橙 外、橙	内、黒 回転糸切り	SI11—3
11-2	SI11 床面	土師器杯	(12.0)	5.8	(4.1)	(0.48)	34	精選	内、浅黄橙 外、浅黄橙	回転糸切り	SI11—5
11-3	SI11 床面	土師器杯	12.6	5.0	4.9	0.39	39	精選	内、にぶい赤褐	内、黒 回転糸切り	SI11—1
11-4	SI11 床面	土師器杯	13.1	4.6	5.1	0.35	39	精選	内、浅黄橙 外、浅黄橙	内、外面に漆付着 回転糸切り	SI11—6
11-5	SI11 床面	土師器杯	(15.2)	6.2	6.1	(0.41)	40	２～５㎜位の小石若干混入	内、橙 外、明赤褐	回転糸切り	SI11—2
11-9	SI11 床面	土師器甕	(17.6)	—	9.4	—	—	砂粒多量混入	内、浅黄橙 外、橙		SI11—4

（２）　**遺構外出土遺物**　（第38図）

土師器甕、須恵器甕、壷、砥石、鉄滓、フイゴの羽口の破片２点が出土した。

土器　15は土師器甕でS54グリッドの第Ⅲ層上面から出土した。底部を地面に斜めに、その上に口縁部、胴部の大破片を上に置き並べた形で出土したもので、底部の下に特別の振り込みや周囲に付属する遺構は検出されなかった。15は、胴部上半に最大径をもち、口頸部がわずかに「く」の字状に外反し外面にはヘラケズリを施こす。16は須恵器壷の口縁部である。18は底部で16と同器形かと思われる。付高台で内外にロクロ成形痕がみられる。17は須恵器甕の破片である。

砥石　途中で欠損しているもので、幅3.3cm、現存部の長さ9.8cm、重さ337gである。石質は流紋岩である。



第37図　SI11　竪穴住居跡　かまど

第３表　遺構外出土土器観察表

番号	出土地点	器　種	口径	底高	器高	底径比	径高指数	胎　土	色　調	備　考	登録番号
11-15	S54グリット	土師器甕	(22.8)	7.8	28.3	―	―	2㎜位の砂粒多量混入	内、明褐 外、浅黄橙		S54―1
11-18	表　採	須恵器甕	―	(9.2)	2.5	―	―	精　選	内、褐灰 外、黒褐	調査区外	表採―1

第５節　その他の遺構と遺物

1　発見遺構と遺物

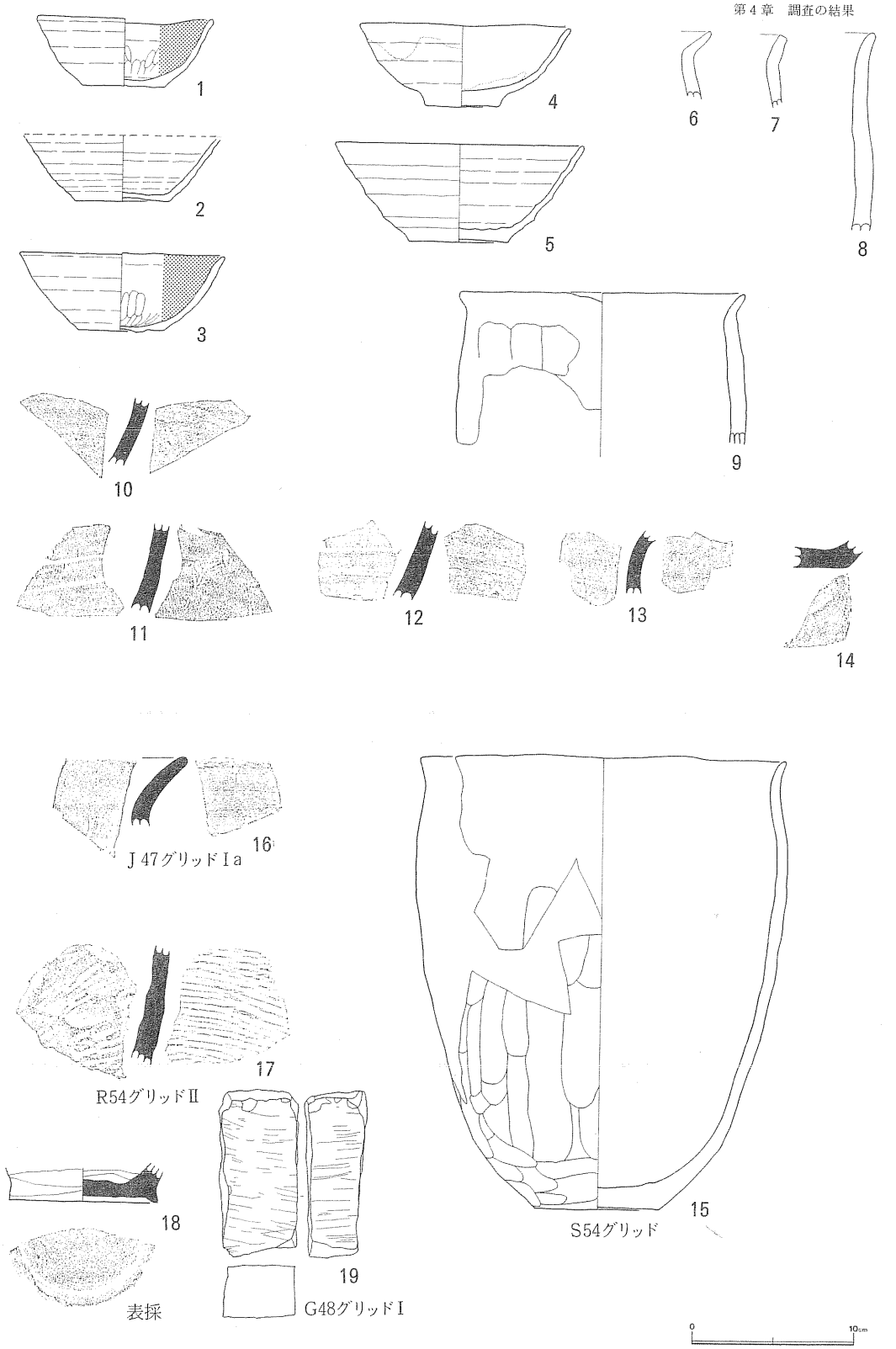
（1）　**掘立柱建物跡**　（第39図）

1棟のみ検出され第Ⅲ層上面で確認した。出土遺物はなく時期を特定できない。

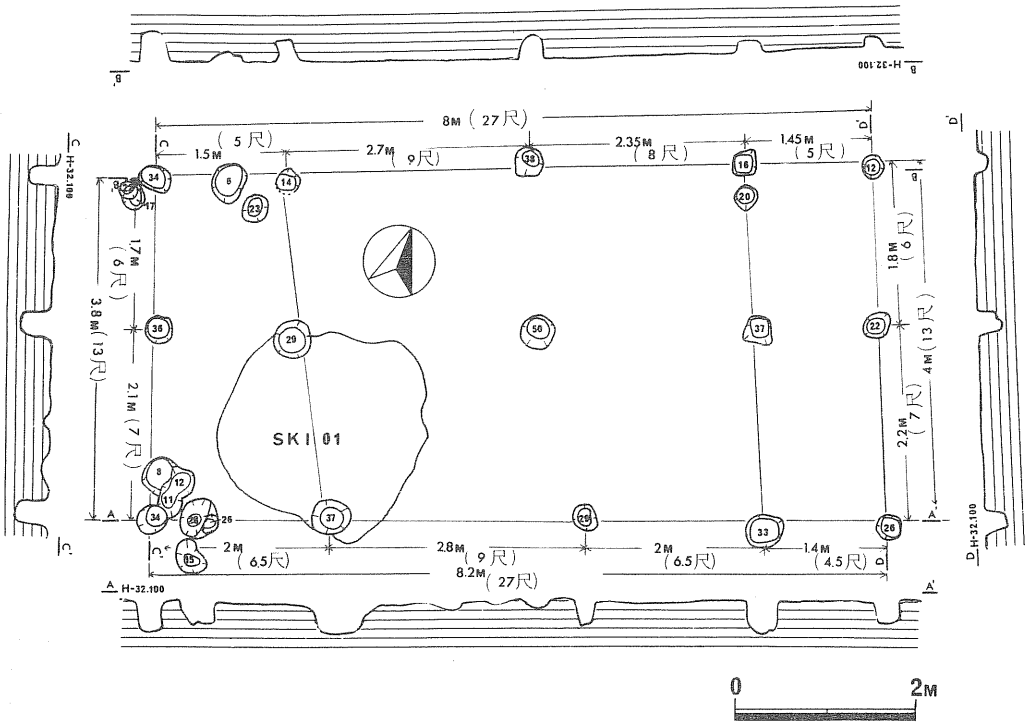
SB10　掘立柱建物跡　東西棟で身舎部分は桁行2間×梁行2間の総柱で、西と東に桁行1間×梁行2間の廂が付く掘立柱建物跡である。1尺平均は身舎で桁行30.0cm、梁行30.0cmで、廂で桁行30.0cm、梁行30.1cmである。建物方位は桁行で約N－20°－Wである。

（2）　**竪穴状遺構**　（第40図）

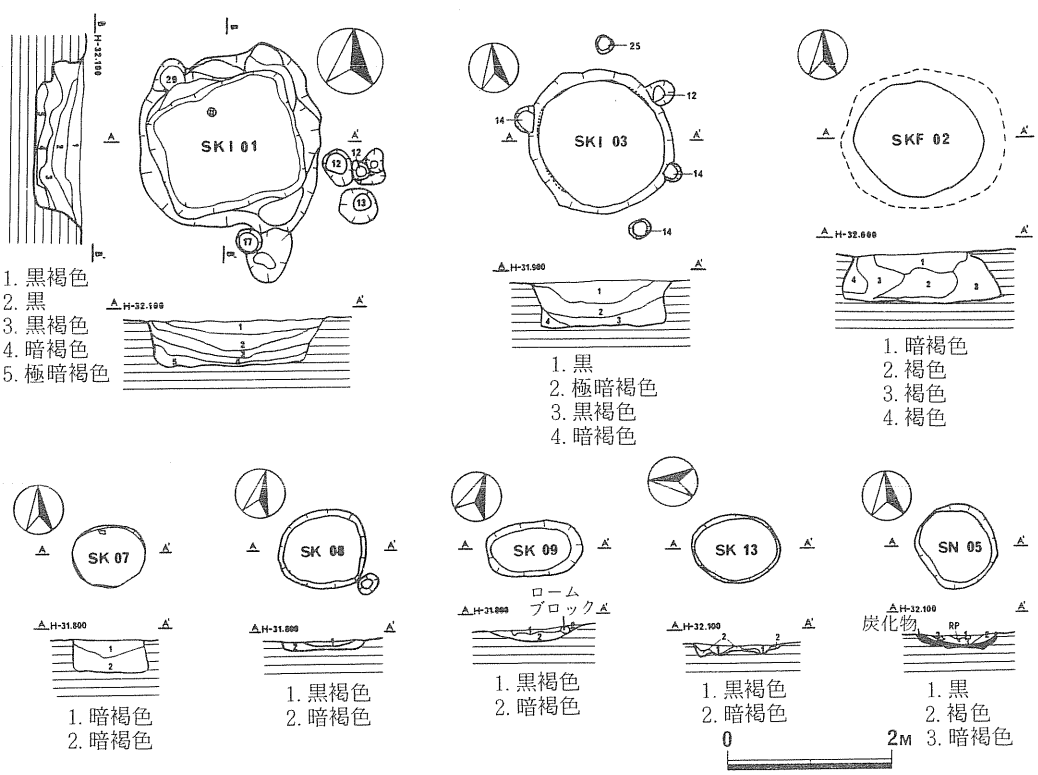
2基検出され、第Ⅲ層上面で確認した。出土遺物はなく時期を特定できない。



第38図　ＳＩ11　竪穴住居跡・遺構外出土遺物（平安時代）



第39図　SB10　掘立柱建物跡



第40図　SKI 01・03、SKF02、SK07・08・09・13、SN05 遺構

SK101　竪穴状遺構　　J48グリッドに位置し、平面形は上面が円形で、底面は隅丸方形である。S　B10の柱穴と重複しているが本遺構の方が古い。長軸2.3ｍ、短軸2.1ｍ、深さ0.60ｍで断面形はビーカー状を呈し、底面は平坦で固い。周辺に上屋の存在を想起させる柱穴がある。

（３）　**土壙**　（第40図）

４基検出された。平面形は円形、断面形は浅皿形で浅いものが主である。いずれも出土遺物はなく時期を特定できない。記述順序は以下の通りである。①位置　②平面形　③断面形　④規模・深さ　⑤その他・特記事項

SK07　土壙	①P50グリッド	②楕円形	③ビーカー状	④0.9ｍ×0.75ｍ・0.4ｍ
SK08　土壙	①Q48グリッド	②円形	③浅皿形	④1.1ｍ×0.12ｍ
SK09　土壙	①Q49グリッド	②楕円形	③浅皿形	④1.15ｍ×0.7ｍ、0.15ｍ
SK13　土壙	①H47グリッド	②円形	③浅皿形	④1.1ｍ×0.13ｍ

（４）　**焼土遺構**

SN05　焼土遺構　（第40図）

N50グリッドの第Ⅲ層上面で検出された。炭化物が底面全体に薄い層をなしている。平面形は円形で断面は鍋底状を呈し、径は1.0ｍ、深さ0.20ｍである。炭化物を取り除いた後の底面には凹凸がある。

（５）　**溝**

SD12溝　（７図）調査区の西側にあり、第Ⅲ層上面で検出された。Q49グリッドより北に延び、Q52グリッドで西に折り曲がるもので、総延長は25ｍである。上面幅は1.0～1.5ｍ、底面幅は0.7ｍ～1.0ｍ、深さ0.06ｍ～0.2ｍで、断面形は鍋底状を呈す。覆土は３つに分かれる。第１層　黒褐色土、第２層　暗褐色土、第３層　褐色土となっており、確認面より、土師器杯の小破片が１点出土したが、流れ込みによるものと判断した。したがって時期は明確に仕難い。

（６）　**その他の遺構**　（７図）

S×04その他の遺構　　SI11竪穴住居跡のすぐ西にあるもので第Ⅲ層上面で確認された。褐色土に焼土がやや混じっているもので、規模は５ｍ×3.5ｍ、深さ0.1ｍ～0.15ｍである。下に遺構も確認されず、出土遺物もなく、性格・時期とも不明である。

S×06その他の遺構　　風倒木痕と判断されるもので、黒褐色土が蹄鉄状になっている。

（７）　**遺構外出土遺物**　Q49グリッド第Ⅱ層より擂鉢の底部の破片が出土した。内外面とも褐色を呈し、胎土に２～３㎜の小石を含むものである。江戸末から明治初期の所産であろう。

第５章　まとめ

本遺跡は48,400ｍの広がりをもち、今回発掘調査を実施したのは広い台地の一画の北東端にあたり、その面積は1,682㎡である。本調査区は東と西が小谷に分断されているが、比較的平坦で、北には眼下に広く沖積平野を望むことができ、周囲に小沢が流れており、格好の場所に位置していると言えよう。

１　旧石器時代の出土遺物について

今回の此掛沢Ⅱ遺跡の調査区内から出土した旧石器時代の出土遺物は約1,750点で、そのうちの定形的石器の内訳は、ナイフ形石器12（57年度の範囲確認調査の１点を含む）、彫刻刀形石器１、石刃30、局部磨製石斧１、米ケ森型台形石器172である。これらの石器は平面的には直径約15ｍの円内、垂直的には約70㎝の幅を持って分布している。それらを細かく見ると、米ケ森型台形石器とその母岩、米ケ森型台形石器と縦長剥片及び石刃を中心とする２つの地点が認められるが、層位的観察、視覚的認識、接合関係、石器群の組成などから観てそれらは単一のまとまり（ユニット）として把えることができる。従ってこれら石器群は時間的に隔りのない期間に製作、使用され、廃棄されたものであると考えられる。以下調査の結果判明したいくつかの点について簡単にまとめてみたい。

定形的石器の内訳は上記のとおりであるが、これをみると、器種の少ないことがまず上げられる。エンドスクレーパーが全くなく、１点ある彫刻刀形石器もはっきりしない。逆に米ケ森型台形石器がとび抜けて多い。このような石器組成の傾向は同じ米ケ森型台形石器を主体とする秋田市下堤G遺跡(註１)でも同様である。ナイフ形石器は全て単設打面の石核から得られた石刃、縦長剥片を素材としており、石刃も含めて両設打面のものはない。また、打面を折り取ったりすることはなく、全て打面を大きく残し、基部調整が背面両側辺に限られるものだけである。このようなナイフ形石器は米ケ森遺跡Ⅰ類(註２)、下堤G遺跡Ⅰ類、山形県金谷原遺跡(註３)の一部のナイフ形石器に類例の見られるものであるが、石刃も含めて東山的な要素(註４)の全く見られないことが本遺跡の特徴の１つといえる。

米ケ森型台形石器が石器組成の中でも突出して多いのは、この石器を得た母岩が13個確認され、その石核だけでも37個残存していることからも肯首できるところである。この石器の石核からの剥取りについては一部逆の場合（剥片剥離作業が右から左に進行する例がある）もあるものの、大筋においては米ケ森遺跡でなされた分析と同じであり、その際の打面の作出についても全く同様であった。また母岩から石核素材を得る場合にも石刃技法のような連続剥離は行われておらず、主に母岩を大分割してその大分割素材をさらに細分割して石核としていること

も指摘のとおりである。(註5)しかしながら、母岩の中には米ケ森型台形石器の石核と、縦長剥片を得るための石核双方が得られているものがあり、1つの石核から両方を剥取りしているように見えるものである（母岩⑪）。米ケ森型台形石器のB種とした石器については、その数が少ないために詳細は不明であるが、少なくともこれが、米ケ森型台形石器の製作技法とほぼ同じであることを指摘しておきたい。

本遺跡出土遺物の中での最大の特徴は、チップ等を除いて大部分の剥片の母岩が特定できるということであろう。従って母岩が見当らない石質のナイフ形石器や石刃は他の場所から本遺跡に持ち込まれたものであることが推定できる。このことを裏付けるように、それらは小剥片であったりすることがなく、1個の石器として認め得るようなものばかりである。ナイフ形石器の大部分、石刃の一部、局部磨製石斧がこの仲間である。このことと、本遺跡で米ケ森型台形石器が大量に作られていることから、此掛沢を生活の一時の舞台とした人々は、ナイフ形石器、石刃、局部磨製石斧等を携えてこの場所に来て、主に米ケ森型台形石器を作りながらもナイフ形石器等を自分達の所持する道具に加えたものであることが想定される。そして、それら道具の中の不要となったものをこの場所に廃棄し、またいくつかの道具を持って他の場所に移動したものであろう。

調査の結果得られた資料の多さに比べ、調査終了から報告書作成までの時間の短さと、これをまとめる力量の不足から資料に対する分析等をほとんど行うことができなかった。米ケ森型台形石器の製作技法に関しては米ケ森遺跡の分析でそのほとんどが解明されたと言えるが、その機能などについての解明は今後に残された問題も多い。また接合資料の多いことから、石器個々の動き等を追うことによって、場の使われ方、石器の廃棄のあり方などに迫れるものと考えられるがそのような分析も出来なかった。今後はこのような個々の遺跡内での分析に加えてようやくその数を増してきた米ケ森型台形石器を主体とする遺跡相互の比較検討も重要であると痛感させられた。

いずれにせよこれまで米代川下流域では、旧石器時代の遺跡、遺物としては、大槻久馬氏の採集した落合出土のナイフ形石器1点、古館出土の掻器1点(註6)をはじめとして、二ツ井町出土といわれるナイフ形石器(註7)、能代市館下Ⅰ遺跡出土の二点の杉久保型ナイフ型石器(註8)、此掛沢Ⅱ遺跡の南東1.7㎞にある逆川遺跡(註9)など数遺跡が知られているにすぎず、この時代を対象とした本格的な発掘調査も行われていなかった。このような状況の中で、今回の此掛沢Ⅱ遺跡の調査結果は当地域の旧石器時代研究に大きな成果をもたらしたと共に、これまで秋田県中央部及び岩手県上萩森遺跡(註10)、大台野遺跡(註11)でしかその存在が知られていなかった米ケ森型台形石器が米代川川口付近でも確認され、その文化内容の一端が明らかにされた意義は大きい。

2　遺構の分布について

検出された遺構は縄文時代のフラスコ状ピット1基、平安時代の竪穴住居跡1軒、それに時

期不明の掘立柱建物跡１棟、竪穴状遺構２基、土壙４基等である。時期のはっきりしている遺構についてその分布を考えてみたい。

縄文時代の遺構は、フラスコ状ピットのみで、開田の際に上半分を削平されてしまっていたが、遺構外から後期前葉の十腰内Ⅰ式土器が少なからず出土した。また、昭和56年の範囲確認調査では本調査区の西に隣接している陸稲畑からも同期の土器が多く出土している。以上の事を考え合わせればこの時期の所産の可能性が高く、本遺跡の周辺にも縄文時代の遺構が存在していたとも考えられるが、定住的な生活が営なまれた場所は隣接している西側と推定される。

調査区の東側、特に旧石器が集中して出土した地点から北側は約１ｍほどの削平を受けている。それはフラスコ状ピットの下半分しか存在しなかった事や、土層断面の観察から判断できる。さらに南の調査区外では、１ｍ以上の段差があり、大きな削平を受けた様である。その中で調査区の南端にあった平安時代の竪穴住居跡は比較的良好な遺存状態で検出された。

上記のように今回の調査では平安時代の遺構は１軒だけであったが、それだけとは考えられず、周辺の地形を勘案すれば調査区外の南側にも存在し集落を構成していたと考えられる。

２　火山灰について

竪穴住居跡の床面とカマド袖部から、オリーブ黄色の火山灰が検出された。カマドの袖部に火山灰が使用されていたということは、住居構築の段階ですでに火山灰が降下していたという事実を物語るものである。しかし、床面に薄く堆積していた火山灰については降下したままのものか、二次堆積したものなのかは明らかではない。

第２章第３節で述べられているように、鑑定の結果、本遺跡の腐植土（第Ⅰ層、第Ⅱ層）にも火山灰が含まれている事が判明した。この火山灰は北海道の石狩～苫小牧地方に広く分布する苫小牧火山灰(註12)で、11世紀の間に降下したもの(註13)と考えられている。

後出の上の山Ⅱ遺跡の竪穴住居跡などからも検出されており、土器もほぼ同時期の所産と考えられる。

註１　秋田市教育委員会　「下堤G遺跡（先土器時代）発掘調査概報」『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』1983年

註２　富樫泰時、藤原姫敏　『米ケ森遺跡発掘調査報告書』協和町教育委員会　1977年

註３　山形県　「金谷原遺跡」『山形県史　考古資料』　1969年

註４　山形県　「東山型のナイフ形石器文化」『山形県史　考古資料』　1969年

註５　注２に同じ

註６　大槻久馬　「能代市周辺の遺跡について」『秋田考古学第32号』　1975年

註７　奈良修介、豊島昂　『秋田県の考古学』吉川弘文館　1967年

註８　秋田県教育委員会　『館下Ⅰ遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書集62集　1979年

註9　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第93集　1982年

註10　菊地強一　『旧石器時代の東北（岩手県）』東北歴史資料館　1981年

註11　富樫泰時氏の御教示による。

註12　町田洋・新井房夫・森脇広　「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』No.151、No.9、岩波書店　1981年

註13　本年度に発掘調査を実施した八森町・土井遺跡でも火山灰が検出され、分析の結果、苫小牧火山灰である事が判明し、その年代は11世紀から13世紀とされている。当センター、桜田隆氏の教示による。詳細は本年3月に刊行予定の『土井遺跡発掘調査報告書』（秋田県文化財調査報告書111集　秋田県教育委員会）を参照していただきたい。

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

1984年2月20日

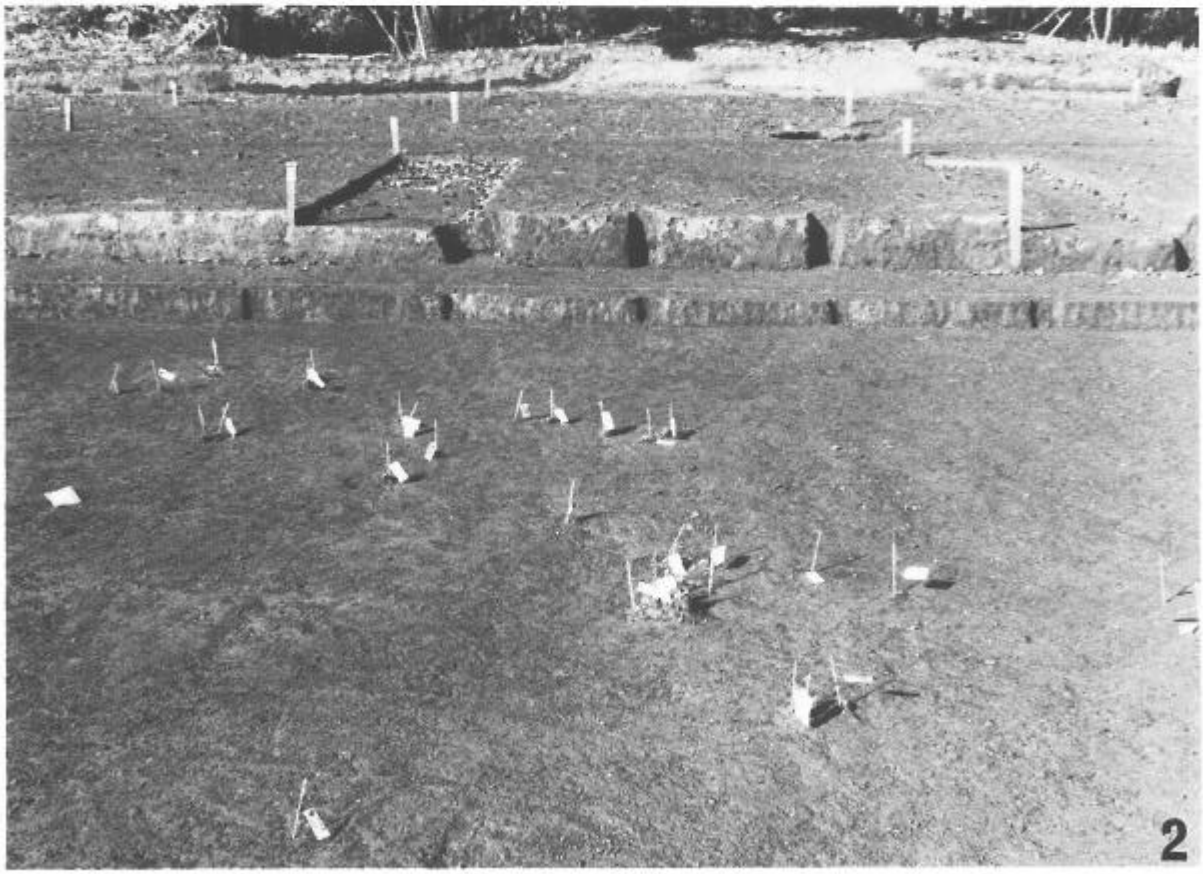
1983年11月22日受領致しました試料についての^{14}C年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には^{14}Cの半減期として Libby の半減期5570年を使用しています。また付記した誤差はβ線計数値の標準偏差σにもとずいて算出した年数で、標準偏差（one sigma）に相当する年代です。試料のβ線計数率と自然計数率の差が2σ以事のときは、3σに相当する年代を下限とする年代値（B. P.）のみを表示してあります。また試料の、β線計数値と現在の標準炭素についての計数率との差が2σ以下のときには、Modern と表示し、δ C%を付記してあります。

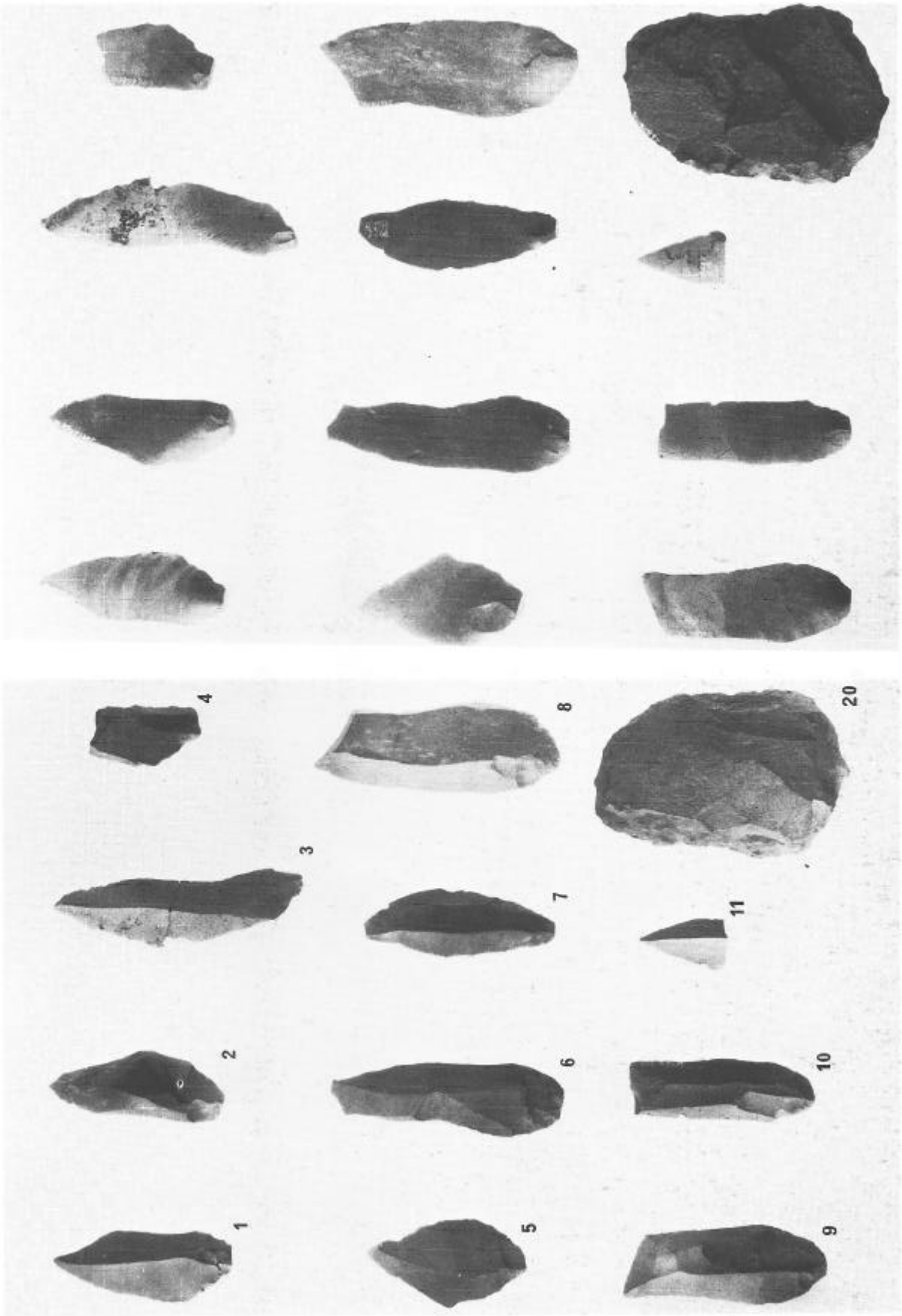
記

Code No.	試　料	B. P. 年代（1950年よりの年数）
Gak-11449.	Charcoal from Noshiro-shi.	1490＋90
	Sample : 3KKZⅡ-SI11.	A. D. 460

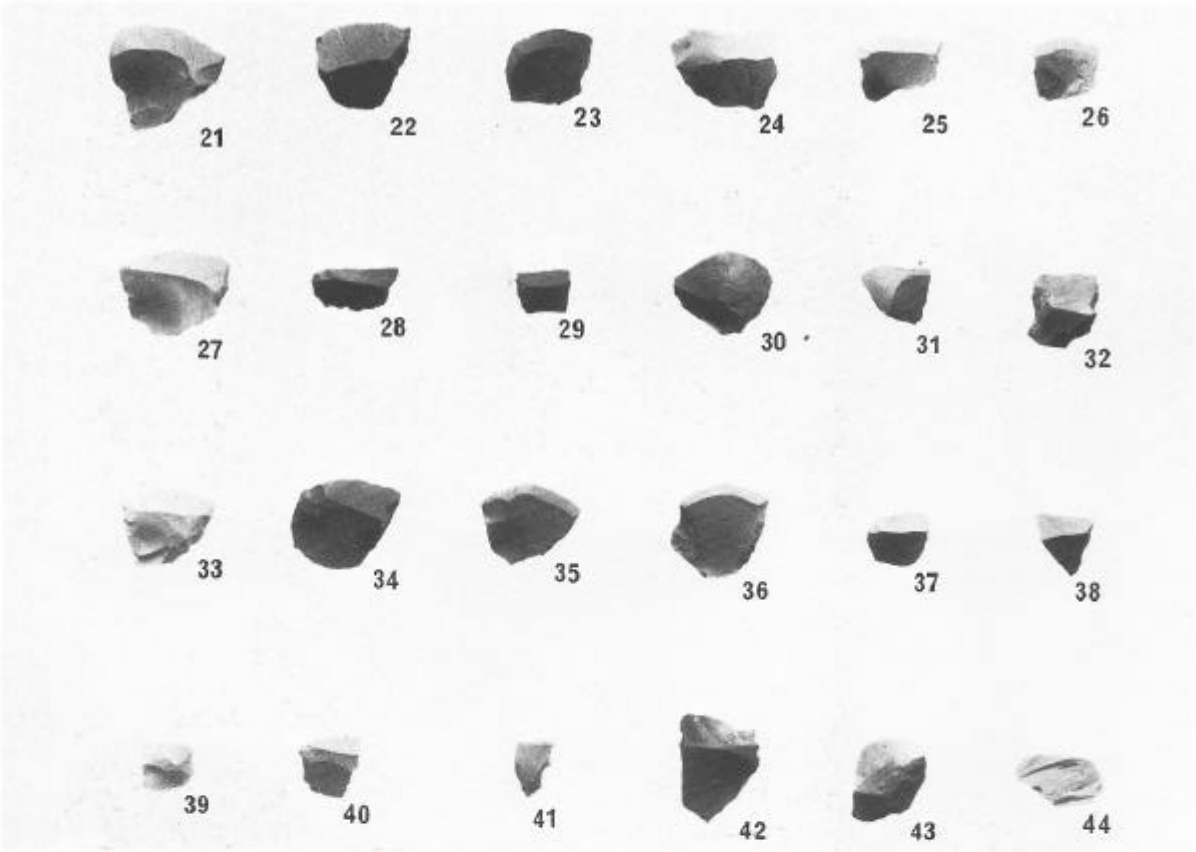
図版1　遺跡航空写真（東から）　（矢印は本年度発掘調査対象地区　1. 此掛沢Ⅱ遺跡　2. 上の山Ⅱ遺跡）

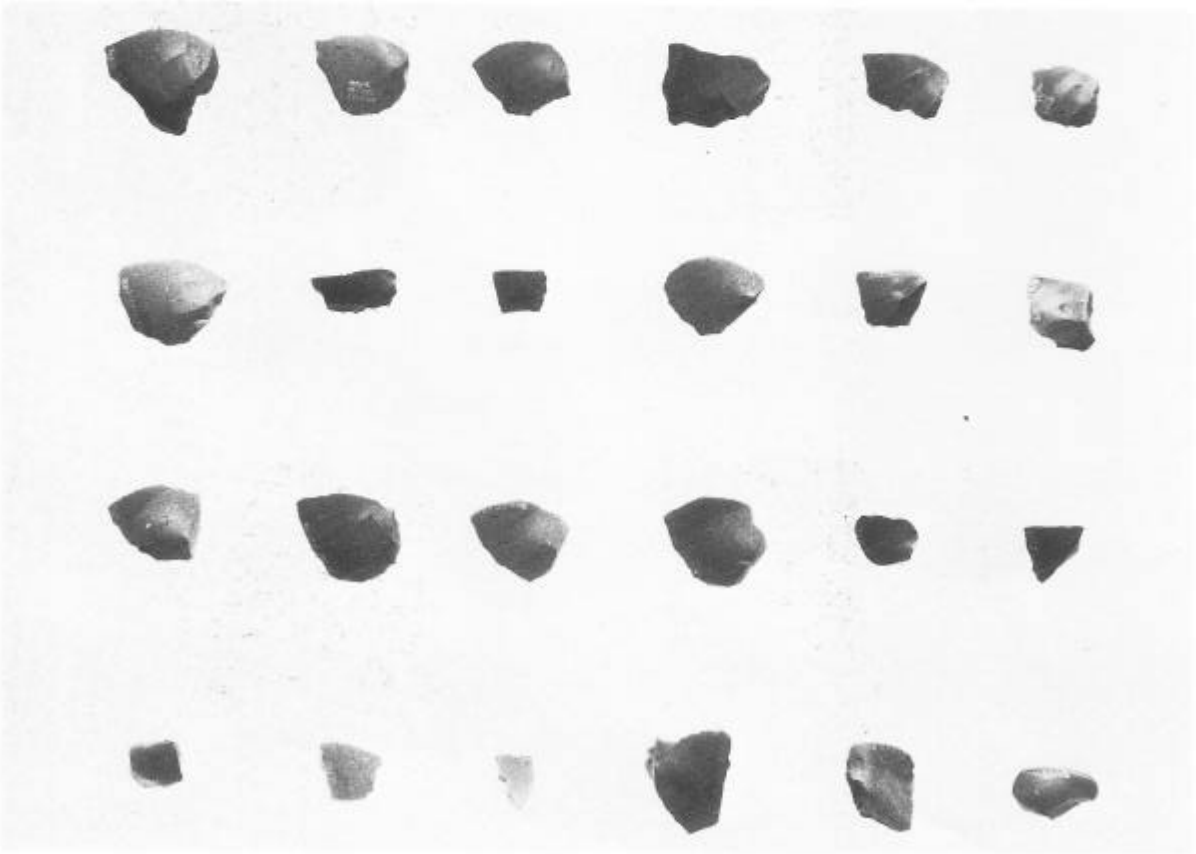


図版２　　上　遺跡全景（東から）
　　下　旧石器出土状況

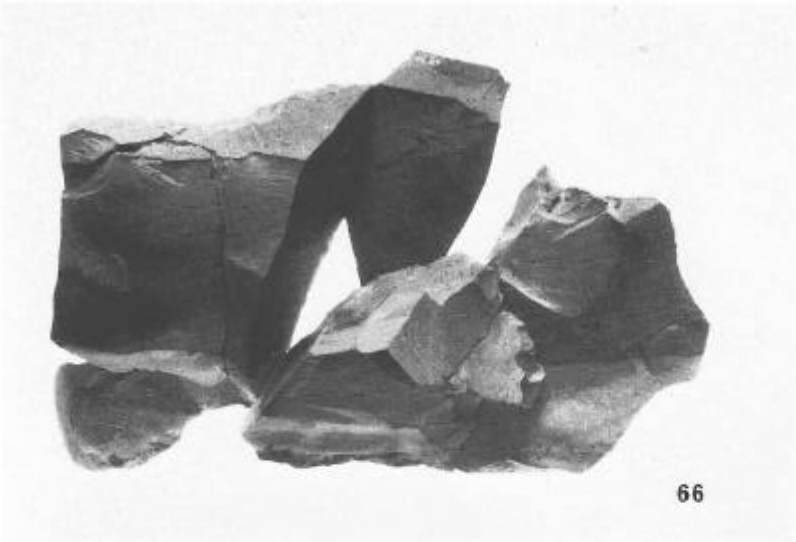


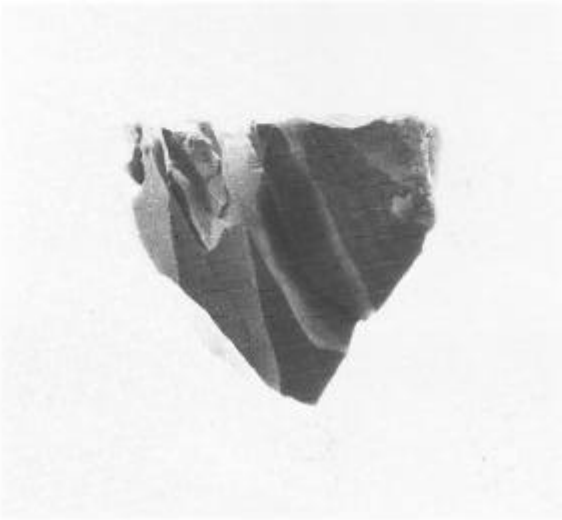
図版 3　　ナイフ形石器・局部磨製石斧

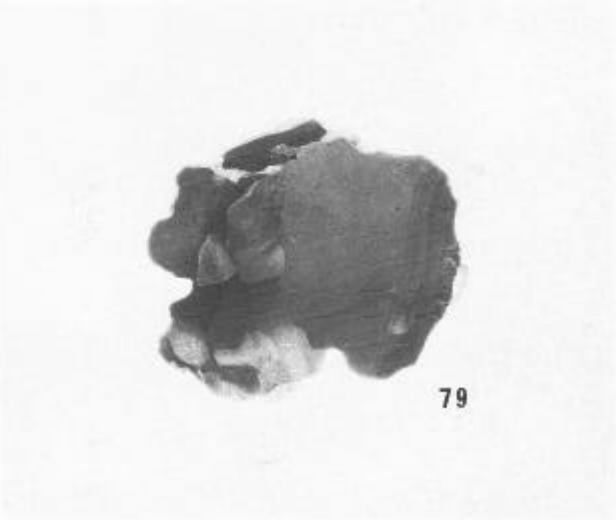




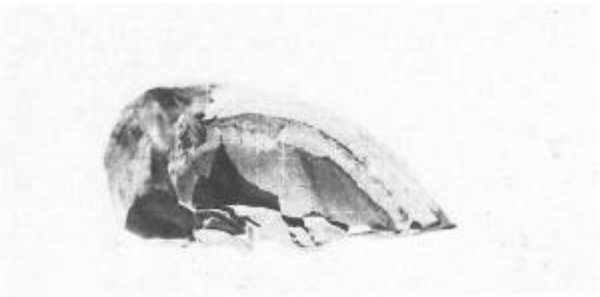
図版 4　　米ケ森型台形石器

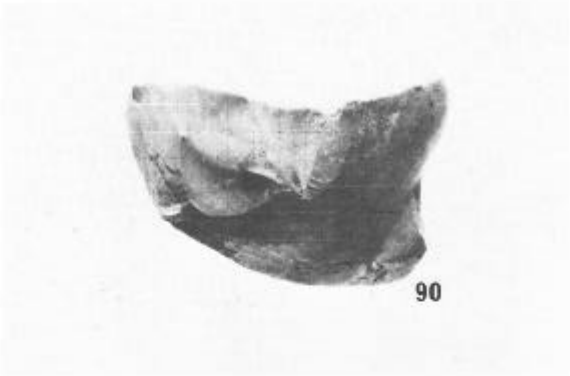


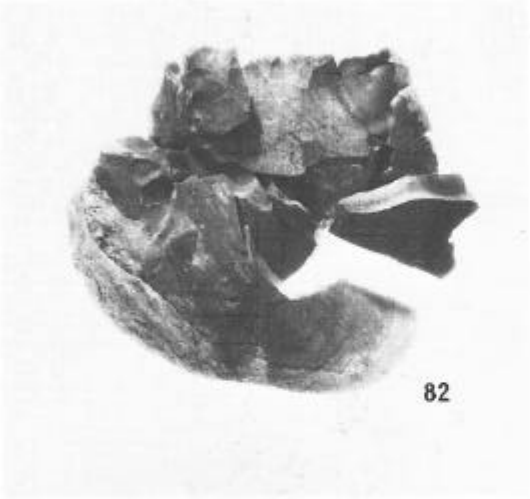


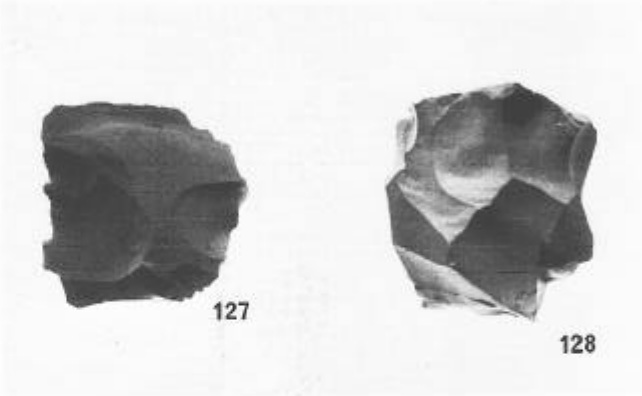


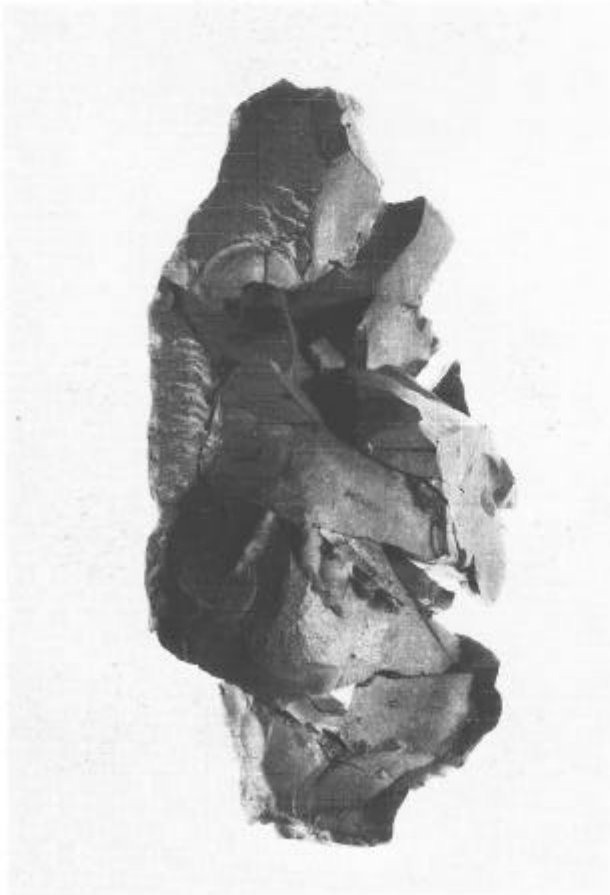
図版 5　　母岩㋒（66.67）、㋓（77.79）



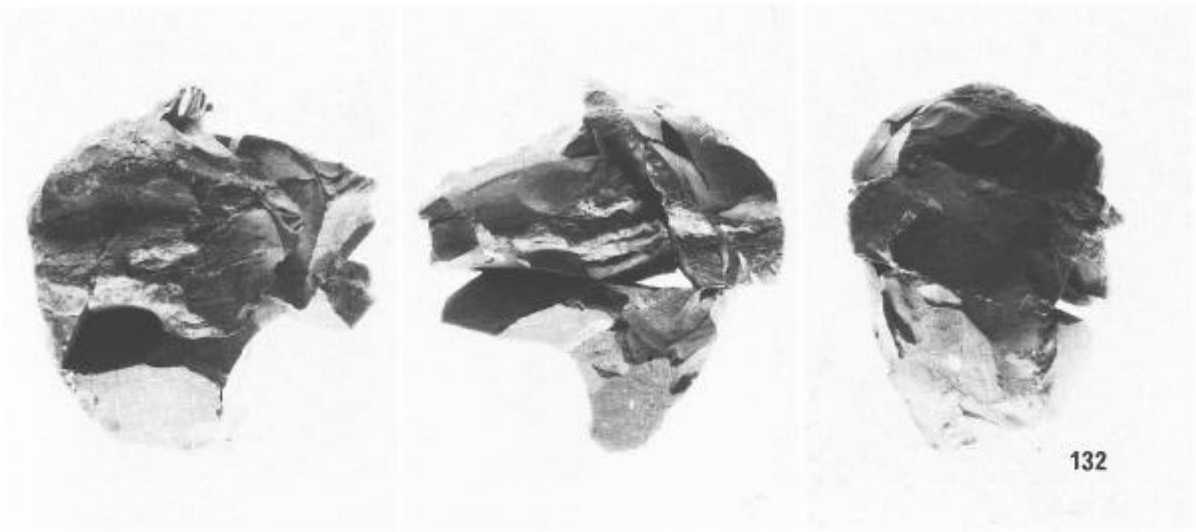


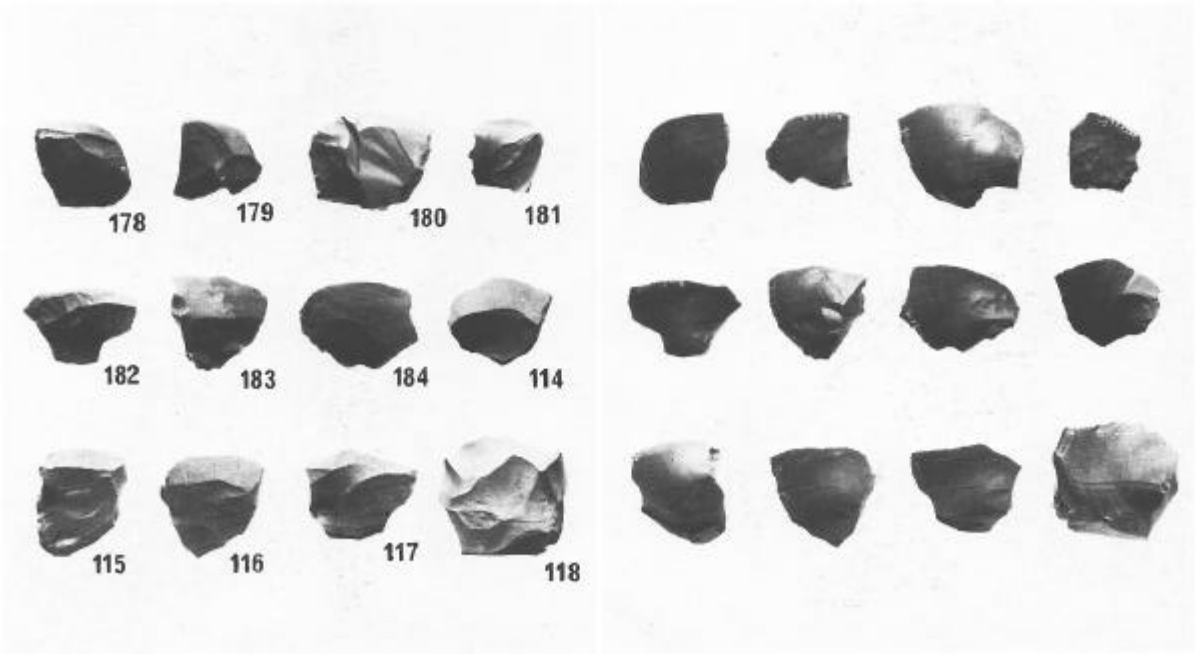




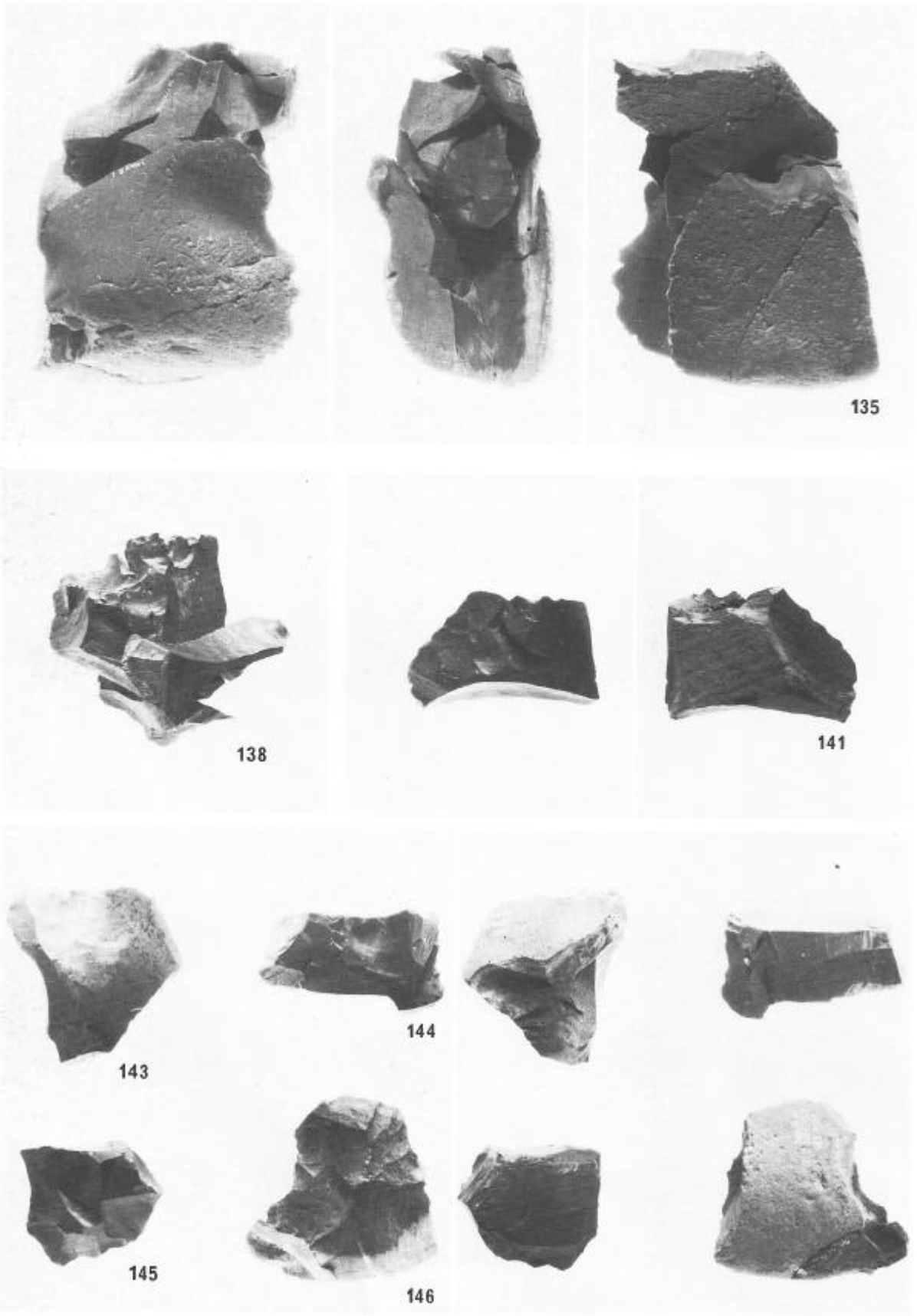


図版 6　　母岩㋐（82.90）、㋒（127.128）、㋓（105）

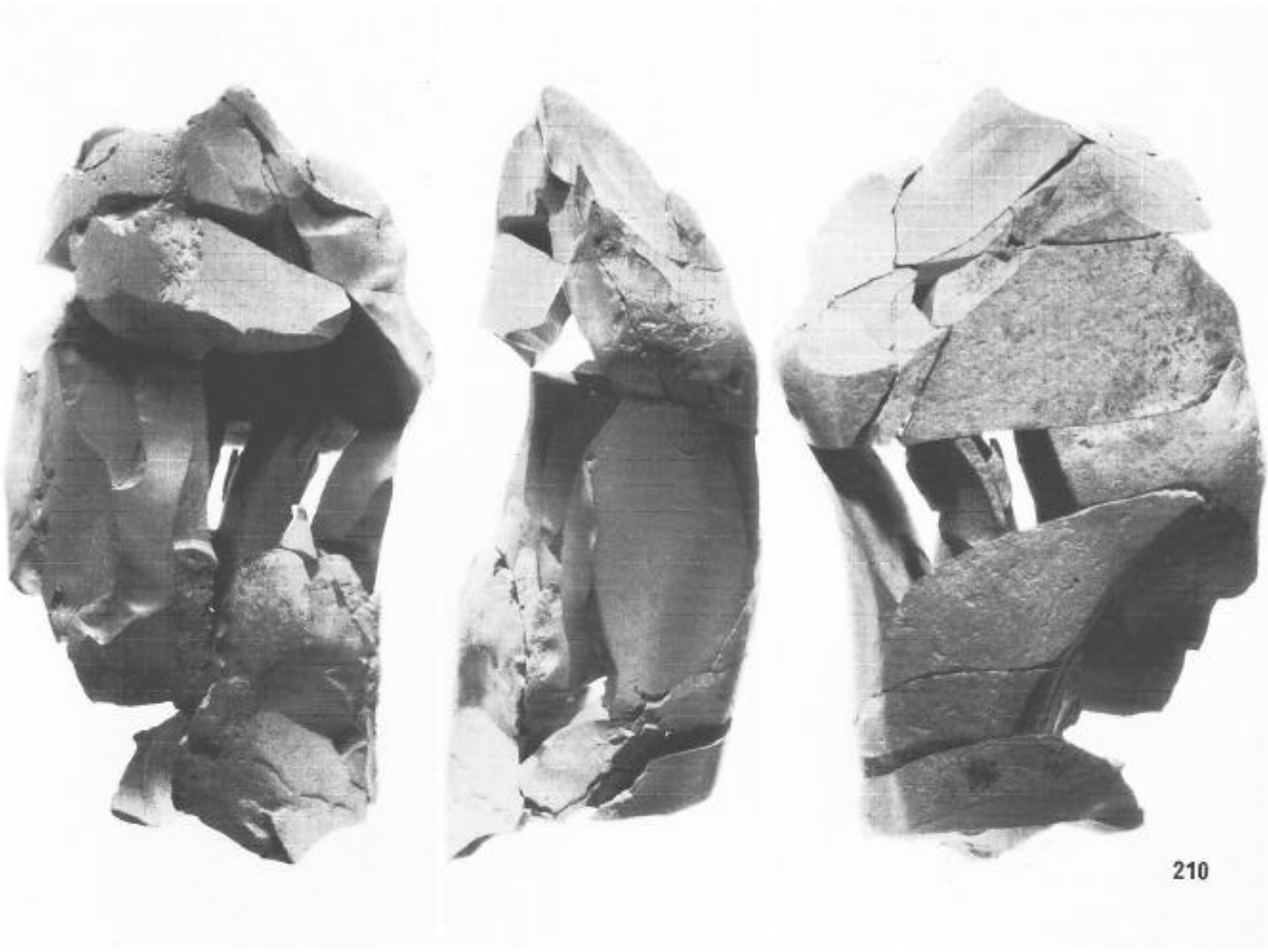


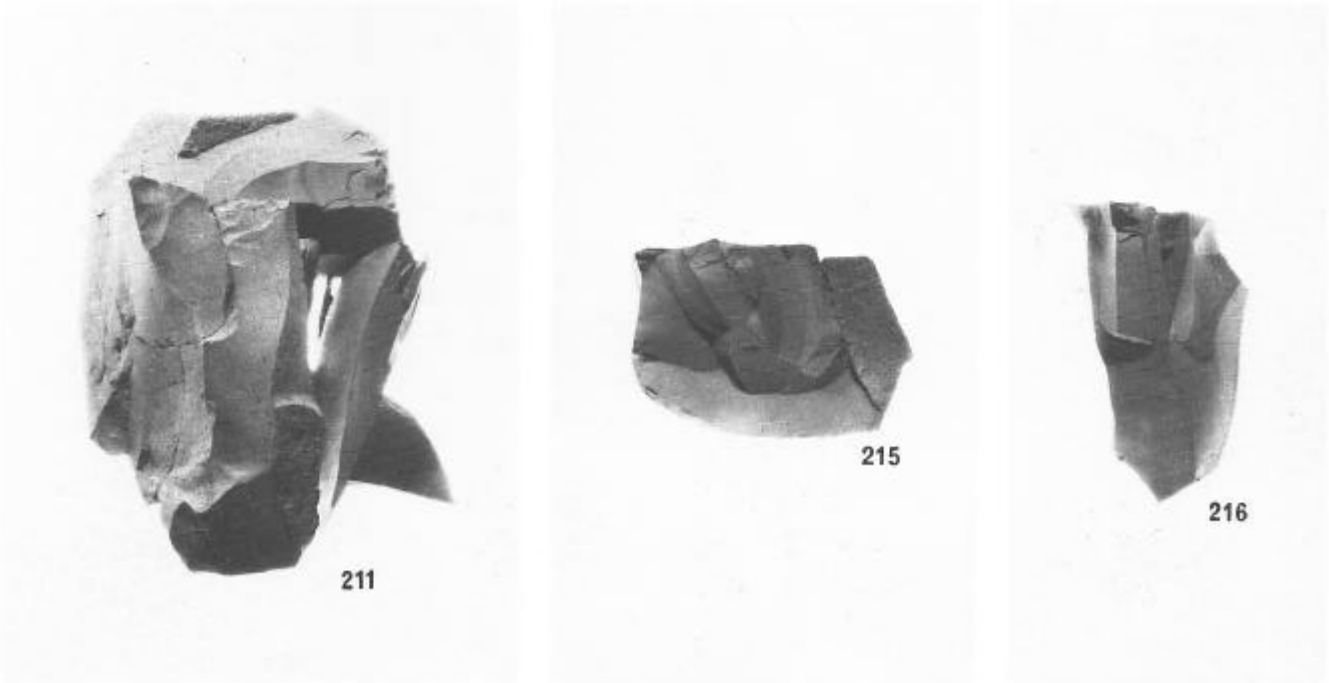


図版 7　　母岩㋖(132)、㋙(134)、㋚(178～184)、㋛(114～118)



図版 8　　母岩㋓（135）、母岩㋕（138、141、143～146）

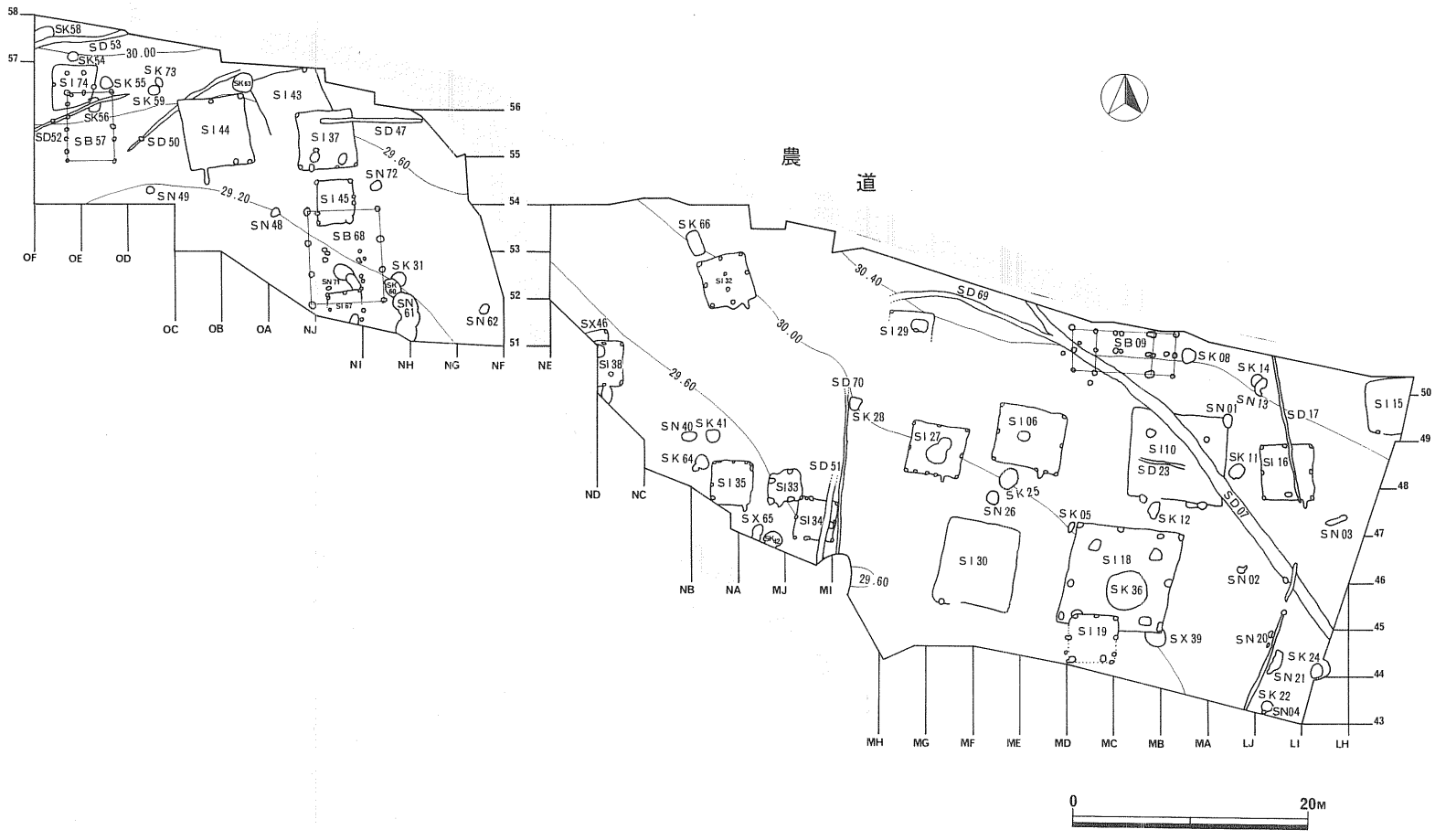




図版 9　　母岩㋐（210、211、215、216）

上の山（うわやま）II遺跡

（略称　3UNYII）



第1図　上の山II遺跡遺構配置図

第１章　はじめ

此掛沢Ⅱ遺跡参照

第２章　遺跡の立地と環境

此掛沢Ⅱ遺跡参照

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

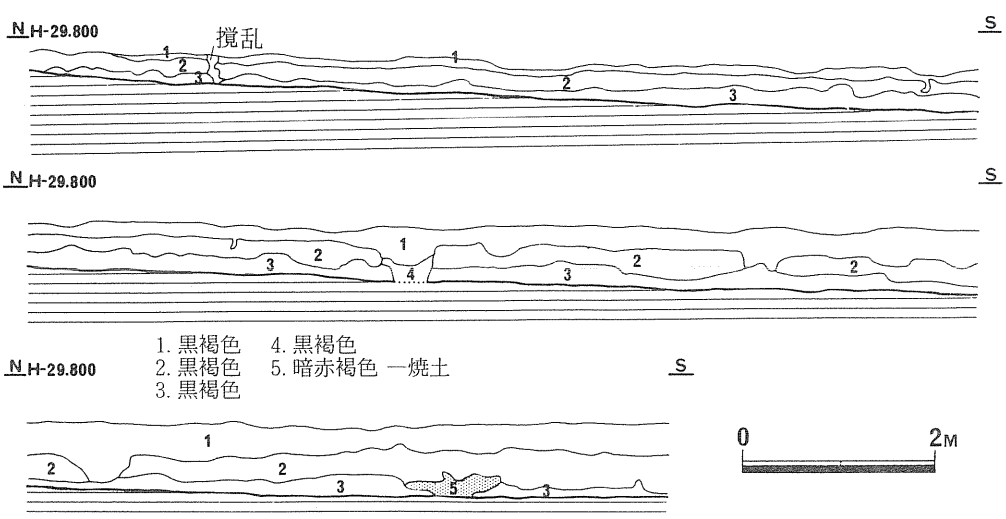
上の山Ⅱ遺跡は昭和56年11月に範囲確認調査が行われ、その面積は131,000㎡である。

本遺跡は此掛沢Ⅱ遺跡とは農道を隔てて隣接しており、今回の両遺跡の調査区も近く、約500ｍほど離れているだけである。

上の山Ⅱ遺跡の調査区は南に緩傾斜している。したがって土層の堆積も北から南にゆくにつれて、厚くなる。現況は畑地、原野となっている。

遺跡の基本層位（第２図）は以下の通りである。

第Ⅰ層　黒色土で砂を多く含み、しまりがない。厚さ10～30cm。―表土―



第２図　上の山Ⅱ遺跡の地層

第Ⅱ層　黒褐色土でやや粘性がある。厚さ20～30㎝。―平安時代の遺物包含層(下部)―

第Ⅲ層　黒褐色土で粘性があり、黄褐色土がわずかに混入する。―平安時代の遺物包含層（上部）―

第２節　調査の方法

グリッドの設定にあたっては、調査区の幅が広い東側に基準点（MA50）を設け、これから磁北に合せた南北基線（Y軸）とこれに直交する東西基線（X軸）とを求め、南北方向には４ｍ毎に二桁の算用数字、東西方向にはアルファベット二文字を付す。２文字の一桁目はＡ～Ｊ（40ｍ）のくり返しで二桁目は40ｍ行く毎に変る。つまりMA50から南にMA49・MA48…、北にMA51・MA52…、東にＬＪ50・ＬＩ50…ＬＡ50、西にＭＢ50・ＭＣ50…ＮＡ50…というふうにある。４ｍ×４ｍのグリッドの呼称はそのグリッドの南東隅の座標名とした。

第３節　調査の経過

調査期間は昭和58年10月13日から12月３日までの約１ケ月半である。尚、調査に先だち、業者委託による除土・抜根、グリッド杭打設を行った。

10月13日、此掛沢Ⅱ遺跡と二手に分かれ、東側から粗掘り開始。３基の焼土遺構を確認。19日、MDラインまでの粗掘りを終了し、焼土遺構の精査開始、20日、SI06・18のプランを確認。24日、SB09、SI10を検出。SI10の覆土に火山灰が混入している事が判明。29日、約1;000㎡の粗掘りを終了。現在までSI４軒、SN６基、SK４基、SD２条を検出。11月７日、SI18とSI19が重複している事が判明。SI18は１辺の長さが９ｍを超える大型のものである。15日、調査が遅れ気味のため作業員を増やす。17日、県埋蔵文化財センター岩見誠夫副所長来跡。今後の調査の見通しにつき検討し、来週より応援を迎ぐ事とする。21日、払田柵跡調査事務所船木義勝学芸主事（24日まで)、埋蔵文化財センター高橋忠彦文化財主事（30日まで)、同小林克文化財主事（27日まで)、同三嶋隆儀調査補佐員（27日まで)、調査に参加。23日、みぞれの日が続く。SI43・SI44、SI45を検山。24日、国立歴史民俗博物館阿部義平助教授,県文化課富樫泰時学芸主事来跡。26日、朝から吹雪となる。遺構精査を終日行なう。27日、日曜日だが調査を続行、SI74を検出。29日、SI45のカマド実測、全体写真を撮り、現場での作業を全て終了。12月２日、資・器材の撤収。３日、事務処理が済み全ての作業終了。

第４章　調査の成果

第１節　平安時代の遺構と遺物

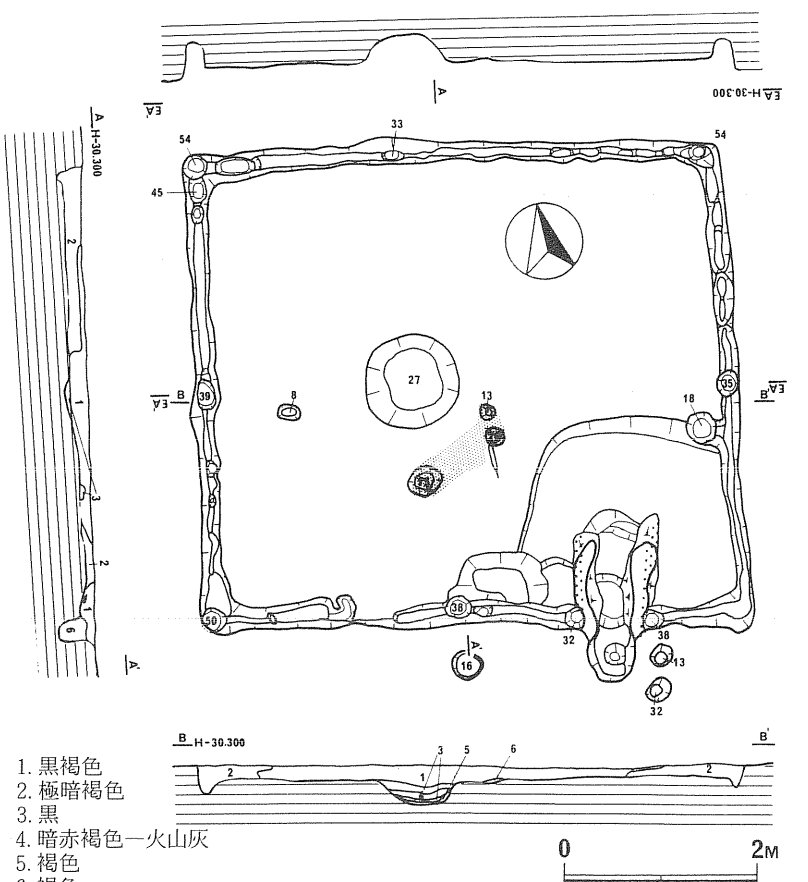
１　発見遺構と遺物

（１）　竪穴住居跡

竪穴住居跡はいずれも第Ⅳ層上面で確認され、平面形は方形かそれに近いもので、20軒検出された。調査区のほぼ全体に分布し、南向きに設けられたカマドが多い。約半数が火山灰をカマド構築の際に使用しており、中には覆土に混入しているものもある。

SI06　竪穴住居跡　（第３図、４図）

MD48グリッドに位置し、南壁5.8ｍ、東壁5.1ｍで、面積は29㎡である。主軸方位はN－13°－Eである。壁はきちっとした掘込みで、高さは15～30㎝で垂直に立上がる。壁溝は幅10～20㎝、深さ10～14㎝である。柱穴は深さ25～30㎝のものが各コーナーにあり、南、西、東の各壁中間に深さ22～25㎝の柱穴がある。北壁の柱穴はやや西にずれる。カマドは南壁

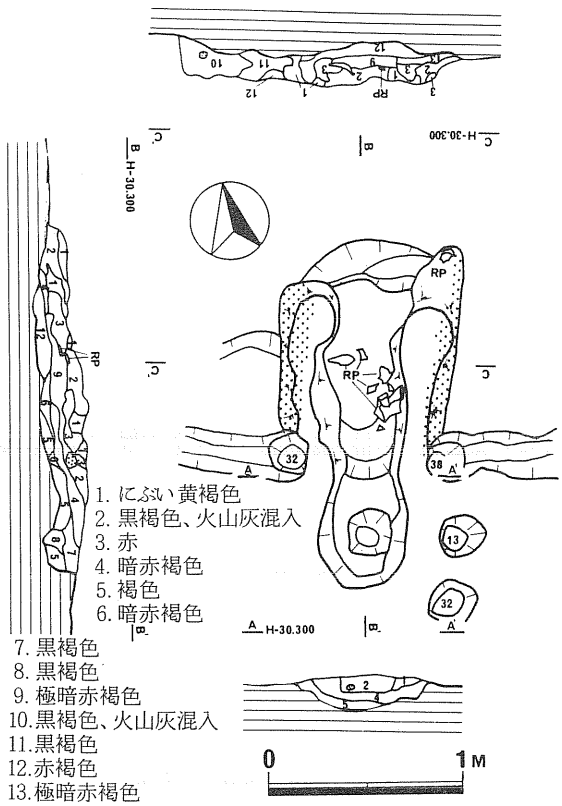


第３図　ＳＩ06　竪穴住居跡

の東寄りにあり、袖部が褐色の粘質土で作られ、中に火山灰が混じる。煙道は壁外に伸び、そのすぐ両脇と屋外に５本の柱穴がみられる。これはカマドの付属施設の可能性もある。

出土遺物　（第７図１～13）　土師器杯、甕・鉢、須恵器杯、甕、壺、刀が出土している。

１～７は土師器杯である。１は底部から体部にかけてやや丸味を持つもの２はやや小ぶりで底部から口縁部にかけて直立気味で、底径が小さい。３～５、７は体部下半が丸味を持ち７が特に顕著である。口縁部がわずかに外反する。２～５、７は内外面とも回転糸切りで二次調整はなく、橙色で焼成良好。８は土師器鉢かと思われるもので、内面にロクロ目が顕著である。９は土師器壺であろう。10、11は須恵器で、10が甕、11が壺である。11は外面にロクロ目が明瞭に残る。褐色でわずかに小石を含む。12、13は鉄製のもので、13は床面出土の刀である。全長35.2㎝、茎の長さ8.5㎝、幅は刀身で3.6㎝、茎で2.4㎝、厚さは0.9㎝である。直刀で両区である。12は刀子状のもので、欠損している。現存部の長さ３㎝、幅0.4㎝、厚さ0.8㎝で、目釘が打たれている。床面出土である。



第４図　SI06　竪穴住居跡 かまど

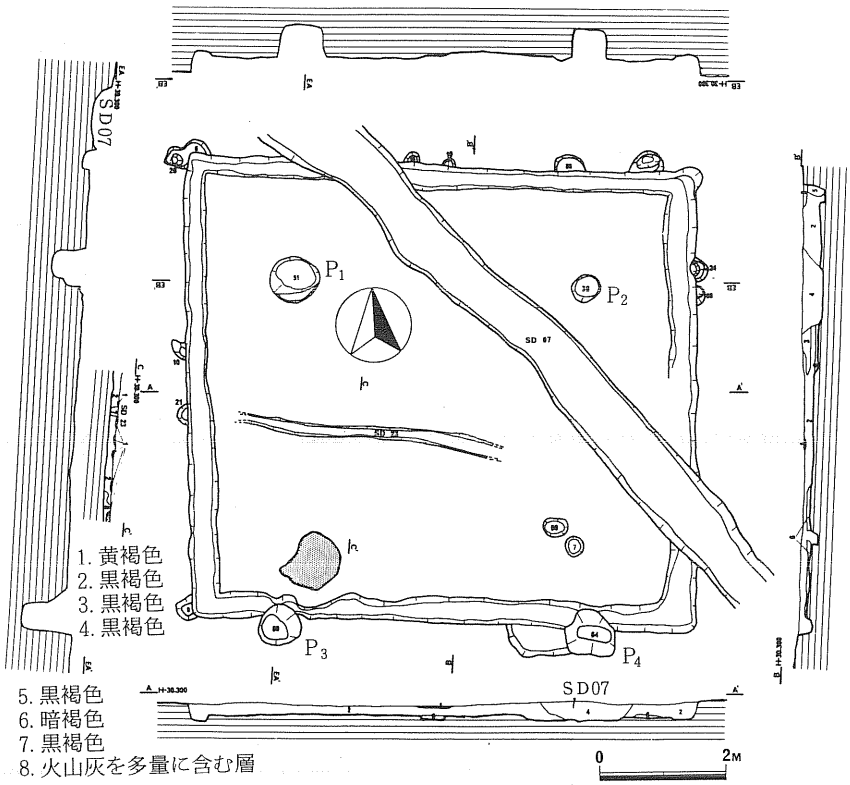
SI10　竪穴住居跡　（第５図　第６図）

MA48グリッドに位置し、SD07、23より古い。覆土上面にブロック状に火山灰（第５図、C－C′）が混入している。南壁8.0ｍ、東壁7.4ｍ、面積は60㎡と他の竪穴住居跡より大規模である。壁高は20～37㎝で、北から南に緩傾斜しているため、南側がやや深い。壁溝は幅20～30㎝、深さ７～24㎝である。主柱穴は床面北に２本、南壁際に２本の計４本で、周囲の壁外に細く浅いピットがある。カマドは南壁の西寄りにあり、崩壊しており詳細は不明である。火山灰が覆土にわずかに認められ、焚口部一面が焼けた状態で検出された。

出土遺物　（第７図14～21）　土師器杯・甕、須恵器杯・甕・壺、鉄製品、鉄滓が出土した。

14、15は土師器杯で回転糸切り、二次調整はなく内外面とも橙色を呈す。17は須恵器壺の口

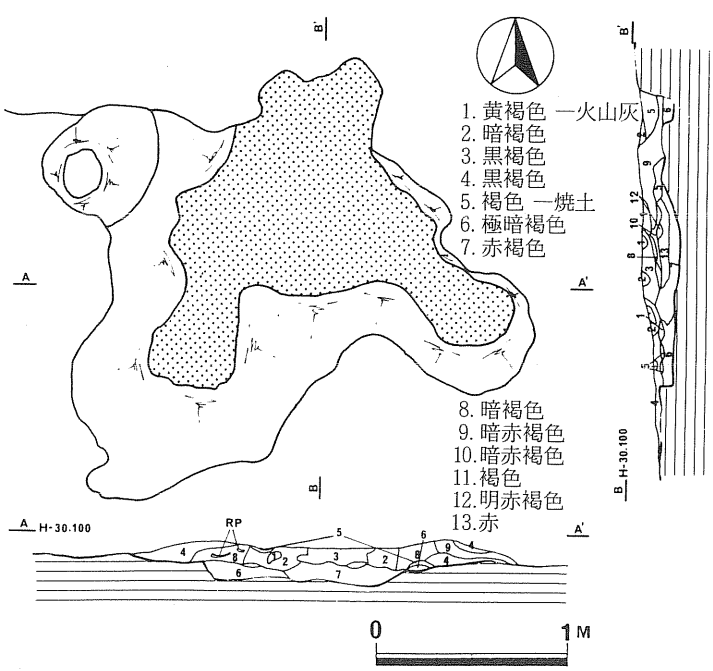
縁部で外面に自然釉がみられる。19、20は須恵器甕で、20は内面はカキ目、外面は平行叩き目があり、生やけで淡褐色を呈する。21は鉄製のもので、途中で欠損しているが、幅1.7㎝、厚さ0.3㎝で、目釘が打たれている。



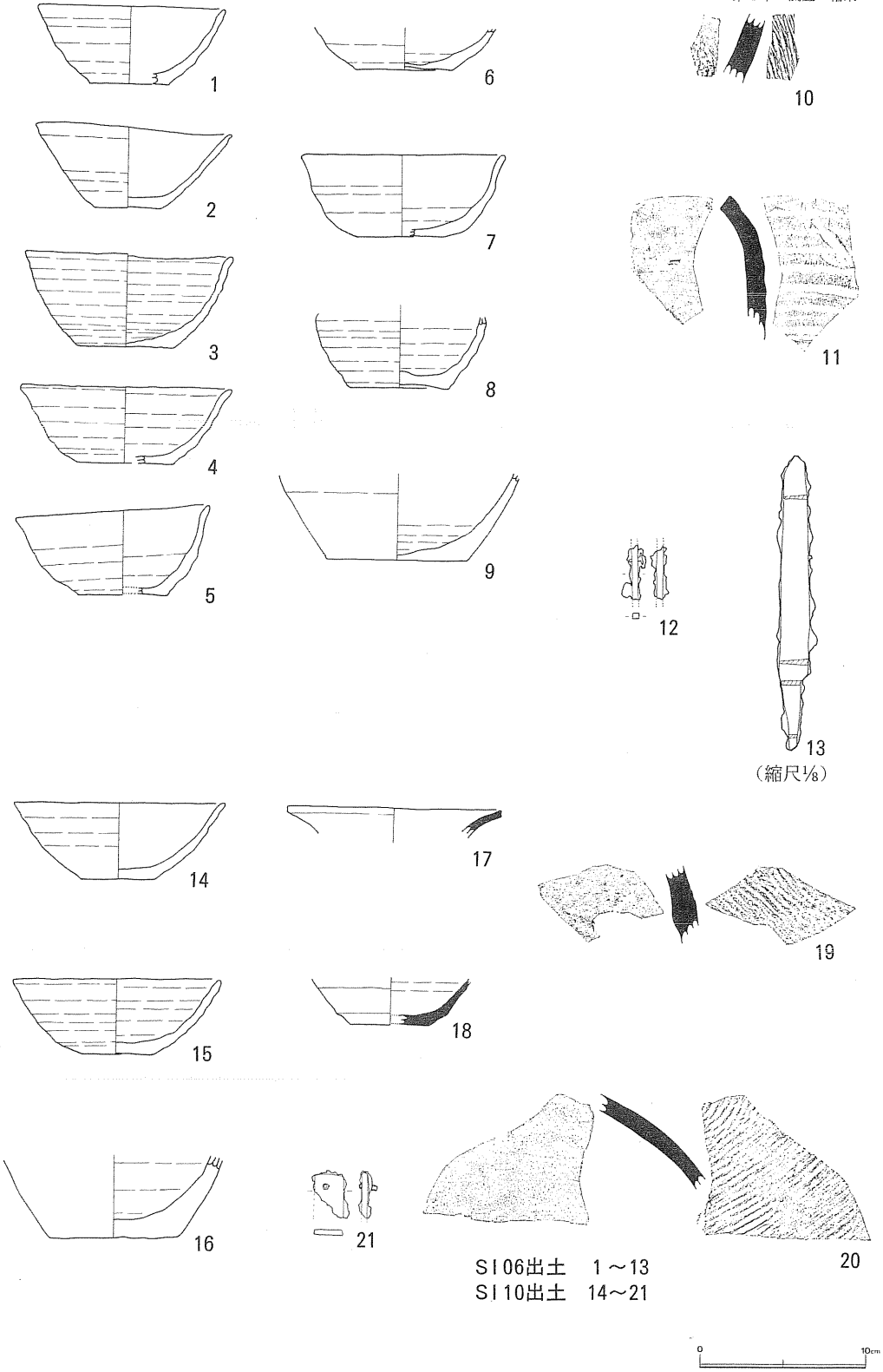
第5図　SI 10　竪穴住居跡

SI15　竪穴住居跡　（第8図）

LF49グリッドに位置し、東側は調査区外にあり、全容は不明である。浅いため、土層断面を作成するに到らなかった。方形を呈するものと思われる。西壁で4.3ｍである。壁溝の幅は10～20㎝で、深さは4～10㎝であるがかなり凹凸が激しい。床面は軟かく凹凸がある。カマドの有無は不明である。



第6図　SI 10　竪穴住居跡 かまど

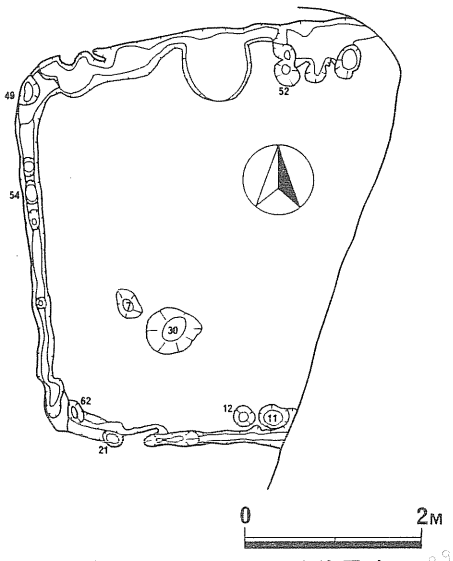


第７図　SI06・SI10　竪穴住居跡出土遺物

出土遺物はない。

SI16　竪穴住居跡（第９図、第10図）

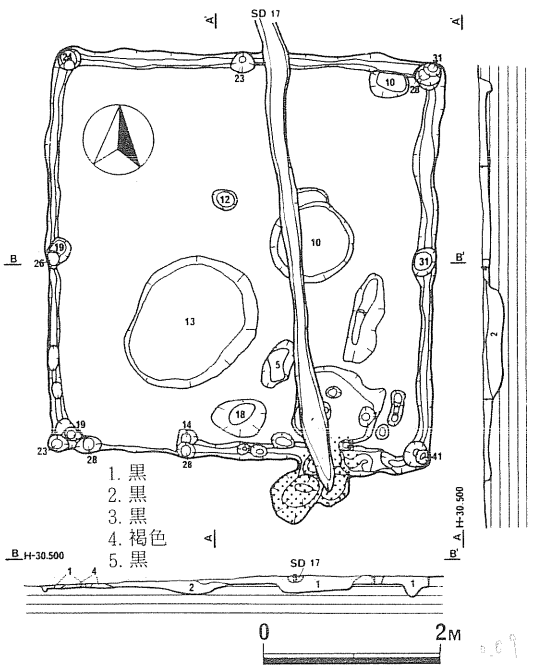
LI48グリッドに位置し、SD17と重複していて、本遺構が古い。北壁4.5ｍ、東壁4.5ｍで面積は21㎡、主軸方位は磁北を示す。壁は高さが12～18㎝である。壁溝は幅が10～20㎝、深さが５～８㎝で、床面は凹凸がある。柱穴は各壁コーナーとその間に配置されて計８本である。壁溝は北壁の西で途切れており、この部分が出入口と考えられる。カマドは南壁の東寄りにあり、袖部は粘土と火山灰で構築されている。煙道部はわずかに壁外に延びている。



第８図　ＳＩ15　竪穴住居跡

出土遺物　（第12図22～27）　土師器杯・甕、須恵器杯・甕、鉄滓１点が出土した。

22、23は土師器杯でいずれも薄手で、内外とも橙色を呈する。21には口縁部の内外に漆が付着している。25は土師器甕でロクロ未使用で、内外にヘラケズリを施こすものである。26、27は須恵器甕の破片で、同一個体であろう。いずれも内面は淡橙色、外面は青灰色である。



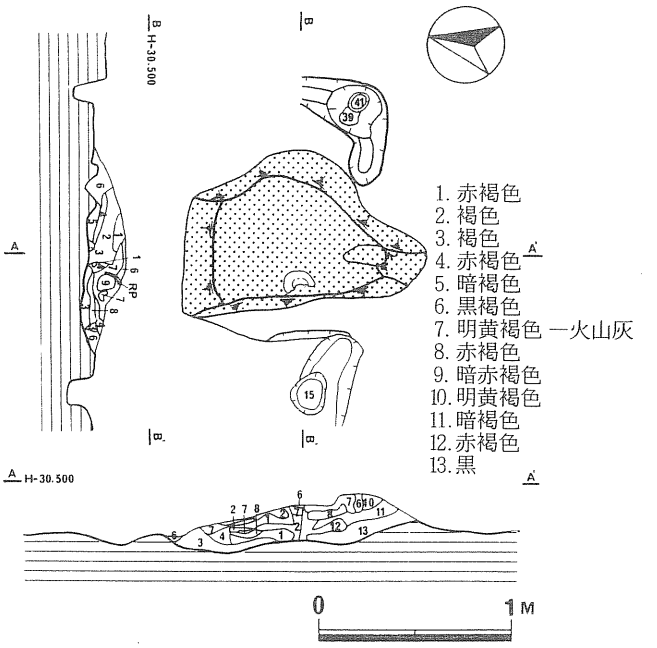
第９図　ＳＩ16　竪穴住居跡

SI18　竪穴住居跡　（第11図）

ＭＢ45、46グリッドに位置し、ＳＩ19、ＳＫ36と重複しており、本遺構はＳＫ36より新しくＳＩ19より古い。平面形は隅丸方形で、北壁9.00ｍ、東壁8.65ｍで、面積78㎡と本住居跡が一番規模が大きい。主軸方位はＮ－10°－Ｅである。壁は高さ６～36㎝で、壁溝は幅18～24㎝、深さ８～25㎝であるが各壁の途中で切れている。床面は平坦で固く締って、炭化物、焼土粒が多く混入していた。柱穴は床面の４本が主柱穴で、各コーナーにもあり、その間に１本ないし２本の柱穴が配されている。カマドは南壁の西側にあったが、SI19に切られ、遺存状態は不良

であったが、焚口と袖部の一部が残存していた。袖部には火山灰が混じっている。

本住居跡は焼失家屋で、炭化物粒、焼土粒が住居跡全体を覆い、各壁溝の内側に炭化した板材が遺存していた。特に北西コーナーが良好であのでそれについて説明を加えたい。挿図中でａとした板材は、北壁溝のすぐ内側に壁高と並行している。長さ272cm、幅18.0cm、厚さ2.0cmで、すぐ南側にも同様な板材がほぼ同じレベルで床面上に並ぶ（D～D′）ａの中ほどでCが直交しており、大きさは、長さ30cm、幅18cm、厚さ1.6cmである。ｃは北で15cmほど下に入っている。西壁溝のすぐ内側にもａと同様な板材が３枚並んでいる。そのうち遺存状態の良いｂは長さ179cm、幅18cm、厚さ1.6cmで、それと直交するｄは一部がｂの上になっている（B～B′）。長さ30cm、幅13cm、厚さ２cmである。尚、C、Dは壁溝上までは延びていない。

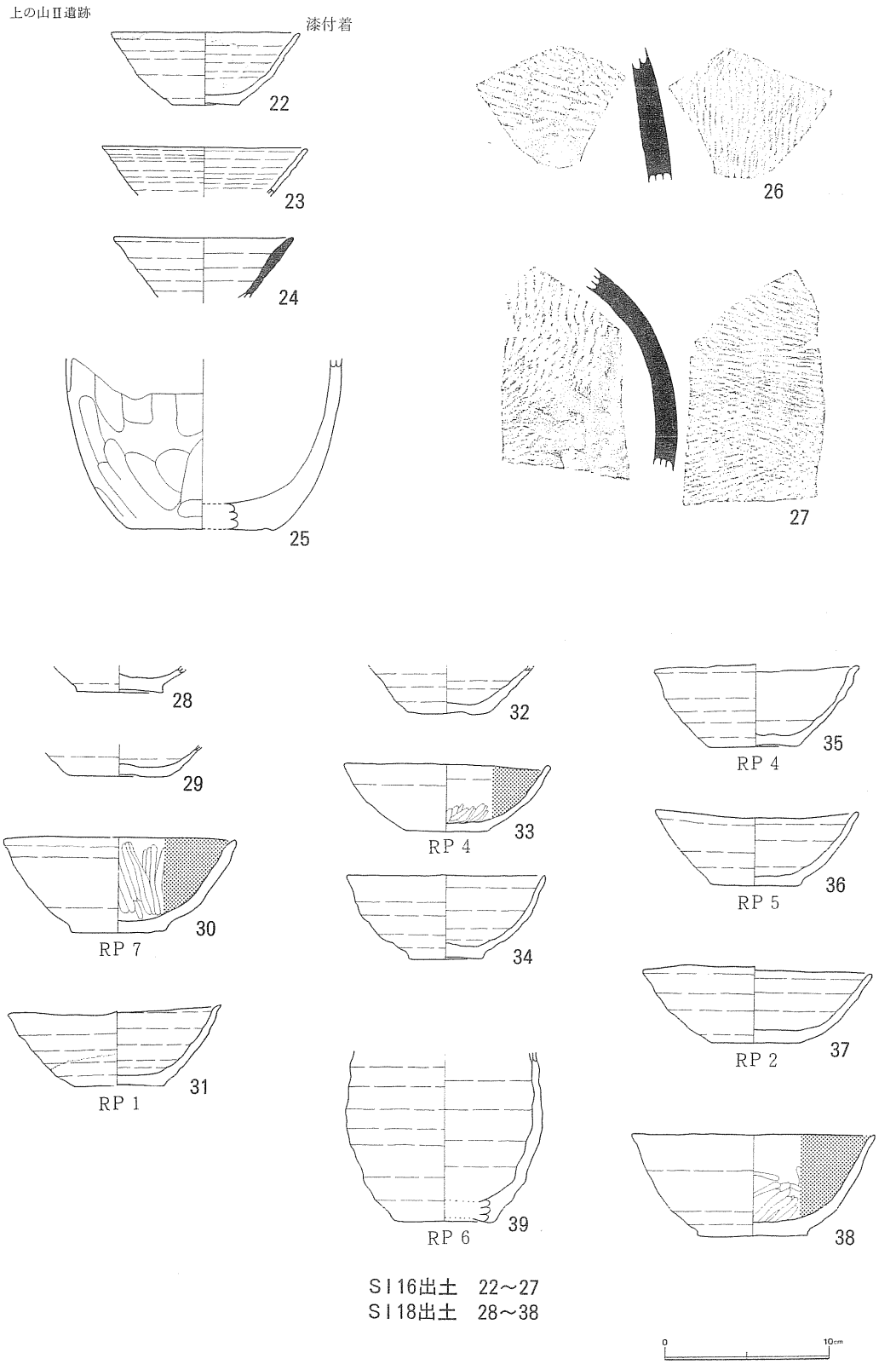


第10図　ＳＩ16　竪穴住居跡　かまど

上記の状況を勘案すれば、２つの可能性が考えられる。１つは壁材が火災の際に焼けて壁溝の内側に倒れたものとし、ａ、ｂは腰板、ｃ、ｄは矢板で、本来は壁材であるという考え方である。もう１つは、ａ、ｂを敷板で、ｃ、ｄはその下のころがし根太とする考え方である。しかし、壁材とすると、中央部寄りにある板材の用途が不明であるし、敷板とすればｄがｂの上にあるのも不自然である。以上のように本住居跡内の用途、機能については決め手を欠くので２つの可能性を指摘するに留めたい。

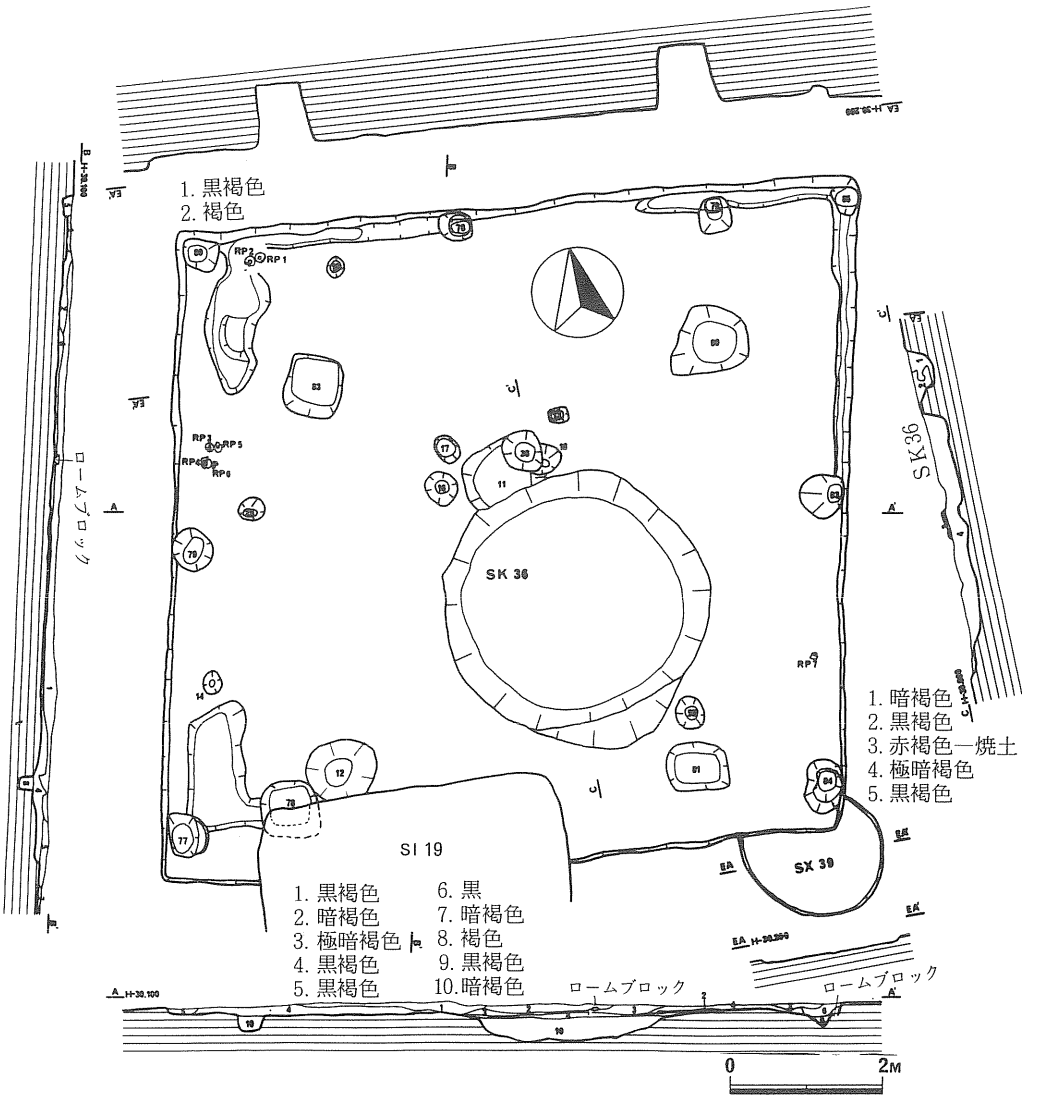
出土遺物　（第12図28～39、第13図40～52）　完形品が多く出土し、器種にバラエティがある。土師器杯・甕・壺・須恵器甕・壺、刀子、砥石、土製支脚が出土した。

28～38は土師器杯で、いずれも回転糸切りで二次調整はない。30、33、38は内黒で30、38は底部から緩やかな立上がりを示すのでやや肉厚である。外面は淡橙色を示す。33は30、38より小ぶりで、丸味をもって立上がるもので、外面は橙色である。31は底部に「川」と思われる墨書が見られる。39は小形の土師器甕で底部は回転糸切りで、二次調整はない。内外面とも橙色を呈する。42～46は土師器甕で、46はロクロ成形後に外面にヘラケズリを施こすものである。40は土師器鉢で内外面とも煤状炭化物（漆の可能性もある）が付着している。41は須恵器の長頸壺である。内外面とも橙色を呈するが、器形・胎土から須恵器としたものである。47・48は



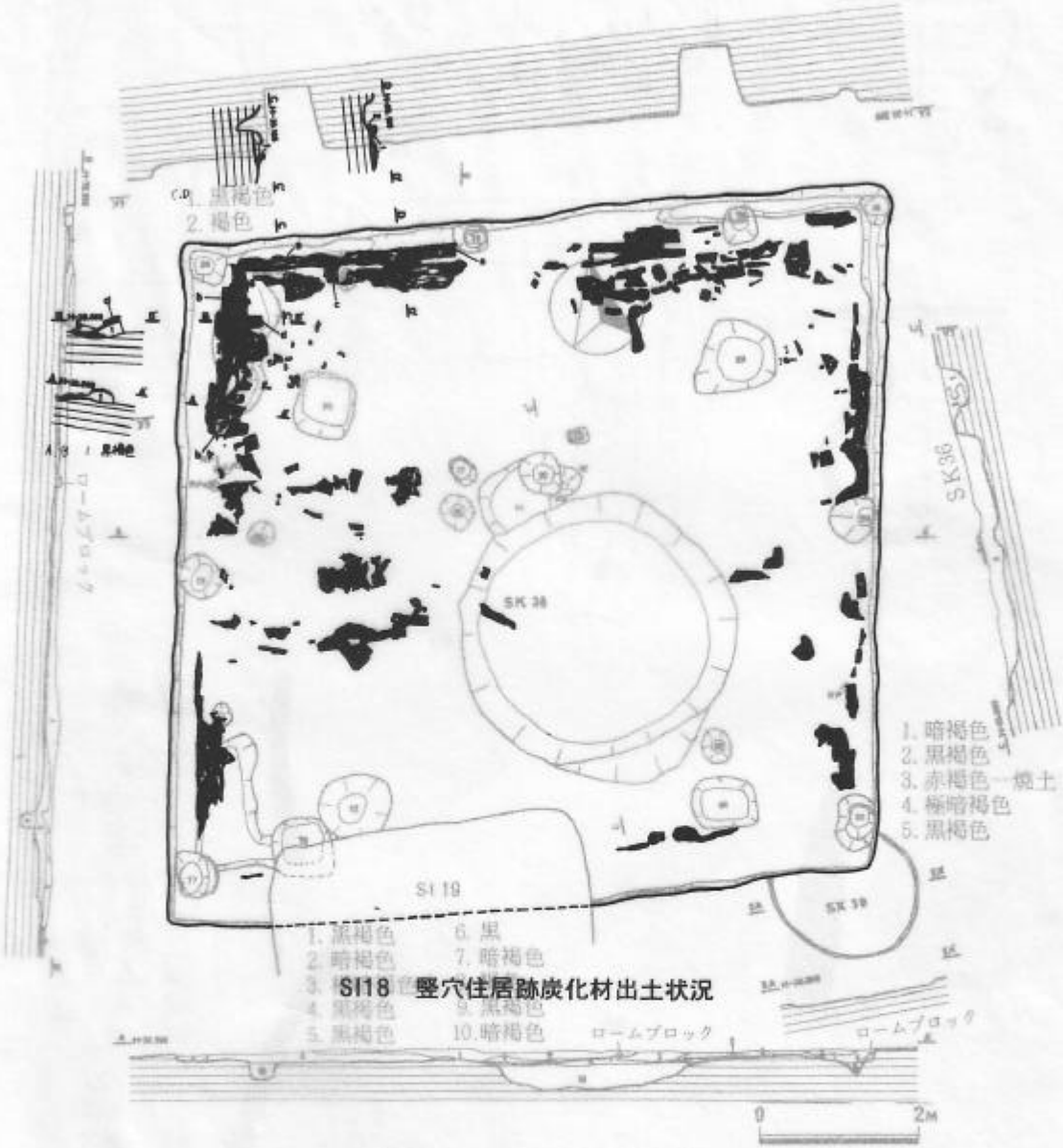
SI16出土　22～27
SI18出土　28～38

第11図　SI16・SI18　竪穴住居跡出土遺物



第12図　ＳＩ18　竪穴住居跡

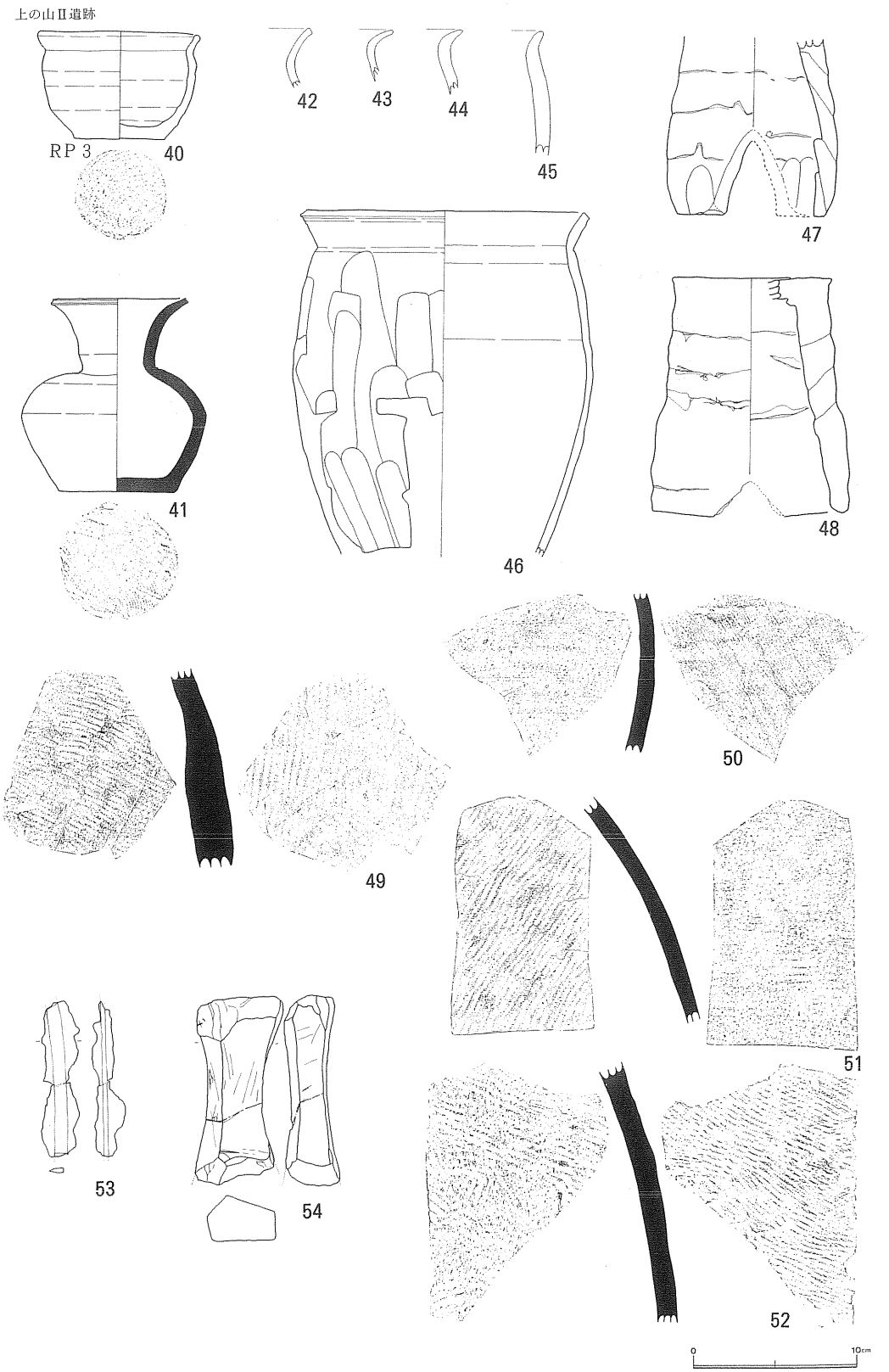
土製の支脚で下部の対面する二方向に逆「Ｖ」字形の切込みが入る。内外に粘土紐の巻き上げ痕があり、胎土に細砂粒を含み、内外面とも橙色を呈する。48は高さ14.5cm、上部幅10.0cm、切込み部の高さ2.0cmである。47も形態は似ているが、欠損している為、詳細は不明である。いずれもカマド付近の床面出土である。49・51・52は須恵器の破片で内面にアテ板痕、外面に叩き目を有し、青灰色や灰色を呈する。50は、須恵器壺の胴部にロクロ成形後、外面にヘラケズリを施こし、灰色を呈する。54は砥石で途中で折れている。現存部の長さ9.8cm、幅4.2cm、重さ337ｇで、石質は凝灰岩である。床面より出土した。53は鉄製で刀子かと思われる。途中で折損している。現存部の長さ9.3cm、幅0.8cm、厚さ0.3cmで、床面から出土した。



SI18　竪穴住居跡炭化材出土状況

第12図　ＳＩ18　竪穴住居跡

土製の支脚で下部の対面する二方向に逆「V」字形の切込みが入る。内外に粘土紐の巻き上げ痕があり、胎土に細砂粒を含み、内外面とも橙色を呈する。48は高さ14.5cm、上部幅10.0cm、切込み部の高さ2.0cmである。47も形態は似ているが、欠損している為、詳細は不明である。いずれもカマド付近の床面出土である。49・51・52は須恵器の破片で内面にアテ板痕、外面に叩き目を有し、青灰色や灰色を呈する。50は、須恵器壺の胴部にロクロ成形後、外面にヘラケズリを施こし、灰色を呈する。54は砥石で途中で折れている。現存部の長さ9.8cm、幅4.2cm、重さ337ｇで、石質は凝灰岩である。床面より出土した。53は鉄製で刀子かと思われる。途中で折損している。現存部の長さ9.3cm、幅0.8cm、厚さ0.3cmで、床面から出土した。



第13図　SI 18　竪穴住居跡出土遺物

SI19　竪穴住居跡　（第14図）

ＭＣ44グリッドに位置し、ＳＩ18と重複し、本遺構の方が新しい。確認面からの覆土の深さは北で６～12cmと浅く、南側では壁は残っていない。柱穴の配置から考えると方形と思われる。壁長は北で3.8ｍで、主軸方位は磁北を指す。推定面積は15㎡である。床面は平坦で固い。柱穴は各コーナーと北を除く壁の中間に１本ずつ配置されている。カマドの本体は遺存せずわずかなくぼみと焼土が、南壁の東寄りにあるだけである。

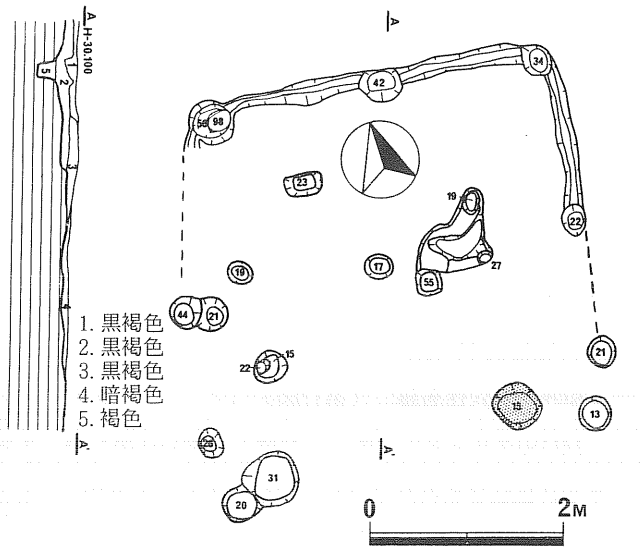
出土遺物　（第18図55～64）

土師器杯（含む・内黒・高台付）・甕・壷、須恵器甕・壷、土製支脚が出土した。

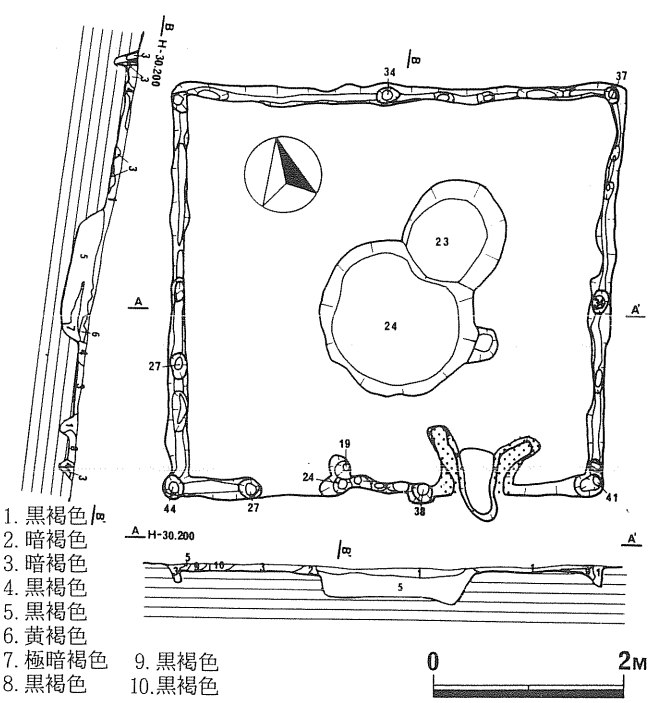
55～58は土師器杯で56は内面に黒斑がみられる。58は高台付杯で、回転糸切り後、高台を付すものである。59は土師器甕で焼成は良好である。60～64は須恵器で60は壷の口縁部、61～64は甕で61は口頸部で「く」字状にくびれている。

SI27　竪穴住居跡　（第15図）

ＭＦ48グリッドに位置し、規模は4.7ｍ、西壁4.4ｍで面積は20㎡である。主軸方位はＮ－８°－Ｅである。壁高は10～14cmで、床は平坦で固く締っている。壁溝の幅は10～30cmで、深さは12～20cm



第14図　ＳＩ19　竪穴住居跡

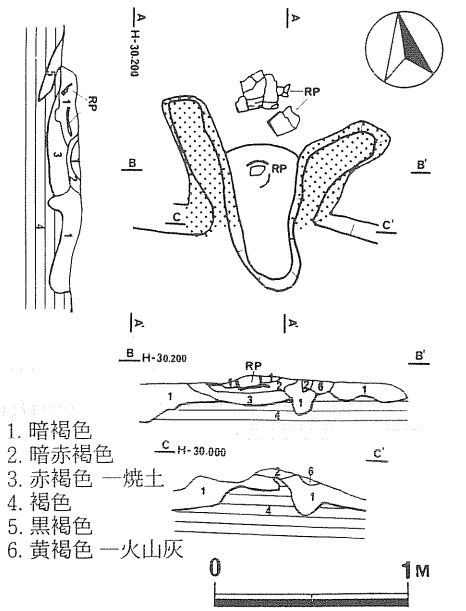


第15図　ＳＩ27　竪穴住居跡

でほぼ全周するが、南壁のカマドの西で途切れる。出入口と思われる。柱穴は各コーナーと各壁の中間に１本ずつ配置される。

出土遺物　（第18図65～67）　土師器杯・甕が出土した。

65～67はいずれも土師器杯で、65は底部を欠損している。大変薄手で内面を横方向のヘラミガキ後に黒色処理している。



第16図　ＳＩ27　竪穴住居跡 かまど

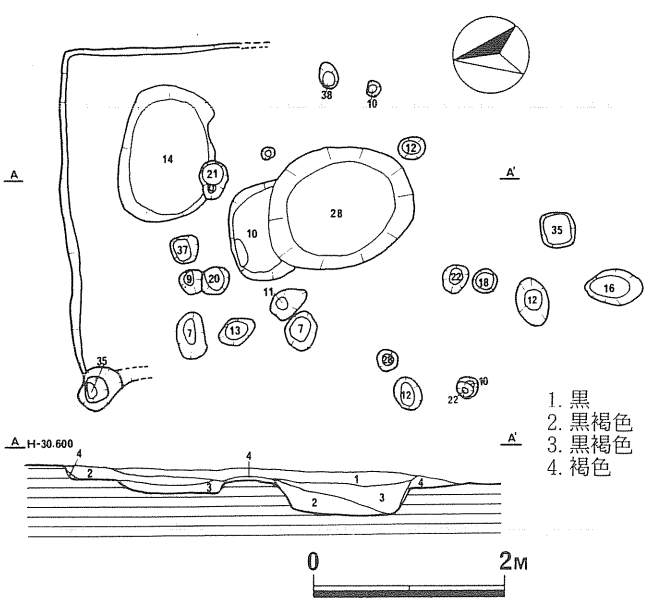
SI29　竪穴住居跡　（第17図）

MG50グリッドに位置し、北壁と東壁の一部がわずかに確認されただけで全体の形は不明であるが、柱穴や遺物の出土状況より竪穴住居跡と判断した。中央部に長軸1.5ｍ×短軸1.3ｍ、深さ0.3ｍの楕円形の土壙があり、その周辺に多くの柱穴がある。カマドは検出されなかった。土壙の上から多くの炭化材が出土したが、焼失家屋かも知れない。

出土遺物　（第18図68～71）

土師器杯・甕、鍋が出土した。

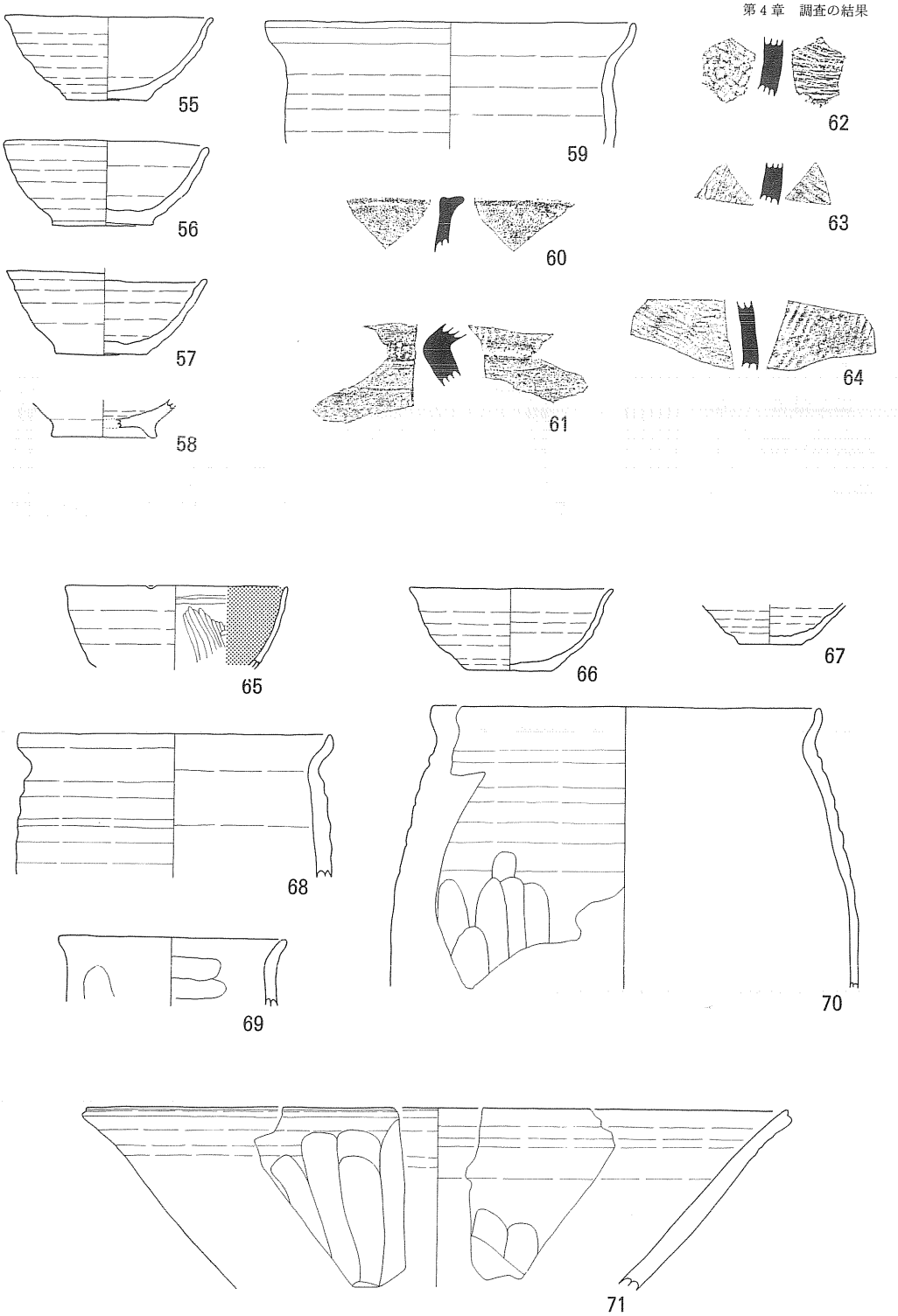
68、70は土師器甕で外面にロクロ目を明瞭に残す。69は土師器甕の小形のもので、内外面とも風化が激しいが、ヘラケズリが見られる。71は鍋の破片であるが成形後に内外面ともヘラケズリを施こすものである。焼成は大変良好である。



第17図　ＳＩ29　竪穴住居跡

SI30　竪穴住居跡　（第19図）

ME45、46グリッドに位置し、南壁6.5ｍ、西壁7.2ｍで面積は45㎡である。主軸方位はＮ－13°－Ｅである。確認面から床面までの深さは10㎝ほどで、壁溝の深さは４～20㎝、幅は10～20㎝で、床面は平坦である。柱穴は西壁溝際に３本、東壁溝際に１本あるが他には検出されず、その配置は不明である。カマドは南壁の西寄りに位置する。本体は確認されなかったが火床部

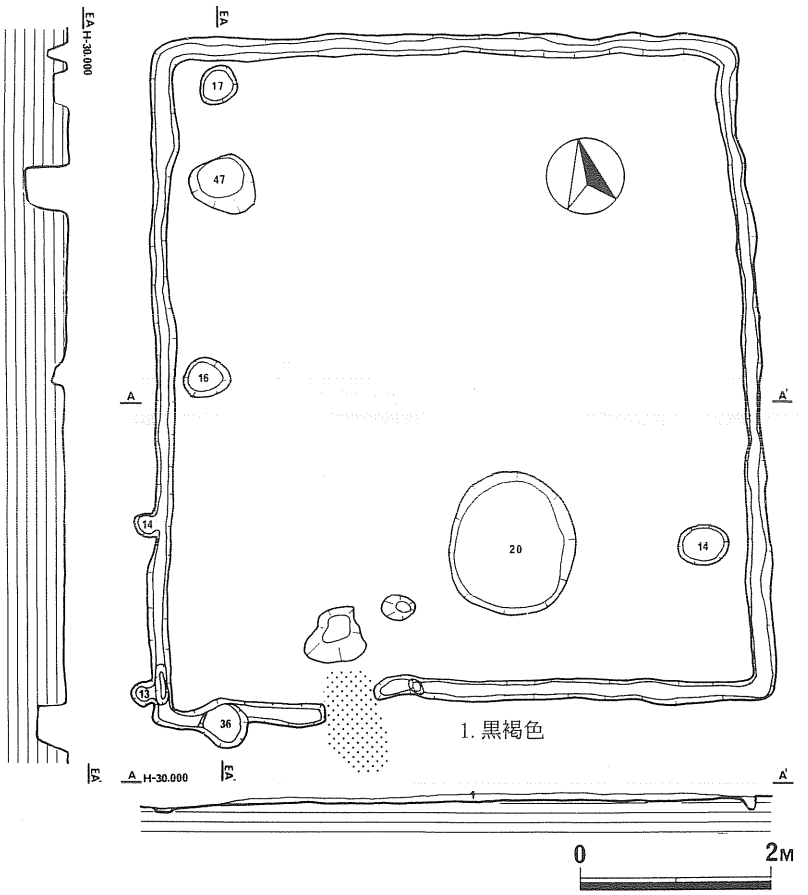


ＳＩ19出土　55～64
ＳＩ27出土　65～67
ＳＩ29出土　68～71

第18図　ＳＩ19・ＳＩ27・ＳＩ29　竪穴住居跡出土遺物

と思われるわずかなくぼみと、壁外に延びる焼土が確認された。焼土上及び周辺には袖部構築の際に使用されたと思われる火山灰が検出された。

出土遺物　（第23図72～76）　土師器杯（含む、内黒）・甕が出土したが、相対的に遺物は少なく、ほとんど破片のものが多い。



第19図　ＳＩ30　竪穴住居跡

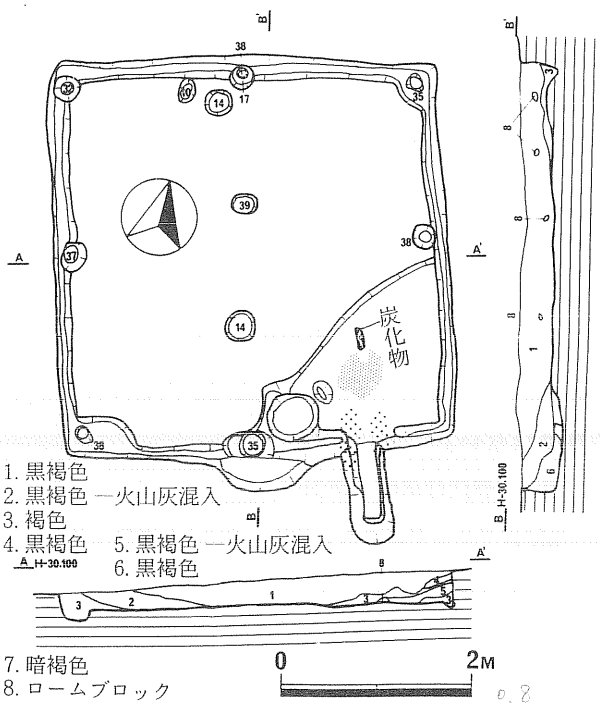
72～76はいずれも土師器甕の口縁部である。72は円筒形に近い形態と思われ、わずかに外反する。外面にはヘラケズリやナデが見られ、焼成は良好である。73、75はロクロ非使用のもので外面にヘラケズリを施こす。74、76はロクロ目が見られ、橙色か淡橙色を呈するもので、焼成良好である。

SI32　竪穴住居跡　（第20図、第21図）

NA50グリッドに位置し、南壁4.1ｍ、西壁4.2ｍ、面積は17㎡である。主軸本位はN－20°－Wである。壁高は北壁46㎝、西壁27～33㎝で、ほぼ垂直なしっかりした壁で、床面はやや凹凸があるが、固く締っている。壁溝は幅10～15㎝、深さ３～10㎝である。柱穴は北東を除く各コーナーとその中間及び床面上に２本配置される。カマドは南壁の東寄りに位置し、褐色土、黒褐色土に粘土・火山灰を混ぜて構築している。焚口には焼土、袖の底面には火山灰があり、煙出部は壁外に延びている。袖のすぐ西脇には土壙が存在する。

出土遺物　（第23図77～87）　土師器杯（含む、内黒）・甕（砂底）、須恵器壺、土製の支脚が出土した。

80は土師器鉢で、内外面とも風化が激しいがロクロ成形と思われる。最大径が胴部にあり、かなり丸味をもつ。82は須恵器壺と思われるもので、底部を高台風に仕上げている。内外面にヘラケズリやカキ目、外底面に指痕が残る。表面は橙色だが、断面内部は灰白色を呈する。86は土製の支脚で、高さ9.5cmで下方に逆「V」字形の切込みが入る。87は高台付の耳皿で回転糸切りである。口縁部を内側に折り曲げている。



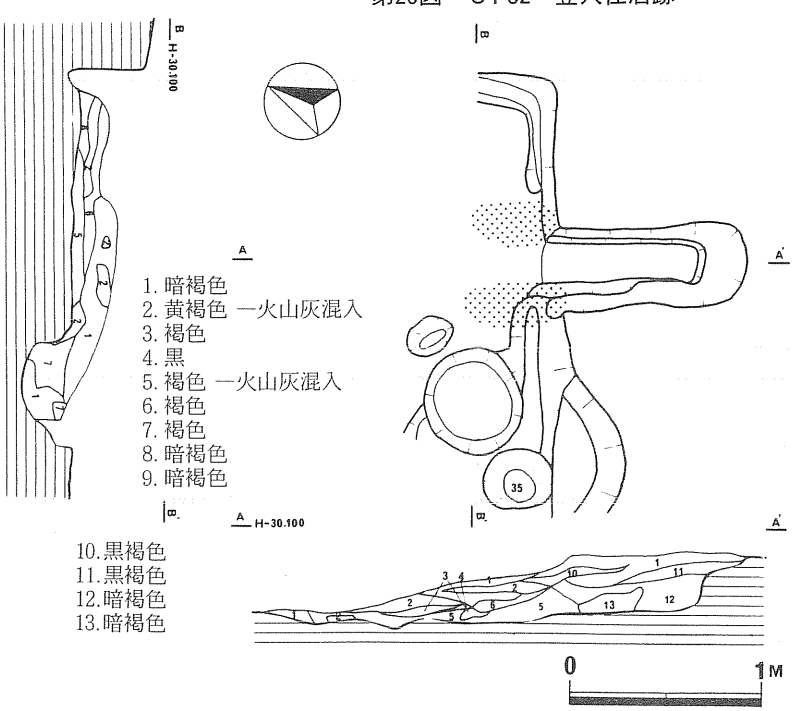
第20図　ＳＩ32　竪穴住居跡

SI33

竪穴住居跡

（第22図）

ＭＪ47グリッドに位置し、ＳＩ44と重複し、本遺構が古い。不整方形で南壁2.7ｍ、西壁2.4ｍ、面積は７㎡で、主軸方位はN－11°－Wである。



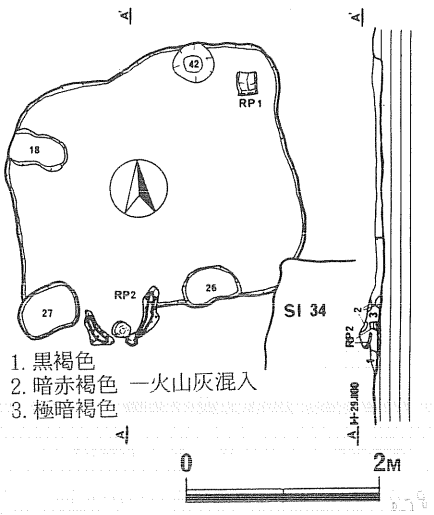
第21図　ＳＩ32　竪穴住居跡 かまど

確認面から床面まで10cm前後と浅く、壁溝は検出されなかった。床面は平坦でやや締まる。柱穴は内部に４本不規則に並ぶ。カマドは南壁の西寄りに位置し、袖部がわずかに残り、壁外に延びる。袖部

に火山灰が使用されている。土師器杯を支脚として転用している。

出土遺物　（第23図88～91）　土師器杯、甕が少量ながら出土した。

88～91はいずれもロクロ使用のものである。88、89は土師器杯で、88はカマドの支脚に利用されていたものである。91は土師器甕で、外面はロクロ成形後、ヘラケズリを施こすもので、内面に二次調整はない。



第22図　SI 33　竪穴住居跡

SI34　竪穴住居跡（第24図）

MJ47グリッドにあり、SI33、SD51と重複している。SI33より新しく、SD51より古い。

確認面はほぼ床面に近い。規模は南壁3.4m、西壁3.6mで、面積は12㎡、主軸方位はN－5°－Eである。床面は中央部付近が、黒褐色土と黄褐色土の混合土の貼り床（スクリーントーン部分）である。厚さ3～5㎝で、特にカマド周辺が硬く締っている。壁高は東で10㎝を計り、他は床面と同レベルである。柱穴は各コーナーと各壁の中間に配置されている。カマドは遺存しないが、南壁の西寄りで壁溝が途切れ、火山灰が検出された事からその場所に構築されていたものと考えられる。

出土遺物　（第25図92～106）

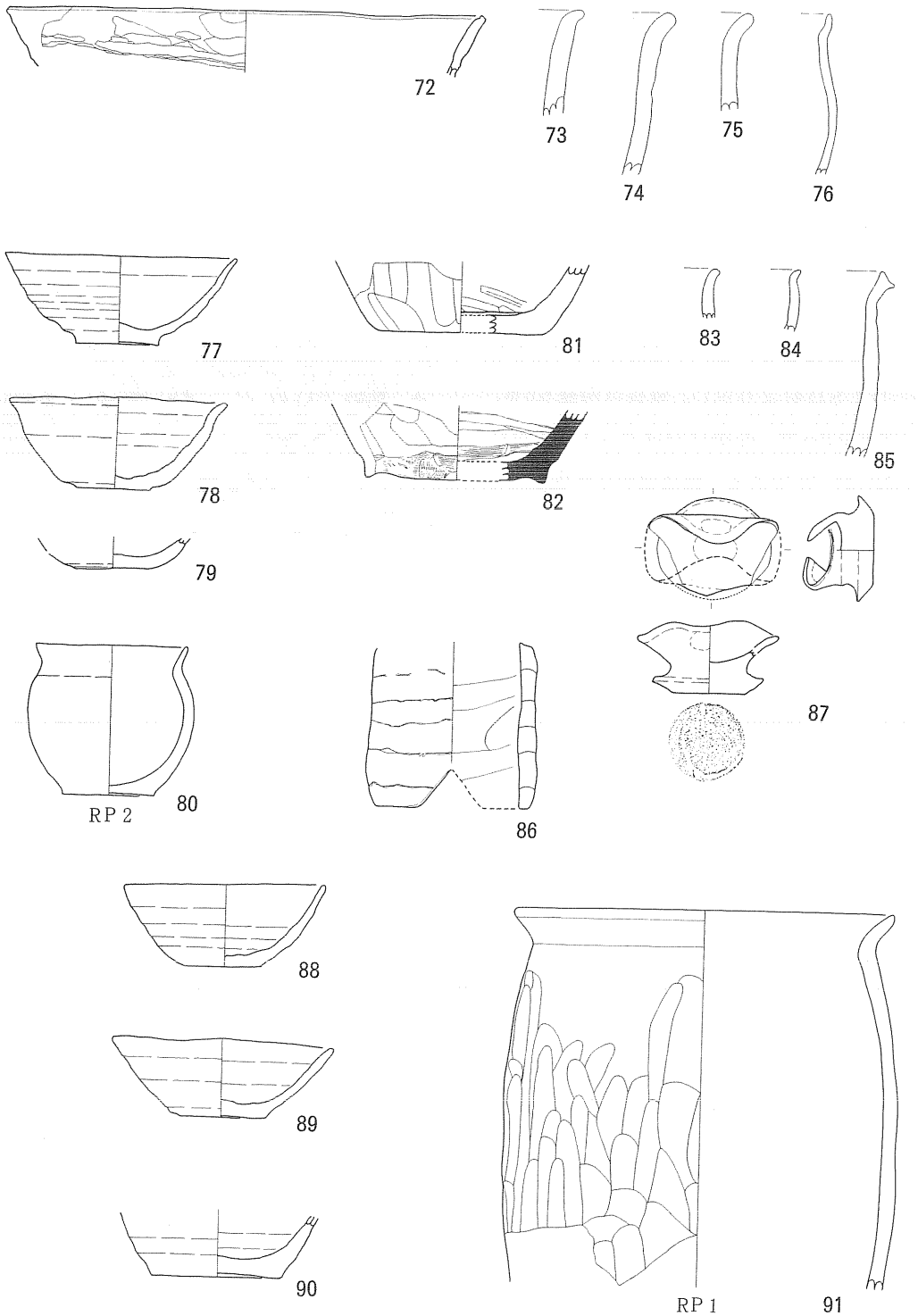
92～98は土師器杯で、92は内黒で底面を高台風に仕上げている。99・101・102・104はいずれも土師器甕で、ロクロ成形である。102は小形の甕で内外面に二次調整はない。底面は平滑に切上げられている。100、103はロクロ未使用で外面にヘラケズリが見られる。105は土師器鉢で内面にヘラケズリ、外面に刷毛目が見られる。106は須恵器壺と思われ、外面には縦にカキ目があり、胎土には小石が混入している。

SI35　竪穴住居跡　（第26図）

NA47グリッドに位置し、確認面から床面までは4～5㎝である。規模は北壁3.4m、東壁3.6m、面積は13㎡で、主軸方位は磁北を指す。壁高は5～6㎝である。壁溝はない。床面は平坦で締まっている。柱穴は南東を除く各コーナーと北壁・西壁の中間にあるが他には検出されなかった。カマドは南壁の東寄りに位置し、袖部が残る。煙道部は壁外に延びている。焚口には焼土は検出されなかった。

出土遺物　（第28図107～114）　土師器杯・甕、須恵器甕が出土した。

109～113は土師器甕で、111以外はロクロ使用のものである。111は胴部から口頸部まで



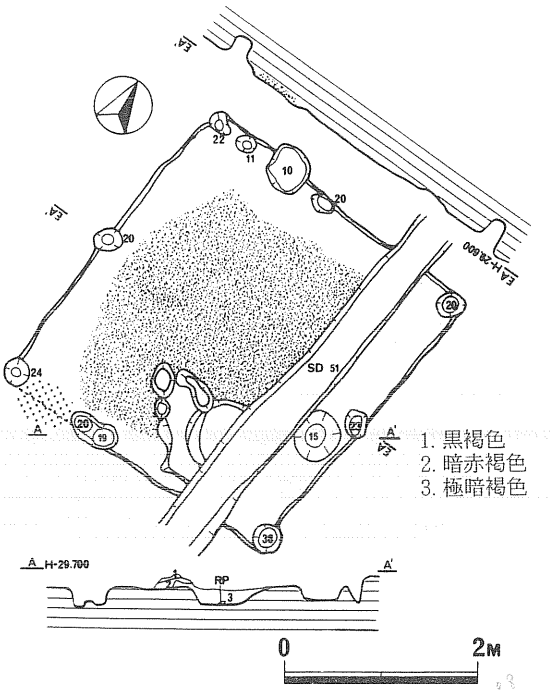
ＳＩ30出土　72～76
ＳＩ32出土　77～87
ＳＩ33出土　88～91

第23図　ＳＩ30・ＳＩ32・ＳＩ33　竪穴住居跡出土遺物

ヘラケズリを施こすものである。113はロクロ成形後、外面にヘラケズリを施こすものである。114は須恵器甕で外面に平行な叩き目を有する。生焼けで、内外面とも黄褐色である。

SI37　竪穴住居跡　（第27図）

ＮＩ55グリッドに位置し、ＳＩ43とＳＤ47と重複している。本遺構はＳＩ43より新しくＳＤ47より古い。壁長は南壁5.0ｍ、東壁4.3ｍで、面積は23㎡で、主軸方位はＮ－4°－Ｗである。確認面から床面までは浅く、壁高は10～27㎝である。床面は軟かく多少の起伏がある。壁溝は幅10～20㎝、深さ８～11㎝を計る。柱穴は床面上に多数のピットがあるが、基本的には各壁のコーナーとその中間に１本ずつ配置されるものであろう。カマドは南壁の東寄りに位置し、遺存状態が悪く袖部は検出できなかったが、南壁の内側にわずかなくぼみとその上に焼土が堆積しており、ここが焚口と思われる。



第24図　ＳＩ34　竪穴住居跡

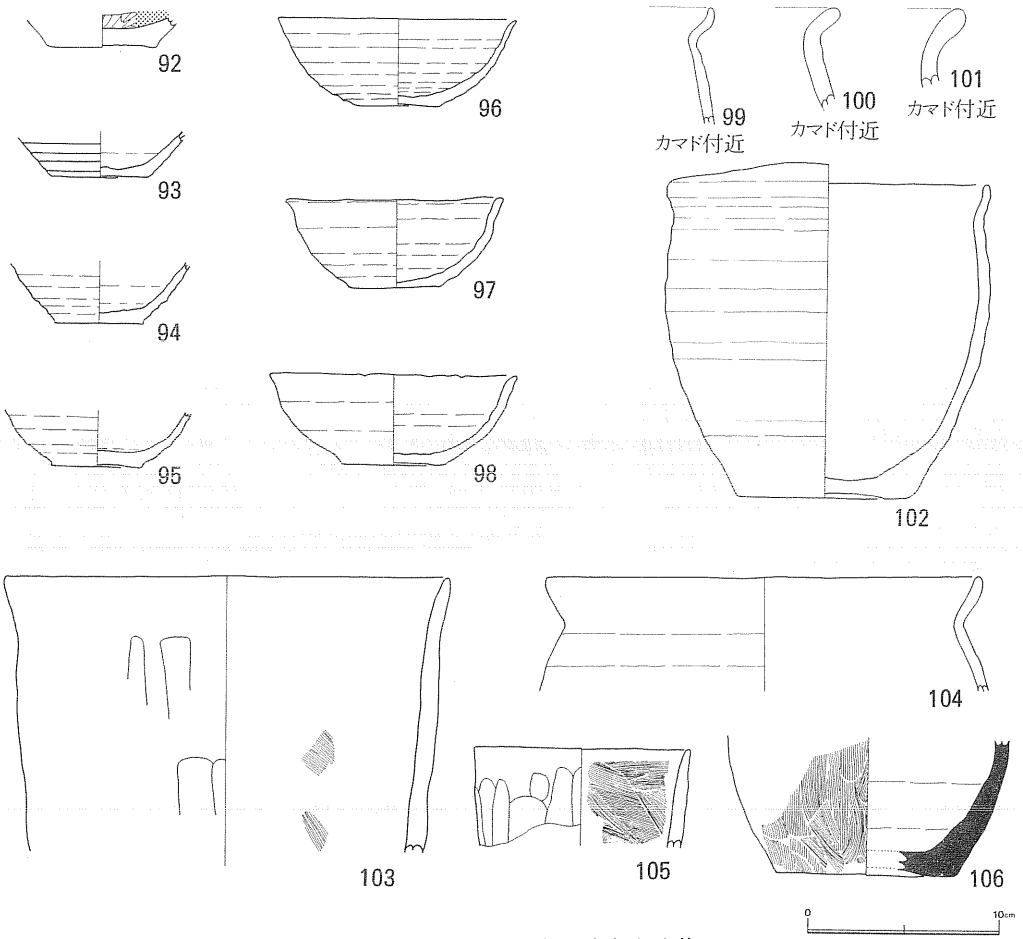
出土遺物　（第28図115～120）　土師器杯（含む、内黒）・甕、刀が出土した。

115～119は土師器杯でいずれも回転糸切りで二次調整はなく、色調は内外とも浅黄橙色か橙色を呈するものである。120は刀で、全長49.5㎝、刀身の長さ35.0㎝、茎の長さ14.5㎝、刀身の幅4.0㎝、茎の幅は1.4㎝～2.8㎝で区（まち）の部分で最大となる。厚さは刃身で1.2㎝、茎で0.8㎝の直刀で両区（りょうまち）である。身と茎の間に鎺（はばき）があり、長さ4.3㎝,幅0.8㎝である。床面から出土した。

SI38　竪穴住居跡　（第29図）

NC50グリッドに位置し、ＳＸ46と重複しており、本遺構の方が新しい。西半分だけで全容は不明であるが東壁は3.8ｍを計り、主軸方位は磁北を指す。床面は平坦で締っている。壁高は15～27㎝、壁溝の幅10㎝、深さ５～13㎝である。柱穴は各コーナーとその中間に配置されている。北壁寄りに長軸0.80ｍ、短軸0.60ｍ、深さ0.40ｍの土壙があり、焼土と多くの土器の破片が出土した。カマドは南壁の東寄りに位置し、本体は遺存しておらず、壁溝際に焼土の広がりがある事から焚口と思われる。煙道部は壁外に延びる。

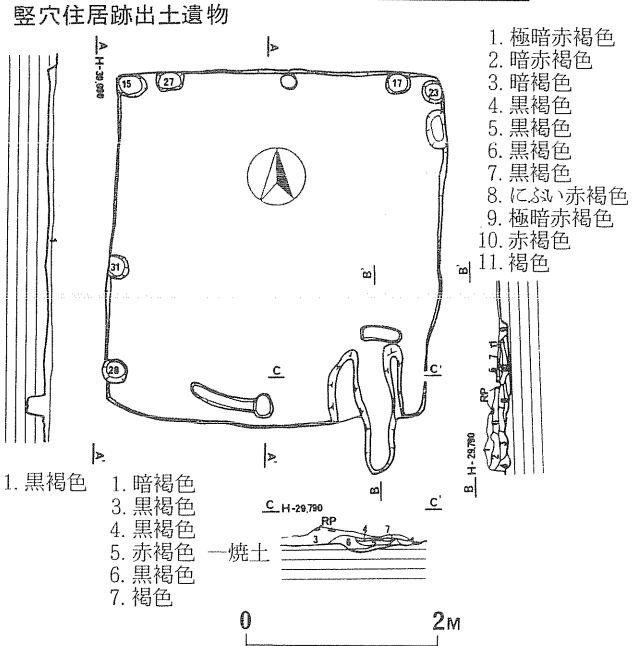
出土遺物　（第30図121～143）　土師器杯（含む、内黒）・甕（砂底）・鉢、須恵器甕、



第25図　ＳＩ34　竪穴住居跡出土遺物

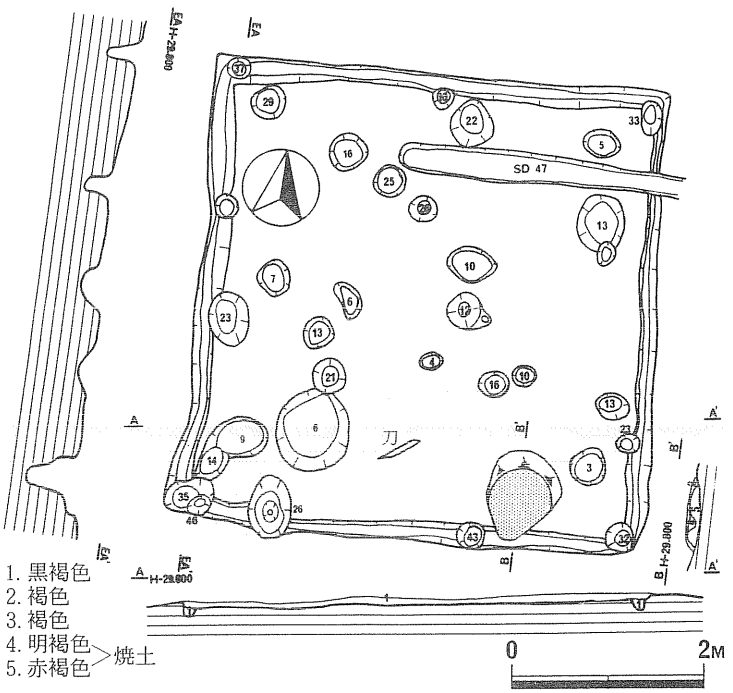
砥石、鉄製品が出土した。

121～125、127～134は土師器杯である。いずれも回転糸切りで二次調整はなく、色調は浅黄橙～橙色を呈するものである。124、125、128は底部から直線的な立上がりを示すもので、底径が小さい割りに器高がある。130は全体的にゆがみがあり、内外面に漆が付着している。135は土師器鉢で胴部が丸味をもち、中央部付近が最大径となっている。143は砥石で折損している。現存部の長さ5.9cm、幅2.2cm、重さ113gで、凝灰岩製である。



第26図　ＳＩ35　竪穴住居跡

141、142は鉄製品である。141は環状で直径3.6cm、孔径2.0cm、厚さ0.9cmである。142は円盤状の薄い板で直径5.4cm、厚さ0.1cmである。他に図示するに到らなかったが、土師器杯の口縁部で漆が面外に厚く付着しているものもある。



第27図　SI37　竪穴住居跡

SI43　竪穴住居跡

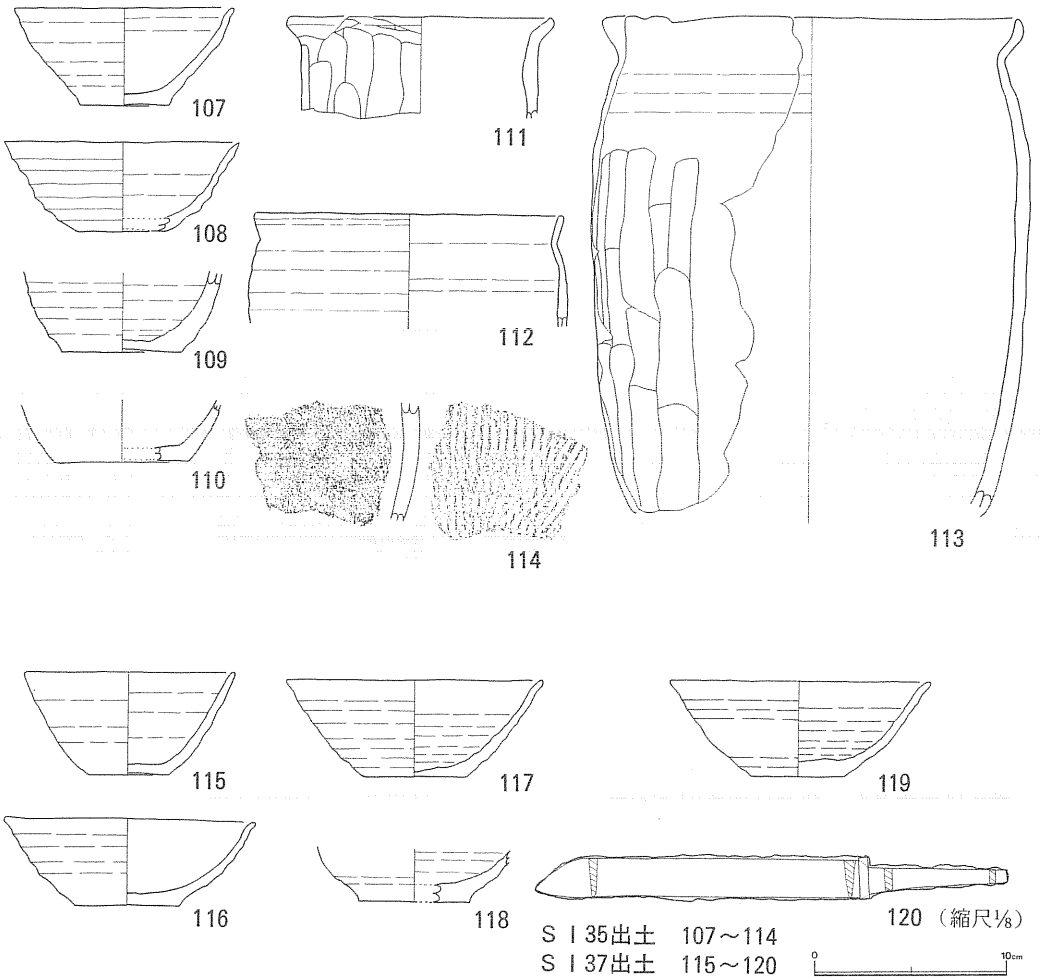
（第31図）

NJ56グリッドに位置し、SI37、SK63と重複しており、本遺構が古い。南と東の壁がSI37と重複し、北壁は半分が未検出の為、全容は不明であるが西壁は約5.0mである。推定面積は28㎡、主軸方位はN－25°－Wである。壁高は20cmで、床面は平坦で締まっている。壁溝は、幅10～20cm、深さ3～5cmで、北と西で一部途切れる。柱穴は、壁溝及び床面に20数本存在するが規則的な配列がみられず、全体の柱配置は不明である。カマドは未検出であるがSI37と重複している南壁寄りの床面上に火山灰がわずかに堆積しており、ここにカマドが構築されていた可能性がある。

出土遺物　（第32図144～161）　土師器杯・甕・鉢、須恵器杯・壺、鉄製品では刀子、釘が出土した。

144～150は土師器杯である。いずれも回転糸切りで二次調整はなく内外面とも浅黄橙色か橙色を呈するものである。144～146は底部から比較的急な立上がりをもつもので、底径の割りに器高がある。145は内面に黒斑が見られる。156はロクロ未使用の土師器甕で、外面にヘラケズリを施こす。底部は砂底である。157～159は須恵器で、いずれもロクロ成形である。157は壺、158は甕と思われる。色調は暗褐色である。158は杯で外面に火ダスキが残る。160、161は鉄製品で、160は刀子、161は釘であろう。160は長さ8.5cm、幅0.5cm、厚さ0.3cmである。161は長さ9.5cm、幅0.5cm、厚さ0.3cmである。

SI44　竪穴住居跡　（第33図）



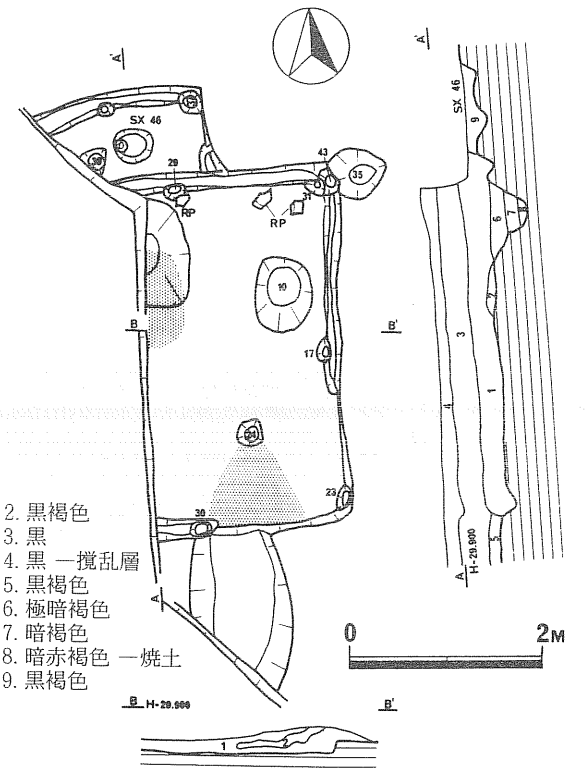
第28図　ＳＩ35・ＳＩ37　竪穴住居跡出土遺物

OB44グリッドに位置し、SD50と重複しており、本遺構の方が新しい。覆土の中ほど（第２層）に火山灰がブロック状に混入する。規模は南壁5.7ｍ、西壁6.0ｍ、面積は32㎡、主軸方位はN－7°－Wである。床面は平坦で締まっている。壁高は南壁で13㎝であるが北壁では38～50㎝である。壁溝の幅は10～20㎝、深さは６～10㎝で、周囲をめぐる。柱穴は各コーナーと床面上に９本が不規則に存在する。各コーナーにある４本が主柱穴であろう。他にカマド袖部の下に２本検出された。その規模・掘方・覆土の状況は本遺構内のものと類似するが、位置からすると必ずしも本遺構に伴なうものかどうかは明瞭ではない。カマドは南壁の東寄りに位置し、遺存状態は比較的良好である。袖部は粘質土や火山灰で構築されている。掘込みはしっかりしており、煙道部は壁外に延びて急な立上がりを示す。

出土遺物　（第35図162～179、第36図180図～190）　土師器杯・甕・壺・耳皿、須恵器

杯・甕・壺、土製支脚、刀子、釘、鉄滓が出土した。

162～169は土師器杯で、いずれも回転糸切りで二次調整はない。焼成良好で、内外面とも浅黄橙色～橙色を呈す。166、169は内黒である。169は高台付杯で回転糸切り後に高台を付したものである。170、171、173～177、183、184は土師器甕である。大形のものと小形のものに大別される。170、171、173～175、183、184はロクロを使わないもので、いずれも外面にヘラケズリ、内面はヘラケズリか刷毛目を有し胎土に砂粒を含むものが多い。174は砂底である。176、177はロクロ成形によるもので外面にヘラケズリを有し、胎土は精選され、色調は内外面とも橙色で、焼成良好である。180は須恵器杯の口縁部である。内外面とも黒褐色で胎土は精選されている。181は須恵器の長頸壺の口縁部である。胎土は精選されているが内外面とも褐色である。185～187は須恵器の胴部のみの破片であるが、185は壺、186、187は甕であろう。188は土製の支脚で、高さ13.0cmである。下面に2.5cmの逆「V」字形の切込みが入る。胎土は精選され、色調は淡橙を呈する。外面に粘土紐の巻上げ痕が残る。178は耳皿で口縁部を内側に折り曲げている。高台付で底部は回転糸切りである。189、190は鉄製品で189は刀子、190は釘かと思われる。189は現存部6.6cm、幅0.8cm、厚さ0.3cmである。190は現存部の長さ5.6cm、幅0.8cm、厚さ0.3cmである。

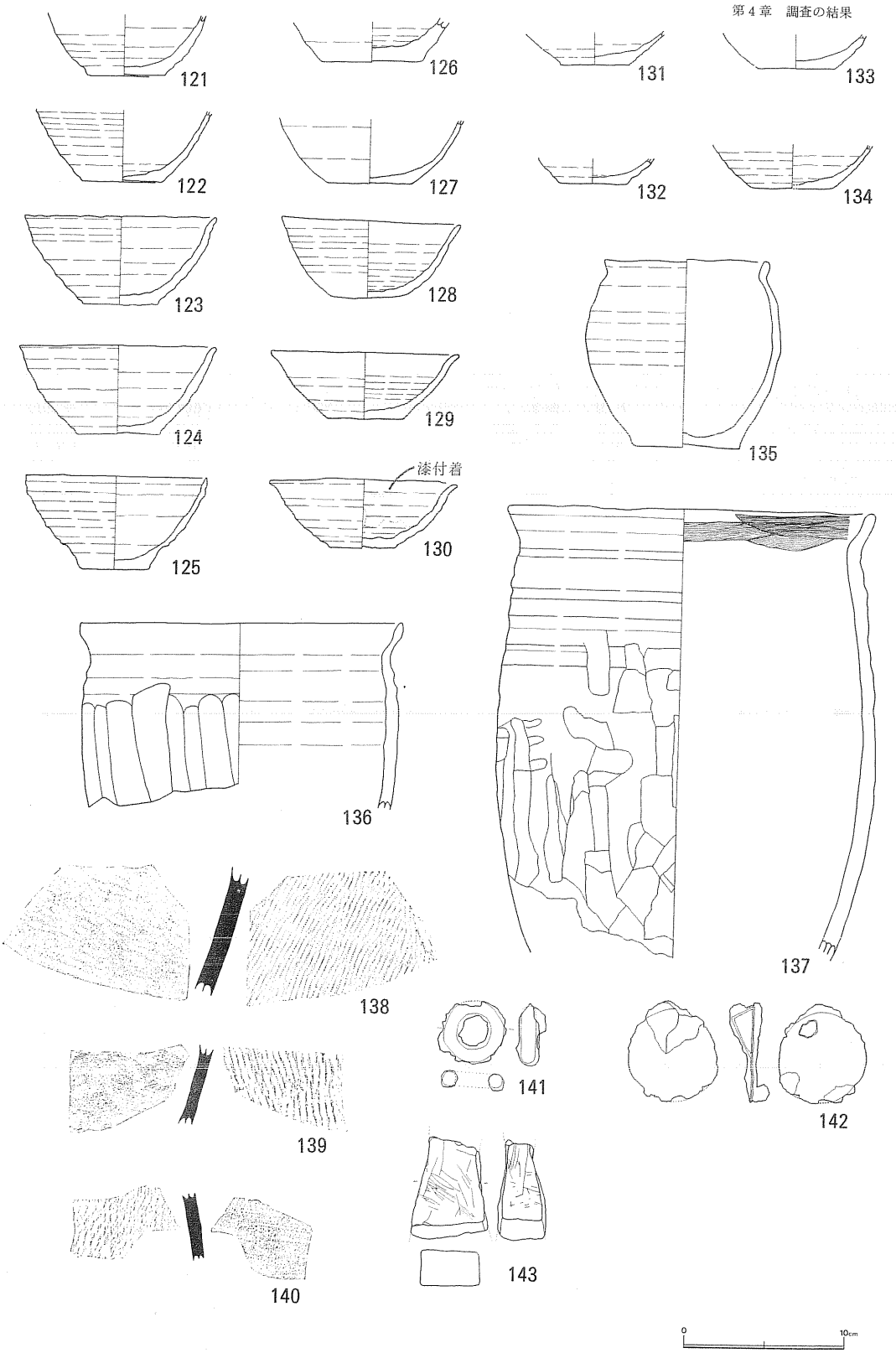


第29図　SI38　竪穴住居跡・S×46遺構

SI45　竪穴住居跡　（第34図）

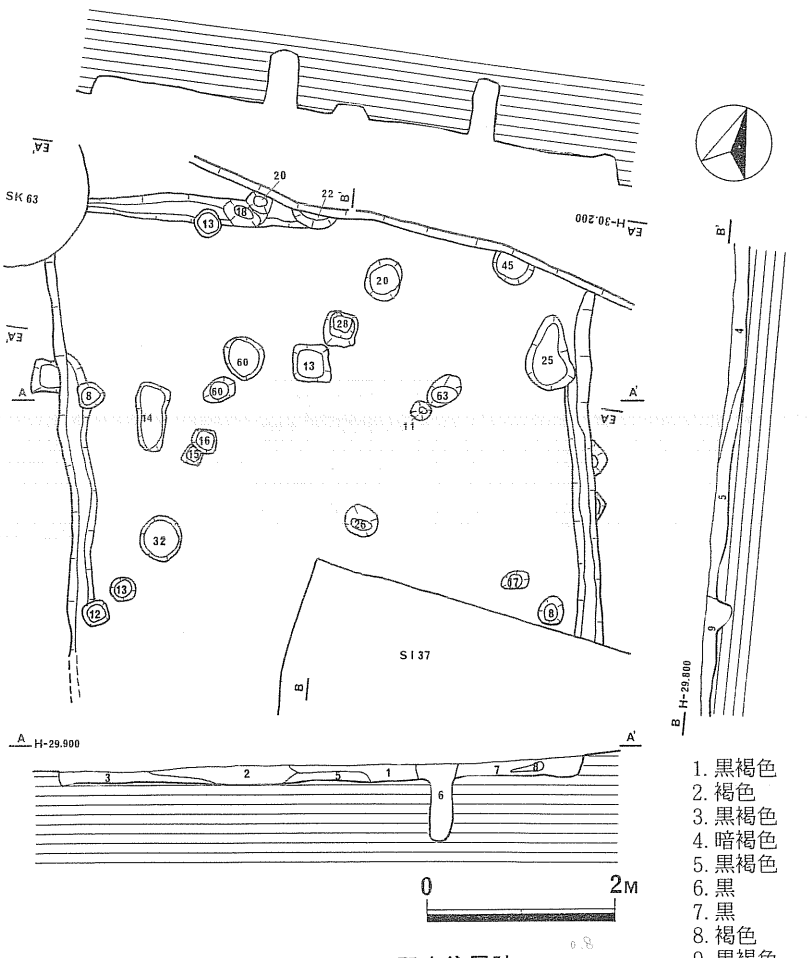
NI53グリッドに位置し、南壁3.1m、西壁3.8mで、面積は12㎡、主軸方位はN－34°－Wである。壁高は5～15cmで北壁が高く、南壁が低い。壁溝は確認されなかった。床面は固く締まっている。主柱穴はカマドのある南東コーナーを除く各コーナーに配置される。カマドは南東コーナーに位置するが主体は遺存せず、焚口と思われるわずかなくぼみの上に焼土と火山灰が薄く堆積していただけである。

出土遺物　（第36図191～194）　土師器杯・鉢が出土した。



第30図　ＳＩ38　竪穴住居跡出土遺物

191～194は土師器杯で、いずれも回転糸切りで、二次調整はなく、内外とも浅黄橙色か橙色を呈するものが多く、焼成は堅緻である。194は土師器鉢で、回転糸切りで、二次調整はない。他に細破片であるが、口縁部に漆の付着している土師器杯も出土している。



第31図　SI 43　竪穴住居跡

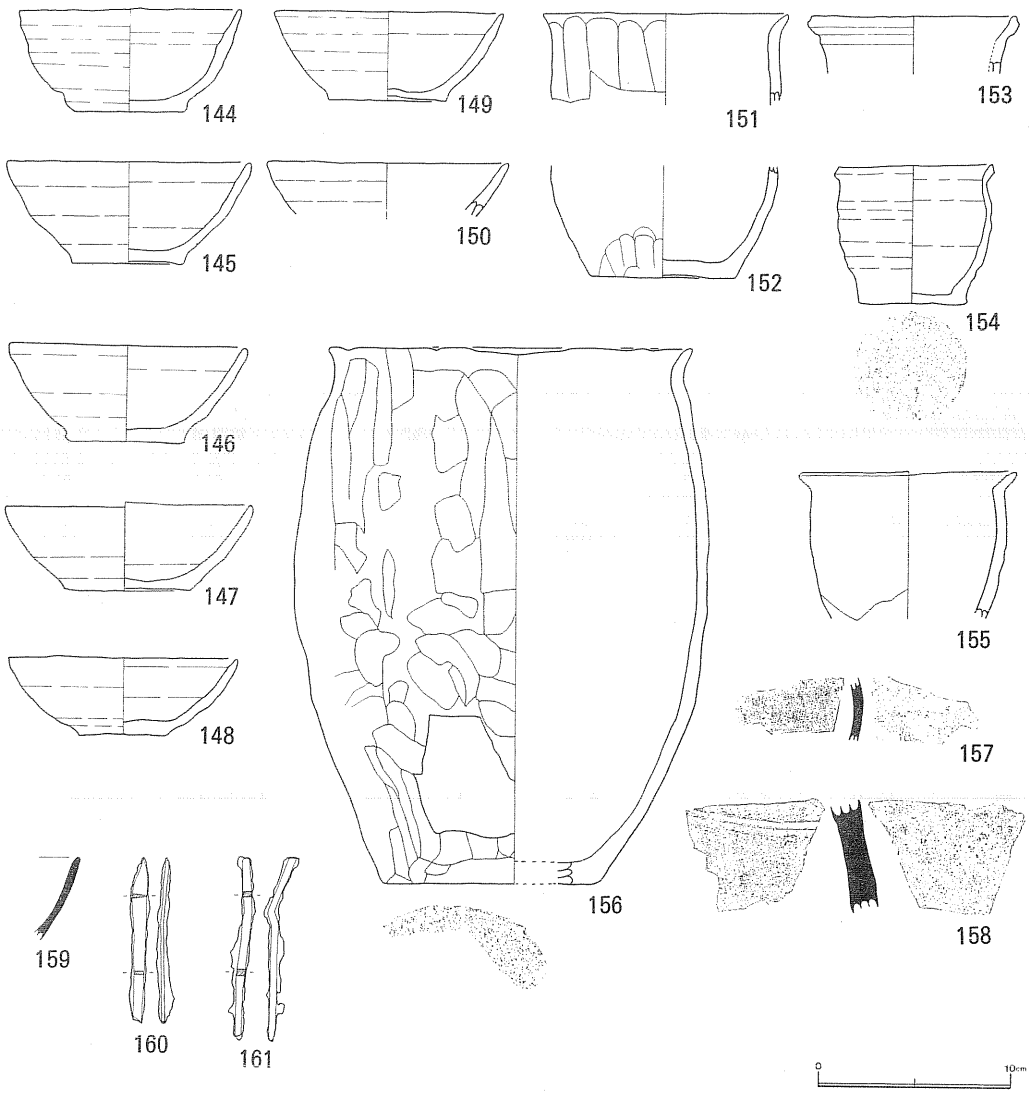
SI67　竪穴住居跡　（第37図）

NI52グリッドに位置し、南側は調査対象外となっている。北壁のみしか検出されず、平面形は判然としないが、柱穴の配置から方形になると思われる。北壁は高さ3.0cmである。壁溝はない。柱穴は各コーナーとその中間に配置されるものであろう。カマドは南壁の東寄りに位置する。全容は不明であるが、本体はなく、わずかな掘込みとその上に焼土の堆積が見られる。

出土遺物はない。

SI74　竪穴住居跡　（第38図）

OE56グリッドに位置し、SB57の柱穴が床面上に３本（P_1～P_3）あり重複しているが、新旧関係は不明である。確認面から床面までの深さは10cm前後で土層断面図を作成するには到らなかった。規模は北壁は3.8ｍ、西壁3.7ｍで南壁と東壁がそれぞれ3.3ｍ、3.1ｍと短かくなり、平面形は台形状を呈す。面積は13㎡である。床面は平坦で大変固い。壁溝はない。柱穴は東壁と西壁の中間に１本ずつあり、主柱穴と思われるが、他は不規則に配置されている。



第32図　ＳＩ43　竪穴住居跡出土遺物

カマドは検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

（２）　掘立柱建物跡

３棟検出され、調査区の東と西に分散している。確認面は第Ⅳ層上面である。

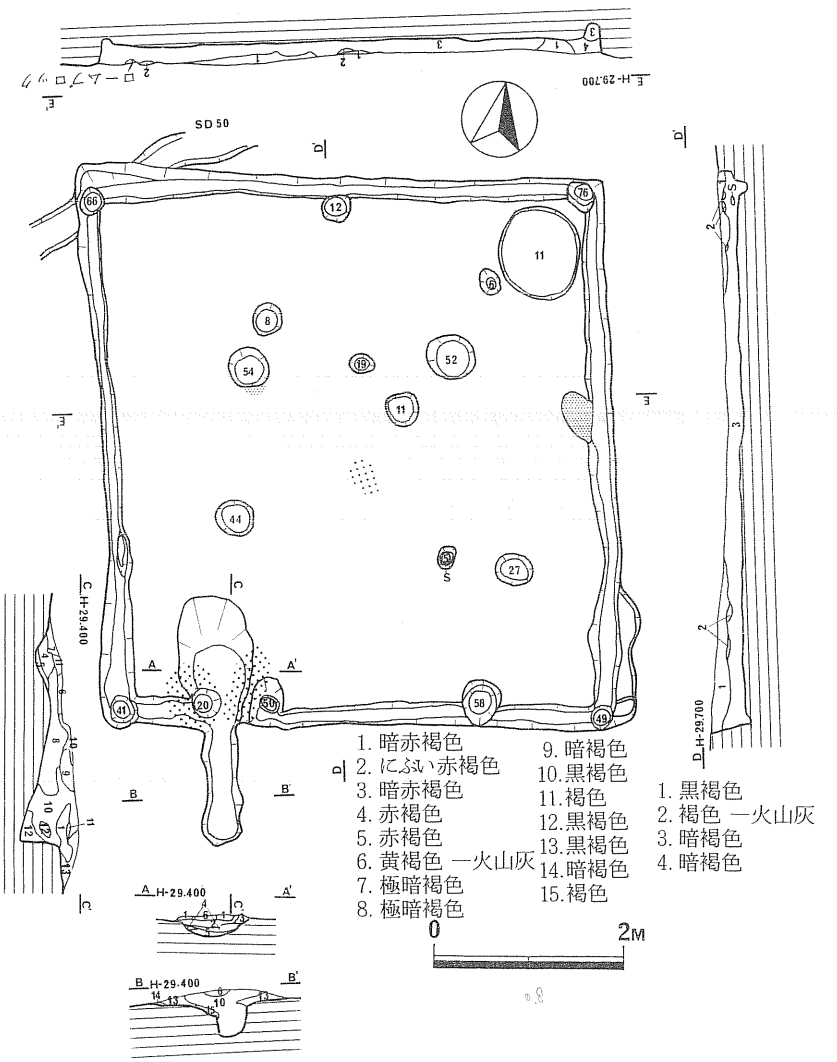
SB09　掘立柱建物跡　（第39図）

MB50グリッド付近に位置する。西側柱列中央の柱がSD17の底面で検出された。東西棟で身舎は桁行３間、梁行２間で、西廂桁行１間×梁行２間の掘立柱建物跡である。１尺平均は身舎で桁行30.5cm、梁行30.6cm、廂で桁行30.3cm、梁行30.9cmである。身舎中央の東西柱列が近

接して２本ずつ並ぶ事から、部分的な建替えと考えられる。建物方位は桁行でN―89°―Eである。

SB57　掘立柱建物跡　（第40図）

OD54・55グリッド付近に位置する。SD52とSI74と重複している。SI74の床面に本遺構の柱穴が検出されたが新旧関係は不明である。SD52の上から本遺構の西側柱の１本が掘込まれており、本遺構が新しい。南北棟で桁行３間×梁行１間の掘立柱建物跡と考えられる。１尺平均は桁行30.2cm、梁行30.0cmである。西側柱列P_5～P_8が深く、P_9～P_{11}がかなり浅い。前者は主柱穴、後者は補助柱と考えられる。したがって対応する東側柱列ではP_1、P_3、P_4が主柱穴であろう。P_{12}は間仕切りと考えられる。周囲を精査したが本遺構に伴なう柱穴は他に検出されなかった。西側柱列から西へ３m行った所は未調査区となっており、本遺構と関係した柱穴の存在も否定できない。建物方位はN－1°－Wで磁北に近い振れを示す。

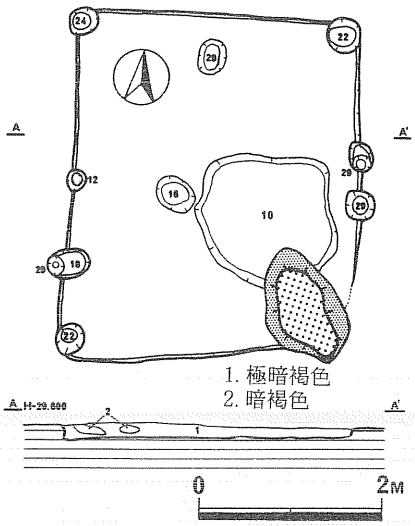


第33図　SI44　竪穴住居跡

遺物は柱穴より土師器杯・甕が出土したが、細片の為図示するには到らなかった。

SB68　掘立柱建物跡　（第41図）

NI52、53グリッド付近に位置する。他の遺構と本遺構の柱穴の重複はないが、確認面が第Ⅳ層の地山上面であることや、付近の遺物の出土状況を勘案して平安時代の遺構と判断した。南北棟桁行３間×梁行１間の掘立柱建物跡である。１尺平均は桁行、梁行とも30.0cmである。主軸方位はN－4°－Wである。



第34図　SI 45　竪穴住居跡

（３）　土壙　（第42図、第43図）

合計23基で、SK36以外はいずれも第Ⅳ層地山上面で検出されたものがほとんどである。調査区のほぼ全体に分布するが、中央部に少なく東側にやや集中する傾向が見られる。中には覆土に火山灰の混入しているものもある。記述順序は以下の通りである。①位置。②平面形。③断面形。④口径・深さ。⑤出土遺物（第44図）。⑥その他。特記事項。

SK05　土壙　①MC47グリッド　②楕円形　③浅皿形　④1.0ｍ×0.6ｍ・0.23ｍ　⑤土師器杯・甕の細片が出土した。

SK08　土壙　①MA50グリッド　②円形　③浅皿形　④1.3ｍ、0.15ｍ　⑤土師器杯（195）が出土した。

SK11　土壙　①LJ48グリッド　②円形　③浅皿形　④1.3ｍ×1.2ｍ・0.1ｍ　⑤土師器杯の細片が出土した。

SK12　土壙　①MB47グリッド　②不整楕円形　③浅皿形　④1.5ｍ×0.90ｍ・0.11ｍ　⑤出土遺物はない　⑥底面に凹凸がある。

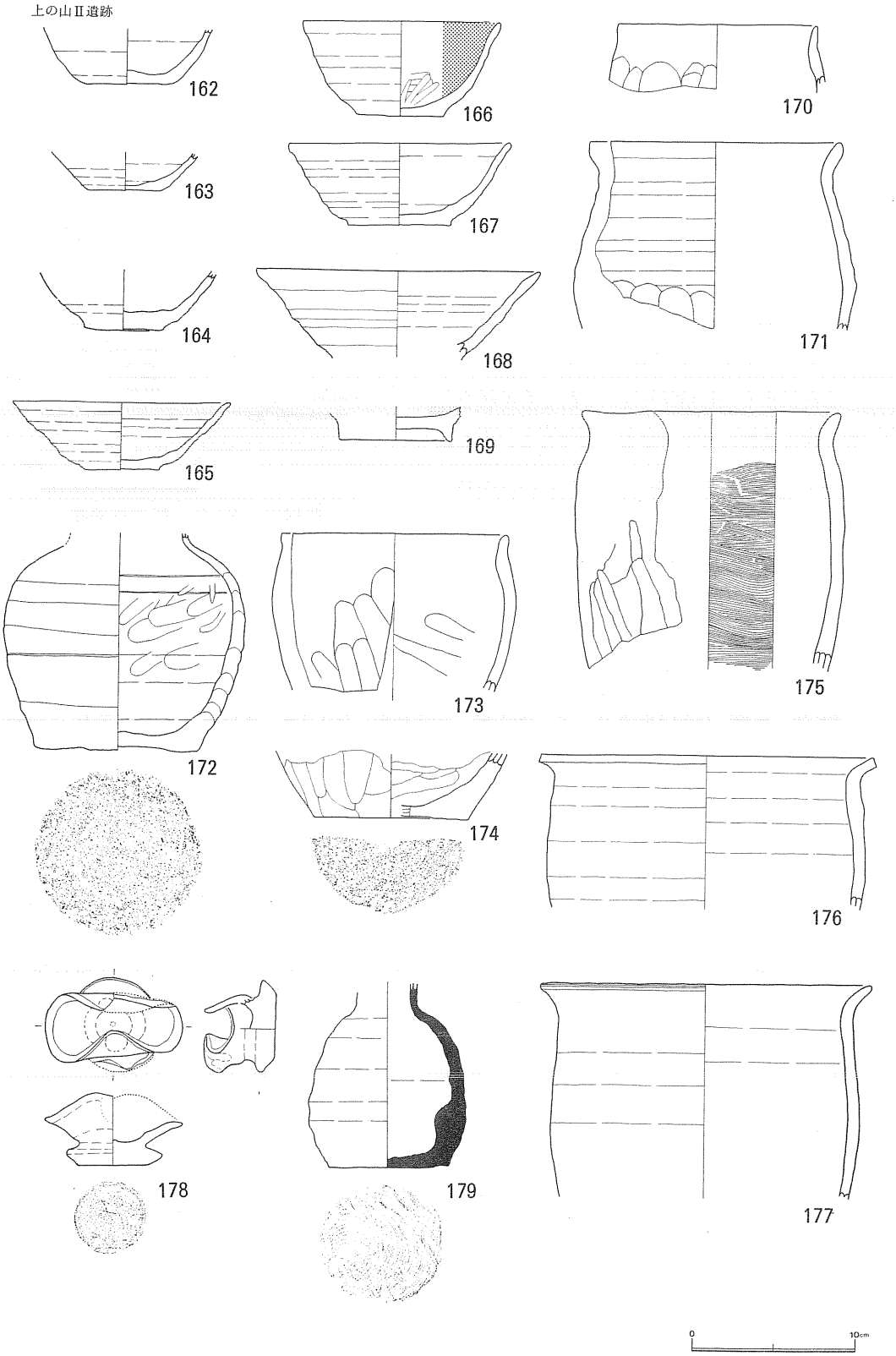
SK14　土壙　①LI50グリッド　②円形　③浅皿形　④1.2ｍ、1.0ｍ　⑤出土遺物はない　⑥上面にSN13があるが本遺構が新しい。

SK22　土壙　①LI43グリッド　②円形　③浅皿形　④0.95ｍ×0.80ｍ・0.09ｍ　⑤出土遺物はない。

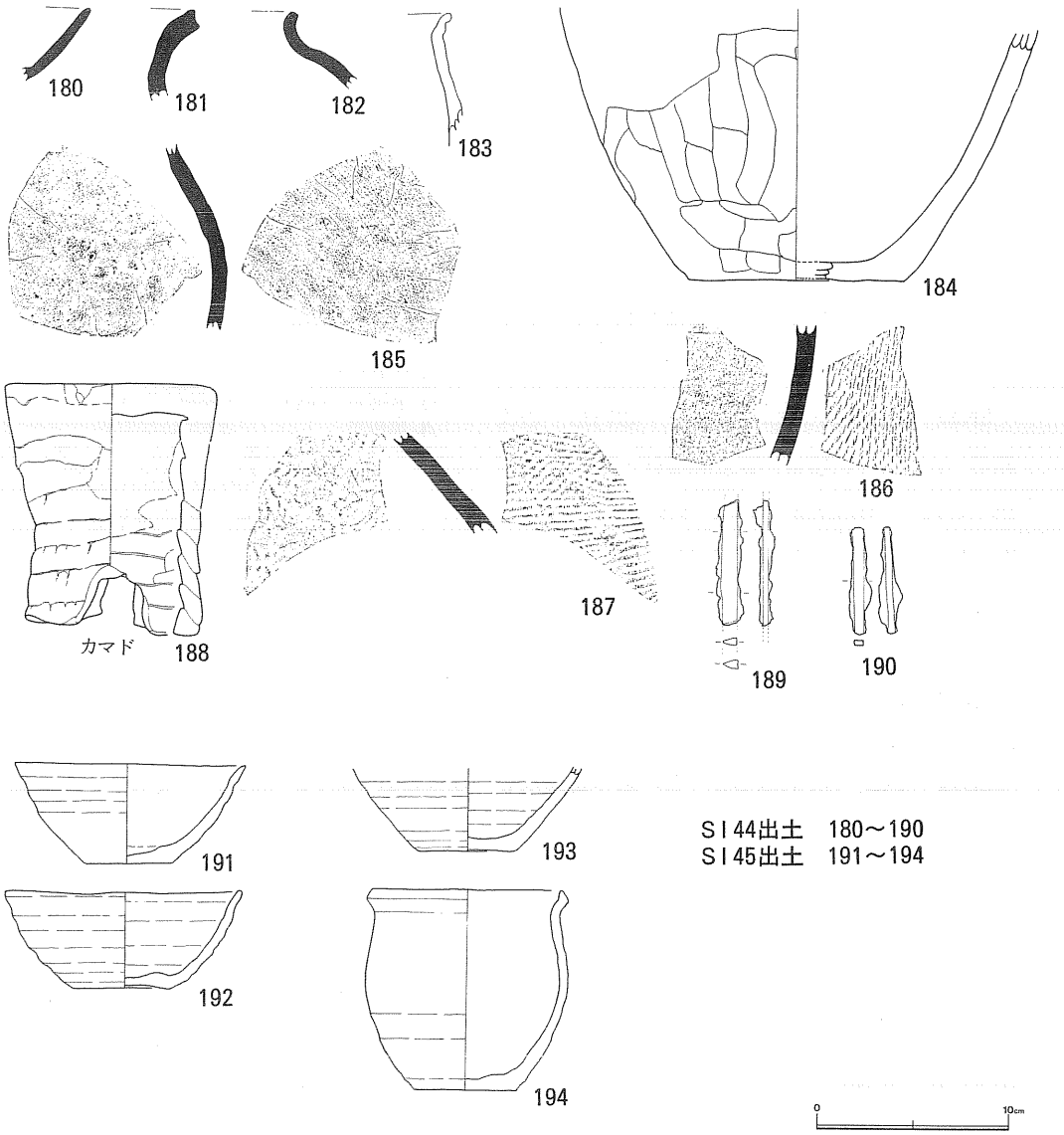
SK24　土壙　①LH44グリッド　②円形　③浅皿形　④1.1ｍ・0.12ｍ　⑤土師器杯（196）・壺（197）・甕・須恵器甕の胴部（198）が出土した。196は底面をヘラ状工具で菊花状にしている。

SK25　土壙　①ME48グリッド　②円形　③浅皿形　④1.75ｍ×1.5ｍ・0.26ｍ　⑤土師器杯（含む、内黒）・甕の細片、須恵器杯（199）・甕・鉄滓が出土した。

SK28　土壙　①MH49グリッド　②不整楕円形　③浅皿形　④1.3ｍ×0.90ｍ・0.13ｍ



第35図　ＳＩ44　竪穴住居跡出土遺物



第36図　ＳＩ44・ＳＩ45　竪穴住居跡出土遺物

⑤土師器杯・甕の細片が出土した。　⑥底面は平坦で良好である。

SK31　土壙　①NK52グリッド　②円形　③浅皿形　④1.2ｍ、0.1ｍ　⑤出土遺物はない　⑥SK60と重複しており、本遺構が古い。

SK36　土壙　①MB45グリッド　②円形　③鍋底状　④3.5ｍ・0.21ｍ　⑤出土遺物はない　⑥SI18の底面下にて検出。

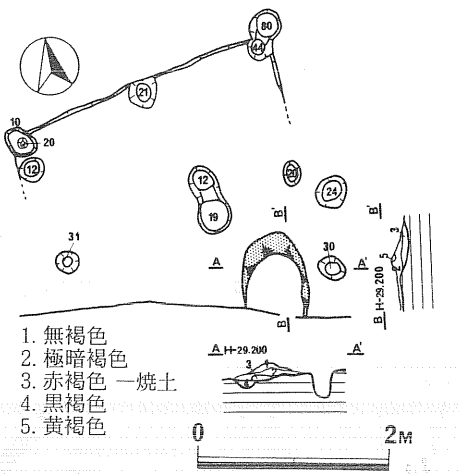
SK41　土壙　①NA49グリッド　②円形　③鍋底状　④1.1ｍ・0.26ｍ　⑤出土遺物はない

SK42　土壙　①MJ46グリッド　②円形　③鍋底状　④1.6m・0.4m　⑤土師器杯（201）・甕の細片・鉄滓が出土した。

SK54　土壙　①OE57グリッド　②円形　③浅皿形　④0.8m・0.07m　⑤出土遺物はない。

SK55　土壙　①OD56グリッド　②円形　③浅皿形　④1.1m・0.15m　⑤出土遺物はない　⑥覆土中に軽石が混入

SK56　土壙　①OD56グリッド　②円形　③浅皿形　④1.2m・0.15m　⑤土師器杯・甕の破片が出土した。　⑥SD52と重複、本遺構が古い。SI74と接しているが新旧関係は不明。



第37図　SI 67　竪穴住居跡

SK58　土壙　①OE57グリッド　②不整長方形　③浅皿形　④長さ不明、幅1.2m・0.2m　⑤土師器杯・甕の細片出土　⑥西端は調査区外。SD53と重複。本遺構が古い。

SK59　土壙　①OC56グリッド　②円形　③鍋底状　④1.0m・0.1m　⑤土師器杯（202）甕、須恵器甕が出土した。

SK60　土壙　①NH52グリッド　②不整楕円形　③浅皿形　④1.5m×1.3m・0.12m　⑤出土遺物はない。

SK63　土壙　①OA56グリッド　②円形　③浅皿形　④1.7m・0.25m　⑤土師器杯（203）が出土した。　⑥SI43と重複。本遺構が新しい。

SK64　土壙　①NA48グリッド　②不整楕円形　③浅皿形　④1.3m×1.0m・0.2m　⑤土師器杯（204）・甕の細片が出土した。　⑥底面には焼土があり凹凸している。周囲には火山灰の薄い堆積がある。

SK66　土壙　①NA53グリッド　②長方形　③浅皿形　④長さ2.0m、1.1m・0.1m、⑤土師器杯12点・（205～216）・甕（217～219）がまとまって出土した。杯はいずれも回転糸切りで二次調整はなく、浅黄橙色～橙色を呈するものが多い。　⑥出土した土器は廃棄された状況で「土器留」と考えられる。周囲を溝と浅いピットがめぐる。

SK73　土壙　①OC56グリッド　②不整方形　③鍋底状　④長さ0.80m、幅0.65m・0.28m

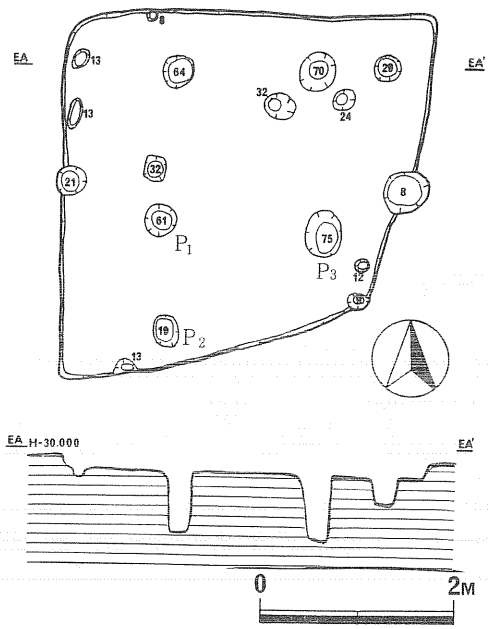
（4）　溝

溝は10条検出され、第Ⅲ層下か第Ⅳ層地山上面で確認された。竪穴住居跡と重複しているものが多く、ほとんどはそれよりも新しい。記述順序は以下の通りである。①長さ　②傾斜方向

③断面形　④上面幅・底面幅・深さ　⑤その他特記事項

SD07　溝　（第１図、第５図）　①38ｍ　②NW→ＳＥ　③鍋底状　④0.60～1.10ｍ・0.40～0.50ｍ・0.15～0.25ｍ　⑤両端とも調査区外に伸びる。ＳＩ10、ＳＢ09、ＳＤ17、ＳＤ69と重複する。ＳＩ10、ＳＢ09よりも新しくＳＤ17よりも古い。ＳＤ69との新旧関係は不明。

SD17　溝　（第１図、第９図）　①途中で途切れている所も含めて約30ｍ　②Ｎ→Ｓ　③鍋底状　④0.20～0.30ｍ・0.10～0.20ｍ・0.05～0.08ｍ　⑤SI16、SD07と重複。いずれよりも新しい。土師器杯・甕の細片出土。



第38図　ＳＩ74　竪穴住居跡

SD23　溝　（第１図、第５図）　①４ｍ　②W→E　③鍋底状　④0.15～0.30ｍ、0.10～0.20ｍ、0.12ｍ　⑤SI10の上に掘られている。SI10の覆土中の火山灰を掘込んでいる。

SD47　溝　（第１図、第27図）　①９ｍ　②E→W　③鍋底状　④0.20～0.30ｍ・0.20～0.25ｍ・0.10ｍ　⑤SI37と重複し、それより新しい。

SD50　溝　（第１図、第33図）　①12ｍ　②NE→SW　③鍋底状　④0.20～0.40ｍ・0.10～0.20ｍ・0.10～0.13ｍ　⑤SI44と重複し、それよりも古い。

SD51　溝　（第１図、第24図）　①7.3ｍ　②N→S　③鍋底状　④0.40～0.50ｍ・0.30ｍ・0.07～0.10ｍ　⑤SI34重複し、それよりも新しい。

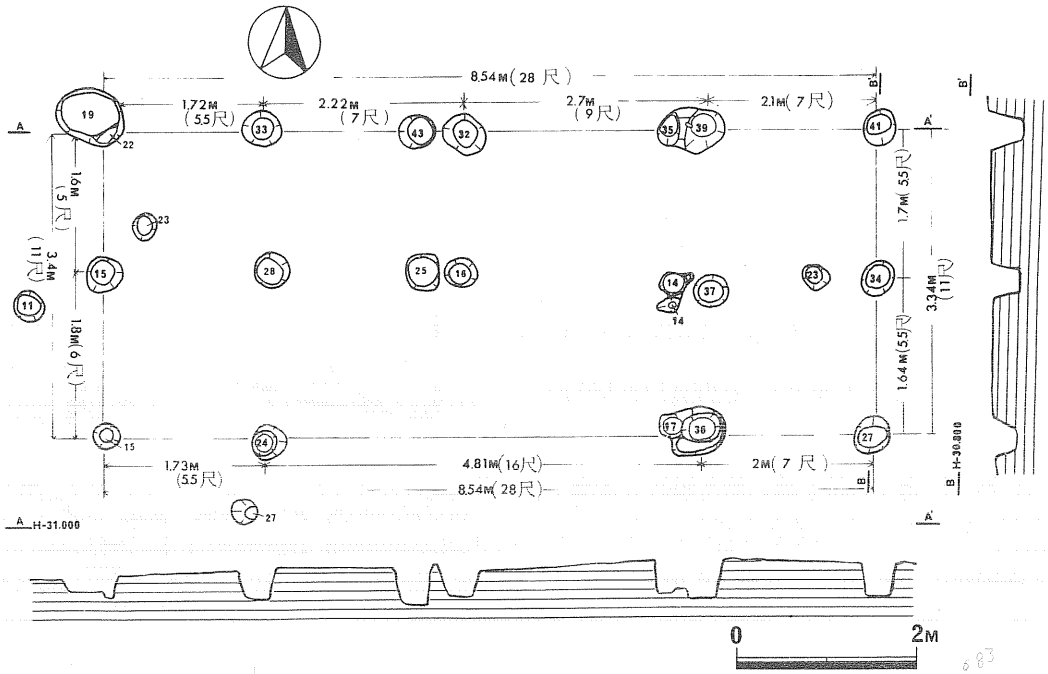
SD52　溝　（第１図）　①8.3ｍ　②NE→SW　③鍋底状　④0.15～0.20ｍ・0.10～0.15ｍ・0.20ｍ　⑤SK56と重複し、それよりも新しい。土師器杯、須恵器甕の細片出土。

SD53　溝　（第１図）　①8.0ｍ　②NE→SW　③鍋底状　④0.30～0.50ｍ・0.20～0.40ｍ・0.18ｍ　⑤SK58と重複し、それよりも新しい。

SD69　溝　（第１図）　①約14.0ｍ　②W→E　③鍋底状　④0.30～0.50ｍ・0.20～0.30ｍ・0.12ｍ　⑤SD07と重複しているが新旧関係は不明。

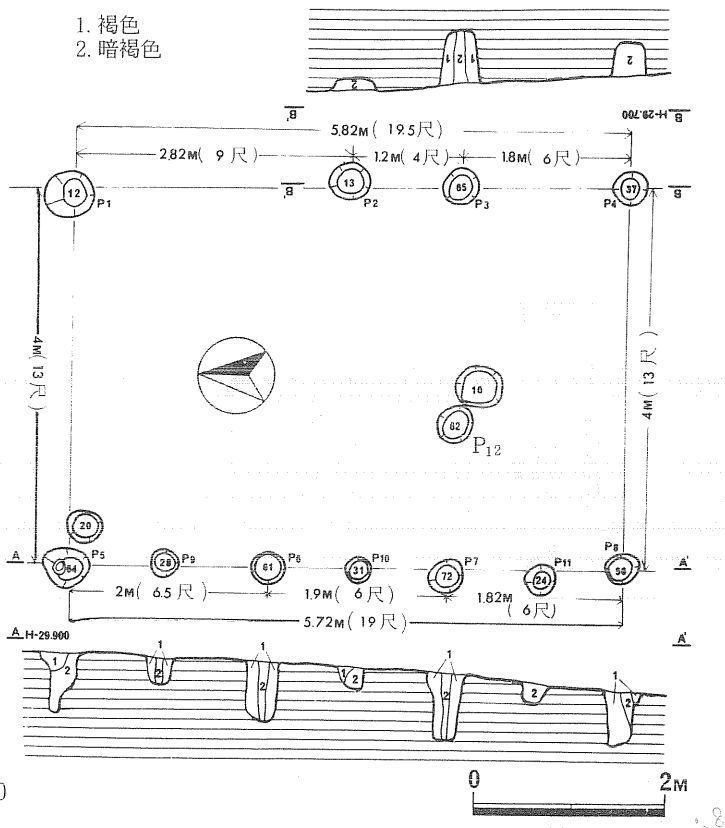
SD70　溝　（第１図）　①13.0ｍ　②N→S　③鍋底状　④0.20～0.30ｍ・0.10～0.20ｍ・0.30ｍ

（５）　焼土遺構　（第45図）



第39図　SB09　掘立柱建物跡

15基検出され、その確認は第Ⅱ層下～第Ⅲ層上面でなされた。東側と西側に多くあり、中央部は１基だけである。覆土中に火山灰が混入しているものもある。記述順序は以下の通りである。①位置　②平面形　③規模・深さ　④出土遺物　⑤その他・特記事項



第40図　SB57　掘立柱建物跡

SN01　焼土遺構　①LJ49グリッド　②不整楕円形　③1.12ｍ×0.65ｍ・0.15ｍ　⑤覆土上面に火山灰が小ブロック状に混入。SI10の上にあり、本遺構が新しい。

SN02　焼土遺構　①LJ46グリッド　②不整形　③0.70ｍ×0.55ｍ・0.10～0.15ｍ　⑤覆土上面に火山灰が小ブロック状に混入。

SN03　焼土遺構　①LH47グリッド　②不整楕円形　③1.8ｍ×0.40ｍ・0.10～0.15ｍ

SN04　焼土遺構　①LI43グリッド　②不整形　③0.65ｍ×0.35ｍ・0.10ｍ　⑤覆土中に火山灰混入。

SN13　焼土遺構　①LI50グリッド　②不整形　③1.50ｍ×1.00ｍ・焼土がマウンド状になっている。　⑤SK14の上にあり新しい。

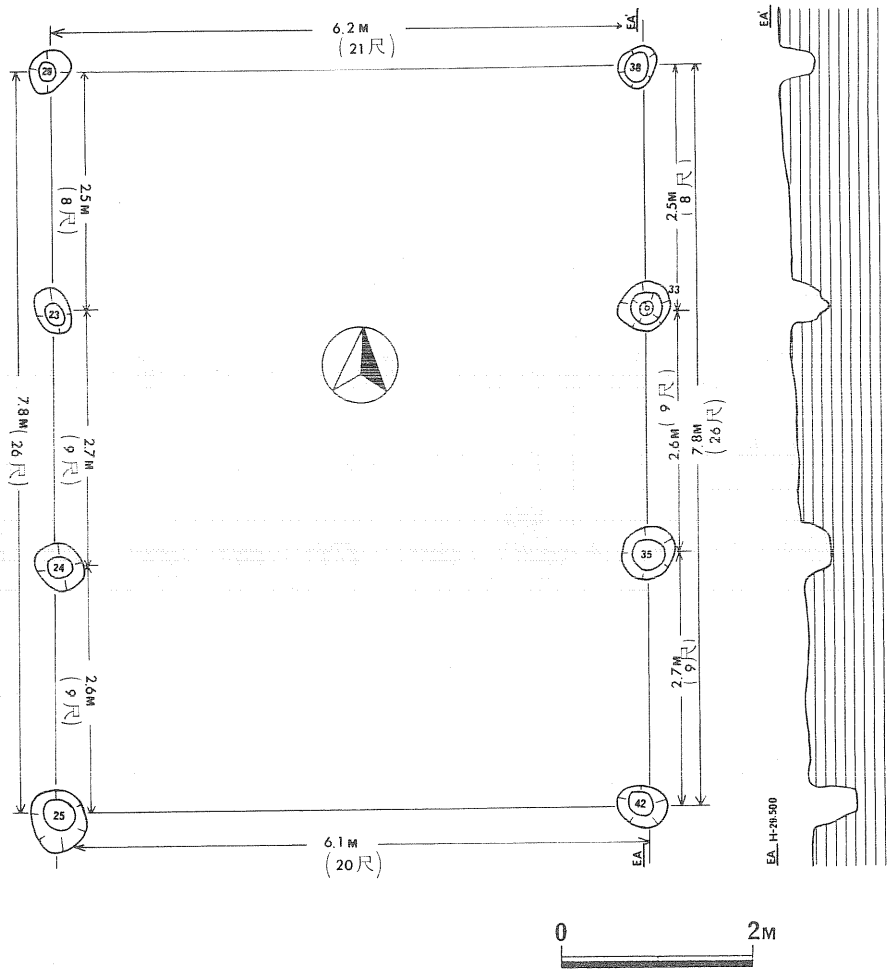
SN20　焼土遺構　①LI44グリッド　②不整形　③1.30ｍ×0.45ｍ・0.10～0.20ｍ

SN21　焼土遺構　①LI44グリッド　②不整形　③2.10ｍ×0.80ｍ・0.05～0.10ｍ

SN26　焼土遺構　①ME47グリッド　②不整楕円形　③1.15ｍ×1.05ｍ・0.15ｍ　④土師器杯（220）・甕が出土した。　⑤覆土第Ⅱ層中に火山灰混入。

SN40　焼土遺構　①NA49グリッド　②楕円形　③1.40ｍ×0.90ｍ　④土師器杯（221～224）・甕（225）が出土した。　⑤本遺構の底面は平坦でかなり固い。

SN48　焼土遺構　①NJ53グリッド　②楕円形　③1.7ｍ×0.90ｍ　④土師器杯・甕（226～229）が出土した。いずれもロクロ成形である。　⑤第Ⅰ層中に火山灰や軽石混入。



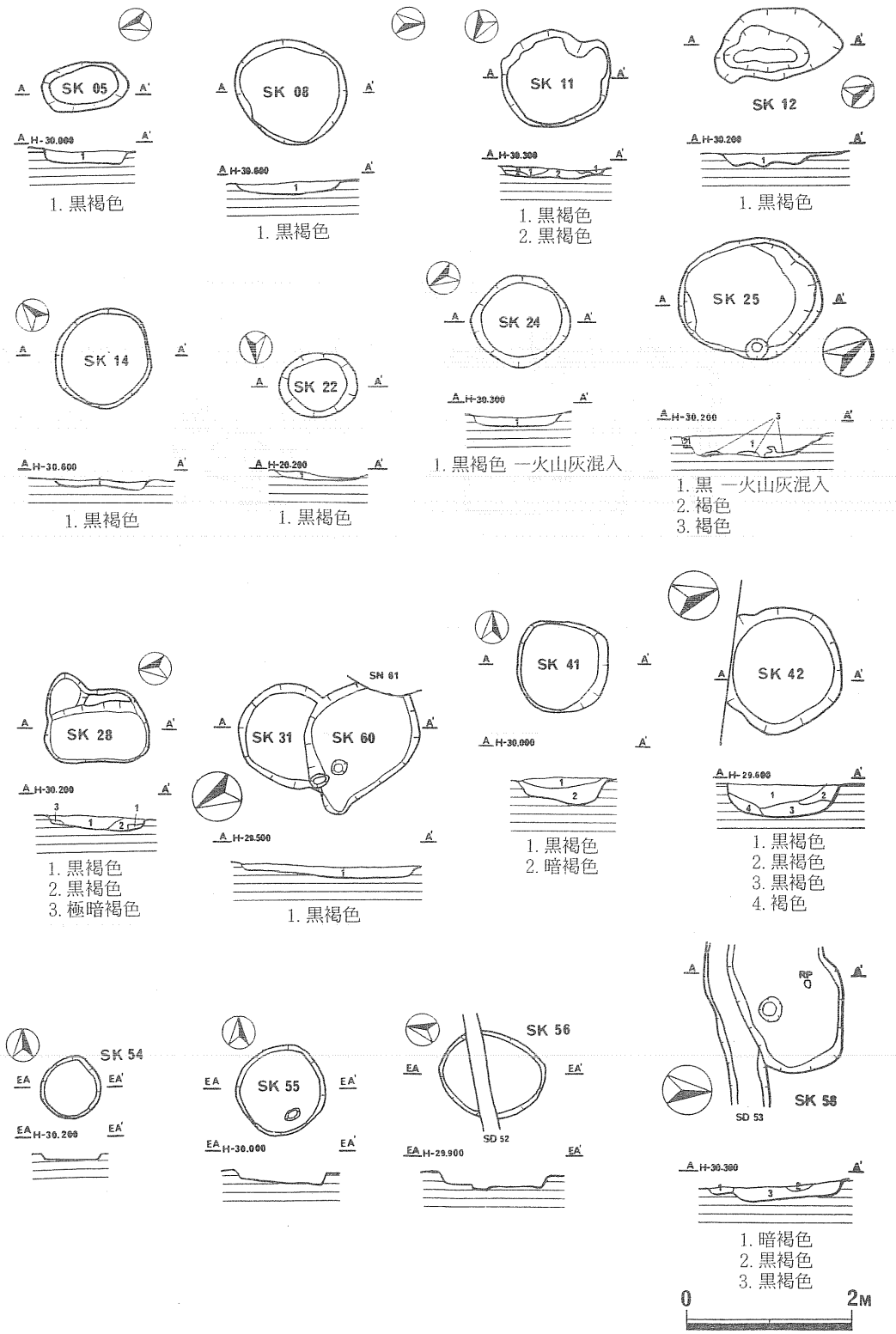
第41図　ＳＢ68　掘立柱建物跡

SN49　焼土遺構　①OC54グリッド　②円形　③0.8ｍ・0.05ｍ　④土師器杯（230、231）・甕（232～235）が出土した。甕は232以外ロクロ成形による。　⑤周囲に土器片が散乱していた。焼土中に火山灰混入。

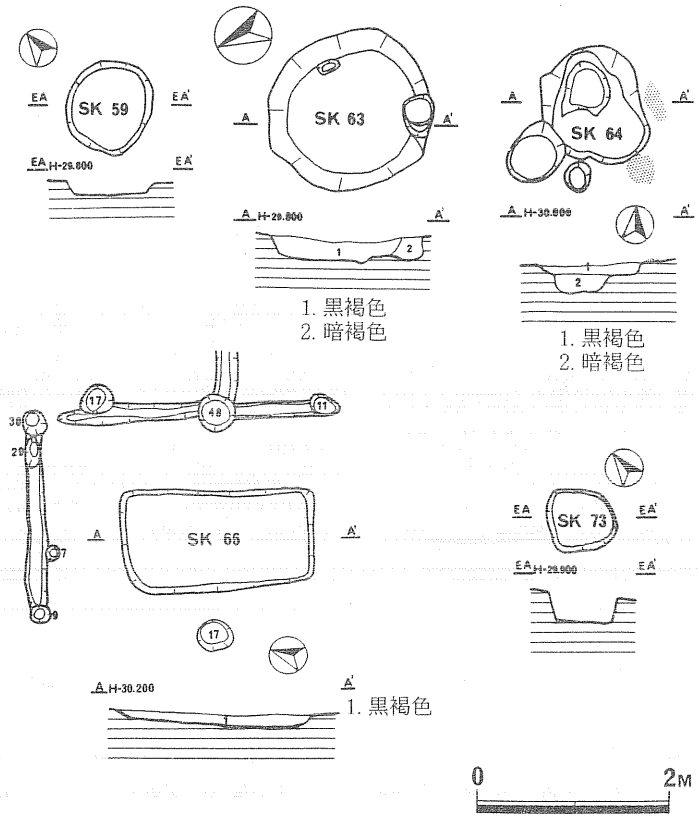
SN61　焼土遺構　①NG51グリッド　②不整形　③3.30ｍ×1.70ｍ・0.30～0.35ｍ　④土師器杯（236～239）・甕、須恵器甕（241）・壺（240）が出土した。　⑤覆土に火山灰混入。底面に凹凸がある。

SN62　焼土遺構　①NF51グリッド　②不整楕円形　③1.80ｍ×1.40ｍ・0.05～0.07ｍ

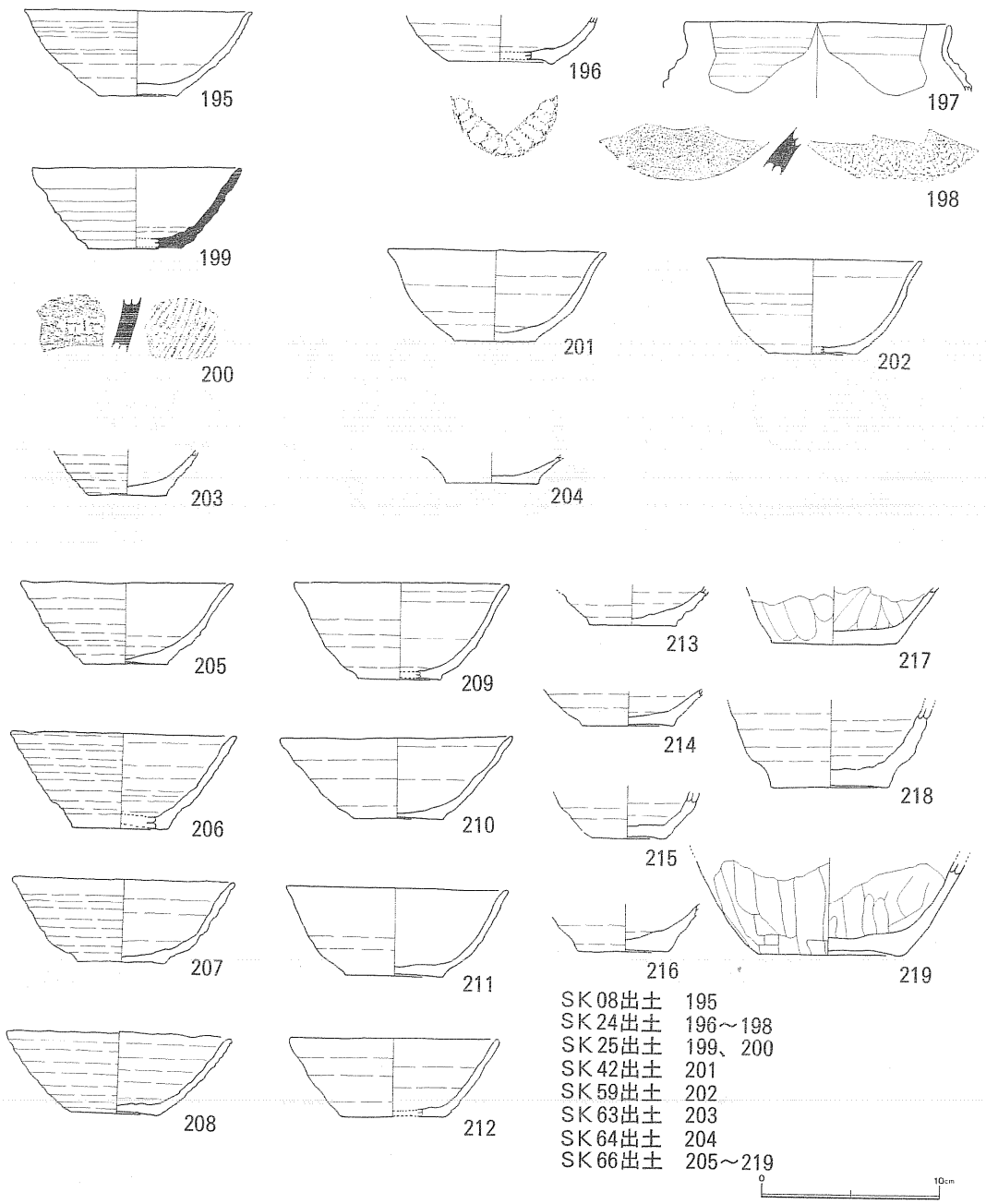
SN71　焼土遺構　①NI52グリッド　②楕円形　③1.10ｍ×0.80ｍ・0.20ｍ　④土師器杯（242）・甕の口縁部（243、244）、フイゴ羽口（250）、鉄滓が出土した。250は単体で長さ17.0㎝、本体の幅7.5㎝、孔径2.2㎝である。一端は高温の為、溶融状態を呈する。　⑤SI67と


SK 05
1. 黒褐色
SK 08
1. 黒褐色
SK 11
1. 黒褐色
2. 黒褐色
SK 12
1. 黒褐色
SK 14
1. 黒褐色
SK 22
1. 黒褐色
SK 24
1. 黒褐色 一火山灰混入
SK 25
1. 黒 一火山灰混入
2. 褐色
3. 褐色
SK 28
1. 黒褐色
2. 黒褐色
3. 極暗褐色
SK 31
SK 60
SN 61
1. 黒褐色
SK 41
1. 黒褐色
2. 暗褐色
SK 42
1. 黒褐色
2. 黒褐色
3. 黒褐色
4. 褐色
SK 54
SK 55
SK 56
SD 52
SK 58
SD 53
1. 暗褐色
2. 黒褐色
3. 黒褐色
0
2M

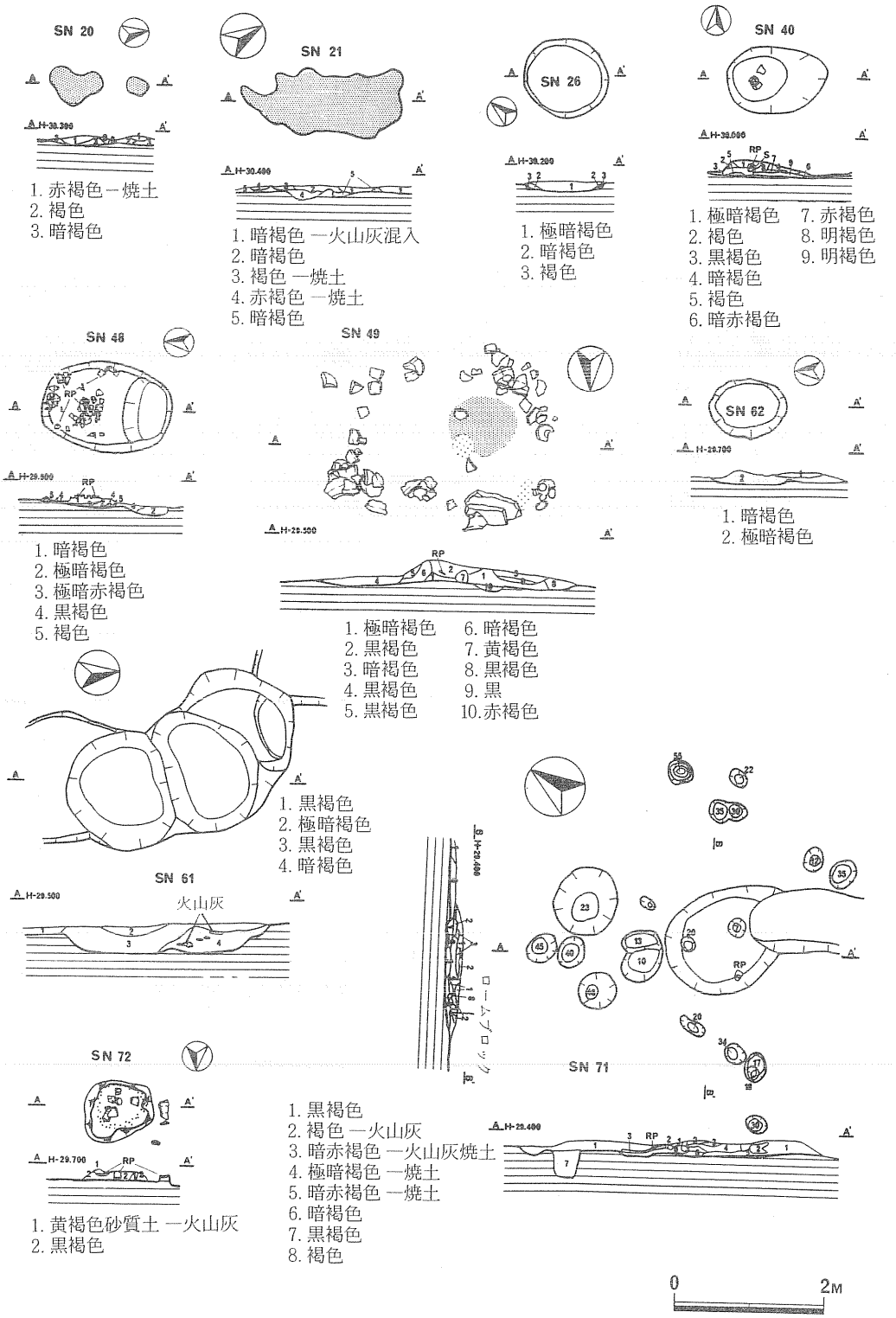
第42図　SK　土　　壙


SK 59
EA
EA'
EA H-29.800
SK 63
A
A'
A H-29.800
1
2
1. 黒褐色
2. 暗褐色
SK 64
A H-30.800
1. 黒褐色
2. 暗褐色
SK 65
A H-30.200
1. 黒褐色
SK 73
EA H-29.900
0
2M

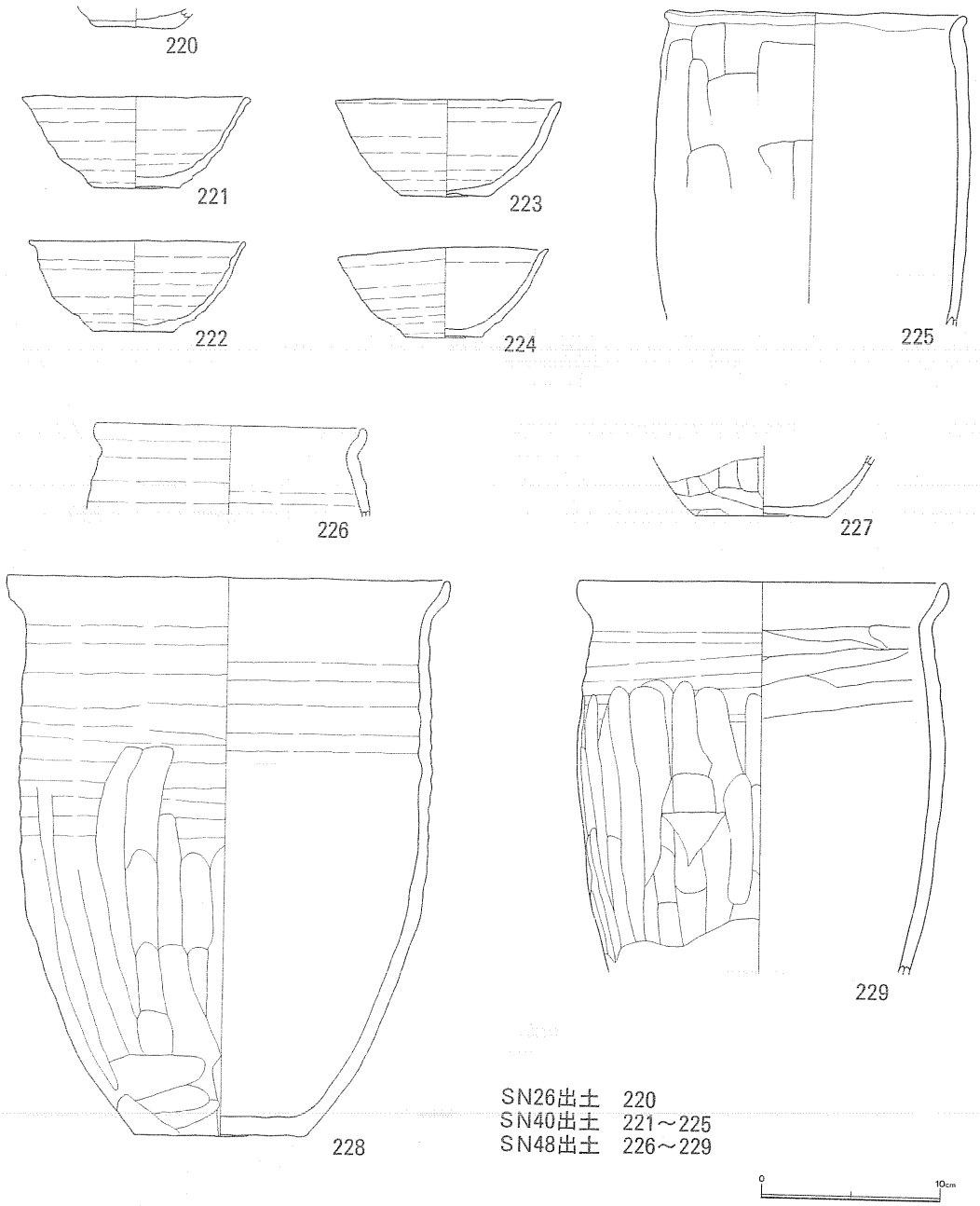
第43図　SK　土　　壙



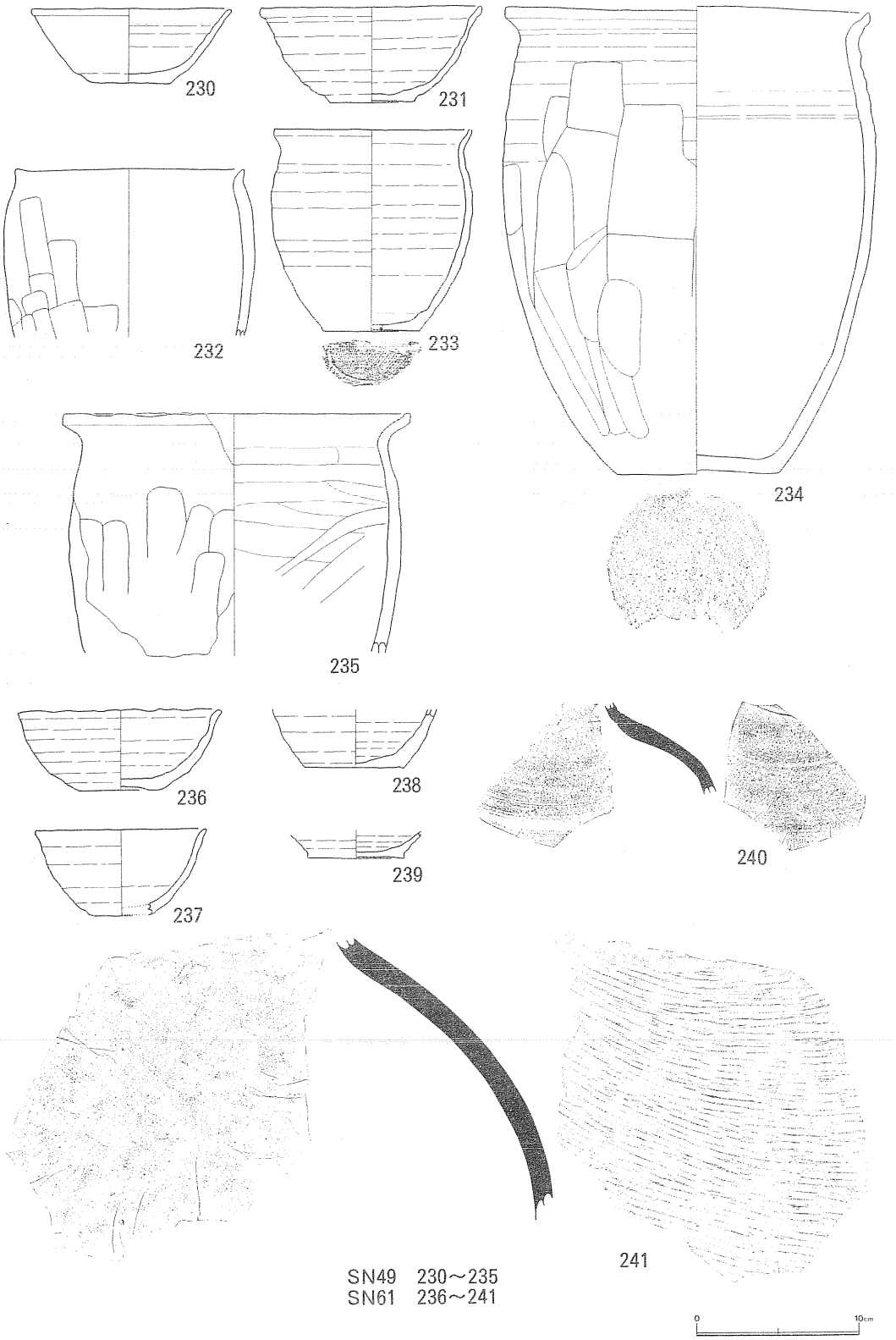
第44図　SK土壙出土遺物


SN 20
1. 赤褐色ー焼土
2. 褐色
3. 暗褐色
SN 21
1. 暗褐色 ー火山灰混入
2. 暗褐色
3. 褐色 ー焼土
4. 赤褐色 ー焼土
5. 暗褐色
SN 26
1. 極暗褐色
2. 暗褐色
3. 褐色
SN 40
1. 極暗褐色
2. 褐色
3. 黒褐色
4. 暗褐色
5. 褐色
6. 暗赤褐色
7. 赤褐色
8. 明褐色
9. 明褐色
SN 46
1. 暗褐色
2. 極暗褐色
3. 極暗赤褐色
4. 黒褐色
5. 褐色
SN 49
1. 極暗褐色
2. 黒褐色
3. 暗褐色
4. 黒褐色
5. 黒褐色
6. 暗褐色
7. 黄褐色
8. 黒褐色
9. 黒
10. 赤褐色
SN 62
1. 暗褐色
2. 極暗褐色
SN 61
1. 黒褐色
2. 極暗褐色
3. 黒褐色
4. 暗褐色
火山灰
SN 72
1. 黄褐色砂質土 ー火山灰
2. 黒褐色
SN 71
ローム・ブロック
1. 黒褐色
2. 褐色 ー火山灰
3. 暗赤褐色 ー火山灰焼土
4. 極暗褐色 ー焼土
5. 暗赤褐色 ー焼土
6. 暗褐色
7. 黒褐色
8. 褐色
0
2M

第45図　SN　焼土遺構

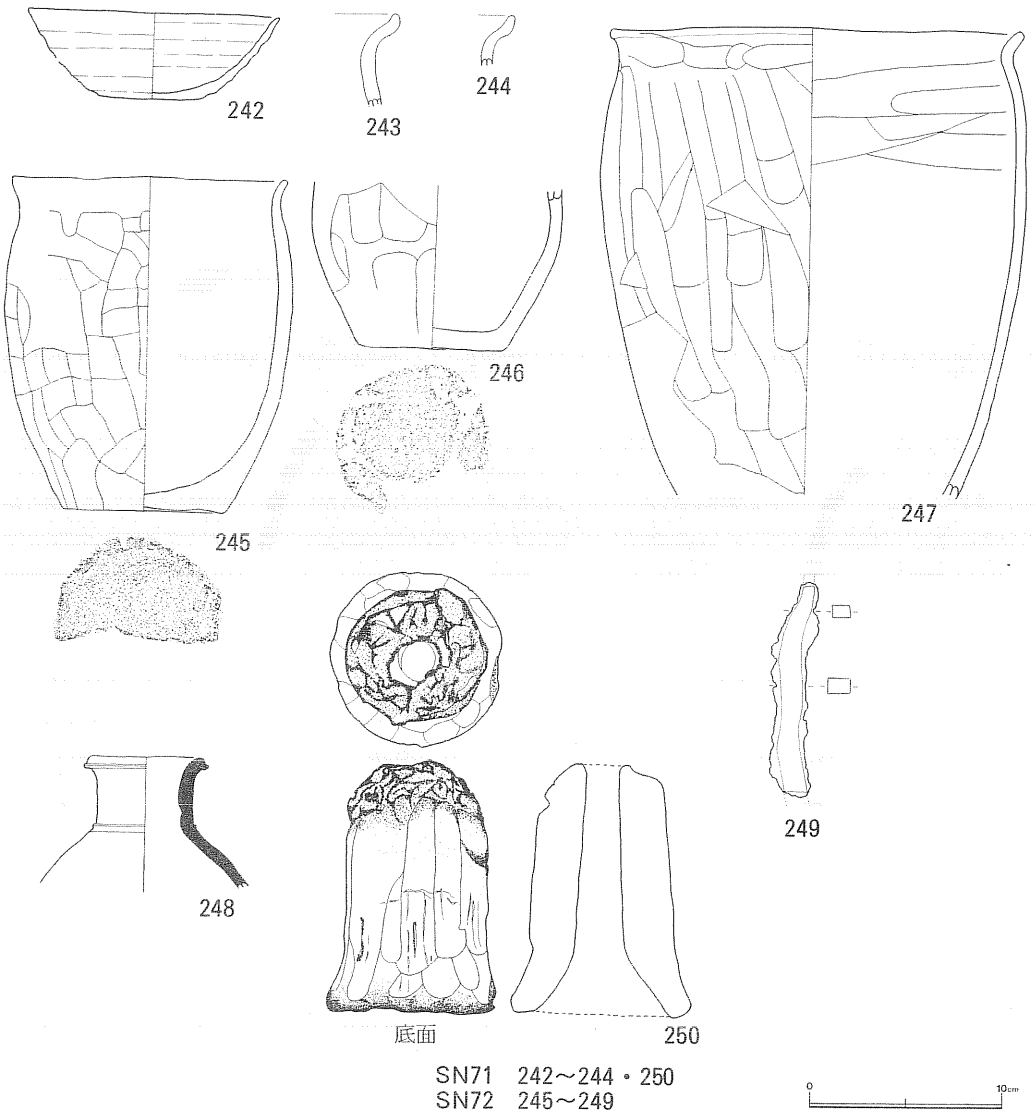


第46図　SN焼土遺構出土遺物



SN49　230～235
SN61　236～241

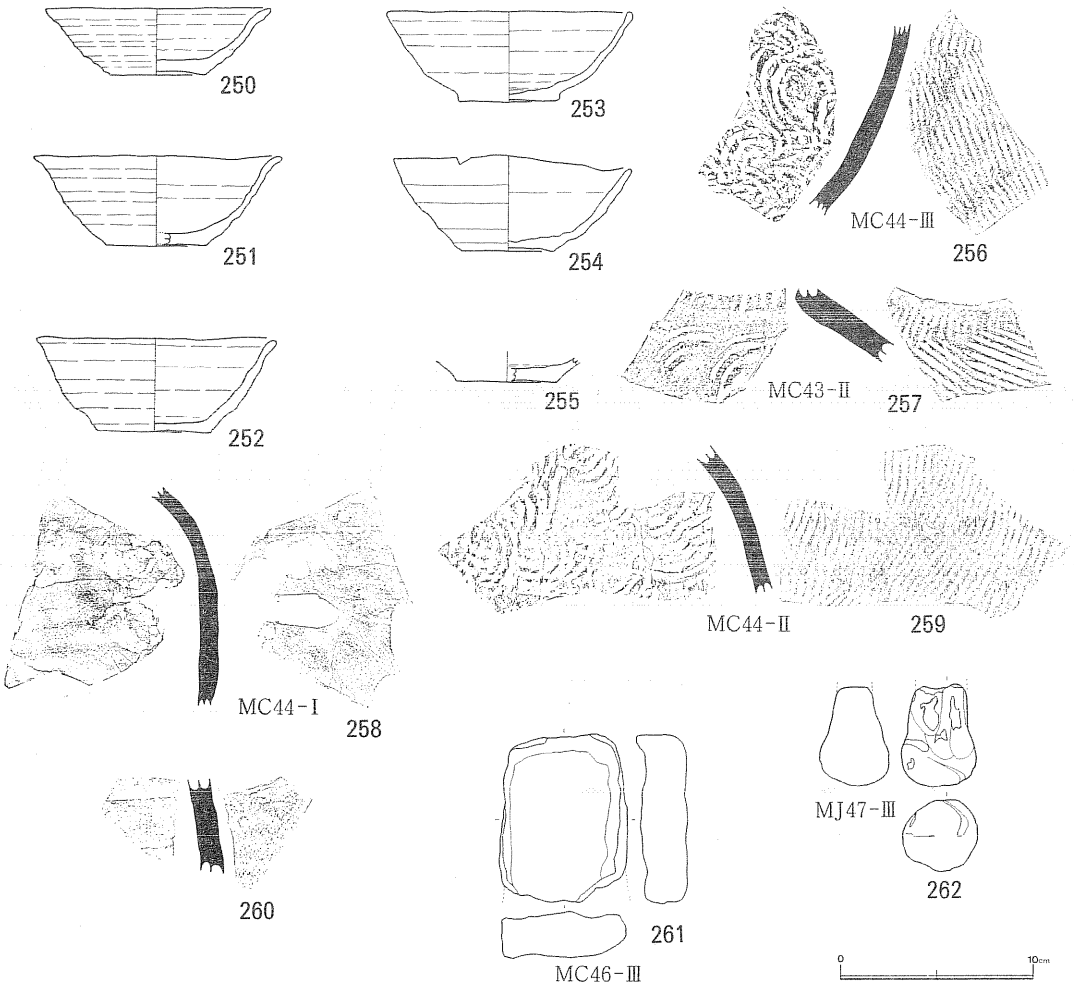
第47図　SN焼園遺構出土遺物



第48図　SN焼土遺構出土遺物

重複し、本遺構が古い。遺存状態は良くない。覆土中に火山灰混入。本遺構の下や周囲にピットがあり、フイゴ羽口や鉄滓の出土を考え合せると、あるいは小鍛冶が行われていたのかもしれない。

SN72　焼土遺構　①ＮＨ54グリッド　②円形　③1.00ｍ×0.80ｍ・0.12ｍ　④土師器杯・甕（245～247）、須恵器長頸瓶（248）、鉄製品（249）が出土した。249は断面形が長方形で、現存部の長さ10.8㎝、幅1.2㎝、厚さ0.8㎝である。



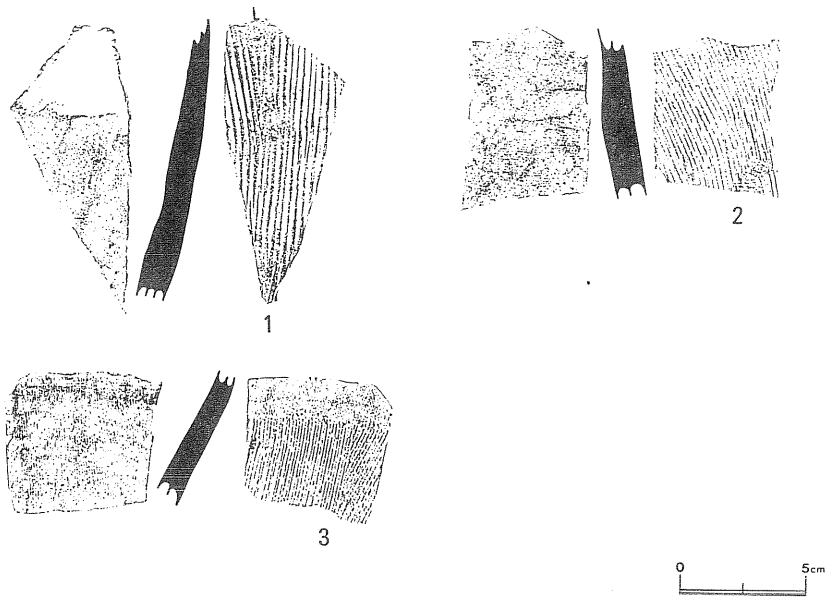
第49図　遺構外の出土遺物

（6）　その他の遺構

SX39　（第11図）　MB44グリッドに位置し、SI18と重複しており、本遺構が古い。円形と思われ、断面形は浅皿形で、径1.8m深さ18cmである。底は平坦で良く締まっている。細片ながら土師器杯・甕、須恵器甕・壺が出土している。

SX46　（第29図）　ND51グリッドに位置し、SI38と重複し、それよりも古い。全体の詳細は不明である。

SX65　（第1図）　MJ46グリッドに位置し、半分以上が調査区外である。褐色土に焼土が若干混じり、マウンド状に盛り上がっているのみで、周囲にそれに伴なう遺構もない。



第50図　遺構外出土陶磁器

（７）　遺構外出土遺物　（第49図250～262）

遺構外出土の遺物はコンテナで約20箱ほどである。時間的制約からほとんど未整理である為、その一部を載せる。

250～255は土師器杯で、いずれも回転糸切りで二次調整はなく、内外面とも浅黄橙か橙色を呈する。256、257、259は須恵器甕・258、260は須恵器壺である。261、262は土製品でいずれも胎土に砂粒を含み、浅黄橙色で焼成は不良である。261は硯を模したもので周堤がみられる。現存部の長さ8.8cm、幅6.2cm、厚さ2.3cmである。262は一見取手風であるが、貼付痕は見られない。断面形は円形である。現存部の長さ5.0cm、最大幅3.5cmである。

第２節　その他の遺物　（第50図１～３）

１　出土遺物

中世陶器が遺構外から出土している。

１は珠州系陶器で、外面に間隔２～３ミリの条線状の平行叩きを有する。内外面とも黒褐色である。２は二ツ井町茂谷沢窯産の陶器で、外面に条線状の平行叩きを有し、間隔は1.5ミリと狭い。内外面とも青灰色である。３は内面に卸目を持つもので、内外面とも黒褐色である。

第1表　SI06 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
7－1	SI06 床直上	土師器杯	(12.4)	(4.8)	5.0	(0.39)	40	精選	内、浅黄橙 外、黄橙	回転糸切り	SI06－4
7－2	SI06 フクド上	土師器杯	11.9	4.2	5.1	0.35	42	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	SI06－2
7－3	SI06 床直上	土師器杯	(12.8)	(5.8)	4.6	(0.45)	35	精選	内、にぶい橙 外、橙	回転糸切り	SI06－6
7－4	SI06 床直上	土師器杯	(12.6)	(5.6)	5.7	(0.44)	45	精選	内、にぶい橙 外、淡橙	回転糸切り	SI06－5
7－5	SI06 フクド中	土師器杯	(11.5)	(5.4)	5.5	(0.47)	47	精選	内、浅黄橙 外、橙	回転糸切り	SI06－1
7－6	SI06 床面	土師器杯	—	(6.0)	2.5	—	—	精選	内、にぶい黄橙 外、橙	回転糸切り	SI06－7
7－7	SI06 カマド袖	土師器杯	(12.3)	(5.0)	4.95	(0.40)	40	精選	内、橙 外、浅黄橙	回転糸切り	SI06－3
7－8	SI06 床直上	土師器鉢	—	5.9	4.4	—	—	精選	内、浅黄橙 外、灰黄褐	回転糸切り	SI06－8
7－9	SI06 カマド	土師器壺	—	(8.6)	5.3	—	—	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	SI06－9

第2表　SI10 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
7－14	SI10 床直上	土師器杯	12.8	4.2	4.6	0.32	35	精選	内、橙 外、橙	底部不明	SI10－1
7－15	SI10 床直上	土師器杯	12.6	4.0	4.5	0.32	35	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	SI10－3
7－16	SI10 フクド中	土師器甕	—	7.7	4.7	—	—	精選	内、浅黄橙 外、褐灰		SI10－2
7－17	SI10 フクド中	須恵器壺	(12.8)	—	(1.7)	—	—	精選	内、灰 外、灰オリーブ	内、外面に自然釉	SI10－4
7－18	SI10 フクド中	須恵器杯	—	(4.8)	2.9	—	—	精選	内、黄灰 外、黄灰	回転糸切り	SI10－5

第3表　SI16 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
12—22	SI16 床面	土師器杯	(11.6)	4.4	5.4	(0.38)	46	精選	内、浅黄橙 外、橙	回転糸切り	SI16—1
12—23	SI16 床直上	土師器杯	(12.4)	—	3.0	—	—	精選	内、にぶい橙 外、にぶい橙		SI16—4
12—24	SI16 床面	須恵器杯	(9.9)	—	3.7	—	—	精選	内、褐灰 外、褐灰	内面に煤状炭化物付着	SI16—3
12—25	SI16 カマドフクド	土師器甕	—	(9.0)	10.5	—	—	3～5㎜位の小石混入	内、橙 外、褐灰		SI16—2

第4表　SI18 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
12—28	SI18 床直上	土師器杯	—	5.2	1.8	—	—	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	SI18—3
12—29	SI18 床直上	土師器杯	—	5.8	1.95	—	—	精選	内、橙 外、浅黄橙	回転糸切り	SI18—1
12—30	SI18 床直上	土師器杯	14.4	5.9	5.9	0.41	40	精選	外、浅黄橙	内黒 回転糸切り	SI18—2
12—31	SI18 床直上	土師器杯	13.2	5.5	4.6	0.42	34	精選	内、にぶい橙 外、にぶい褐	底部に墨書 回転糸切り	SI18—4
12—32	SI18 上	土師器杯	—	5.0	3.1	—	—	精選	内、にぶい褐 外、にぶい褐	回転糸切り	SI18—5
12—33	SI18 床直上	土師器杯	(12.6)	5.0	4.1	(0.39)	32	精選	外、橙	内黒 回転糸切り	SI18—8
12—34	SI18 床直上	土師器杯	(12.2)	4.6	5.15	(0.38)	42	精選	内、橙 外、浅黄橙	回転糸切り	SI18—7
12—35	SI18 床直上	土師器杯	12.5	5.4	4.9	0.43	39	精選	内、灰白 外、褐	回転糸切り	SI18—9
12—36	SI18 床直上	土師器杯	12.4	5.6	4.6	0.45	37	精選	内、にぶい橙 外、浅黄橙	内外面に漆付着 回転糸切り	SI18—10
12—37	SI18	土師器杯	(14.1)	5.4	4.75	0.38	33	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	SI18—11
12—38	SI18 床直上	土師器杯	14.9	(6.8)	6.25	(0.45)	41	精選	外、橙	内黒 回転糸切り	SI18—12
12—39	SI18 床直上	土師器甕	—	(6.0)	10.3	—	—	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	SI18—6
13—40	SI18 床直上	土師器鉢	9.8	5.6	6.7	—	—	精選	内、黒褐 外、黒褐	口縁部から内面に煤付着、回転糸切り	SI18—13
13—41	SI18 床直上	須恵器壺	8.2	7.2	12.0	—	—	精選	内、浅黄橙 外、浅黄橙	頸部4.6 回転糸切り	SI18—14
13—46	SI18	土師器甕	(17.2)	—	21.3	—	—	2～3㎜位の小石多量混入	内、橙 外、浅黄橙		SI18—15

第5表　SI 19 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
18—55	SI19 フクド	土師器杯	(12.5)	4.9	5.0	(0.39)	40	精選	内、浅黄橙 外、にぶい橙	外面に煤状炭化物付着、回転糸切り	SI19—3
18—56	SI19 床直上	土師器杯	12.2	6.1	5.1	(0.5)	41	精選	内、にぶい黄橙 外、浅黄橙	回転糸切り	SI19—1
18—57	SI19 床直上	土師器杯	12.0	5.5	4.9	0.45	40	精選	内、橙 外、浅黄橙	口縁部内外面に漆付着、回転糸切り	SI19—2
18—58	SI19 床直上	土師器 高台付杯	—	(6.0)	2.2	—	—	精選	内、浅黄橙 外、浅黄橙		SI19—5
18—59	SI19 床直上	土師器甕	(22.0)	—	7.5	—	—	精選	内、黄橙 外、褐灰		SI19—4

第6表　SI 27 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
18—65	SI27 フクド中	土師器杯	(13.2)	—	4.9	—	—	精選	外、浅黄橙	内黒	SI27—3
18—66	SI27 フクド中	土師器杯	(12.2)	(5.2)	4.95	(0.4)	40	精選	内、浅黄橙 外、浅黄橙	回転糸切り	SI27—1
18—67	SI27 フクド中	土師器杯	—	3.9	2.4	—	—	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	SI27—2

第7表　SI 29 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
18—68	SI29 フクド	土師器甕	(9.6)	—	8.5	—	—	1㎜位の砂粒多量混入	内、橙 外、にぶい橙		SI29—1
18—69	SI29 フクド	土師器甕	(13.6)	—	4.0	—	—	精選	内、黒褐 外、にぶい黄褐		SI29—4
18—70	SI29 フクド	土師器甕	(23.2)	—	16.7	—	—	精選	内、橙 外、浅黄橙		SI29—2
18—71	SI29 フクド	土師器鍋	(41.8)	—	(10.7)	—	—	精選	内、にぶい橙 外、黒褐	外面に煤状炭化物付着	SI29—3

第8表　SI 30 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
23—72	SI30 カマド	土師器甕	(27.8)	—	3.6	—	—	精選	内、橙 外、橙		SI30—1

第9表　SI 32 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
23—77	SI32 フクド	土師器杯	(14.9)	4.9	5.2	(0.32)	35	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	SI32—7
23—78	SI32 フクド	土師器杯	12.8	4.3	5.3	0.33	41	精選	内、橙 外、浅黄橙	回転糸切り	SI32—1
23—79	SI32 フクド	土師器杯	—	4.6	1.9	—	—	精選	内、浅黄橙 外、浅黄橙	回転糸切り	SI32—6
23—80	SI32 フクド	土師器鉢	(9.0)	5.4	8.8	—	—	精選	内、浅黄橙 外、浅黄橙	内面に煤状炭化物付着、回転糸切り	SI32—4
23—81	SI32 フクド	土師器甕	—	(9.7)	4.1	—	—	精選	内、橙 外、にぶい黄褐	砂底	SI32—2
23—82	SI32 フクド	須恵器壺	—	(9.7)	4.3	—	—	精選	内、黄橙 外、黄橙		SI32—5
23—87	SI32 フクド	土師器耳皿	8.3	4.3	4.3	—	—	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	SI32—3

第10表　SI 33 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
23—88	SI33 カマド	土師器杯	11.7	4.5	4.8	0.3	41	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	SI33—1
23—89	SI33 フクド	土師器杯	12.8	5.4	4.6	0.42	36	精選	内、橙 外、にぶい橙	回転糸切り	SI33—2
23—90	SI33 フクド	土師器甕	—	(7.6)	3.6	—	—	1㎜位の小石多量混入	内、橙 外、にぶい橙	回転糸切り	SI33—3
23—91	SI33 床面	土師器甕	(22.4)	—	22.0	—	—	1～2㎜位の小石多量混入	内、にぶい褐 外、淡橙	外面に煤状炭化物付着	SI33—4

第11表　S I 34 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
25—92	S I 34 フクド	土師器杯	—	5.9	1.85	—	—	精選	外、橙	内黒 回転糸切り	S I 34—8
25—93	S I 34 柱穴	土師器杯	—	5.2	2.4	—	—	精選	内、浅黄橙 外、浅黄橙	回転糸切り	S I 34—2
25—94	S I 34 フクド	土師器杯	—	4.6	3.3	—	—	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	S I 34—5
25—95	S I 34 フクド	土師器杯	—	4.8	2.9	—	—	精選	内、浅黄橙 外、にぶい黄橙	回転糸切り	S I 34—6
25—96	S I 34 柱穴	土師器杯	(12.4)	(4.3)	5.1	(0.34)	41	精選	内、浅黄橙 外、浅黄橙	回転糸切り	S I 34—3
25—97	S I 34 カマド付近	土師器杯	11.3	4.7	4.7	0.41	41	精選	内、白灰 外、浅黄橙	回転糸切り	S I 34—4
25—98	S I 34 カマド付近	土師器杯	(12.9)	5.3	4.8	(0.41)	37	精選	内、浅黄橙 外、黄橙	回転糸切り	S I 34—1
25-102	S I 34 カマド付近	土師器甕	(17.0)	9.1	17.5	—	—	1～2mm位小石少量混入	内、橙 外、褐灰		S I 34—7
25-103	S I 34 フクド	土師器甕	(23.2)	—	14.4	—	—	精選	内、にぶい橙 外、にぶい橙	外面に煤状炭化物付着	S I 34—12
25-104	S I 34 柱穴	土師器甕	(22.8)	—	6.0	—	—	精選	内、にぶい橙 外、にぶい橙	内、外面に煤状炭化物付着	S I 34—10
25-105	S I 34 フクド	土師器鉢	(11.4)	—	5.2	—	—	精選	内、にぶい黄橙 外、橙	口縁部に煤状炭化物付着	S I 34—9
25-106	S I 34 フクド	須恵器壺	—	(9.4)	7.2	—	—	2mm位の小石少量混入	内、灰黄褐 外、褐灰		S I 34—11

第12表　S I 35 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
28-107	S I 35 フクド	土師器杯	(11.5)	4.6	5.1	(0.4)	44	精選	内、橙 外、浅黄橙	回転糸切り	S I 35—1
28-108	S I 35 フクド	土師器杯	(12.2)	(4.4)	4.7	(0.36)	38	精選	内、浅黄橙 外、浅黄橙	回転糸切り	S I 35—3
28-109	S I 35 フクド	土師器甕	—	(6.4)	4.2	—	—	精選	内、にぶい橙 外、褐灰	回転糸切り	S I 35—4
28-110	S I 35 フクド	土師器甕	—	(7.2)	3.3	—	—	精選	内、明褐灰 外、褐灰	回転糸切り	S I 35—6
28-111	S I 35 フクド	土師器甕	(13.6)	—	5.1	—	—	1mm以下の砂粒多量混入	内、橙 外、橙		S I 35—5
28-112	S I 35 フクド	土師器甕	(15.9)	—	5.8	—	—	精選	内、にぶい赤褐 外、にぶい赤褐		S I 35—2
28-113	S I 35 フクド	土師器甕	(21.4)	—	21.0	—	—	1mm以下の砂粒多量混入	内、橙 外、灰褐		S I 35—7

第13表　S I 37 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
28-115	S I 37 フクド	土師器杯	(12.1)	(4.8)	5.4	(0.39)	45	1～3mm位の小石多量混入	内、橙 外、橙	回転糸切り	S I 37—1
28-116	S I 37 カマド	土師器杯	13.2	5.4	4.7	0.41	36	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	S I 37—2
28-117	S I 37 フクド	土師器杯	(13.4)	5.3	5.1	(0.4)	38	精選	内、浅黄橙 外、浅黄橙	回転糸切り	S I 37—3
28-118	S I 37 フクド	土師器杯	—	(5.8)	2.8	—	—	精選	内、にぶい橙 外、浅黄橙	回転糸切り	S I 37—5
28-119	S I 37 フクド	土師器杯	(13.6)	4.8	5.0	0.35	37	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	S I 37—4

第14表　SI38 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
30-121	SI38 フクド	土師器杯	—	(5.0)	3.9	—	—	精選	内、浅黄橙 外、浅黄橙	回転糸切り	SI38－2
30-122	SI38 フクド	土師器杯	—	(5.0)	4.5	—	—	精選	内、浅黄橙 外、浅黄橙	回転糸切り	SI38－12
30-123	SI38 フクド中	土師器杯	12.0	4.7	5.5	(0.39)	46	精選	内、浅黄橙 外、橙	回転糸切り	SI38－5
30-124	SI38 フクド中	土師器杯	(12.4)	5.2	5.5	(0.41)	44	精選	内、浅黄橙 外、浅黄橙	回転糸切り	SI38－7
30-125	SI38 フクド中	土師器杯	(11.4)	4.4	5.8	(0.38)	51	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	SI38－4
30-126	SI38 フクド	土師器甕	—	6.3	2.6	—	—	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	SI38－14
30-127	SI38 フクド中	土師器杯	—	5.2	4.0	—	—	精選	内、橙 外、にぶい橙	回転糸切り	SI38－3
30-128	SI38 フクド中	土師器杯	11.2	4.7	4.8	0.41	43	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	SI38－1
30-129	SI38 フクド中	土師器杯	(11.8)	5.0	4.15	0.42	35	精選	内、淡橙 外、浅黄橙	回転糸切り	SI38－6
30-130	SI38 フクド	土師器杯	(11.8)	4.1	4.3	0.35	36	精選	内、橙 外、橙	内外面の一部に漆付着、回転糸切り	SI38－8
30-131	SI38 フクド	土師器杯	—	4.3	2.1	—	—	精選	内、橙 外、浅黄橙	回転糸切り	SI38－11
30-132	SI38 フクド	土師器杯	—	4.3	1.6	—	—	精選	内、浅黄橙 外、浅黄橙	回転糸切り	SI38－9
30-133	SI38 フクド	土師器杯	—	(4.8)	2.2	—	—	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	SI38－13
30-134	SI38 フクド	土師器杯	—	(5.0)	2.8	—	—	精選	内、浅黄橙 外、橙	回転糸切り	SI38－10
30-135	SI38 フクド	土師器鉢	10.4	9.6	11.7	—	—	精選	内、橙 外、橙	内外面に煤状炭化物付着、回転糸切り	SI38－15
30-136	SI38 フクド	土師器甕	(20.2)	—	11.6	—	—	精選	内、橙 外、にぶい橙		SI38－17
30-137	SI38 フクド	土師器甕	(23.4)	—	27.9	—	—	精選	内、灰褐 外、橙		SI38－16

第15表　SI43 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
32-144	SI43 カマド	土師器杯	11.6	5.8	5.4	0.5	46	1㎜位の砂粒多量混入	内、橙 外、橙	回転糸切り	SI43－2
32-145	SI43 フクド	土師器杯	(12.8)	5.9	5.4	(0.46)	42	精選	内、橙 外、橙	内面に黒斑 回転糸切り	SI43－6
32-146	SI43 カマド	土師器杯	12.5	6.1	5.1	0.49	41	1㎜位の砂粒多量混入	内、褐 外、橙	回転糸切り	SI43－1
32-147	SI43 フクド	土師器杯	(13.0)	6.6	4.6	(0.5)	35	精選	内、灰黄褐 外、灰黄褐	回転糸切り	SI43－3
32-148	SI43 フクド	土師器杯	12.1	4.6	4.0	(0.38)	33	精選	内、黄橙 外、橙	回転糸切り	SI43－4
32-149	SI43 フクド	土師器杯	(12.0)	(6.2)	4.7	(0.51)	39	精選	内、橙 外、黄橙	回転糸切り	SI43－5
32-150	SI43 カマド	土師器杯	(12.5)	—	2.8	—	—	精選	内、褐灰 外、橙		SI43－13
32-151	SI43 カマド	土師器甕	(12.8)	—	4.8	—	—	精選	内、橙 外、橙		SI43－11
32-152	SI43 フクド	土師器甕	—	7.6	5.9	—	—	精選	内、にぶい褐 外、にぶい黄褐	砂底	SI43－8
32-153	SI43 カマド	土師器壺	(10.6)	—	—	—	—	精選	内、橙 外、橙		SI43－12
32-154	SI43 カマド	土師器鉢	8.0	5.9	7.3	—	—	精選	内、にぶい褐 外、にぶい褐	回転糸切り	SI43－7
32-155	SI43 フクド	土師器鉢	(11.5)	—	7.8	—	—	精選	内、橙 外、橙		SI43－10
32-156	SI43 カマド	土師器甕	(19.1)	(11.3)	28.0	—	—	精選	内、黄橙 外、橙	砂底	SI43－9

第16表　SI44 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
35-162	SI44 フクド	土師器杯	—	(5.3)	3.5	—	—	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	SI44—6
35-163	SI44 フクド	土師器杯	—	4.8	2.4	—	—	精選	内、橙 外、黄橙	回転糸切り	SI44—7
35-164	SI44 フクド	土師器杯	—	4.9	3.8	—	—	精選	内、にぶい橙 外、橙	回転糸切り	SI44—8
35-165	SI44 フクド	土師器杯	13.4	4.7	4.2	0.35	31	精選	内、にぶい橙 外、橙	煤状炭化物付着 回転糸切り	SI44—9
35-166	SI44 フクド	土師器杯	(12.1)	5.3	5.9	(0.44)	49	精選	外、浅黄橙	内黒 回転糸切り	SI44—3
35-167	SI44 フクド	土師器杯	13.6	6.4	5.1	0.47	37	精選	内、にぶい橙 外、橙	漆付着 回転糸切り	SI44—2
35-168	SI44 フクド	土師器杯	(17.6)	—	5.5	—	—	精選	内、橙 外、橙	漆付着 回転糸切り	SI44—13
35-169	SI44 カマド	土師器杯	—	7.0	2.15	—	—	精選	外、にぶい橙	高台付、内黒 回転糸切り	SI44—12
35-170	SI44 フクド	土師器甕	(12.2)	—	4.1	—	—	精選	内、橙 外、橙	口縁部に煤状炭化物付着	SI44—14
35-171	SI44 カマド	土師器甕	(15.7)	—	11.6	—	—	精選	内、浅黄橙 外、灰白		SI44—15
35-172	SI44 フクド	土師器壺	—	10.2	13.5	—	—	精選	内、橙 外、橙	外面に黒斑有り 砂底	SI44—4
35-173	SI44 カマド	土師器甕	(14.0)	—	9.7	—	—	精選	内、橙 外、橙		SI44—17
35-174	SI44 フクド	土師器甕	—	(9.4)	4.1	—	—	精選	内、褐灰 外、橙	砂底	SI44—10
35-175	SI44 フクド	土師器甕	(15.8)	—	16.0	—	—	精選	内、橙 外、橙		SI44—18
35-176	SI44 カマド	土師器甕	(20.6)	—	9.4	—	—	1～2mm位の小石少量混入	内、橙 外、橙		SI44—16
35-177	SI44 カマド	土師器甕	(20.6)	—	13.3	—	—	精選	内、橙 外、橙	煤状炭化物付着	SI44—11
35-178	SI44 フクド	土師器耳皿	8.5	4.2	4.5	(0.5)	—	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	SI44—5
35-179	SI44 カマド	須恵器瓶	—	7.4	11.4	—	—	精選	内、灰 外、灰白	回転糸切り	SI44—1
36-184	SI44 カマド	土師器甕	—	(11.2)	13.3	—	—	精選	内、橙 外、赤灰		SI44—19

第17表　SI45 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
36-191	SI45 床面	土師器杯	(12.1)	4.2	5.2	(0.35)	43	精選	内、浅黄橙 外、浅黄橙	回転糸切り	SI45—1
36-192	SI45 フクド	土師器杯	12.5	5.2	5.1	0.42	41	精選	内、灰褐 外、明赤褐	回転糸切り	SI45—3
36-193	SI45 フクド	土師器杯	—	(5.0)	4.4	—	—	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	SI45—4
36-194	SI45 フクド	土師器鉢	10.6	5.4	10.6	—	—	精選	内、浅黄橙 外、灰褐	回転糸切り	SI45—2

第18表　SK08 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
44-195	SK08 フクド	土師器杯	(12.8)	4.4	4.85	(0.34)	38	精選	内、橙 外、浅黄橙	回転糸切り	SK08—1

第19表　SK24 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
44-196	SK24 フクド上	土師器杯	—	(5.8)	2.7	—	—	精選	内、浅黄橙 外、浅黄橙		SK24—2
44-197	SK24 フクド上	土師器壺	(15.0)	—	—	—	—	精選	内、灰褐 外、黒褐		SK24—1

第20表　SK25 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
44-199	SK25 フクド	須恵器杯	(11.4)	(5.2)	4.6	(0.46)	40	精選	内、白灰 外、灰黄	回転糸切り	SK25—1

第21表　SK42 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
44-201	SK42 フクド	土師器杯	(12.3)	4.6	5.15	(0.37)	42	精選	内、灰黄褐 外、にぶい黄橙	回転糸切り	SK42—1

第22表　ＳＫ59 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
44-202	SK59 フクド	土師器杯	(12.2)	(5.1)	5.35	(0.41)	44	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	SK59－1

第23表　ＳＫ63 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
44-203	SK63 底面	土師器杯	—	4.4	2.7	—	—	精選	内、浅黄橙 外、浅黄橙	回転糸切り	SK63－1

第24表　ＳＫ64 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
44-204	SK64 フクド	土師器杯	—	5.3	1.8	—	—	精選	内、橙 外、浅黄橙	回転糸切り	SK64－1

第25表　ＳＫ66 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
44-205	SK66 フクド	土師器杯	(12.1)	4.8	4.7	(0.4)	39	1㎜以下の砂粒多量混入	内、浅黄橙 外、浅黄橙	回転糸切り	SK66－1
44-206	SK66 フクド	土師器杯	(12.8)	(5.4)	5.4	(0.42)	42	2～3㎜位の小石混入	内、黄橙 外、浅黄橙	回転糸切り	SK66－9
44-207	SK66 フクド	土師器杯	(12.4)	5.0	4.7	(0.4)	38	1㎜以下の砂粒多量混入	内、橙 外、橙	回転糸切り	SK66－6
44-208	SK66 フクド	土師器杯	12.8	5.1	4.6	0.4	36	精選	内、にぶい橙 外、橙	内、外面に煤状炭化物付着、回転糸切り	SK66－4
44-209	SK66 フクド	土師器杯	(12.2)	(4.7)	5.4	(0.38)	44	精選	内、浅黄橙 外、浅黄橙	回転糸切り	SK66－11
44-210	SK66 フクド	土師器杯	(13.2)	5.2	4.8	(0.4)	36	精選	内、橙 外、橙	内面に煤状炭化物付着、回転糸切り	SK66－2
44-211	SK66 フクド	土師器杯	(12.6)	5.4	5.1	(0.42)	40	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	SK66－3
44-212	SK66 フクド	土師器杯	(12.6)	(5.9)	4.4	(0.47)	35	精選	内、浅黄橙 外、浅黄橙	回転糸切り	SK66－12
44-213	SK66 フクド	土師器杯	—	5.0	2.4	—	—	精選	内、にぶい橙 外、橙	回転糸切り	SK66－5
44-214	SK66 フクド	土師器杯	—	5.3	2.1	—	—	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	SK66－7
44-215	SK66 フクド	土師器杯	—	4.2	2.6	—	—	1㎜以下の砂粒多量混入	内、橙 外、浅黄橙	回転糸切り	SK66－13
44-216	SK66 フクド	土師器杯	—	5.1	2.75	—	—	2～3㎜の小石混入	内、橙 外、橙	回転糸切り	SK66－14
44-217	SK66 フクド	土師器甕	7.2	3.3	—	—	—	精選	内、明赤褐 外、赤褐		SK66－10
44-218	SK66 フクド	土師器甕	—	6.6	4.5	—	—	精選	内、橙 外、にぶい褐	ロクロ成形	SK66－8
44-219	SK66 フクド	土師器甕	—	8.0	5.2	—	—	精選	内、にぶい赤褐 外、橙		SK66－15

第26表　ＳＮ26 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
46-220	SN26 フクド	土師器杯	—	4.5	1.1	—	—	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	SN26－1

第27表　ＳＮ40 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
46-221	SN40 フクド	土師器杯	12.6	5.9	5.2	0.47	41	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	SN40－3
46-222	SN40 フクド	土師器杯	12.0	4.5	5.1	0.37	42	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	SN40－1
46-223	SN40 フクド	土師器杯	(12.7)	4.8	5.5	(0.38)	43	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	SN40－2
46-224	SN40	土師器杯	11.8	4.3	5.1	0.36	43	精選	内、にぶい褐 外、橙	内面に煤状炭化物付着、回転の糸切り	SN40－4
46-225	SN40	土師器甕	(18.8)	—	17.5	—	—	精選	内、にぶい橙 外、浅黄橙		SN40－5

第28表　SN48 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
46-226	SN48 フクド	土師器甕	(15.0)	—	5.0	—	—	精選	内、にぶい橙 外、にぶい橙		SN48—4
46-227	SN48 フクド	土師器甕	—	(7.3)	3.5	—	—	精選	内、淡橙 外、橙		SN48—3
46-228	SN48 フクド	土師器甕	(22.4)	9.8	31.5	—	—	精選	内、橙 外、橙	煤状炭化物付着	SN48—2
46-229	SN48 フクド	土師器甕	(20.8)	—	22.0	—	—	精選	内、にぶい橙 外、にぶい橙		SN48—1

第29表　SN49 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
47-230	SN49 フクド	土師器杯	(12.4)	5.0	4.6	(0.4)	37	精選	内、橙 外、橙	内面底部に煤状炭化物付着、回転糸切り	SN49—1
47-231	SN49 フクド	土師器杯	(12.4)	(5.4)	5.9	(0.47)	47	精選	内、にぶい褐 外、明赤褐	内外面に煤状炭化物付着、回転糸切り	SN49—2
47-232	SN49 フクド	土師器甕	(14.2)	—	10.3	—	—	精選	内、橙 外、にぶい褐	内面に煤状炭化物付着、回転糸切り	SN49—5
47-233	SN49 フクド	土師器甕	(12.3)	(6.0)	12.45	—	—	精選	内、にぶい橙 外、橙	内面底部に煤状炭化物付着、回転糸切り	SN49—3
47-234	SN49 フクド	土師器甕	22.5	9.6	29.1	—	—	精選	内、にぶい褐 外、赤褐	胴部に煤状炭化物付着、砂底	SN49—4
47-235	SN49 フクド	土師器甕	(21.2)	—	19.8	—	—	精選	内、灰褐 外、橙	外面に煤状炭化物多量付着	SN49—6

第30表　SN61 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
47-236	SN61 フクド	土師器杯	12.6	5.0	5.0	0.4	40	精選	内、橙 外、浅黄橙	内外面の一部に漆付着、回転糸切り	SN61—1
47-237	SN61 フクド	土師器杯	(10.6)	(4.0)	5.3	(0.39)	50	精選	内、橙 外、浅黄橙	回転糸切り	SN61—4
47-238	SN61 フクド	土師器杯	—	(6.2)	3.6	—	—	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	SN61—3
47-239	SN61 フクド	土師器杯	—	5.9	1.7	—	—	精選	内、橙 外、浅黄橙	回転糸切り	SN61—2

第31表　SN71 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
48-242	SN71 フクド	土師器杯	(13.0)	5.1	4.6	(0.39)	35	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	SN71—1

第32表　SN72 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
48-245	SN72	土師器甕	(14.1)	8.2	17.5	—	—	精選	内、浅黄橙 外、橙	内外面に煤状炭化物付着、砂底	SN72—1
48-246	SN72	土師器甕	—	7.4	8.7	—	—	精選	内、明褐 外、橙	砂底	SN72—4
48-247	SN72	土師器甕	21.5	—	24.6	—	—	精選	内、明赤褐 外、明赤褐	内面に煤状炭化物付着	SN72—2
48-248	SN72	須恵器瓶	5.8	—	6.8	—	—	精選	内、灰褐 外、灰褐		SN72—3

第33表　遺構外出土土器観察表

番号	出土地点	器種	口径	底径	器高	底径比	径高指数	胎土	色調	備考	登録番号
49-250	MD49 グリッド	土師器杯	(11.2)	5.1	3.6	(0.46)	32	1㎜位の砂粒多量混入	内、にぶい橙 外、淡橙	回転糸切り	MD49—1
49-251	LJ47 グリッド	土師器杯	12.4	5.3	4.7	0.43	38	精選	内、灰 外、灰黄	回転糸切り	LJ47—1
49-252	NA53 グリッド	土師器杯	(12.6)	6.0	4.8	(0.48)	38	精選	内、にぶい橙 外、浅黄橙	回転糸切り	NA53—1
49-253	NB52 グリッド	土師器杯	12.8	5.4	4.7	0.42	37	精選	内、橙 外、橙	回転糸切り	NB52—1
49-254	表採	土師器杯	12.4	4.8	4.8	0.39	39	精選	内、橙 外、橙	内外面に煤状炭化物付着、回転糸切り	表採—1
49-255	MD49 グリッド	土師器杯	—	(5.4)	1.3	—	—	精選	内、浅黄橙 外、浅黄橙	回転糸切り	MD49—2

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

1984年２月20日

1983年11月22日受領致しました試料についての^{14}C年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には^{14}Cの半減期として Libby の半減期5570年を使用しています。また付記した誤差はβ線計数値の標準偏差σにもとずいて算出した年数で、標準偏差（one sigma）に相当する年代です。試料のβ線計数率と自然計数率の差が２σ以下のときは、３σに相当する年代を下限とする年代値（B. P.）のみを表示してあります。また試料の、β線計数値と現在の標準炭素についての計数率との差が２σ以下のときには、Modern と表示し、δ^{14}C％を付記してあります。

記

Code No.	試　料	B. P.年代（1950年よりの年数）
Gak-11450.	Charcoal from Noshiro-shi.	1260±80
	Sample : 3 UNY Ⅱ-SI18.	A. D. 690

第5章　まとめ

本遺跡は131,000㎡と広大な範囲に渡っているが、今回調査を実施した地区は遺跡の南西寄りで、北側から南西側に向かって緩やかに傾斜しているがほぼ平坦といえる。南端では小谷が入り込んで台地が分断された形になっている。

調査区の面積は2,645㎡と遺跡の広さからすればわずかな面積を調査したにすぎないが、その割りに遺構の検出数が多い。いずれも平安時代のもので、竪穴住居跡20軒、掘立柱建物跡3棟、土壙23基、溝10条、焼土遺構15基などである。遺物の出土量も多く、コンテナで約30箱にのぼったが遺構内出土の遺物も多く、遺構外のものは時間的制約からその一部をのせたにすぎない。

1　遺構の分布について

各遺構は調査区の西側と東側に集中する傾向が強く、中央部付近では遺構の数が少ない。またいずれの遺構も調査区外に延びているものも少なくない。昭和56年の範囲確認調査では、調査区外の農道をはさんでそのすぐ北側の松林や南側の水田で竪穴住居跡が確認されている事から、調査区周辺、特に隣接した南と東の比較的平坦な場所に遺構が数多く存在する可能性が強い。

2　竪穴住居跡について

20軒の竪穴住居跡は、いずれも方形で、規模から見ると大きく3分類される。①　SI10、18、30のように一辺が7.2m～9.1mと規模の大きいもの　②　SI06、16、27、37、43、44のように一辺が4.7m～6.0mと中規模のもの　③　SI19、33、34、35、45のように一辺が2.7m～3.8mと小規模のものとに分かれる。①の中でSI18は9.10mと1番規模が大きい。③の中でSI33、34、35は3棟が隣接している。

カマド（カマドと思われるものも含む）の位置をみてみると、主軸方向にバラつきが見られるものの、規模の大小にかかわらず南壁の東か西に構築されている。

柱穴の配置をみてみると①　各コーナーと壁の中間に計8本の主柱穴のあるもの　②　SI10のように壁のコーナー寄りに2本、壁上に2本配置されるもの　③　SI18のように各コーナーに4本、壁間に4本、床面に4本の計12本配置されるものである。この竪穴住居跡は大規模であるだけに上屋を支える柱穴数も多い。　④　柱穴はあるが全体の柱位置が不明のもの、に分けられる。

他に柱穴のない竪穴住居跡も存在する。

大雑把にみてきたが、以上のように規模・柱穴の位置においては規格性はない様である。

3　火山灰について

検出された各遺構に混入している火山灰は、紛状でオリーブ黄色かそれに近い色を呈し、青森県や北海道の石狩～苫小牧地方に広く分布しているもので分析の結果、苫小牧火山灰である事が判明した。その噴出年代については11世紀から13世紀の間とされている。(註1) 検出された竪穴住居跡の半数以上のカマドの袖部に火山灰が混入しており、カマド構築時に黄褐色粘質土や腐植土（暗褐色～褐色土）とともに構築材として使用されたものと考えられる。このことから半数以上の竪穴住居跡は、苫小牧火山灰の降下後に構築されたものである事が判明した。SI06、SI10、SI44はカマド袖部の他に覆土上面にも混入している。いずれもわずかに小ブロック状に混入しているだけである。「地形・地質」の項で工藤英美氏が述べられているように、本遺跡の腐植土（第Ⅰ～Ⅲ層）中に火山ガラスが含まれており、二次堆積層としている。しかし、本遺構内のものが二次堆積か直接降下したものかは、土層断面や周囲の状況からは判断できなかった。

竪穴住居跡の他にも土壙や焼土遺構の周辺や覆土から火山灰が検出された。いずれも小ブロック状か部分的に薄く堆積しているもので、層を成していない。

4　出土土器について

出土した土器には、土師器と須恵器がある。

土師器の種類は、杯（内黒を含む）・高台付杯・甕・壷・鉢・鍋・耳皿である。この中で杯が圧倒的に多いが、甕も比較的多い。

杯は以下の様に3分類される。

a類　ロクロ水挽き・回転糸切り・無調整・色調は内外とも淡黄橙色～橙色を呈する。

b類　内面内黒処理・横と縦方向のヘラミガキを施すが、他はa類と同じ特徴を有する。

c類　内面内黒処理・ヘラミガキ・付高台で、他はa類と同じ特徴を有する。

a類の中には黒斑を有するものもわずかながらある。（Ⅱ類）

甕は、ロクロを使用しないで成形したもの（Ⅰ類）と、ロクロを使用して成形したもの（Ⅱ類）に大別できる。更にその中で調整技法・器形・器体の大小から、細分可能である。

Ⅰ－a類　大形・長胴のものである。口頸部が短かく、わずかに外反し、外面はいずれもヘラケズリ、内面に刷毛目を有するものもあり、胎土に砂粒を含む。底部の遺存しているものは1例あり、砂底である。

Ⅰ－b類　Ⅰ－a類と同じ器形・調整・色調・胎土を有する、小形のものである。

Ⅱ－a類　大形・長胴のものである。口頸部が短かく、わずかに「く」字状に外反し、外面の胴部上半はロクロ成形痕を明瞭に有し、下半部はヘラケズリを施し、内外面とも橙色を呈する。胎土は精選されている。

Ⅱ－b類　Ⅱ－a類と同じ器形・調整・色調・胎土を有する、小形のものである。

壺は、粘土紐巻上げ成形で、底部は砂底である。

須恵器の器種には、杯・甕・壺・瓶があり、その中では甕が多い。杯は少なく、全容の知れるものはない。

以上の土器群の中で、Ⅰ－a類の中には、砂底のものがあるが、この土器は、青森県津軽地方と秋田県北部・米代川流域に出土する事が近年、判明しており、その年代観については10世紀半ば説と12世紀以降の2説(註2)がある。また、土師器杯は、須恵系土器とも呼ばれているもので(註3)、その出現時期は10世紀後半以降(註4)とされている。また、本遺跡では、12世紀末頃を下限とする土師器小皿・台付皿(註5)は出土していない。前記のように、半数以上の竪穴住居跡の袖部から、11世紀～13世紀の間に降下した苫小牧火山灰が検出された。

本遺跡出土土器の時期については、県内の編年がまだ確立されておらず明言できないが、上記の事を勘案すれば、11世紀前半を中心とした頃が想定される。

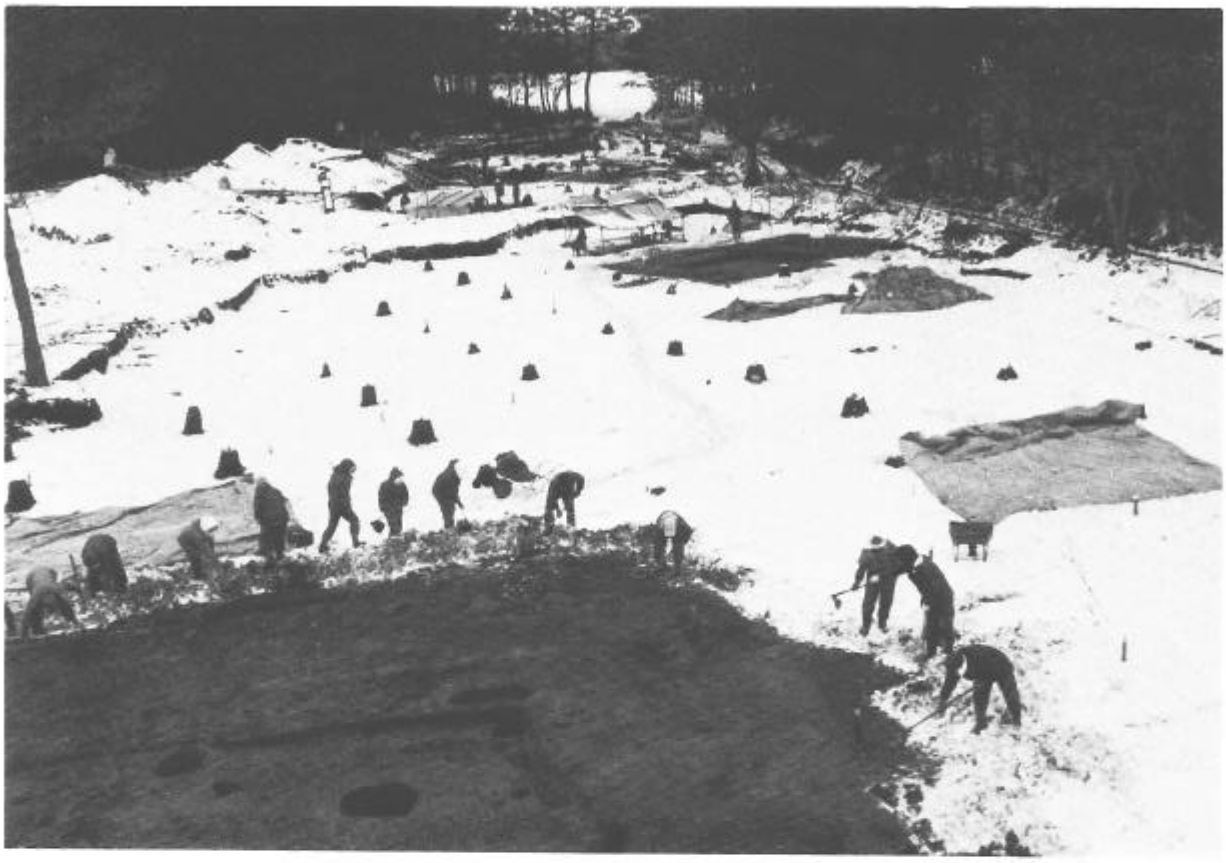
註1　前出の此掛沢Ⅱ遺跡　第5章の註12を参照されたい。

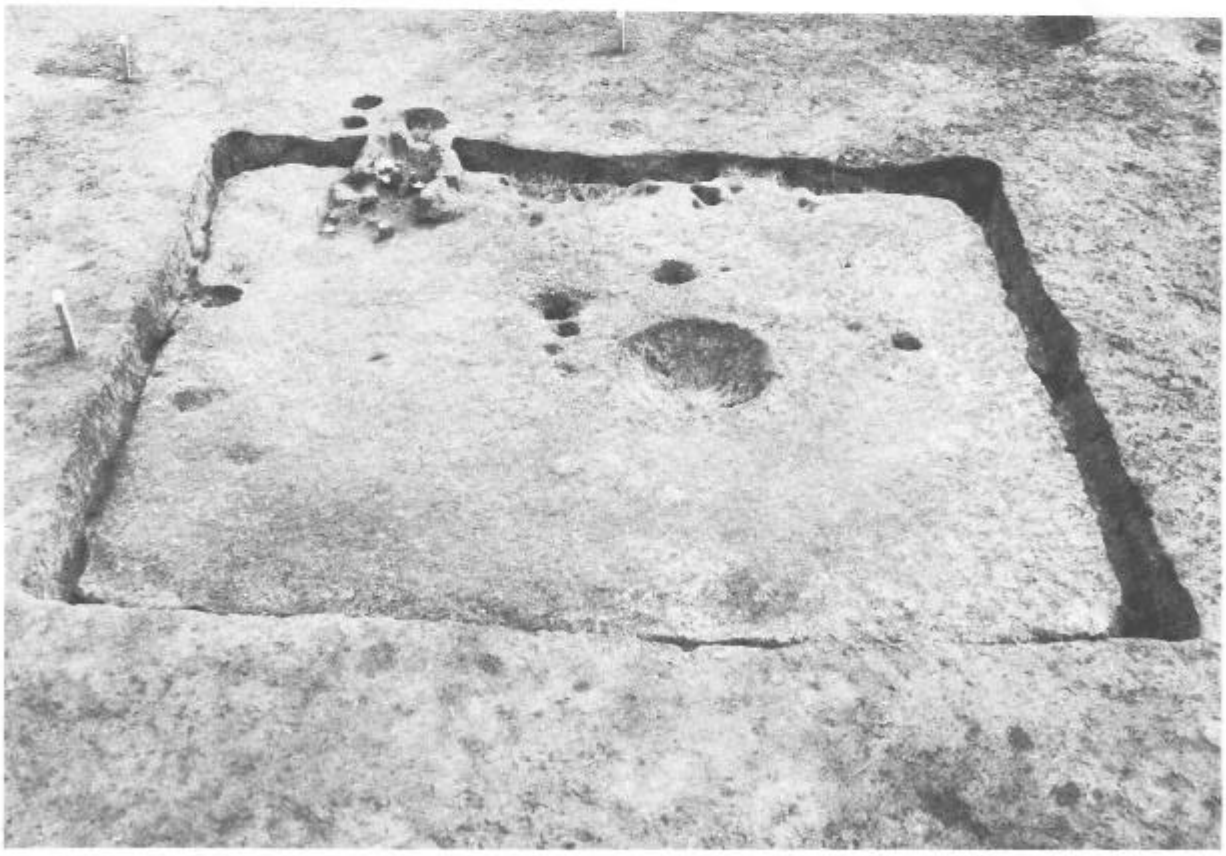
註2　桜田隆　「底面に砂粒を付着させる甕形土師器とその分布について」『日本考古学協会第48回総会研究発表要旨』1982年

註3　桑原滋郎氏の御教示による。

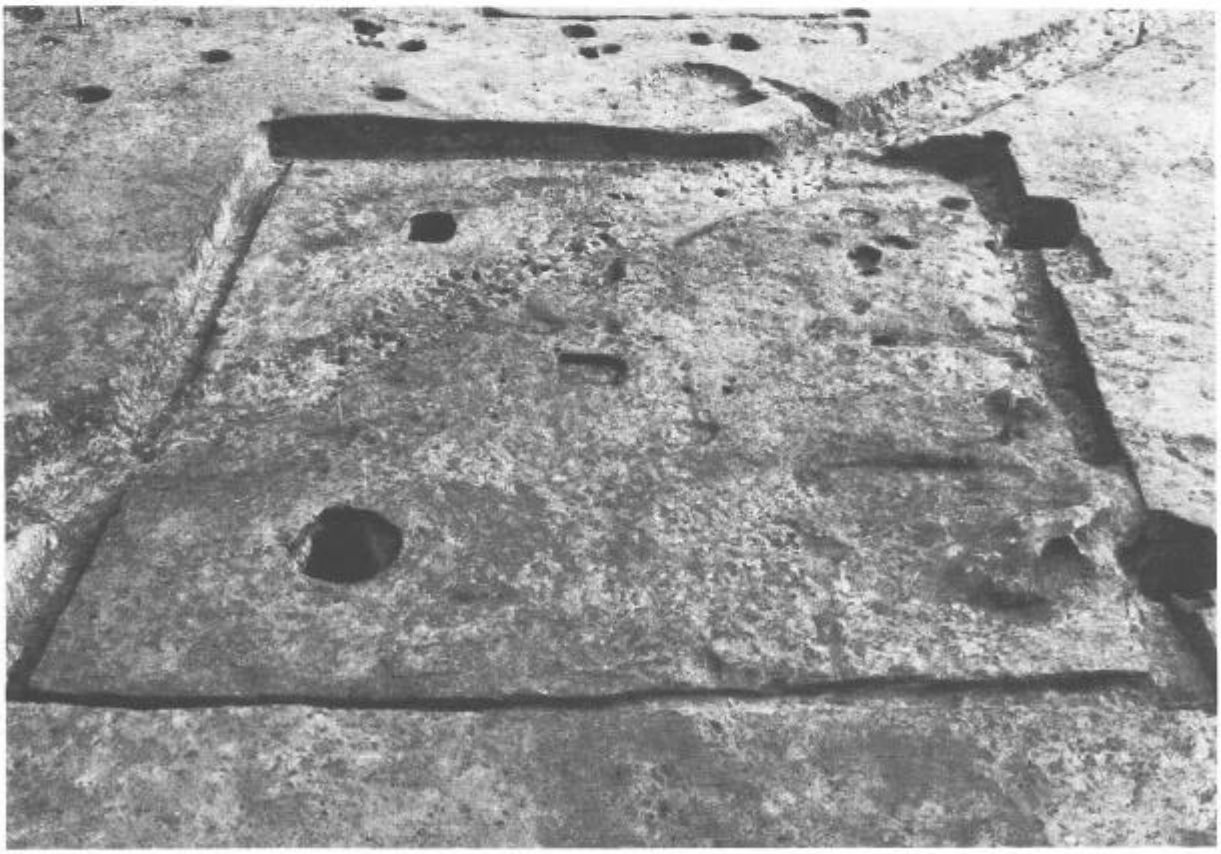
註4　桑原滋郎　「東北の須恵器」『世界陶磁全集2　日本古代』1979年

註5　桑原滋郎　「須恵系土器について」『東北考古学の諸問題』1976年



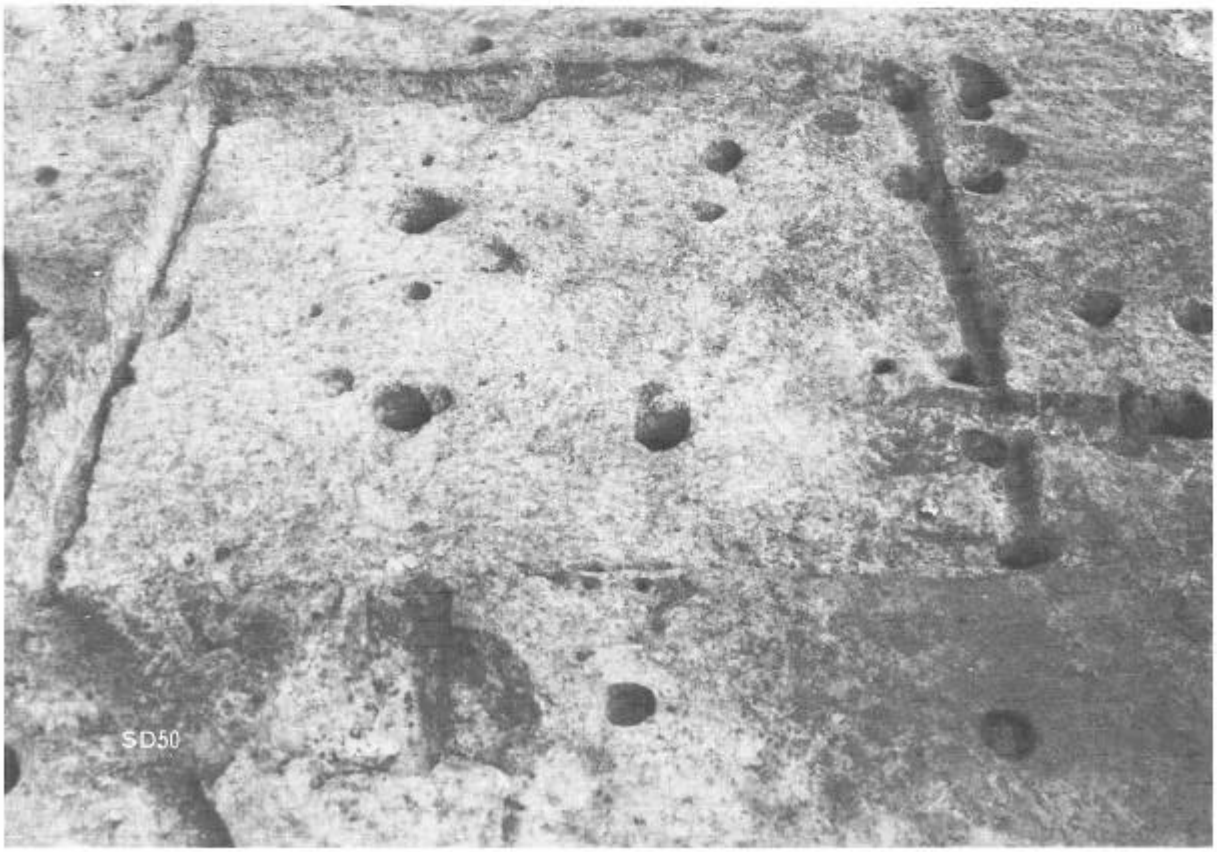


図版１　　上　調査風景（東から）
　　下　ＳＩ06　竪穴住居跡（北から）

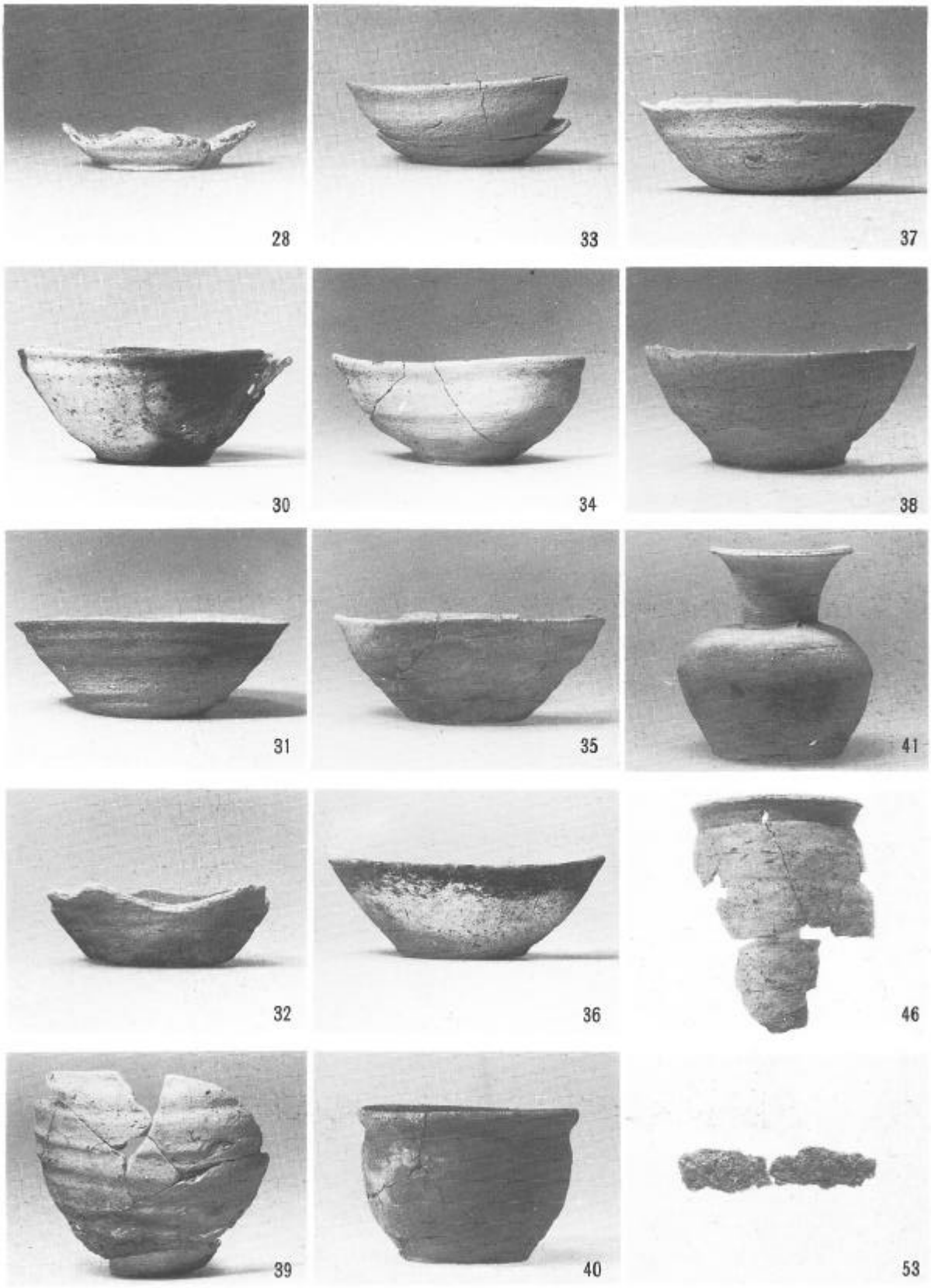


図版2　上　SI10　竪穴住居跡、SD07・23　溝　検出状況（東から）
下　同　完掘後（西から）

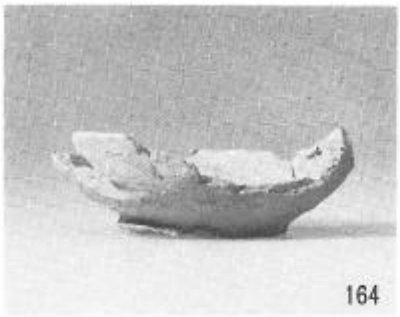
図版３　上　ＳＩ18　竪穴住居跡　炭化材検出状況（西から）
下　同　完掘後（東から）

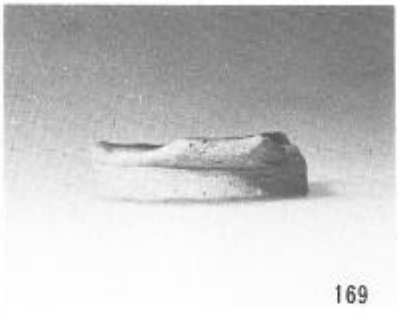


図版４　　上　ＳＩ33（右）・34（左）　竪穴住居跡、ＳＤ51　溝（北から）
　　下　ＳＩ44　竪穴住居跡、ＳＤ50　溝（西から）

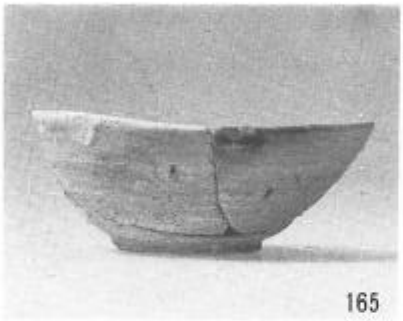


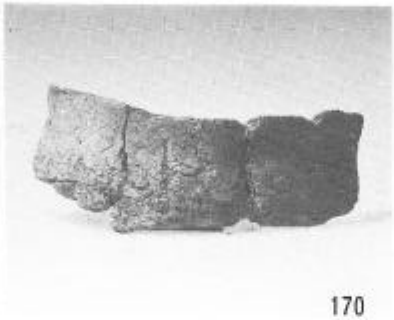
図版 5　　S I 18　竪穴住居跡出土遺物


164

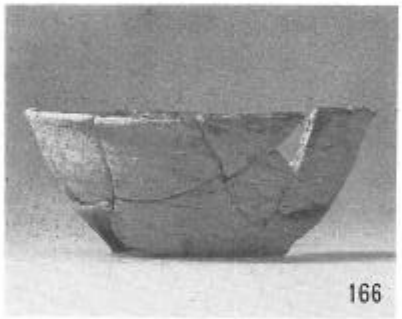

169

175


165

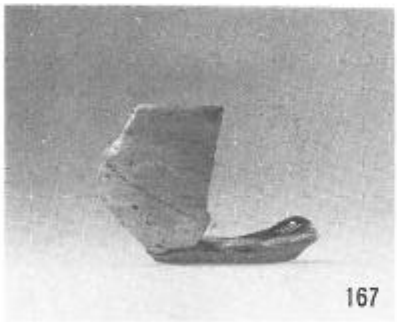

170

176


166

171

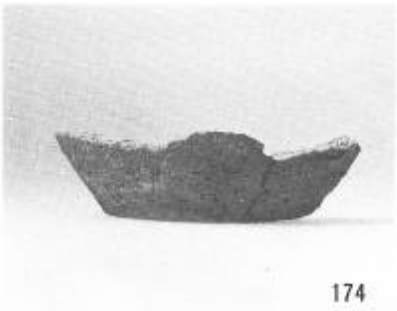
177


167

173

180

168


174

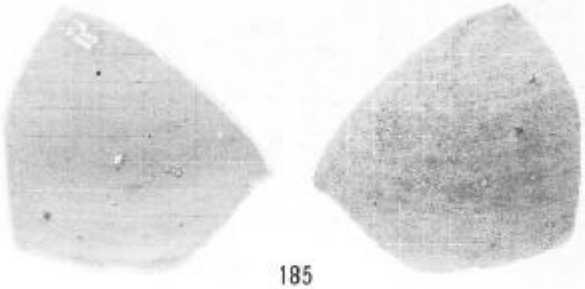
184

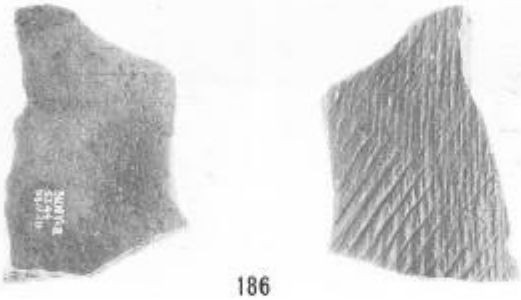
図版 6　　S I 44　竪穴住居跡出土遺物

172

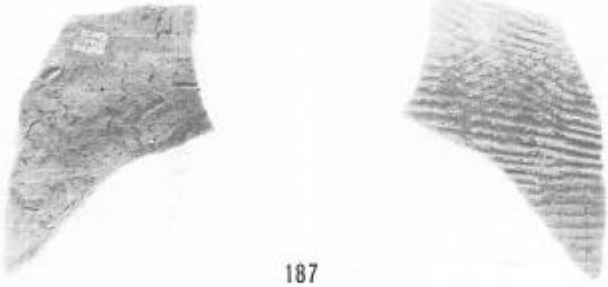
179

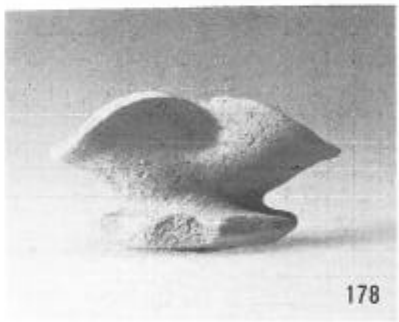
181


185


186

178


187

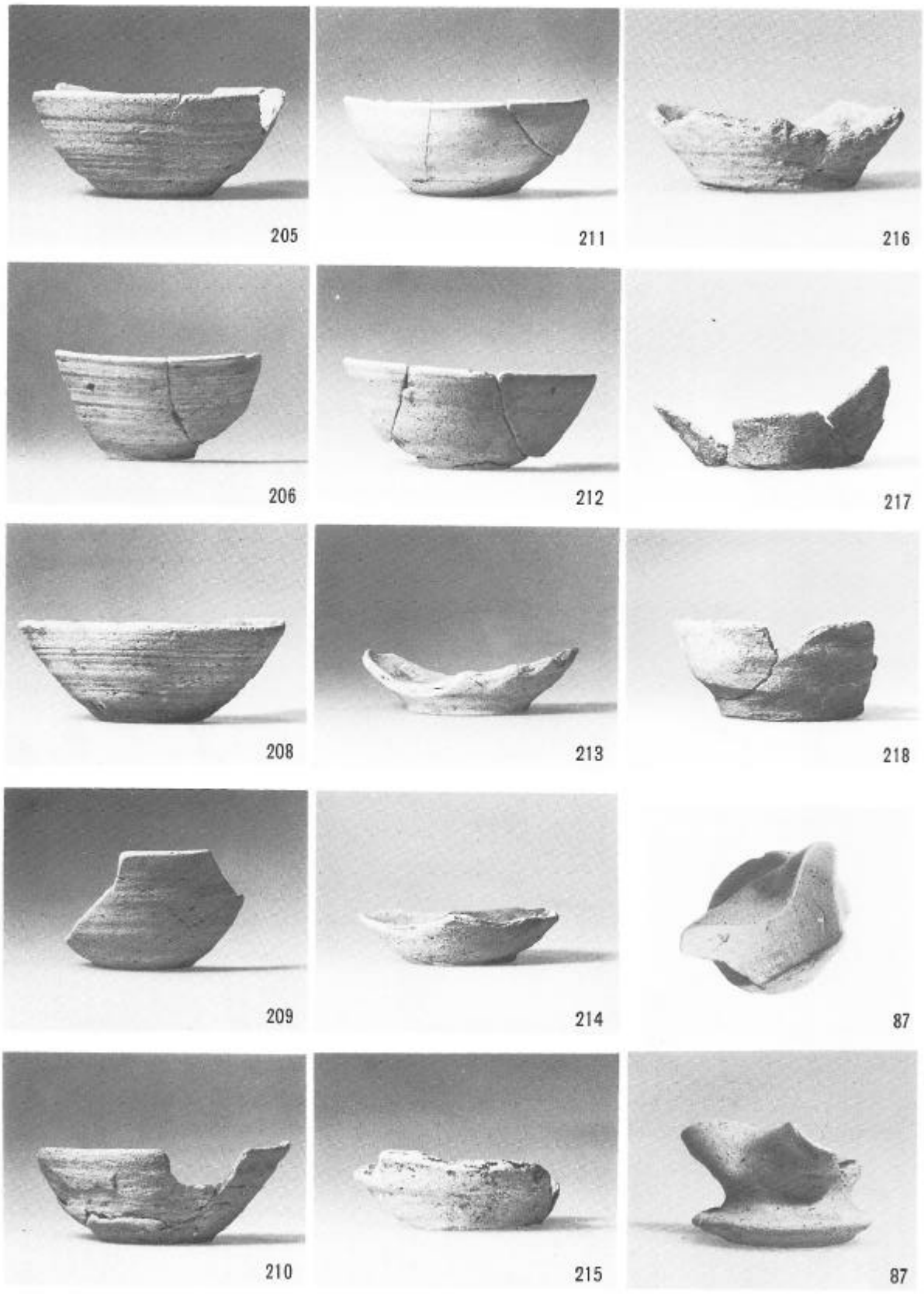

178

188

189

190

図版 7　　S I 44　竪穴住居跡出土遺物



図版 8　　S I 32　竪穴住居跡、SK 66　土壙・出土遺物

87のみ S I 32出土